

せんばる

千原遺跡

—沖縄西海岸道路北谷拡建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査事業（平成25年度）—



タカラガイ集積遺構出土

2018（平成30）年3月

沖縄県 北谷町教育委員会

せんばる

千原遺跡

—沖縄西海岸道路北谷拡建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査事業（平成25年度）—



タカラガイ集積遺構出土

2018（平成30）年3月

沖縄県 北谷町教育委員会

はじめに

北谷町字浜川小学千原に所在する千原遺跡は、キャンプ桑江北側地区返還に伴う試掘調査により平成9年10月15日に発見され、国道拡幅工事に伴って、平成25年度に北谷町教育委員会が記録保存のための発掘調査を行いました。

戦前の字浜川は、浜川・平安山ヌ上屋取・喜友名小屋取の3集落から成り、北谷村役場・北谷尋常高等小学校・軽便鉄道平安山駅などの公共施設が集中し、村の中心地として栄えていました。

しかし、1945年の沖縄戦によってこれらの建物は焼失し、奇跡的に戦火をくぐり抜けた家屋も戦後の米軍基地建設により敷きならされ、現在はその影もありません。

近世琉球の幕開けは1609年の薩摩侵攻を境としており、浜川集落は近世前半の1674年にはその前身となる村が成立していたことが古文書で確認できます。この度の発掘調査ではこれを裏付ける出土品が数多く発見されました。

また、少量ではありますが、12世紀から13世紀といったより古い時代の資料や、18世紀から19世紀の比較的新しい資料も数多く見つかっています。

残念ながら、近世以降の土地の改変によって、各時代のオリジナルな生活層を確認することが困難でありましたが、試掘調査によってグスク時代と考えられていた遺跡の年代を一考する成果が得られたものと思います。

現在、一帯は国道58号の拡幅により道路と化しておりますが、数百年前から当地に先人たちが生活し、戦前まで受け継がれていた証を本書で感じて頂ければこれ以上の喜びはありません。

末尾になりましたが、本書が文化財保護の一助となることを願うと共に、本報告にあたりご指導・ご協力を賜りました関係各位に感謝申し上げます。

平成30年3月
北谷町教育委員会
教育長 川上 啓一

例 言

1. 本報告書は、北谷町教育委員会が沖縄西海岸道路北谷拡幅建設事業に伴い、平成 25 年度に実施した千原遺跡の発掘調査成果をまとめたものである。
2. 本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の 1/2,500 地形図(昭和 54 年測量)を元に北谷町役場都市計画課が作成したものである。本書に掲載した緯度、経度の平面直角座標はすべて世界測地系にもとづくものである。
3. 遺物の同定等については、下記の方にご協力をいただいた(敬称略)。記して感謝申し上げます。

脊椎動物遺体	菅原 広史(浦添市教育委員会)
貝類遺体	黒住 耐二(千葉県立中央博物館)
輸入陶磁器	森 達也(沖縄県立芸術大学)
石質	大城 逸朗(理学博士)
4. 黒住耐二氏・菅原広史氏には玉稿を賜った。記して謝意を表する。
5. 放射性炭素年代測定は、バリノ・サーヴェイ(株)沖縄支店に委託した。
6. 本報告書の編集は、松原哲志(北谷町教育委員会)の指導の下、國分篤志(株式会社島田組)が行った。執筆分担は下記のとおりである。

第Ⅰ章 第 1・2 節、第Ⅱ章 第 1～3 節、第Ⅵ章	松原 哲志
第Ⅰ章 第 3 節、第Ⅲ章 第 1・2 節、第Ⅳ章 第 1・2 節	安里 進
第Ⅲ章 第 3 節	安里 進・國分 篤志
第Ⅲ章 第 4 節、第Ⅳ章 第 3 節	伊波 直樹・國分 篤志
第Ⅴ章 第 1 節	黒住 耐二
第Ⅴ章 第 2 節	菅原 広史
第Ⅴ章 第 3 節	バリノ・サーヴェイ株式会社
7. 文中、時代表記が各執筆で異なっているが統一はしていない。
8. 本報告の編年表記は沖縄編年を基本とするが、出土遺物には時代幅があり、その種類によって時代表記が異なる。『伊礼原D遺跡』(第 35 集)例言「沖縄・九州時代区分対象表」参照)
9. 本書に掲載した発掘調査に関する写真・実測図などの記録資料および出土遺物全ては北谷町教育委員会が保管している。
10. 層序の表記は、基本層序は「Ⅰ層」「Ⅱ層」などとローマ数字で表記し、ピット・土坑などの遺構埋土の層序は「1層」「2層」などと算用数字で表記した。
11. 出土遺物に注記した記号の内容は下記の通りである。

「千原 140305 - P02 - Ⅲ層」	→ 遺跡名-取上日-グリッドNa-出土層位
「千原 140326 - Q04 - P121 - 1層」	→ 遺跡名-取上日-グリッドNa-遺構Na-遺構内出土層位



地山上面の遺構群 検出状況（南から）



調査区遠景（北側を望む）



戦前石列検出状況（西から）



方形石組遺構検出状況（北から）



N-20 グリッド ウマ下顎骨検出状況（西から）



P-0-03 グリッド ブタ埋葬遺構検出状況（南から）



遺構完掘状況（南東から）



方形石組遺構、SD1・2 など完掘状況（北東から）



タカラガイ集積遺構検出状況（東から）



タカラガイ集積遺構出土（右上：ハナマルユキ、左下：ハナヒラダカラ）



沖縄産施釉陶器



沖縄産無釉陶器・陶質土器・瓦質土器



輸入陶磁器



煙管・金属



骨・貝製品

本文目次

はじめに	
例言	
巻首図版	
第I章 調査の経緯・経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	2
第3節 調査の経過	3
第II章 位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 自然的環境	5
第3節 歴史的環境	8
第III章 調査の方法と成果	12
第1節 調査の方法	12
第2節 層序と遺物の出土層位の記述	13
第3節 各層の出土遺物	18
第4節 遺構とその出土遺物	111
第IV章 遺構と遺物の検討	136
第1節 沖縄産播鉢と碗の型式からみた各層・遺構群の年代の検討	136
第2節 鍛冶関係遺物の検討	138
第3節 遺構と遺物の様相	139
第V章 科学的分析	145
第1節 千原遺跡の調査で得られた貝類遺体	145
第2節 千原遺跡出土の脊椎動物遺体	168
第3節 千原遺跡出土遺物の年代測定	190
第VI章 総括	193
参考・引用文献	195
報告書抄録	
奥付	
付録 CD	
・タカラガイ集積遺構出土貝類計測表	
・有孔貝製品（貝錘）の計測値一覧	
・脊椎動物遺体分析表	
・遺構一覧表	

目 次

第1図	北谷町の位置	5	第43図	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (15) 青磁 3	74
第2図	北谷町全体	5	第44図	遺物分布図 (Ⅲ層・白磁)	79
第3図	地形分類図 (「沖縄県地形分類図」に加筆)	6	第45図	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (16) 白磁	80
第4図	表層地質図 (「5万分の1都道府県土地分類基本調査」に加筆)	6	第46図	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (17) その他の輸入陶磁器	81
第5図	表層地質断面図 (「5万分の1都道府県土地分類基本調査」に加筆)	7	第47図	遺物分布図 (Ⅲ層・土器)	83
第6図	水理地質図 (「沖縄県水理地質図」に加筆)	7	第48図	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (18) 土器・カムイヤキ	84
第7図	キャンプ桑江北側地区の遺跡分布と地下構造	9	第49図	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (19) 円盤状製品	86
第8図	1945年2月の航空写真	9	第50図	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (20) 土製品・瓦	88
第9図	1945年8月の航空写真	9	第51図	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (21) 煙管	89
第10図	北谷町遺跡一覧図	10	第52図	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (22) ガラス製品・金属製品・銭貨	91
第11図	グリッド設定図	12	第53図	遺物分布図 (Ⅲ層・石器)	93
第12図	調査区土層断面図	15	第54図	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (23) 石器・石製品 1	94
第13図	出土遺物の主な層別割合	18	第55図	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (24) 石器・石製品 2	96
第14図	Ⅱ層出土遺物 構成比	19	第56図	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (25) 骨製品	99
第15図	遺物分布図 (Ⅱ層・全遺物)	19	第57図	有孔貝製品 (貝鍾) の重さ×大きさ指数の分布	100
第16図	Ⅱ層出土遺物 1	23	第58図	有孔タカラガイ製品 (貝鍾) とタカラガイ集積遺構の殻高ヒストグラムの比較	101
第17図	Ⅱ層出土遺物 2	24	第59図	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (26) 貝製品 1	105
第18図	Ⅱ層出土遺物 3	26	第60図	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (27) 貝製品 2	106
第19図	Ⅱ層出土遺物 4	28	第61図	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (28) 貝製品 3	108
第20図	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 構成比	30	第62図	方形石組遺構	111
第21図	遺物分布図 (Ⅲ層・全遺物)	30	第63図	ブタ埋葬遺構	113
第22図	遺物分布図 (Ⅲ層・沖縄産施釉陶器)	31	第64図	遺構配置図	112
第23図	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (1) 沖縄産施釉陶器 1	34	第65図	タカラガイ 2種の殻高ヒストグラム	115
第24図	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (2) 沖縄産施釉陶器 2	36	第66図	タカラガイ集積遺構	116
第25図	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (3) 沖縄産施釉陶器 3	38	第67図	地上上面遺構群の埋土と出土遺物の様相	118
第26図	遺物分布図 (Ⅲ層・沖縄産無釉陶器)	40	第68図	SD1・2・SX8	119
第27図	沖縄産無釉陶器・挿鉢の分類	41	第69図	SD3	120
第28図	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (4) 沖縄産無釉陶器 1	44	第70図	ピット・土坑・不明遺構 深度	122
第29図	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (5) 沖縄産無釉陶器 2	46	第71図	P304	123
第30図	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (6) 沖縄産無釉陶器 3	48	第72図	SK4・17	124
第31図	遺物分布図 (Ⅲ層・沖縄産陶質土器)	50	第73図	SX12	126
第32図	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (7) 沖縄産陶質土器	52	第74図	その他遺構の出土遺物 1	128
第33図	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (8) 瓦質土器	54	第75図	その他遺構の出土遺物 2	130
第34図	遺物分布図 (Ⅲ層・本土産陶磁器)	55	第76図	その他遺構の出土遺物 3	132
第35図	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (9) 本土産陶磁器 1	58	第77図	挿鉢の層別割合	136
第36図	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (10) 本土産陶磁器 2	60	第78図	碗各型式の層別割合	137
第37図	遺物分布図 (Ⅲ層・染付)	62	第79図	Ⅲ層における焼土と銑滓・リサイクル素材の平面分布	138
第38図	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (11) 染付 1	64	第80図	千原遺跡と近代現川集落	140
第39図	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (12) 染付 2	66	第81図	遺構変遷図	142
第40図	遺物分布図 (Ⅲ層・青磁)	69	第82図	主要遺物分布図	142
第41図	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (13) 青磁 1	70	第83図	時期別出土遺物変遷図	143
第42図	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (14) 青磁 2	72			

図 版 目 次

巻首図版1	遺構検出状況	図版29	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (22) 煙管	89
巻首図版2	調査区 遠景・個別遺構	図版30	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (23) 鉄滓	90
巻首図版3	遺構完形状況	図版31	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (24) ガラス製品・金属製品 ・銭貨	92
巻首図版4	タカラガイ集積遺構	図版32	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (25) 石器・石製品1	95
巻首図版5	遺物 (沖縄産陶器)	図版33	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (26) 石器・石製品2	97
巻首図版6	遺物 (輸入陶磁器ほか)	図版34	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (27) 骨製品	99
図版1	発掘調査風景	図版35	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (28) 貝製品1	105
図版2	遺物整理作業風景	図版36	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (29) 貝製品2	107
図版3	基本層序	図版37	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (30) 貝製品3	108
図版4	Ⅱ層出土遺物1	図版38	穿孔のある貝	109
図版5	Ⅱ層出土遺物2	図版39	近代へ戦前の遺構	111
図版6	Ⅱ層出土遺物3	図版40	動物遺体集中部	112
図版7	Ⅱ層出土遺物4	図版41	タカラガイ集積遺構	116
図版8	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (1) 沖縄産施釉陶器1	図版42	SD1～3・SX8	121
図版9	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (2) 沖縄産施釉陶器2	図版43	P304	123
図版10	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (3) 沖縄産施釉陶器3	図版44	SK4・17	124
図版11	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (4) 沖縄産無釉陶器1	図版45	SX12	126
図版12	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (5) 沖縄産無釉陶器2	図版46	その他遺構の出土遺物1	129
図版13	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (6) 沖縄産無釉陶器3	図版47	その他遺構の出土遺物2	131
図版14	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (7) 沖縄産陶質土器1	図版48	その他遺構の出土遺物3	133
図版15	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (8) 沖縄産陶質土器2	図版49	現在、利用されている職金	147
図版16	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (9) 瓦質土器	図版50	貝類遺体1 (巻貝)	164
図版17	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (10) 本土産陶磁器1	図版51	貝類遺体2 (巻貝)	165
図版18	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (11) 本土産陶磁器2	図版52	貝類遺体3 (巻貝、二枚貝)	166
図版19	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (12) 染付1	図版53	貝類遺体4 (二枚貝、種名一覽)	167
図版20	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (13) 染付2	図版54	脊椎動物遺体1 (魚類・鳥類・ウマ)	184
図版21	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (14) 青磁1	図版55	脊椎動物遺体2 (イヌ・ネコ・ヤギ・イノシシ/ ブタ)	185
図版22	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (15) 青磁2	図版56	脊椎動物遺体3 (イノシシ/ブタ)	186
図版23	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (16) 青磁3	図版57	脊椎動物遺体4 (ブタ)	187
図版24	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (17) 白磁	図版58	脊椎動物遺体5 (ウシ・ジュゴン)	188
図版25	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (18) その他の輸入陶磁器	図版59	脊椎動物遺体6 (ヒト・動物遺体(こみられる傷痕))	189
図版26	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (19) 土器・カムイヤキ			
図版27	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (20) 円盤状製品			
図版28	Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (21) 土製品・瓦			

表 目 次

第1表	発掘調査の経過	第4表	土層観察表	17
第2表	北谷町遺跡一覧表	第5表	出土遺物集計表	18
第3表	遺物の出土層位の整理	第6表	土器陶磁器の部位別集計表	18

第7表-1	II層出土遺物 観察表(1) ……………	21	第36表	タカラガイ集積遺構出土遺物 観察表 ……………	116
第7表-2	II層出土遺物 観察表(2) ……………	22	第37表	SD1～3・SX8出土遺物 観察表 ……………	117
第8表	沖縄産施釉陶器・碗の分類 ……………	31	第38表	P304出土遺物 観察表 ……………	123
第9表	沖縄産施釉陶器・碗の部位別集計表 ……………	32	第39表	SX12出土遺物 観察表 ……………	125
第10表-1	III・IV層出土沖縄産施釉陶器 観察表(1) ……	33	第40表-1	その他遺構の出土遺物 観察表(1) ……………	134
第10表-2	III・IV層出土沖縄産施釉陶器 観察表(2) ……	39	第40表-2	その他遺構の出土遺物 観察表(2) ……………	135
第11表	沖縄産無軸陶器・挿鉢の部位別集計表 ……………	42	第41表	挿鉢の層別数量と割合 ……………	136
第12表	III・IV層出土沖縄産無軸陶器 観察表 ……………	43	第42表	碗各型式の層別数量と割合 ……………	137
第13表	III・IV層出土沖縄産陶質土器 観察表 ……………	51	第43表	鍛冶遺物・リサイクル素材の集計 ……………	138
第14表	III・IV層出土瓦質土器 観察表 ……………	54	第44表	焼土のグリッド・層別の集計 ……………	138
第15表-1	III・IV層出土本土系陶磁器 観察表(1) ……	56	第45表	ピックアップ法で得られた貝類遺体の 分類学的位置と生息場所類型 ……………	152
第15表-2	III・IV層出土本土系陶磁器 観察表(2) ……	57	第46表-1	ピックアップ資料の詳細分析(1) ……………	153
第16表-1	III・IV層出土染付 観察表(1) ……………	63	第46表-2	ピックアップ資料の詳細分析(2) ……………	155
第16表-2	III・IV層出土染付 観察表(2) ……………	68	第47表	ピックアップ資料の優占種同定標本数 ……………	157
第17表-1	III・IV層出土青磁 観察表(1) ……………	77	第48表	詳細な確認に基づく同定標本数(NISP)と最小 個体数(MNI)の比較 ……………	159
第17表-2	III・IV層出土青磁 観察表(2) ……………	78	第49表	食用貝類遺体の優占種(ピックアップ法/NISP) ……	160
第17表-3	III・IV層出土青磁 観察表(3) ……………	79	第50表	タカラガイ集積遺構の種別内容 ……………	160
第18表	III・IV層出土白磁 観察表 ……………	80	第51表	堆積物サンプルからの抽出詳細 ……………	161
第19表	III・IV層出土その他の輸入陶磁器観察表 ……	82	第52表	遺構内の堆積物から抽出された陸淡水産貝類 ……	163
第20表	III・IV層出土土器・カムイヤキ 観察表 ……	83	第53表	脊椎動物遺体の分類群一覧 ……………	171
第21表	III層出土円盤状製品 組成表 ……………	85	第54表	脊椎動物遺体の基本層位および遺構出土の状況 ……	171
第22表	III・IV層出土円盤状製品 観察表 ……………	85	第55表-1	脊椎動物遺体一覧(1) ……………	172
第23表	III・IV層出土土製品・瓦 観察表 ……………	88	第55表-2	脊椎動物遺体一覧(2) ……………	173
第24表	煙管 組成表 ……………	89	第55表-3	脊椎動物遺体一覧(3) ……………	174
第25表	III・IV層出土煙管 観察表 ……………	89	第55表-4	脊椎動物遺体一覧(4) ……………	175
第26表	銭貨 組成表 ……………	90	第55表-5	脊椎動物遺体一覧(5) ……………	176
第27表	III・IV層出土ガラス・金属製品・銭貨 観察表 ……	93	第55表-6	脊椎動物遺体一覧(6) ……………	177
第28表	石器・石製品 組成表 ……………	93	第55表-7	脊椎動物遺体一覧(7) ……………	178
第29表	III・IV層出土石器・石製品 観察表 ……………	98	第56表	遺構外出土の脊椎動物遺体の組成(NISP) ……	179
第30表	III・IV層出土骨製品 観察表 ……………	99	第57表-1	遺構内出土の脊椎動物遺体の組成(NISP)(1) ……	180
第31表	有孔貝製品(貝鍾)の貝種・層位別集計表 ……	100	第57表-2	遺構内出土の脊椎動物遺体の組成(NISP)(2) ……	181
第32表	タカラガイ集積遺構と有孔タカラガイ製品の最高 階級値 ……………	101	第57表-3	遺構内出土の脊椎動物遺体の組成(NISP)(3) ……	182
第33表-1	有孔貝製品(貝鍾)の計測値一覧(1) ……	102	第58表	脊椎動物遺体 層位・遺構別集計表(NISP) ……	183
第33表-2	有孔貝製品(貝鍾)の計測値一覧(2) ……	103	第59表	放射性炭素年代測定結果 ……………	193
第33表-3	有孔貝製品(貝鍾)の計測値一覧(3) ……	104			
第34表	III・IV層出土土製品 観察表 ……………	110			
第35表	タカラガイ集積遺構の貝類集計表 ……………	115			

第1章 調査の経緯・経過

第1節 調査に至る経緯

概要 千原遺跡は平成15年3月に返還されたキャンプ桑江北側地区内の北西端に位置し、平成7～9年度に実施した試掘調査で発見され、国道58号拡幅事業に伴って平成25年度に記録保存目的の発掘調査が行われた周知の埋蔵文化財である。本書は平成25年度の調査成果報告書である。

道路拡幅計画 国道58号の拡幅は、平成6年に同道の読谷～那覇空港間が地域高規格道路（沖縄西海岸道路）として計画路線に指定されたのに端を発する。嘉手納町兼久～宜野湾市宇地泊間の拡幅計画地は指定後暫く未定であったが、平成18年に内閣府沖縄総合事務局南部国道事務所（以下、南部国道）、沖縄県、北谷町による沖縄西海岸道路北谷道路と桑江伊平土地区画整理事業に関する連絡調整会議が開催され、嘉手納～宜野湾地区が調査区間として指定された。

埋蔵文化財の有無照会と調整 上記指定後、南部国道は当該地におけるルート選定調査に着手し、平成23年2月23日、北谷町字浜川～字北前のおよそ4kmに亘る文化財の有無について北谷町教育委員会（以下、町教委）へ照会した（府国南事第195号）。町教委は、照会地には千原遺跡等周知の埋蔵文化財包蔵地がある旨回答し（同11日付北教社4228号）、遺跡の保存を求めたが工事計画の変更は困難であった。南部国道は平成26年度に当該地区の工事着工を予定していたため、発掘調査を平成25年度中に終える工程で協議を重ねた。

平成25年度には調査対象範囲を確定するため調整を開始した。遺跡は概ね南北に走る国道58号と国道から東へ延びる県道23号線がト字状に交差する南東部に位置し、現況は国道から2m、県道から4mも低かった。発掘調査によって現況から更に2～3m掘削する必要があるため、擁壁倒壊を避けるべく道路から適切な離隔距離を保つ必要があった。県道側の擁壁に関する資料は確認出来なかったため、6月に試掘調査を行い擁壁深度を確認した。試掘調査及び南部国道との協議の結果、国道の擁壁からは2m、県道の擁壁からは4mの離隔距離を確保し調査区を設定した。遺跡は道路計画範囲より東と南に拡がるのが確認されていたが、東側は町の公園が設置され現地保存が可能であること、南側は遺構密度が希薄になり、かつ電信柱の移設が困難であることから調査対象外とした。発掘調査範囲確定後の6月12日には『沖縄西海岸道路「北谷拡幅」建設事業に係る埋蔵文化財（千原遺跡）に関する協定書』を南部国道と締結した。

文化財保護法に関する手続 7月1日、南部国道は、町教委へ対し発掘調査業務に要する経費見積及び実施計画書の提出依頼と、文化財保護法第94条第1項に基づき「埋蔵文化財発掘の通知について（府国南事第52号）」を发出、同16日、町教委は沖縄県教育委員会（以下県教委）へ発掘通知を進達した（北教社1505号）。同22日、県教委は文化財保護法第184条第1項第6号に基づき、工事着手前に発掘調査を実施するよう回答し（教文第726号）、町教委はこれを南部国道へ伝達した（同31日付北教社第25第1764号）。

契約締結 7月以降調整してきた発掘調査費用の見積額と実施設計書を9月26日南部国道へ提出し、11月15日「平成25年度国道58号（北谷拡幅・千原遺跡）埋蔵文化財発掘調査業務」を締結した。

発掘調査の着手 町教委は上記委託契約の締結を受け発掘調査の民間発注に着手した。平成25年度も残り4か月余りであったため迅速な事務作業に努めた。11月29日には「千原遺跡埋蔵文化財発掘調査業務委託」の入札を執行し、株式会社アークジオパシフィック支店がこれを落札、12月5日に契約を締結・発掘調査の着手に至った。

第2節 調査体制

現地調査は平成25年度に、資料整理及び報告書作成は平成29年度に実施した。各年度の調査体制は以下の通り。

平成25年度（発掘調査）

事業受託者	北谷町長	野国昌春
調査主体	北谷町教育委員会	
調査責任者	〃	教育長 川上 啓一
	〃	教育次長 比嘉 良典
調査主管	〃	社会教育課長 比嘉 敬文
調査総括	〃	文化係長 米須 健
調査担当	〃	主任主事 松原 哲志
委託業務	千原遺跡埋蔵文化財発掘調査業務委託	
受託者	株式会社アーキジオパシフィック支店 支店長 西井 敏夫	
現場代理人	池田 文治	
主任調査員	宮平 千春	

発掘調査指導・助言（敬称略、所属五十音順）

沖縄県教育庁文化財課	島袋 洋（考古学）・知念 隆博（考古学）
沖縄県立博物館・美術館	藤田 祐樹（人類学）・山崎 真治（人類学）
沖縄国際大学総合文化学部	江上 幹幸（考古学）・横尾 昌樹（考古学）
千葉県立中央博物館	黒住 耐二（貝類学）
北谷町文化財調査審議会委員	知念 勇（考古学）・大城 逸朗（地質学・古生物学）
パリオ・サーヴェイ株式会社	橋本 真紀夫（考古学）・上田 圭一（環境考古学）
早稲田大学教育学部	樋泉 岳二（動物考古学）

平成29年度（資料整理）

平成29年6月16日、南部国道と資料整理作業及び発掘調査報告書作成に関する委託契約を締結し、町教委が7月28日に民間発注の為の入札を行った。入札は不調に終わったため、後日応札額昇順で見積書の再提示を求め、予定価格を下回る金額を提示した株式会社島田組と地方自治法167条の2第1項第8号に基づき、8月16日随意契約を締結した。

事業受託者	北谷町長	野国昌春
調査主体	北谷町教育委員会	
調査責任者	〃	教育長 川上 啓一
	〃	教育次長 佐久本 盛正
調査主管	〃	社会教育課長 池原 誠
調査総括	〃	文化係長 米須 健
調査担当	〃	主任主事 松原 哲志
委託業務	千原遺跡埋蔵文化財遺跡報告書作成業務委託	
受託者	株式会社島田組 沖縄支店 支店長 角上 寿行	
管理技術者	角上 寿行	

資料整理指導・助言（敬称略、所属五十音順）

浦添市教育委員会	菅原 広史（考古学）
沖縄県立芸術大学付属研究所	安里 進（考古学・琉球史）
千葉県立中央博物館	黒住 耐二（貝類学）
理学博士	大城 逸朗（地質学・古生物学）

第3節 調査の経過

発掘作業

発掘調査の経過については、株式会社アーキジオパシフィック支店が作成した『コンテナ及び遺物台帳』の「袋№」ごとの情報(遺物取り上げ日付、グリッド、遺構名、層位、遺物種類)をベースに、『個別遺物取り上げ台帳』、『遺構台帳』、『調査日誌』などを参考にして、株式会社島田組沖繩支店がまとめた。

発掘調査は平成25年12月18日～平成26年3月26日にかけて実施。現場周辺の雑木・雑草伐採、不発弾磁気探査と地形などの測量のあと、調査区を設定。調査区の形状は、概ね長三角形で、底辺18m、長軸約37m、面積は427m²である。

調査区内の米軍基地工事に伴う客土(Ⅰ層)をバックホウで除去した後、Ⅱ層上面でグリッドを設定。調査区の概ね中心ラインに沿って東西畦、南北畦をそれぞれ設けて調査区を北区・南区・東区・西区に4分割して遺物包含層の人力発掘調査を開始。攪乱坑はバックホウで埋土を掘削。

遺物包含層は、Ⅱ層(近代)、Ⅲ層(近世)、Ⅳ層(近世)を確認。各層からは近世の遺物を中心に近代やグスク時代・古琉球の遺物も多数混在していた。Ⅱ層から近代の石列や石組遺構が出土した。Ⅲ層中にタカラガイ集積遺構やブタ埋葬遺構が検出されているので、Ⅲ層中に近世期の遺構面があったと思われるが、全体的な遺構面は地山(白砂層)上面で確認している。

地山上面の遺構は、700基を越えるピット・土坑群や溝(本文では「遺構群」と呼ぶ)が確認されている。これらの遺構群からも近世陶磁器とともにグスク時代・古琉球の輸入陶磁器が多数出土している。

Ⅲ層や地山上面の遺構群から15～16世紀を中心にしたグスク時代・古琉球の遺物が多数出土しているため、かつてこの一帯に当該期の遺物包含層や遺構が存在していたと思われるが、近世の人間活動によって攪乱されたため、そのオリジナルな遺物包含層や遺構を確認することはできなかった。

以下に発掘調査経過の要点を箇条書きと表で示した。

12月18日：発掘調査範囲の伐採と測量に着手。

12月19日：磁気探査の実施。

12月20日：現況測量。バックホウによる表土(Ⅰ層)掘削に着手。

1月14日：グリッド設定。

1月20日：攪乱部(Ⅰ層)の人力掘削開始。

1月21日：遺物包含層(Ⅱ層)の人力掘削に着手。調査区内に東西畦と南北畦を設定。Ⅱ層から沖縄産陶器などとともにガラス瓶、明治17年銘硬貨などが出土。

1月21～24日：戦前の石組遺構の検出と撮影・実測作業。

1月23日：遺物包含層(Ⅲ層)の人力掘削開始。Ⅲ層から沖縄産陶器・銅製煙管・銅製ジーファー(簪)、鉄製農具の桂(留め具)、タカラガイ製貝鎌などの近世遺物とともに、グスク時代～古琉球期の輸入陶磁器な

第1表 発掘調査の経過

日付	主な業務内容 (休日を除く)	Ⅰ層(客土・攪乱層)					地山上面の遺構群				Ⅴ層(地山)	
		Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅳ層	Ⅴ層	Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅳ層		
12月18日	調査範囲の測量、伐採											
19日	調査範囲の測量、伐採、磁気探査											
20日	現況測量、バックホウで表土掘削											
21日	土バックホウで表土掘削											
24日	機土整形											
25日	磁気探査											
26日	磁気探査											
1月6日	表土掘削、機土整形											
7日	表土掘削、機土整形											
8日	磁気探査											
9日	表土掘削、機土整形											
10日	表土掘削											
11日	植草測量											
14日	土グリッド設定											
15日	資材搬入											
16日	壁面清掃											
17日	壁面清掃											
20日	攪乱部の人力掘削開始											
21日	包含層の人力掘削開始、戦前遺構検出											
22日	包含層掘削、戦前遺構検出											
23日	包含層掘削、トレンチ掘削、戦前遺構検出											
24日	包含層掘削、戦前遺構測量											
27日	包含層掘削											
28日	包含層掘削											
29日	包含層掘削											
30日	包含層掘削											
31日	包含層掘削											
2月8日	遺物洗浄											
4日	包含層掘削、攪乱部測量											
5日	包含層掘削、攪乱部測量											
6日	遺構検出、貝集積遺構測量											
7日	壁面清掃、遺物洗浄											
10日	遺物洗浄											
12日	攪乱部埋土掘削、睡人力掘削											
13日	攪乱部埋土掘削											
14日	包含層掘削、遺構検出、包含層掘削、磁気探査											
17日	遺構検出、攪乱部埋土掘削											
18日	遺物洗浄											
19日	遺構検出											
20日	遺構検出、遺構検出写真撮影											
21日	ラジオリレー撮影、対構測量、積層測量											
24日	遺構の掘削・測量・写真撮影、対構測量											
25日	遺構の掘削・測量・写真撮影、対構測量											
26日	遺構の掘削・断面実測・写真撮影、対構測量											
27日	遺構の掘削・断面実測・写真撮影、対構測量											
28日	遺構の掘削・断面実測・写真撮影、対構測量											
3月2日	遺構の断面実測・写真撮影、写真測量											
4日	遺構の断面実測・写真撮影、写真測量											
5日	遺構の掘削・測量・断面実測、貝集積遺構写真撮影											
6日	遺構の掘削・測量・断面実測、写真測量											
6日	遺構の掘削・測量・断面実測、写真撮影、写真測量											
7日	遺構の掘削・測量・断面実測、写真撮影、写真測量											
9日	遺構の掘削・測量・断面実測、写真撮影、写真測量											
10日	遺構の掘削・測量・断面実測、写真撮影											
11日	遺構の掘削・測量・断面実測、写真撮影											
12日	遺構の掘削・測量・断面実測、写真撮影											
13日	遺構の掘削・測量・断面実測、写真撮影											
14日	遺構の掘削・測量・断面実測、写真撮影											
16日	遺構の掘削・測量・断面実測、写真撮影											
17日	遺構の掘削・測量・断面実測、写真撮影											
18日	遺構の掘削・測量・断面実測、写真撮影											
19日	遺構の掘削・測量・断面実測、写真撮影											
20日	遺構の掘削・測量・断面実測、写真撮影											
21日	遺構の掘削・測量・断面実測、写真撮影											
22日	遺構の掘削・測量・断面実測、写真撮影											
24日	遺構の掘削・測量・断面実測、写真撮影											
25日	遺構の掘削・測量・断面実測、写真撮影											
26日	遺構の掘削・測量・断面実測、写真撮影、実測調査											

どグスク時代の遺物も多数出土。永楽通宝・政和通宝・無文銭などの古銭、ガラス製勾玉片、鉄滓などが出土。

2月12日～14日：東西・南北畦の掘削。

2月14日：地山（白色砂層）上面で遺構群検出に着手。

2月20～21日：遺構群検出面の写真撮影。

2月24～3月26日：遺構群の発掘・実測・撮影に着手。700基を越えるピット・土坑などの遺構、溝3条、タカラガイ集積遺構1基を発掘。これらの遺構からは近世の沖縄産陶器、銅製・陶製煙管などとともに、グスク時代～古琉球期の輸入陶磁器、銭、鉄鏝、鍍金金具などが出土。

3月26日：遺構完掘後の写真測量。



図版1 発掘調査風景

左から機械掘削作業、包含層の人力掘削作業、遺構掘削作業の風景。

整理作業

遺物整理の期間は、平成29年8月16日から着手し、平成30年3月19日で終了した。出土遺物の整理は、発掘調査業務の委託を受けた株式会社アーキジオパシフィック支店が作成した成果品帳簿類を基礎情報にして株式会社島田組沖縄支店が行った。

遺物総量は、外寸600×400×153mmのコンテナ45箱分であった。遺物は洗浄された状態でポリ袋に取められ、袋にはそれぞれ袋No、取り上げ日付、グリッドNo、層位または遺構Noが記載されている。これらの情報は『コンテナ及び遺物台帳』にまとめられている。

遺物整理は原則的に下記の手順で実施した。まず、発掘調査の成果品帳簿を整理して発掘調査の全体像を把握する作業を行った。この作業と並行して出土遺物への注記作業に着手した。注記対象は、原則として2cm角以上の遺物とした。注記は例えば「千原140305-P02-III層下層」のように遺跡略称、取り上げ日付、グリッドNo、出土層位または遺構の順に記載した。

注記した遺物は、種別、層位別、遺構別に分類集計した。この作業と併行して主要な遺物については実測図の作成を進めた。

貝類・獣骨・石質の同定や年代測定については、次の方々に依頼した。貝類遺体（黒住耐二氏、千葉県立中央博物館）、石器石質（大城逸朗氏、理学博士）、脊椎動物遺体（菅原広史氏、浦添市教育委員会）、年代測定（パリオ・サーヴェイ株式会社）。また、輸入陶磁器の年代・産地については森達也氏（沖縄県立芸術大学）から助言をいただいた。



図版2 遺物整理作業風景

第Ⅱ章 位置と環境

第1節 地理的環境

北谷町は沖縄島中部の西海岸、県都那覇市から北東約16kmに位置している。北に嘉手納町、東に沖縄市と北中城村、南に宜野湾市と接し、西に東シナ海が面し、彼方に慶良間諸島が眺望できる。町の総面積は13.93km²で、南北約6km、東西約4.3kmの長方形をなし、ほぼ中心（北緯26度18分58秒、東経127度45分55秒）に町役場は位置する。

本町は、米軍基地の多い沖縄県内においても基地占有率が3番目に高い自治体で、町総面積における軍用地の比率は52.9%を占める。そのため土地利用上大きな制約があり、丘陵台地からなる東部地域と主に海岸埋立地からなる西部地域の両居住域は基地により分断されている。

産業は西海岸地域を中心に第三次産業が盛んで、ハンビー地区やアメリカンビレッジなどでは国内外から訪れる観光客で賑わいをみせている。また、近年はフィッシャリーナ整備事業や自然海製塩事業など、地域特性を生かした新しい地場産業の創出に取り組んでいる。

交通の面では、国道58号が西海岸側を縦断し、県道23、24、130号線が国道以東へ延びる。現在は、国道58号の道路拡幅や県道24号バイパスの建設が進められているが、米軍基地の存在により部分的な工事となっている。

平成30年1月末現在の人口は約29,288人で、現在進められている桑江伊平土地区画整理事業認可前（平成16年3月11日認可）に比べ2,930人、率にして1.10%増となっている。今後も公有水面埋立地の利用や返還軍用地の跡地利用に伴って、一層の人口増加が見込まれている。

第2節 自然的環境

本町の気候は亜熱帯海洋性に属し四季を通して温暖である。年平均気温は22℃、年平均湿度は77%前後で冬期が短い。年降水量は2,000～3,000mmと多雨で、梅雨と台風期に集中する。

地形を概観すると、町の北西-南東方向に走る桑江断層を大きな境とし、東高西低を呈す。東部・南部では3段の段丘（標高100m以上、100～50m、50～30m）が見られ、侵食が進み起伏に富んだ地形となっている。北部では、洞穴やドリーネ、石灰岩塔、石灰岩丘等のカルスト地形が発達し、西部の海岸低地は、ほとんど埋立地や人工ビーチとなっており、わずかに自然海浜が残る。

表層地質は、基盤の島尻層群を琉球層群が不整合に覆い、低地では琉球層群を沖積層が不整合に覆う。琉球層群は、砂礫堆積物の国頭礫層とサンゴ礫性堆積物の琉球石灰岩層からなり、前者は沖縄島北部、後者は中・南部に広く分布する。



第1図 北谷町の位置



第2図 北谷町全体



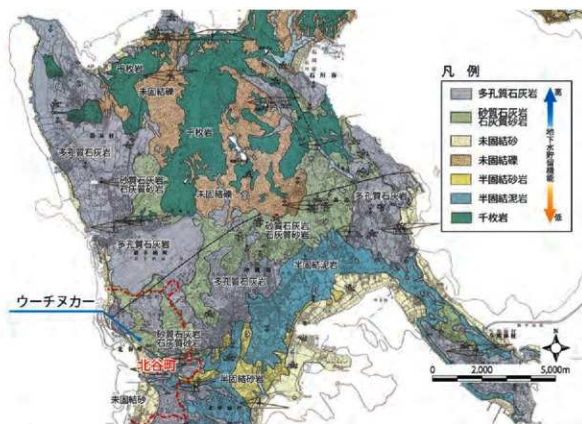
第 3 図 地形分類（「沖縄県地形分類図」に加筆）



第 4 図 表層地質（「15 万分の 1 都道府県土地分類基本調査」に加筆）



第5図 表層地質断面（「5万分の1都道府県土地分類基本調査」に加筆）



第6図 水理地質（「沖繩県水理地質図」に加筆）

本町にも国頭礫層が分布しており、同層は基盤である名護層の影響を受けて酸性化し、風化した土壤（国頭マージ）にはイジュやヤマモモが生育する。

水理地質は、不透水層の基盤とこれを不整合で覆う帯水層（琉球石灰岩）との不整合部で湧出する。本遺跡の南を西流するナガサヤ、国史跡伊礼原遺跡付近のウーチヌカーも同構造による。

植生では、先述のイジュ・ヤマモモ等と、中南部に広がるアルカリ化した土壤（島尻マージ）に生息するアカギ・オオバギ・ヤブニッケイ等が混生し、学術的にも貴重な地域である。嘉手納基地内やその周辺、庁舎北側の丘陵地、北谷城周辺、河川流域に森林が比較的良好に残るも、その割合は町土の7%と高くない。動物相は、良好な植生が残っている場所を中心に1,411種が確認され、2000年に行われた動物調査では、希少性の高い哺乳類のオリオオコウモリ、鳥類のミフズラ、昆虫類のクロイワゼミ等を含む陸棲動物や、海域、汽水域、河川域で多様な水棲動物が確認されている。

第3節 歴史的環境

旧石器時代

本書刊行時点で旧石器時代に比定される遺跡は存在しない。1966年、多和田真淳によって発見された桃原洞穴遺跡出土の化石人骨が約16,000年前のものと考えられたが、近年の研究で中世に属すると考えられている。同遺跡付近では1983年に土地区画整理事業が施行され、その際鹿化石が3点発見されているが、現在は宅地化しているため遺跡の有無を確認することは困難である。

貝塚時代前期（縄文時代相当期）

本町最古級の遺跡は、桑江土層下標高2～4mの沖積地に立地する伊礼原遺跡である。同遺跡は、縄文海進ピーク時にあたる前1～2期（縄文時代早期～前期）の頃は海食崖付近の低湿地に、海退によって陸地化が進む前3期（同中期）以降は、1～2期の頃に無かった砂丘上に遺跡が形成される。一帯の砂丘は、前4期のほか後1期（弥生から古墳）にも浸食と再堆積を繰り返しており、地形の発達過程を良好に示す。低湿地からは滑石を含む埴輪土器が出土し、九州との交流が窺える。町北部に位置する前4～5期の砂辺貝塚は、標高33mの残丘カルストの台地上に住居跡を、崖下に貝塚を形成する。砂辺貝塚から南西に300m、標高7mの鍾乳洞内に前5期の墓場を形成するクマヤー洞穴遺跡があり、洞内からは50数体分の改葬人骨とともに副葬品が発見された。近年、沖繩島の洞穴遺跡から前1期に比定される爪形文土器より古段階の尖底土器の発見が相次いでいる。クマヤー洞穴遺跡からも同尖底土器の類似資料が得られており、今後の詳細な調査・研究によっては町内最古の遺跡となる可能性がある。

貝塚時代後期（弥生から平安時代並行期）

本期の遺跡はキャンプ桑江北側地区の標高3～5mに集中する。平安山や桑江の低地では砂丘や浜堤の発達に伴って後1期の遺跡が増加する。遺跡からは燃焼遺構や貝塚、土壇墓などが検出されるが、住居跡は認められない。後2期の終末からグスク時代の初期にあたる小堀原遺跡では、10～12世紀代の大麦・稲・アワや、カムイヤキ埋納土壇墓が発見され、喜界島城久遺跡群との関連が注目されている。その他、平安山原B遺跡からは10世紀まで遡り得る鉄製の風呂鉢が出土するなど、農耕を示唆する遺物・遺跡が増加する。また、小堀原遺跡に隣接する後兼久原遺跡からは、製鉄・鍛冶関連の遺物・遺構も検出されており、小堀原と共に次代の成立を考える上で重要な遺跡である。

グスク時代・古琉球

本期の代表的な遺跡に北谷城が挙げられる。北谷城は、町役場から南へ約1.3kmの石灰岩丘陵上に立地する本町で唯一残存するグスクで、14世紀後半から15世紀中頃に石垣が構築され、15世紀後半に終焉したと考えられる。城主に関する明確な記録はなく、金満按司や大川按司、谷茶按司の3系統の興亡があったと伝えられているが伝承の城を出ない。「北谷」の文字は、嘉靖年間（1522～1566年）の愈姓大宗家家譜中に「北谷間切平安山頭職」と見え、遅くとも16世紀前半には存在していたようである。また、琉球国王が地方役人に給した辞令書（1577年）に「きたたんまきり」と見られることから、当時は北谷を「きたたん」と読んでいたようである。その後「きたたん」は「きちやたん」から「ちやたん」へと変化した。現在の「ちやたん」となる。なぜ「きたたん」というのが諸説あるが、定説には至っていない。

近世（1609-1879）

1649年に作成された『絵図郷村帳』をみると、近世の北谷間切には、北谷・くわい（現在の桑江）・平安山・すなへ（砂辺）・野国・屋郎（屋良）・賀手納（嘉手納）・山内・あきな（安仁屋）の9つの村があったことが分かる。1660～1670年代には、間切の分割・新設に伴って山内が越來間切に、あきなが宜野湾間切に割かれ、新たに玉代勢、伝道、伊礼、浜川、野里が誕生し、計12村となって近代まで引き継がれた。1700年代前半になると首里の土族層が地方へ下り、屋取（ヤードウイ）として生活し始める。北谷は屋取が多い地域で、彼らは古集落と離れた未開地、概して高標高の地を開墾し集落を形成するが、急激な開墾により土砂流出が起きたことが下流域の伊礼原B遺跡で確認された。近世末期の1840年には、北谷沖にイギリス商船のインディアン・オーク号が座礁する事故が起こる。北谷間切の人々は同船の乗組員全員を救助・保護し、帰国の手助けをした。インディアン・オーク号座礁地では当時の積み荷の一部が今も海底に残されている。

近代・現代

1908（明治41）年に施行された島嶼町村制以後、北谷間切は北谷村（むら）となった。戦前は水田の広がる農村として栄えていたが先の大戦で焦土化し、沖繩戦や戦後の米軍基地建設により地形は大きく改変された。米軍上陸直前に守備隊が建設した特攻艇匿匿壕は、北谷城が立地する丘陵北側に現在も残されている。戦後は村全城が米軍の軍事占領下に置かれ、中でも嘉手納基地の存在は村を南北に二分し行政執行に支障をきたす要因となった。これらを受け、

1948（昭和23）年には北谷村（そん）と嘉手納村に分村し、1980（昭和55）年には北谷村から北谷町へと町制移行している。

千原遺跡周辺の歴史的環境

千原遺跡が発見されたキャンプ桑江北側地区は直角三角形形状をなしており、斜辺部分にあたる東側は桑江新層によって5～20mの比高差がある。返還跡地は標高5～10mの一見平坦な地形だが、平成7～9年度に実施した試掘調査の結果、地下には隆起石灰岩やピーチロックなどが存在しており起伏に富んでいることが判った（第7図）。概ね標高2m以下は枝状サンゴ礫層が堆積しており、縄文海進最盛期の前1～2期（縄文時代早期～前期）の汀線は丘陵近くまで追っていたと想定される。この頃、伊礼原遺跡付近はわずかに陸地を成し、丘陵麓から湧き出るウーチヌカーも存在していたことが地層断面から看取される。前3期（同中期）頃からは度々浸食作用を受けながらも陸地化は進み、それに連動して人々の居住域も海（西側）へ遷移した。

近世の間切の分割や新設に伴う村の分割を経て、17世紀後半には北谷間切の範囲と村々が確定した。家譜資料によると、現在「浜川」と呼ばれる集落は1674年には西平安山村とされていた。また、嘉靖年間（1522～1566）には既に平安山の名が見られるため、西平安山村は近世に入り平安山村から分離した印象を受ける。しかし、慶長検地（1609～1611）に全産で715あった村が『絵図郷村帳』（1649）では467と少なくなっており、1660～1670年代の間切分割や新設以前に統合があったことを留意しなければならない。村の名称はともかく、浜川村の前身が17世紀後半には存在しており、『琉球国由来記』成立時（1713）には浜川村となっていることが判る。

戦前の字浜川には浜川・平安山ヌ上屋取・喜友名小屋取の3集落があり、千原遺跡は浜川集落跡に位置する。当時の浜川は戸数21軒の集落で、1945年2月に米軍が撮影した航空写真には、浜川集落と平安山集落が県道を挟み存在しているのが判る（第8図）。1945年8月に撮影された写真では、道路建設により浜川集落はほぼ消失した（第9図）。



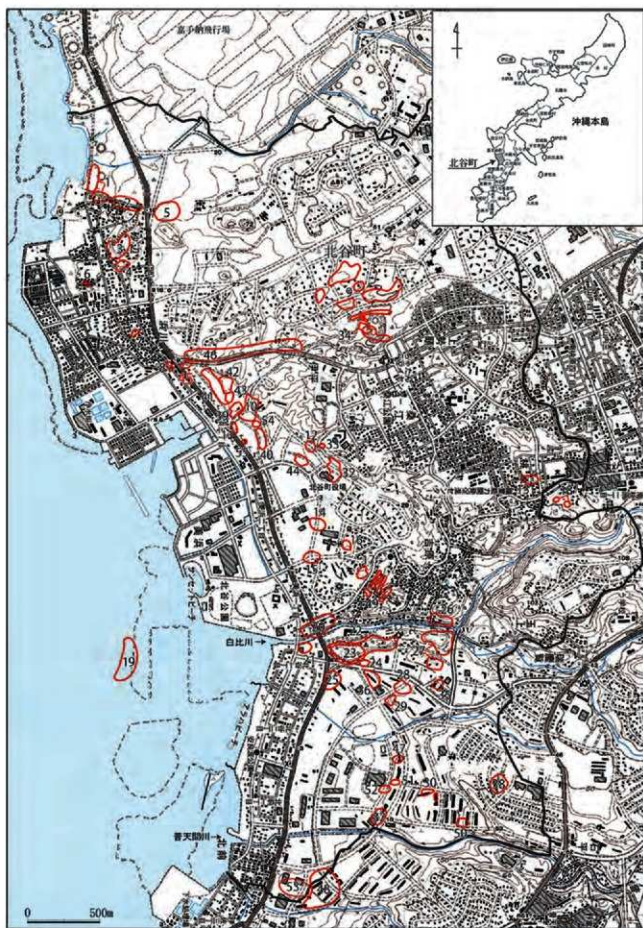
第7図 キャンプ桑江北側地区の遺跡分布と地下構造



第8図 1945年2月の航空写真



第9図 1945年8月の航空写真



第10図 北谷町遺跡一覽図

第2表 北谷町遺跡一覧表

No.	遺跡名	時期	所在地
1	砂辺(すなべ)サーク原貝塚	貝塚後期	字砂辺差久原
2	砂辺サーク原遺跡	貝塚前4期～近世	砂辺加志原
3	砂辺貝塚	貝塚前4期～グスク	砂辺村内原
4	砂辺ウガン遺跡	貝塚後期	砂辺加志原
5	カーシーンボントン遺物散布地	貝塚前5期	砂辺加志原
6	クマヤー洞穴遺跡	貝塚前2期～戦前	砂辺村内原
7	浜川千原岩山(はまがわせんばるいわやま)遺物散布地	貝塚前5期	浜川浜川千原
8	浜川ウガン遺跡	貝塚後期	浜川浜川
9	上・下勢頭区古墓群(かみ・しもせどくこぼぐん)	近世	上勢頭平安山伊森原・伊礼伊森原・下勢頭平安山下勢頭原
10	伊礼原(いれいばる)遺跡	貝塚前1期～戦前	伊平伊礼原
11	伊礼原B遺跡	貝塚1～5期・晩期・近世・戦前	伊平伊礼原
12	桑江ノ殿(くわえのどうん)遺物散布地	グスク～近世	桑江小堀原
13	鹿化石出土地	旧石器	吉原栄仁原・桃原
14	前原古島(めーばるふるじま)A遺跡	近世	桑江桑江原・前原
15	前原古島B遺跡	近世	桑江前原
16	伊地差久原(いじさくぼる)古墓	近世	桑江伊地差久原
17	前原古墓群	近世	桑江前原
18	桃原(とうばる)洞穴遺跡	中世	吉原東新川原
19	インディアン・オーク号の産産地	近世	北谷地先
20	池(いち)グスク	グスク	吉原東宇地原・西宇地原
21	白比川(しろひがわ)河口遺物散布地	貝塚前2期	北谷西表原
22	北谷城(ちったんぐすく)遺跡群	貝塚後期末～グスク	大村城原
23	北谷城	貝塚後期末～近世	大村城原
24	北谷城第7遺跡	貝塚後期～グスク	大村城原
25	北谷番所址	近世	北谷北谷原
26	吉原東角双原(よしはらあがりちめまたばる)遺物散布地	グスク	吉原東角双原・西角双原
27	山川原(やまがーばる)古墓群	近世	大村山川原
28	玉代勢原(たまよせばる)遺跡	貝塚後期末～グスク	大村玉代勢原
29	長老山(ちやうろうやま)遺物散布地	グスク～近世	大村玉代勢原
30	大道原(うふどうばる)A遺跡	グスク	北谷大道原
31	大道原B遺跡	貝塚前5期	北谷大道原
32	後兼久原(くしかにくぼる)遺跡	グスク	桑江後兼久原・字桑江小堀原
33	ジョーミーチャー古墓	グスク	桑江小堀原
34	伊礼伊森原(いりーいーむいばる)遺跡	グスク	上勢頭伊礼伊森原
35	後原(くしばる)遺跡	グスク～近世	大村玉代勢原
36	塩川原(すーがーばる)遺跡	グスク	北谷塩川原
37	稲干原(いぬふしばる)遺跡	貝塚後期	北前稲干原
38	横高原(よこたけばる)遺跡	グスク	北前横高原
39	伊礼原D遺跡	貝塚後期～近世	伊平伊礼原
40	伊礼原E遺跡	貝塚前2期～近世	伊平伊礼原
41	平安山原(はんざんばる)A遺跡	貝塚後期～近世	伊平平安山原
42	平安山原B遺跡	貝塚後期～近世・戦前	伊平平安山原
43	平安山原C遺跡	貝塚後期～近世	伊平平安山原
44	小堀原(くむいばる)遺跡	貝塚後期～近世	桑江小堀原
45	千原(せんばる)遺跡	グスク～近世	浜川字千原
46	大作原(うふさくぼる)古墓群	貝塚後期・近世	伊平大作原
47	東表原(あがりうむていばる)遺跡	貝塚前5期	北谷東表原
48	新城下原(あらぐすくしちやばる)第2遺跡	貝塚前1期～近世	北谷安仁屋原
49	東宇地原(あがりうじばる)古墓群	近世	吉原東宇地原
50	大道原C遺跡	近世	北谷大道原
51	大道原D遺跡	グスク	北谷大当原
52	高群原(たかぶしばる)水田跡	近世～戦前	北谷高群原
53	安仁屋原(あにやばる)遺跡	グスク～近世	北前安仁屋原
54	伊礼原A遺跡	貝塚前3期～貝塚後期	伊平伊礼原
55	蔵森(くらんもー)	近世～戦後	伊平伊礼原

註：時代表記は概ね「グスク」→「10～17世紀前半」、「近世」→「17世紀後半～明治以前」、「戦前」→「1945年以前」
*番号は第10図と一致

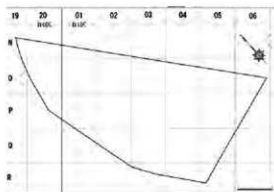
第三章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

1. グリッドの設定

本調査区が所在する区画整理事業地内には、1辺100mの大区画が設定されている。各大区画には、北東隅を起点にして南東へ01～20、南西へA～Tの番号を振り、各大区画にA1区、B5区などと番号を付けている。

本調査区は、大区画のB0区とB1区にまたがる。調査区のグリッド設定は、B0区とB1区に5mメッシュをかけて南東へ01～20、南西へA～Tの番号を割り、各グリッドにA-1区、B-5区などの番号を付けて設定している。調査区内のグリッドは、B0区がN-19～20、O-20、P-20、B1区がN-01～06、O-01～06、P-01～06、Q-01～05、R-03～05にまたがり、全部で32グリッドになる。(第11図)。



第11図 グリッド設定図

2. 表土・攪乱層・遺物包含層・遺構の掘削

表土(1層及び攪乱層)はバックホウ0.3m級で掘削したうえで、手作業で掘削面を整えた。

遺物包含層は、スコップ、手鍬、三角ホーなどで人力掘削した。掘削土は一輪車に集土したうえで、バックホウのバケットに入れて排出した。出土した遺物は、日付、グリッド、層位ごとにに取り上げている。

3. 遺構の検出と掘削

遺構の検出は、II層中とV層(地山の白砂層)上面で行っている。II層中の近代遺構は、石組遺構と石列遺構、手鍬、三角ホーで発掘。V層上面の遺構は、ガリ、三角ホーで遺構面を精査して遺構面を確認したあと、遺構を移植へら、玉杓子などを使って半裁して発掘。半裁面の撮影、断面図作成のあと残り半裁部分を発掘している。

4. 記録作業

記録作業の使用機材は、トータルステーション(SOKKIA SRX2)、オートレベル(トプコンATG-3)、デジタルカメラ(ニコンD90)、パーソナルコンピュータ(TOSHIBA Windows7、TOUGHBOOK WindowsXP)などである。V層上面の遺構検出面は、ラジコンヘリで上空撮影を行っている。

地形測量は、発掘調査前の地形測量、遺構完掘後のV層上面の微地形測量を行っている。

土層断面図は、東壁、西壁、南壁の各面を写真撮影したあと手作業で実測。遺構は半裁した断面を写真撮影したあと手作業で土層断面図を作成している。

III層中から検出したブタ埋葬遺構は、出土状態を撮影したあと、手実測で平面図を作成している。

このほか、重要遺物については出土状態の撮影を行っている。

第2節 層序と遺物の出土層位の記述

調査区壁面の土層断面図を第12図に、写真を図版3に、層序の観察一覧を第4表に掲げた。

土層断面図と土層観察表の層序は、Ⅰ層・Ⅱ層・Ⅲ層（上部・下部）・Ⅳ層・Ⅴ層に区分され、各層はさらに細分されている。一方、『遺構台帳』の遺物出土層位の表記は様々だったので、本報告書では第3表のように整理した。遺物の出土層位の整理にもとづいて、層序と遺物の出土層位を、Ⅰ層、Ⅱ層、Ⅲ層（上部・下部）、Ⅳ層、地山上面、遺構群、Ⅴ層（地山）に区分した。

各層の土質は『遺構台帳』の「基本層序」にもとづいた。各層の詳細を第4表に掲げた。各層の面的広がりには、遺物台帳のグリッド別出土層位と土層断面図から判断した。採取した遺物ラベルの「層序」の項目に「地山上面」と記されたものが多数あったので、層を形成してはいないが、これらの遺物の出土層位を「地山上面」とした。また、地山面で検出された750基余のピットや土坑などの遺構群から出土した遺物の出土層位を「遺構群」とした。下記は、各層位の概要である。

なお、遺構完掘後に実施した下層確認では、全面でピーチロックを確認した。ピーチロック上の標高は、概ね0.6～0.7mとなるが、P-04グリッド付近で落ち込んでおり、標高0.3m程度となる。

- Ⅰ層 米軍関係工事に伴う客土および攪乱層。
- Ⅱ層 近代の遺物包含層。黄褐色砂質土ないし黄褐色シルト。層の厚さは5～20cm前後で、ほぼ調査区全域に広がる。近代の沖繩産陶器などとともにガラス瓶、明治17年銘硬貨などが出土。
- Ⅲ層 近世の遺物包含層。暗褐色ないし黒褐色砂質土。層の厚さは10～40cm前後で、調査区全域に広がる。18～19世紀の沖繩産陶器を中心に、14～16世紀の輸入陶磁器も多数包含する。少量だが、グスク時代の石鍋片や貝塚時代後期の土器も出土した。
- Ⅳ層 グスク時代～近世の遺物包含層。黒褐色砂質土。10～20cm前後。調査区の北側隅のN-20～N-01、O-20～O-01グリッド周辺の小範囲に広がる。出土遺物はほとんどなく数点にとどまる。
- 地山上面 層序ではないが、地山上面の遺構検出作業中に出土した遺物を「地山上面」とした。
- 遺構群 層序ではないが、地山上面で検出した750基余のピット・土坑などを「遺構群」として本遺跡最下層に位置付けておく。
- Ⅴ層 地山。黄褐色砂層ないし白砂層。遺物の出土はない。

調査区の発掘調査前の現況地形は、標高4.21～4.51mで概ね平坦地形だが、調査区内の東側隅（O-04・O5グリッド一帯）から北東側の調査区外にかけては、米軍基地工事による深い攪乱坑に伴う窪地で、周辺より20～30cmほど窪んでいる。

主要な遺物包含層であるⅡ層・Ⅲ層は、概ね水平堆積している。Ⅴ層上面（遺構検出面）の微地形は、高低差は最大45cmあるが概ね平坦である。調査区北側部分（N-20、O-20グリッド周辺）が最も高く標高2.40～2.50m、南側部分北側部分（P-04、Q-04グリッド周辺）は標高2.20～2.25m、調査区中央部（P-03、Q-03グリッド周辺）が低く海拔2.05～2.10mになる。

第3表 遺物の出土層位の整理

『遺構台帳』の記載	報告書	
客土	Ⅰ層	
攪乱		
戦前の屋敷跡		
戦前に伴う石列？		
方形石組み遺構	Ⅱ層	
Ⅱ層		
Ⅱa層、Ⅱb層など	Ⅲ層	
Ⅲ層		
Ⅲa-2層、Ⅲb-1層など		Ⅲ層 上部
Ⅲ層上面		
Ⅲ層上層		Ⅲ層 下部
Ⅲ層下層		
Ⅲ層（地山直上）		
Ⅲ層（Ⅳ層？）	Ⅳ層	
Ⅳ層？		
Ⅳ層、Ⅳb層	地山上面	
地山上面（Ⅳ層？）		
地山上面	遺構群	
P、SD、SK、SX		
表探	その他	
南壁		



東壁

I
II
III



西壁（北半分）

I
III
IV



西壁（南半分）

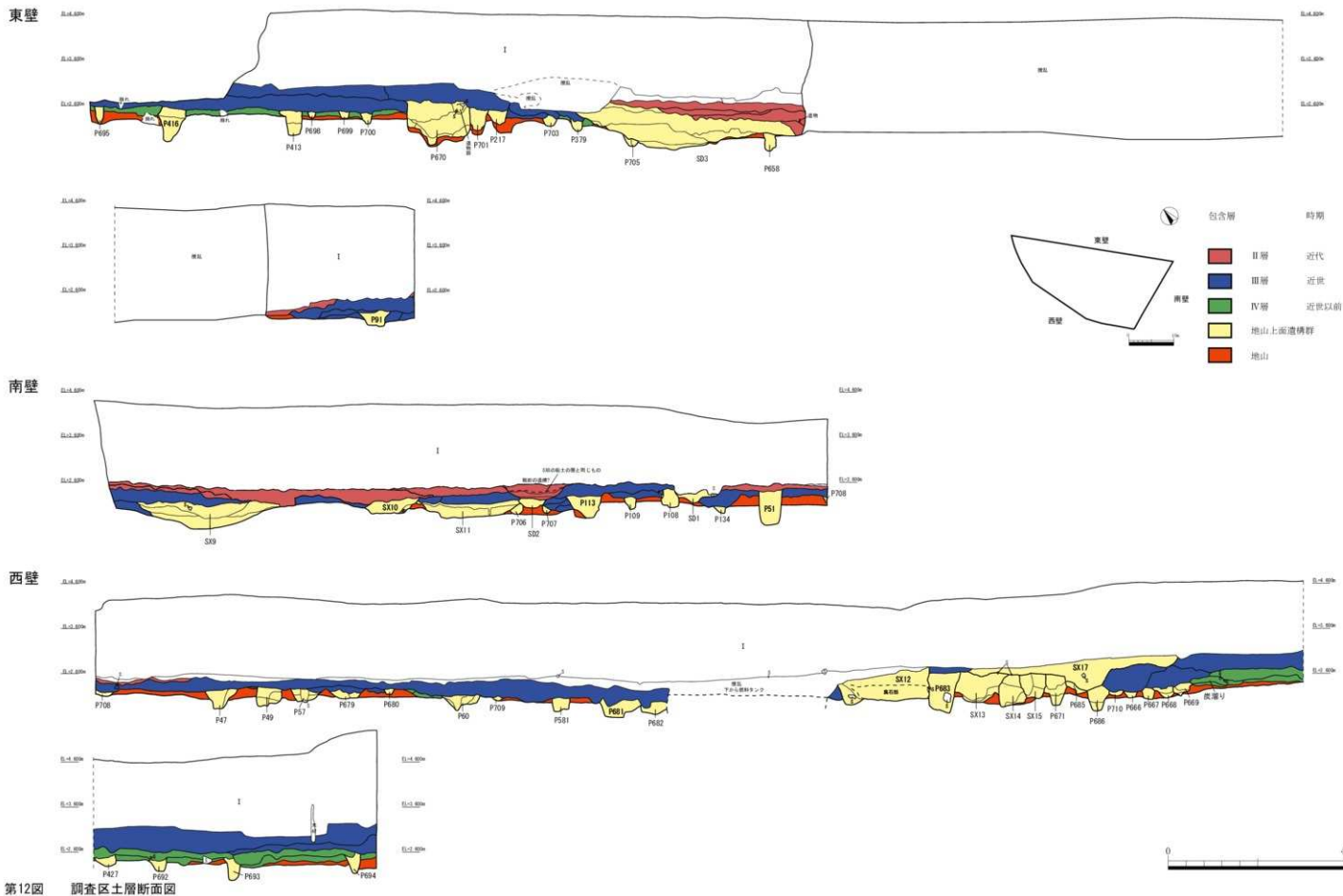
I
III



南壁

図版3 基本層序

I
II
III



第12圖 調査区土層断面図

第4表 土層観察表

層序	所見	土色
I層		
赤成土および埋層		
a	灰黄色砂質土 しまり強い、粘性やや弱い、オリーブ色シルトがブロック状にやや多く入る。炭・焼土わずかに入る。にがい・黄褐色シルト しまりやや強い、黒褐色土がわずかに混じる。オリーブ色シルトを含む。	10YR4/2
b	炭・焼土わずかに含む。調査区南側で見られる。	10YR5/4
II層		
c	暗灰黄褐色砂質土 しまりやや強い、粘性やや弱い、IIb層とIII層の黒褐色土が混じったような感じ。オリーブ色シルトがブロック状に少量入る。	2.5Y4/2
d	オリーブ褐色シルト しまり強い、粘性弱い、黒褐色土が少量混じる。黄褐色シルトがわずかに入る。砂粒が多く入る。	2.5Y4/3
e	にがい・黄褐色砂質土 IIc層に近い、しまりやや強い、粘性なし。黒褐色土の混じりが多い。砂粒の入りが多い。炭・焼土わずかに入る。	10YR4/3～3/3
a-1	黒褐色砂質土 しまり強い、炭・焼土わずかに入る。混入物の入りが少ない。	10YR3/2
a-2	黒褐色砂質土 しまりやや強い、粘性弱い、砂粒と貝片がやや多く混じる。オリーブ色シルトがブロック状にわずかに入る。炭・焼土少量入る。調査区南側で見られる。	10YR3/2
b	暗褐色砂質土 IIIa-2に比べ褐色が強い、しまり強い、オリーブ色シルトがわずかに入る。焼土少量入る。炭わずかに入る。	10YR3/3～3/4
c	黒褐色砂質土 やや褐色が強い。IIIa-2層に比べ砂粒の入りが少ない。しまりやや弱い。オレンジ色シルトがブロック状にわずかに入る。炭・焼土わずかに入る。	10YR3/2～3/3
d	黒褐色砂質土 しまりやや強い。砂質が強い、オリーブ色シルトがわずかに入る。炭・焼土わずかに入る。堆土土がまだら状に少量入る。	10YR3/2
e	黒褐色砂質土 しまり強い、やや褐色が強い、オレンジ色シルトが粒状に少量入る。炭わずかに入る。	10YR2/3
f	黒褐色砂質土 砂の層にIIIe層がまだら状に10%ほど混じる。しまり強い。炭・焼土わずかに入る。	10YR4/4
g	黒褐色砂質土 しまりやや強い。砂がみずけに少量入る。炭少量入る。	10YR3/2
h-1	黒褐色砂質土 やや褐色が強い、しまり強い、炭わずかに入る。黄褐色シルトが少量入る。貝片や砂粒を多く含む。炭わずかに入る。焼土少量入る。IIIc層に似るがやや色調が明るい。	10YR3/2
h-2	黒褐色砂質土 しまり強い、粘性なし、貝片・砂粒多く含む、やや褐色が強い、炭・焼土少量入る。小礫少量入る。調査区全体で見られる。	10YR3/1～3/2
h-3	黒褐色砂質土 IIIb層に近い部分が集中して見られる。やや褐色が強い。	10YR3/1～3/2
i	黒褐色砂質土 しまりやや強い、炭・焼土わずかに入る。貝片などの混入物少ない。	10YR3/1
j	黒褐色砂質土 堆山の砂が40%ほどまだら状に入ると。炭・焼土わずかに入る。褐色が強い。	10YR2/3
k	黒褐色砂質土 SX12の層に近いがややしまり強く、黒色も強い、小礫が少量入る。	10YR3/2
l	黒褐色砂質土 しまり強い、やや灰色が強い。黄褐色シルトがブロック状に少量入る。炭・焼土わずかに入る。貝片・小礫少量入る。	10YR3/1
m	黒褐色砂質土 III層に比べ褐色が強い、しまり強い、黄褐色シルトがわずかに入る。砂粒・貝片の混入がやや多い。炭・焼土少量入る。	10YR3/1
n	黒褐色砂質土 しまり強い、オレンジ色シルトが少量入る。砂粒・貝片の混入はやや少ない。炭・焼土少量入る。調査区全体に分布するが、北側で特に厚く堆積する。	10YR2/2～2/1
o-1	黒褐色砂質土 II層の土がブロック状に少量入る。しまりやや強い。砂粒・貝片の混入がやや多い。炭わずかに入る。焼土少量入る。*IIIc-1～3層は、現地調査では基本層序としたが、整理の過程でSD30の埋土と認識するに至った。	10YR3/1～3/2
o-2	黒褐色砂質土 しまりやや弱い、黄褐色シルトがわずかに入る。砂がすじ状に少量入る。貝片や小礫の混入がやや多い。炭わずかに入る。焼土少量入る。	10YR3/2
o-3	黒褐色砂質土 しまり強い、黄褐色シルトがわずかに入る。オリーブ色シルトがわずかに入る。貝片や砂粒・貝片の混入がやや少ない。	10YR3/1
p	黒褐色砂質土 しまり強い、黄褐色シルトがブロック状に少量入る。砂粒の混入が多い。炭・焼土少量入る。	10YR3/2
q	黒褐色砂質土 IIIa層に比べ褐色が強い、しまりやや強い、貝片や小礫などの混入物の入りがやや少ない。	10YR2/3
r	黒褐色砂質土 やや褐色が強い、堆山の砂がブロック状に20%ほど入る。	10YR2/2～2/1
III層		
a	黒色砂質土 しまりやや強い、砂粒がわずかに入る。貝片の混入がやや多い。炭・焼土わずかに入る。黒色が一番強い層。調査区北側の一部でしか見られない。	10YR2/1
b	黒色砂質土 しまり強い、IVa層に比べ貝片の混入は少ない、色調もやや薄い、炭・焼土わずかに入る。調査区北側で見られる。	10YR2/1
c	黒色砂質土 しまりやや強い、IVb層に比べ粒子が細か。炭や小礫が集中して混入している部分がある。*埋土年代の分析資料とした。	10YR2/2～2/1
d	黒褐色砂質土 しまりやや弱い、IVb層と堆山の砂が混じりあったような感じのため色調が薄い。炭少量入る。調査区北側で見られる。	10YR2/2
e	黒褐色砂質土 しまりやや強い、IVd層に比べ堆山の砂の入りが少ない、III層とIV層の間くらい、砂粒や貝片の混入も少ない。	10YR2/2～2/3
V層		
a	堆山と考えている。黄褐色砂質土 しまり強い、貝・小礫などの混入がやや多い。	
b	堆山と考えている。白砂層 しまり強い、貝・小礫・長サコなどの混入が多い。	

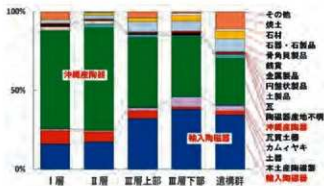
第3節 各層の出土遺物

1. 各層の遺物概要

本遺跡から出土した遺物の総数は6,221点である。種類は土器・陶磁器が主体で、近世沖繩産陶器を中心に近世中国陶磁などの輸入陶磁器、本土産陶磁器、貝塚時代後期～グスク時代・琉球の土器があり、ほかに沖繩産瓦、瓦質土器、カミヤキが少量出土した。土器・陶磁器以外では、骨角貝製品や焼土が多い。骨角貝製品の半数近くがタカラガイ科の有孔貝製品(貝鏟)である。焼土と金属製品や銭貨の一部は、鍛冶関係遺物と考えられる。

基本層位は、上層から順に、I層(客土・攪乱層)、II層(近代遺物包含層)、III層(近世遺物包含層)、IV層(近世遺物包含層)、地山上面、遺構群(近世)、V層(地山)で、表面採集や出土層位不明は「その他」とした。層位からみると、III層の出土遺物が圧倒的に多く全体の63.5%を占める。次いでII層が15.3%、遺構群が13.1%で、I層は6.9%、IV層は分布範囲も狭く遺物も5点しか出土していない。V層(地山=白砂層)は無遺物層である。

II層では、沖繩産陶器など近世・近代の遺物が主体を占める。III層では、沖繩産陶器が主体だが、14～16世紀を中心とした輸入陶磁器も多数出土している。III層のうち、III層下部では近世沖繩産陶器と輸入陶磁器の割合が半々である。IV層は、上述したように遺物の出土は殆どない。地山上面の遺物も37点とわずかで、輸入陶磁器がやや多い。遺構群では近世沖繩産陶器が多いが、14～16世紀の輸入陶磁器の割合が高くなっている(第5・6表, 第13図)。



第13図 出土遺物の主な層別割合

第5表 出土遺物集計表

層位	輸入陶磁器							本土産磁器	土器	カミヤキ	瓦質土器	沖繩産		陶磁器産地不明	瓦	円盤状製品	金属製品	銭貨	骨角貝製品	石器・石製品	焼土(個数)		焼土(g)	その他	・焼土重量を占める	遺物総計		
	青磁	白磁	漆付	その他	襖絵陶器	無軸陶器	陶質土器					瓦	焼土(個数)								焼土(g)							
I層	35	3	27	2	2	36	5	1	76	90	99	2	10	2	4	3		9	2		21	107	4	429	6.9%			
II層	72	10	60	7	17	62	6		1	195	284	140	20	21	4	1	4	1	25	12	4	1	17.8	3	950	15.3%		
III層上部	603	125	327	69	86	182	75	4	8	503	788	345	52	28	2	12	27	10	250	86	4	149	798	3	3736	60.1%		
III層下部	45	7	17	6	8	3	13		1	12	37	34	1					4	2		14	8	3	2	16.4	217	3.5%	
IV層計	648	132	344	75	94	185	88	4	9	515	825	379	53	28	2	16	29	10	264	94	7	151	814	7	3953	63.5%		
IV層	1																									5	0.1%	
地山上面	9	4				2	1			2			1					1		4	2	4	2	3.6		32	0.5%	
遺構群	134	16	74	9	49	21	27		5	61	157	19	21	2	1			8	4	69	39	9	90	454	6	815	13.1%	
その他	2	6	1			3	1			3	14	5														36	0.6%	
合計	901	165	511	93	163					850	1372	642	86	61	9	21	45	15	371	150	24	265	1398	5	6221	100.0%		
						309	132	4	16																			

第6表 土器陶磁器の部位別集計表

層位	輸入陶磁器																					本土産磁器	土器	カミヤキ	瓦質土器	沖繩産						陶磁器産地不明	合計											
	青磁			白磁			漆付			その他			襖絵陶器		無軸陶器		陶質土器		陶磁器産地不明																									
	口部	胴部	底	口部	胴部	底	口部	胴部	底	口部	胴部	底	口部	胴部	口部	胴部	口部	胴部	口部	胴部	底																							
I層	10	21	4	1	2	4	19	4		1	2									1	22	33	21	9	77	4	82	13	2	378														
II層	29	35	8	3	5	2	16	37	7	6	1	15	1	32	22	8	1	4	1		1	54	106	36	32	226	26	20	110	10	2	18	874											
III層上部	234	318	51	29	60	37	138	149	40	3	63	3	2	79	5	70	83	29	7	65	3	4	1	5	2	171	266	66	96	618	32	45	277	23	2	13	37	3167						
III層下部	18	22	5	3	2	8	8	1		6	2	6	1	1	1	1	1	1	2			1	6	3	3	9	24	4	3	26	5	1	184											
IV層計	252	340	56	31	62	39	146	157	41	3	69	3	4	85	5	71	84	30	7	76	5	4	2	5	2	177	269	69	107	642	78	48	300	28	2	14	37	3381						
IV層	1																1	1	1																			5	1	19				
地山上面	3	5	1	4							1	1	1		1	1				1							2											1	19					
遺構群	29	76	19	4	8	4	32	37	5	9	2	46	1	7	13	1	26	1			2	3	17	35	9	18	126	13	15	4	2	3	16	963										
その他	1	1	1				1	4	1		1	3				1	1			1							2	1	2	12	1	4					1	4			59			
合計	334	478	89	43	76	47	199	254	58	3	85	5	7	149	7	130	131	48	8	117	7	4	4	8	270	444	136	168	1063	119	69	514	59	4	19	74			8606					

以下、各層の主な遺物について説明するが、沖縄産無軸陶器の播鉢と沖縄産施軸陶器の碗の分類については、Ⅲ層で説明する。

なお、掲示する分布図では、各種別の出土点数をグリッド数で除した値を平均値とし、グリッド毎に平均値の倍数に基づいて色の濃淡を付けている。

2. Ⅱ層 (第16～19図、図版4～7、第7表)

Ⅱ層では、合計で950点の人工遺物が出土した。このうち、出土した遺物のグリッドが特定できる810点についてみると(第15図)、P-04グリッドが374点と最多で、約半分を占める。その他にP-02、Q-03・04グリッドでも全体の1割(70点)を超える出土点数があり、南側への偏在が認められる。

遺物の内訳は、沖縄産陶器(施軸陶器・無軸陶器・陶質土器)、輸入陶磁器(青磁・白磁・染付・褐釉陶器)、本土産陶器・磁器、瓦質土器、瓦、円盤状製品、銭貨・金属製品、石製品、骨・貝製品などである。構成比は第14図の通りである。このうち、沖縄産陶器の点数が619点と最多で6割以上を占める。

〈沖縄産施軸陶器〉(1～7)

195点が出土しており、うち7点を図化した。器種としては碗・小碗・蓋・壺・瓶・急須・鉢などがある。施軸技法としては、白化粘土を塗布した後に透明釉を掛けるものが主体で、他に鉄釉や灰釉を掛けるものも認められる。

1は碗、2は小碗で、いずれも内外面に白化粘土を塗布した後に透明釉を掛けるものである。見込みには重ね焼きの痕跡が残る。2は外面体部を面取りする。面取りの幅はほぼ均一で、推定で16単位になると思われる。

3・4は蓋である。3は内外面に透明釉を付すもので、器高は低い。4は天井部外面に鉄釉を付す。蛇の目釉剥ぎした部分には重ね焼き痕が残る。

5は小型の壺の体部で、外面に鉄釉を掛ける。

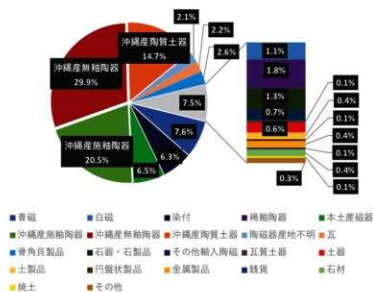
6は酒器で、算盤玉形の器形である。注口部は粘土の剥離痕のみ残存する。外面には白化粘土・透明釉を付した後、呉須と黄釉により、上位に菱形の区画文、下位に草花文を描く。内面は轆轤痕跡が顕著である。

7は火炉で、口縁部まで直線的に立ち上がる器形である。内外面に鉄釉を浸し掛けし、口唇上を釉剥ぎする。内面には鉤状の突起を有する。

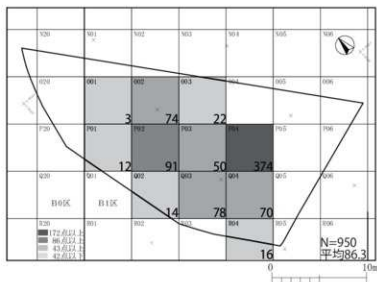
〈沖縄産無軸陶器〉(8～18)

284点が出土しており、うち11点を図化した。器種としては、播鉢・鉢・壺・甕・火炉などがみられる。

8は壺の口縁部である。頸部からやや外反気味に立ち上がり、口端部を外側へ引き出す。口唇の断面形態は逆L字状を呈する。9は水甕である。口縁部が肥厚しており、断面形態はT字状を呈す



第14図 Ⅱ層出土遺物 構成比



第15図 遺物分布図(Ⅱ層・全遺物)

る。外面体部には、2～3条1組の圏線帯の間に、櫛状工具による波状文を付す。10は壺または甕の体部下半～底部である。内面には輪積み痕が明瞭に残る。

播鉢は16点が出土した。外側に張り出した口端部上面に凹線を巡らすIVb類が主体となる。11はII類の口縁部で、口縁の下位に1条の稜を有する。12はI類ないしII類の底部で、ベタ底となる。13・14はIII類の底部で、若干上げ底となる。内面のカキ目は反時計周りの施文順序が認められる。13ではカキ目の各単位の右側で彫りが深い。見込みには、放射状のカキ目を付した後に別単位のカキ目を付す。15はIVa類の口縁部で、口端部の断面形態は角型を呈する。内面口縁直下には1条の圏線を有する。16～18はIVb類の口縁部で、口端部の下縁は丸みを帯びる。16では口端に平坦面を有する。

〈陶質土器〉(19・20)

陶質土器は140点が出土した。器種としては鍋・急須などがある。19は鍋の口縁部である。口縁部は蓋受け状となり、口端部に紐状の耳を有する。耳は欠損するが、幅6cm、太さ1.5cm程度を測るものと思われる。20は急須で、算盤玉形の器形を呈する。注口部とその上位の突起が残存する。

〈輸入陶磁器〉(21～23)

青磁72点、白磁10点、染付60点、褐釉陶器17点が出土した。

青磁は碗・皿が主体を成す。このうち碗の口縁部2点を図化した(21・22)。21は直口口縁で、外面口縁直下に圏線を3条付す、いわゆる「弦文」を施すもので、14世紀後半に位置づけられる。22は外反口縁で、外面にラマ式蓮弁文を付す。15世紀前半に比定される。

染付は、器種としては碗・皿・杯などがあり、産地は福建・広東系や徳化窯系が中心であると思われる。23は碗の底部で、腰がやや膨らむ器形である。外面には、やや発色の悪い呉須で草花文を手描きする。18～19世紀の福建・広東系の所産である。

〈本土産陶磁器〉(24～30)

62点が出土した。全て磁器で、器種は碗・皿が主体である。施釉・施文の方法としては、近世以来の手描きの他、近代に登場する手法として型紙摺り・銅版転写・クロム青磁などが認められる。統制番号を付すものは見出せなかった。型紙摺りで施文したものは11点あり、うち碗を3点図化した(24～26)。その多くが砥部産のいわゆる「スンカンマイ」である。器種は碗・皿で、碗の口径は4寸前後を測る。高台置付は軸割ぎとする。見込みに残る目跡から、5足のハマの使用が認められる。文様構成としては大きく2種類を認めた。一つは24・25などで、外面体部に唐草地に五弁花、腰部に櫛文、内面口縁直下に梅文帯を付す。25は見込みに枝付きの五弁花を施文する。もう一つは26などで、外面には点描による三角文を口縁から下向き、腰部から上向きに配して菱形の窓枠を作り、その枠内に菊花を配する。内面口縁直下にも同様の三角文帯を付す。見込みには内向きの松竹梅文を付す。

銅版転写で施文したものは9点あり、うち2点を図化した(29・30)。29は碗で、口縁が内湾気味に立ちあがる。外面体部にソテツと思われる植物の文様を、腰部には退化した剣先文を付す。30は皿で、高台は置付が細く削り出される。見込みに鳳凰などと思われる祥瑞文様を付す。瀬戸・美濃窯産と考えられる。

クロム青磁による施釉は5点あり、いずれも瀬戸・美濃窯産である。1点を図化した(27)。口縁は直立し、裏底は蛇の目状の削り出しとする。体部外面には縦位に飛びカンナによる器面調整が認められる。

28は金色・赤色などの顔料を用いて施文する。外面には紙書きで3文字を記すが、判読は不能である。

〈ガラス〉(31)

ガラスは2点出た。色調は透明で、やや気泡が多い。31は薬瓶で、円形の小型瓶である。側面には作出時の見切り線が残る。外面には目盛り線と「30」の数字を陽刻する。製造元・年代は不明である。

〈円盤状製品〉(32)

1点出たしている。32は近代の本土産磁器碗の体部を利用しており、周縁に細かい剥離が連続する。径3cm以下の小型品である。

〈石器・石製品〉(33)

石器・石製品は12点出たしており、うち1点を図化した(33)。器種としては礪石・磨石・砥石などがある。33は礪石の下臼で、復元直径は約25～26cmになると思われる。中央に1辺2.5cm、深さ3cmの芯棒孔が残る。上面には5条1単位とする受溝を掘る。石臼全体で6区画に分かれるものと考えられる。

〈金属製品・銭貨〉(34～39)

計6点を図化した。34は、明治17(1885)年銘の半銭硬貨である。磨耗が著しいが、銭文は「大日本 明治十七年 1/2SEN」と判読できる。35は鉄製で、「ヘラ」と総称される道具である。器厚は2mm前後と薄手で、着柄部が袋状となる形状である。36は銅製の留め金具である。隅は方形で、1ヶ所の釘穴が残る。取り外しの際に角を捻じ曲げている。37・38は鉄製品である。37は器種不明。38は釘で、断面形態は長方形となる。39は銅製の簪(ジーファー)である。頭部は欠損するが、匙状になるものと思われる。首部は捻って作出している。

〈骨・貝製品〉(40～43)

骨角貝製品は25点出土した。

40はサメと思われる軟骨魚類の椎骨を素材とする垂飾である。椎体の中央部に長方形の穿孔をおこなった上、孔の周縁を丁寧に研磨する。

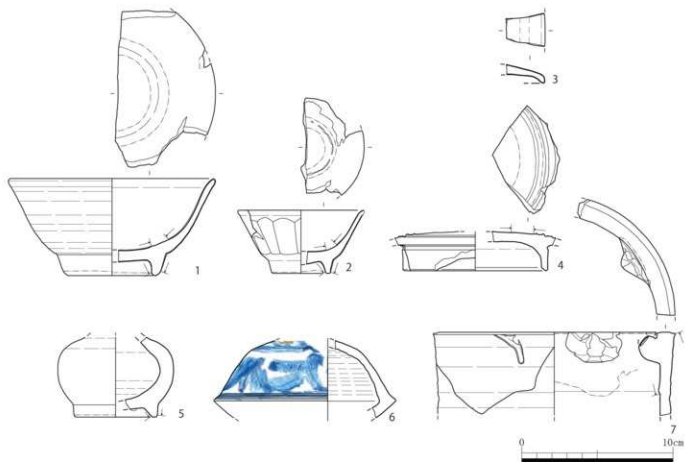
41～43はタカラガイ有孔製品(貝鐘)で、41は種不明、42・43はハナヒラダカラを素材とする。背面を大きく割り取り、扁平にする。いずれも設軸が残存する。破面の調整は粗雑で、敲打の単位が確認できる。

第7表-1 II層出土遺物 観察表(1)

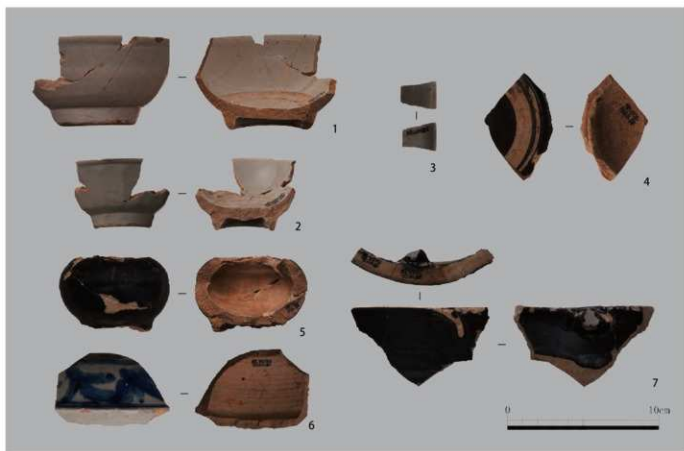
種類	写真番号	図番号	出土地		種別	部種	部位	法量()は推定値			観察事項	分類・時期・産地		
			グッド	遺構				層位	口径	器高			底径	重量
沖縄産無軸陶器	16	4	1	P-04	II層	沖縄産無軸陶器	碗	口～底	(13.4)	6.4	(5.8)	-	口縁上部外反。高台裏付は踏輪。内外面とも白化後に透明釉(5YR/1灰白色)。貫入はみだれない。見込みは蛇の目輪割。裏地はやや密。色調は2.5YR/3浅黄色。	IVa類
沖縄産無軸陶器	16	4	2	P-04	II層	沖縄産無軸陶器	碗	口～底	(8.3)	4.15	(3.8)	-	口縁上部はやや外反。外面は縦位に面取り。内外面とも白化焼土の後に透明釉(10YR/1灰白色)。光沢あり。細かな貫入。見込みは蛇の目輪割。裏地はやや密で0.5mm以下の塵粒子。色調は2.5YR/3浅黄色。	
沖縄産無軸陶器	16	4	3	P-04	II層	沖縄産無軸陶器	蓋	口	-	(1.3)	-	-	軸は透明釉(5Y7/2灰白色)で光沢あり。縦かな貫入あり。裏地は密で1mm以下の黒色砂粒を含む。色調は5Y7/1灰白色。	
沖縄産無軸陶器	16	4	4	P-04	II層	沖縄産無軸陶器	蓋	口	(9.4)	(2.7)	-	-	天井部は平坦。輪みは欠損。軸は鉄輪(10YR3/2黒褐色)。天井部外面は蛇の目輪割。色調は2.5YR/4浅黄色。	
沖縄産無軸陶器	16	4	5	P-04	II層	沖縄産無軸陶器	瓶	底	-	(5.3)	(5.5)	-	体部中央に最大径を持つ。内外面とも回転平。内面はクロ散着。軸は鉄輪(10YR2/1黒色)。高台裏付および内面は踏輪。裏地に砂みあり。裏地は密。色調は灰白色。	
沖縄産無軸陶器	16	4	6	P-04	II層	沖縄産無軸陶器	酒器	体	-	(5.1)	-	-	内面はクロ散着。草盤玉形を呈する。注口部は粘土接合痕のみ残存。外面は兵架による給付を行う。上位菱形の文様。下位草花文。屈曲部直上に2条1組の圓縁。白化粧の後に透明釉(灰白色2.5YR/2)。貫入は細かな。裏地は密。色調は10YR8/3浅黄褐色。	
沖縄産無軸陶器	16	4	7	P-04	II層	沖縄産無軸陶器	火鉢	口	(8.0)	(5.5)	-	-	口縁まで直立。口端は内側がやや肥厚し、突起の突起基が平く。軸は鉄輪(10YR1.7/1黒色)。口端部は4輪割。裏地は密。色調は2.5Y7/3浅黄色。	
沖縄産無軸陶器	17	5	8	P-04	II層	沖縄産無軸陶器	蓋	口	(11.4)	(4.6)	-	-	体部から直線的に立ち上がる。口唇部は逆「J」字状。口唇は平坦。外面は口縁直下および頸・体部現に各1条の圓縁。内外面とも回転平調整。裏地は密。～2mm大の砂粒少量を含む。色調は5YR5/4こい赤褐色。	
沖縄産無軸陶器	17	5	9	P-04	II層	沖縄産無軸陶器	水甕	口	-	(7.2)	-	-	口縁部は直立。口唇は外傾。外面は口縁直下に沈線3条。その下に成状文を施す(樹状工具、7本1単位)。裏地はやや密。色調は2.5YR4.6赤褐色。	
沖縄産無軸陶器	17	5	10	O-01	II層	沖縄産無軸陶器	底	-	(8.7)	10.4	-	-	体部直線的に立ち上がる。外面にマンガン色(10YR5/2灰黄色)。裏地は密で、白色粒含むセラビ。色調は10YR5/2灰黄色。	
沖縄産無軸陶器	17	5	11	P-04	II層	沖縄産無軸陶器	楕鉢	口	-	(5.1)	-	-	口縁部は調整回転コナダ。口縁部直下に横を有する。カキ目数不明。裏地は密。色調は5YR3.6暗赤褐色。	II類
沖縄産無軸陶器	17	5	12	II層 平面 清掃	II層	沖縄産無軸陶器	楕鉢	底	-	(2.4)	(10.0)	-	体部回転コナダ。底面未調整。カキ目11本/2.4cm。裏地は密。色調は2.5YR2/4暗赤褐色。	I～II類
沖縄産無軸陶器	17	5	13	P-04	右列	沖縄産無軸陶器	楕鉢	底	-	(7.2)	(11.0)	-	底部は若干上り底。カキ目は10本以上/2.4cm。左右の腕に施文。工具の右端はやや深い。裏地は密。色調は2.5YR4.8赤褐色。	III類
沖縄産無軸陶器	17	5	14	P-04	右・右列	沖縄産無軸陶器	楕鉢	底	-	(5.3)	(10.0)	-	底部は若干上り底。カキ目6本/1.5cm。底部は放射状にカキ目を付す。裏地は密。色調は2.5YR3.4暗赤褐色。	III類
沖縄産無軸陶器	17	5	15	P-04	II層	沖縄産無軸陶器	楕鉢	口	-	(3.6)	-	-	口縁部回転コナダ。カキ目は丁寧に消去される。逆「J」字状に口縁は外反する。内面に圓縁1条。裏地は密。色調は2.5YR4.6赤褐色。	IVa類
沖縄産無軸陶器	17	5	16	P-04	II層	沖縄産無軸陶器	楕鉢	口	-	(1.6)	-	-	口縁部調整回転コナダ。カキ目は単位は不明瞭だが消去は十分。裏地は密。色調は5YR4.6赤褐色。	IVb類
沖縄産無軸陶器	17	5	17	II層	II層	沖縄産無軸陶器	楕鉢	口	(29.4)	(3.4)	-	-	口縁部調整回転コナダ。体部内外面回転コナダ。カキ目数不明。裏地は密。色調は2.5YR1.8赤褐色。	IVb類
沖縄産無軸陶器	17	5	18	P-04	II層	沖縄産無軸陶器	楕鉢	口	(26.0)	(5.5)	-	-	調整回転コナダ。カキ目12本/2.4cm。裏地は密。色調は2.5YR5.6赤褐色で、部分的に灰褐色を呈す。	IVb類
陶質土器	18	6	19	P-04	II層	陶質土器	鍋	口	(20.0)	(4.5)	-	-	頭部は「く」字状に屈曲。口縁内面や内面。縁状の把手を有する。裏地は普通。色調は2.5YR6/6褐色。	
陶質土器	18	6	20	P-04	II層	陶質土器	急須	体	-	(6.2)	-	-	器形は草盤玉形。把手・注口を付す。注口下部に僅か付着。裏地は密。色調は5YR6/6褐色。	

第7表-2 II層出土遺物 観察表(2)

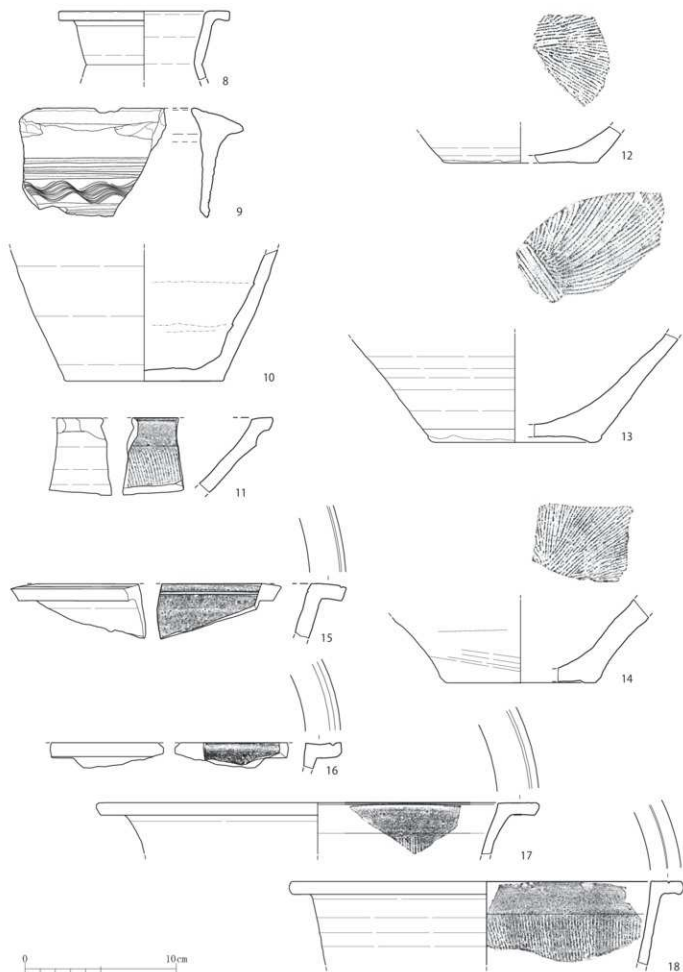
探検	年号	図 番号	出土地 ブリード 遺構	層位	種別	器種	部位	法量 ()は推定値				観察事項	分類・時期・産地	
								口径	器高	底径	重量			
18	6	21	O-03	II層	青磁	碗	口	(12.1)	(5.4)	-	-	直口縁。外面口縁直下には赤色の濃緑(位文)。軸は10Y5/3Rオリーブ色でやや光沢あり。縁がい貫入あり。素地は密で白色微粒子。色調は7.5Y8/1灰白色。	14世紀後半 龍泉窯系	
18	6	22	O-03	II層	青磁	碗	口	(14.6)	(3.0)	-	-	外反口縁。内外面へう彫刻によるラメ式蓮文。軸は2.5GY1/オリーブ灰色でやや光沢あり。貫入は無い。素地は密で細い4白色微粒子を含む。色調はN8/灰白色。	15世紀前半 龍泉窯系	
18	6	23	O-03	II層	染付	皿	底	-	(4.4)	(8.8)	-	内面腹部に團扇1条。外面腹部に草花文。軸は10GY8/1明緑灰色で光沢あり。貫入はやや細い4。見込みは蛇の目松樹文。鳥雲の景色は淡く、淡青色。素地はやや密で1mm以下の白色微粒子少量含む。色調は2.5Y8/3淡黄色。	18世紀後半～19世紀 福登・広東系	
18	6	24	P-04	畦	II層	本土産磁器	碗	口	(13.0)	(3.1)	-	-	外面は青草地に五弁花。内面口縁部に五弁花帯。素地は赤。色調はN8/灰白色。	砥部焼碗(シカマカイ)
18	6	25	戦前の 居敷跡		本土産磁器	碗	底	-	(5.2)	4.6	-	-	口縁外反。外面体部青草地に五弁花。腰脚脚文。高台脇に團扇1条。見込みに五弁花(枝あり)。畳付は露胎。素地は密。色調はN8/灰白色。	砥部焼碗(シカマカイ)
18	6	26	P-04	畦	II層	本土産磁器	碗	口へ 底	(13.7)	6.1	(4.0)	-	外反口縁。外面は点描梅・巻形窓に菊花。腰に三角文。高台脇に團扇2条。見込みに松竹梅。内面口縁下方。見込みに團扇をめぐらす。内野点描・巻形窓に梅文。見込みに径5.5mmの目録2ヶ所。降灰による付着物有。素地は透明極で光沢あり。素地は密で0.1mm以下の長石少量含む。色調はN8/灰白色。	砥部焼碗(シカマカイ)
18	6	27	P-04	畦	II層	本土産磁器	碗	口へ 底	(7.4)	4.1	(3.2)	-	フロム青磁の有文小碗。外面は飛びカンナによる縦文に文様を施す。外底は蛇の目状に削り出す。軸は10Y6/2オリーブ灰色で貫入は見られない。畳付から外底面は露胎。素地は密で白色微粒子。色調はN8/灰白色。	瀬戸・美濃窯系
18	6	28	P-04	II層	本土産磁器	碗	口へ 底	(8.0)	4.9	(3.8)	-	-	直口口縁。軸は淡緑灰色。畳付は露胎。素地は密。色調は7.5Y8/1灰白色。	
18	6	29	戦前の 居敷跡		本土産磁器	碗	底	-	(5.5)	(4.0)	-	-	内外面に銅版転写による筋文。外面体部は青黄波文を地に挿物(ソテツ?)。腰部に彫刻化された筋先文。内面口縁側面に筋文。見込みに松竹梅文。素地は密。色調はN8/灰白色。	
18	6	30	O-02	II層	本土産磁器	皿	底	-	(1.0)	(6.0)	-	-	銅版転写による筋文。外面高台脇に團扇3条。見込みに風流文など祥瑞文様。内外器面に灰白色の透明釉。高台畳付は露胎。素地は密。色調はN8/灰白色。	
19	7	31	P-04	畦	II層	ガラス製品	瓶	口	1.2	(4.5)	-	-	薬瓶。体部に見切の縁と「30」の文字。色調は透明。	
19	7	32	O-02	II層	円盤状製品			長2.5	巾3.3	厚0.6	8.0		本土産磁器・碗の体部を転用。内面から大ぶりの割罫の後、外面から細い割罫により周縁を整形。素地は密。色調はN8/灰白色。	
19	7	33	P-04	畦	II層	石製品	繭白	長 (19.0)	巾 (17.0)	厚9.6	4300		中央部に芯棒孔が穿たれる。孔は直径4cm。上面に5条1mmの溝が刻まれる。6区画に分けられる。側面・下面には特加工痕は見られない。琉球石灰岩を素材とする。	
19	7	34	II層平 面遺跡		銭貨				2.2	厚0.1	2.6		手銭硬貨。明治17年の刻印跡。錆が多く付着し銭文不鮮明。	
19	7	35	P-04	II層	金属製品	鉄へう		長13.8	巾9.7	厚1.3	137.3		鉄製。縦型のへう。鍛造による作。刃部の厚さ0.1mm程度。柄の側は袋状に仕上げられる。全体に錆蝕している。	
19	7	36	P-04	II層	金属製品	留の金具		長2.4	巾2.7	厚0.1	2.2		青銅製。器体から外すための角を捻じ曲げている。斜めに整える切断面がある。	
19	7	37	P-04	II層	金属製品	鉄製品		長0.8	巾3.5	厚1.3	64.7		器種不明の鉄製品。全体に錆蝕れがみられる。	
19	7	38	P-04	II層	金属製品	釘		長0.4	巾0.9	厚0.6	13.5		鉄製。横断面は長方形となる角釘。頭部残存せず。	
19	7	39	P-02 Q-02	II層	金属製品	管		長0.8	巾0.4	厚0.4	2.6		銅製のジューアー。先端は欠損している。基部部分は四角で先端に向けて途中から丸くなっている。	
19	7	40	P-02	II層	骨製品	垂飾		長2.8	巾2.7	厚1.3	4.6		サメ歯骨を利用した垂飾。確体の中央に長方形の穿孔孔。孔の周囲丁寧に研削されている。	
19	7	41	P-02	II層	貝製品	タカラガイ 有孔製品		径0.44	径0.2	高1.6	13.4		貝種不明。背面を削り取っている。色残り良好。	
19	7	42	Q-03	II層	貝製品	タカラガイ 有孔製品		径0.23	径0.1	高0.9	1.9		ハナビラダカフカ利用。背面削り取っている。	
19	7	43	Q-03	II層	貝製品	タカラガイ 有孔製品		径0.22	径0.1	高0.7	1.5		ハナビラダカフカ利用。フヤは無い。部分に黄斑残る。背面を削り取った周縁を整えている。殻軸残存。	



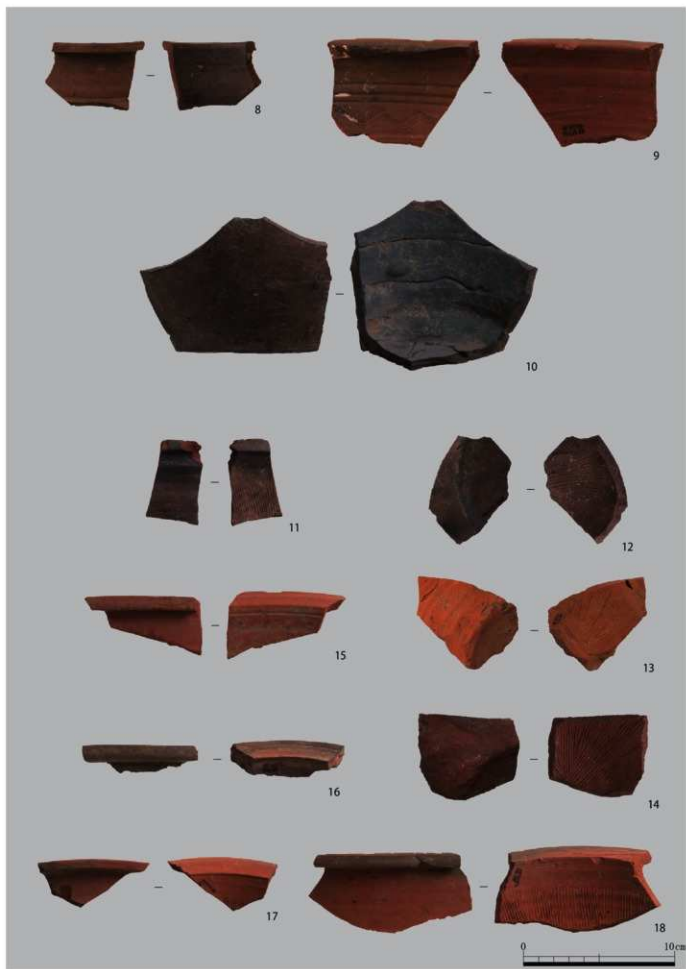
第 16 圖 II 層出土遺物 1



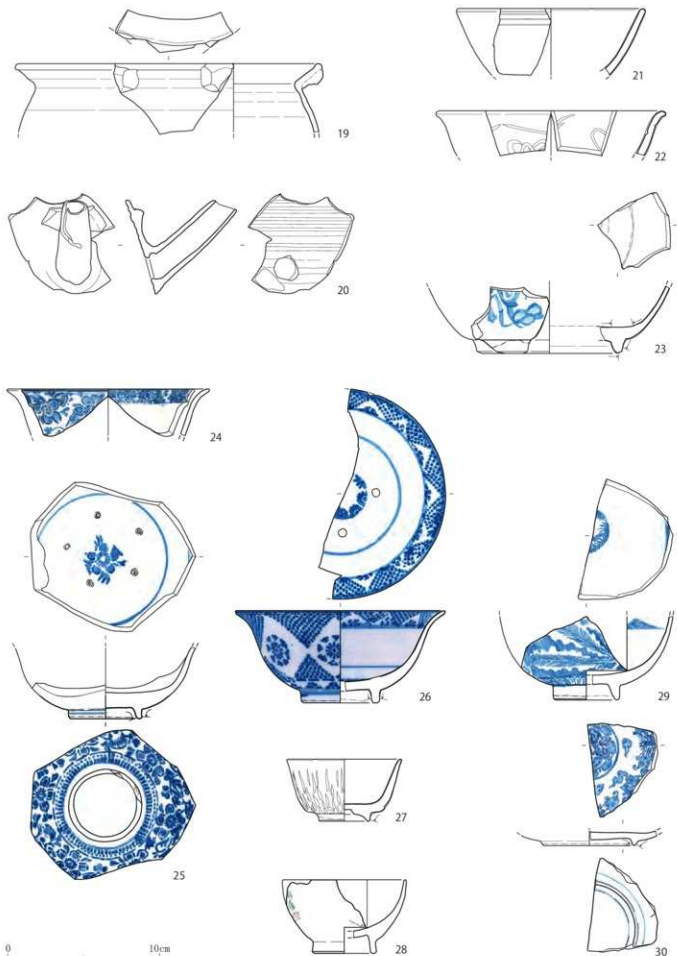
圖版 4 II 層出土遺物 1



第 17 図 II 層出土遺物 2



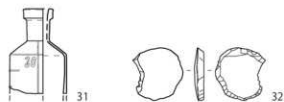
圖版 5 II 層出土遺物 2



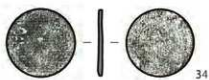
第 18 圖 II 層出土遺物 3



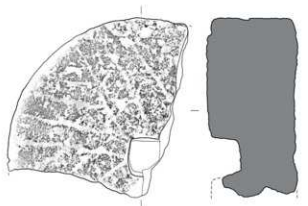
圖版 6 II 層出土遺物 3



0 (31-32) 10cm

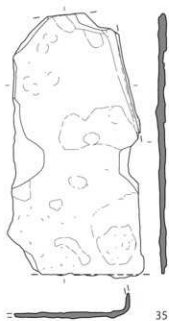


0 (34) 5cm

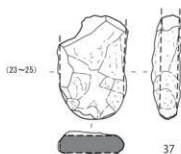


0 (33) 10cm

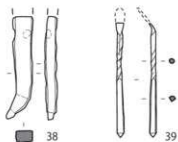
33



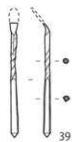
35



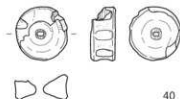
37



38



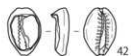
39



40



41



42



43

0 (35-43) 10cm

第19図 II層出土遺物4



圖版 7 II 層出土遺物 4

3. III・IV層

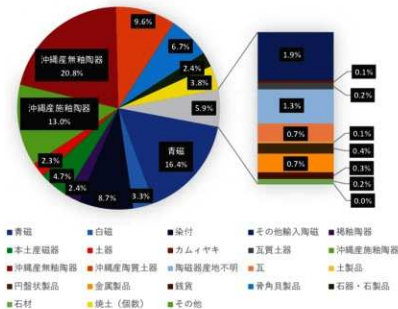
III・IV層では、合計3,958点の遺物が出土した。本遺跡の出土遺物の63.5%を占める。

III層は調査区全域に30～40cm厚で分布している。調査区壁面のIII層と遺構群との関係を見ると、III層中でも数枚の遺構面が想定でき、III層は複数の時期にわたるものと思われる。また、III層の下位には、調査区北側を中心にIV層が5～10cm厚で分布する。しかし、現地調査ではIII・IV層の明確な掘り分けがなされておらず、帰属層の細分が困難であるため、遺物の報告は一括しておこなうこととする。

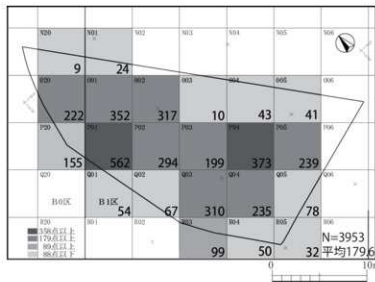
III層の出土遺物の内訳は第20図の通りである。種別は、沖縄産陶器（施軸陶器・無軸陶器・陶質土器）、瓦質土器、本土産陶磁器、輸入陶磁器（染付・青磁・白磁・褐釉陶器など）、貝塚時代後期～グスク時代の土器、カムイヤキ、円盤状製品、土製品、瓦、銭貨、金属製品、石器・石製品、骨製品、貝製品、鉄滓・焼土など多岐に亘る。全体の出土量は、18～19世紀代の沖縄産陶器が1,719点と最多で、近世遺物を主体とするものの、近代の本土産陶磁器、グスク時代・古琉球の輸入陶磁器（青磁・白磁・染付など）や貝塚時代後期の土器・石器なども出土しており、遺物の時期は幅広い年代幅を有する。特に輸入陶磁器は、出土点数が1,293点と沖縄産陶器に比肩するほど多いうえ、残存長が10cmを超える破片が非常に多く、単なる流入や再堆積とは考え難い。これらは本来ならば近世遺物包含層であるIII層よりも下位層に帰属すべき遺物であろうが、III層段階におこなわれた人為的な土地改変により下位層が破壊され、当地に存在した遺物群が遊離したことを示すものであろう。

確実にIV層から出土した遺物は、青磁・土器など5点のみである。IV層は、III層よりは若干古相を示すと思われるものの、確実な時期の検討をおこなない得ないため、III層と合わせて報告することとする。

遺物分布は第21図の通りである。P-01グリッド周辺とP-04グリッド周辺の2ヶ所に分布の中心が認められる。



第20図 III・IV層出土物 構成比

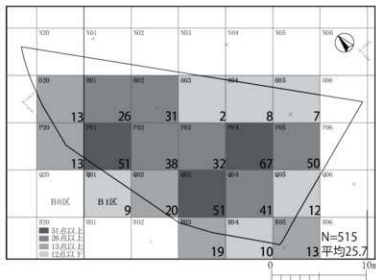


第21図 遺物分布図 (III層・全遺物)

(1) 沖縄産施釉陶器 (第23～25図、図版8～10、第10表)

515点が出土しており、このうち31点を図化した。

器種としては、碗類のほか、小碗・鉢・香炉・急須・酒器・火炉・火入などが出土している。分布の様相をみると(第22図)、P-04グリッド・P-01グリッドでそれぞれ約1割となる50点以上の出土があり、調査区南側と北側の2ヶ所に分布の中心を見出せる。



第22図 遺物分布図(Ⅲ層・沖縄産施釉陶器)

〔碗〕(1～23)

碗は、『平安山原A遺跡』[北谷町教育委員会2016]での分類に依拠する形で、器形・施釉方法に基づいて、大きくⅠ～Ⅳ類に分類して整理した(第8表)。各々の類型で、調整手法などにも特徴がある。第9表は、Ⅰ層(客土・攪乱)を除く各層の全数調査による各型式の層別別出土数量表である。また、各層とも実測可能な個体は極力図化しており、Ⅲ層出土分では23点を図示した。

碗Ⅰ類(1～5) 内外面の体部上半に灰釉を浸し掛けする一群である。壘付から口縁部まで直線的に立ち上がる器形で、口径は12～13cmを測る。高台は削り出しており、断面形態は逆台形を呈する。体部と高台の間には若干の段差を有する。灰釉は緑灰色を呈する。灰釉碗には有文と無文があるが、本遺跡の資料は全て無文である。素地は精良である。

底部形態をみると、1では平坦であるが、4・5は蓮子心となる。1の内面には、溶着防止のための耐火砂の痕跡が残る。3は口縁直下に数条の凹線を付す。5は体部下半の釉葉を丁寧拭き取る。

碗Ⅱ類(6～10) 内外面に鉄釉ないし鉛釉を掛ける一群である。器形は、腰がやや張り、口縁部が緩やかに外反する。底部は平坦である。削り出し高台で、高台の断面形態は逆台形を呈する。体部下半は1～2段の回転ヘラケズリが顕著である。施釉方法はⅠ類と同じく浸し掛けで、下地に暗褐色を呈する錆釉を掛けた後に、黒色～黒褐色を呈する鉄釉を掛ける。外面は体部下半を露胎とする。見込みには鉄釉や錆釉を用いて丸文を施文しており、Ⅲ・Ⅳ類の蛇の目軸刺ぎのような形状とする。高台壘付には、溶着防止のため、1～2mm幅で白化粧土を塗布している。

7は、高台脇に飛びカンナによると思われるケズリ痕跡が残る。7～10では、見込み中央に丸文を描く。10では、見込みの丸文に施釉した釉葉の一部が緑灰色に発色する。9・10の見込みには、重ね焼きの痕跡として白化粧土の付

第8表 沖縄産施釉陶器・碗の分類

	I	II	III	IV
器形	直口縁 直線的	外反口縁 丸み帯びる	外反口縁 丸み帯びる	外反口縁 丸み帯びる
釉の種類	灰釉	鉄釉or 鉛釉	外:鉄釉 内:透明	白化粧→ 透明釉
施釉範囲	外面底部	×	○	○
	高台裏	×	△	○
見込み	×	×	○	○
壘付	×	×	○	○
見込み	×	×	○	○

第9表 沖縄産施軸陶器・碗の部位集計表

分類		Ⅱ類	Ⅲ類	遺構群	合計		
Ⅰ類	灰釉	口縁部	8	24	1	SD3	33
		胴部	7	10			17
		底部	10	10			20
		計	25	44	1		70
Ⅱ類	透明釉・鉄釉	口縁部	2	15	1	SK10-11	18
		胴部	1				1
		底部	1	6			7
		計	4	21	1		26
Ⅲ類	掛分け	口縁部	3	20	1	P673	24
		胴部		1			1
		底部					
		計	3	21	1		25
Ⅳ類		計	28	78	1		107
Ⅳ類 細別	Ⅳa類 無文	口縁部	10	47			57
		胴部	6	16	1	SX9	23
		底部	6	12			18
		計	22	75	1		98
	Ⅳb①類 線彫り文	口縁部		1			1
		胴部					
		底部					
	Ⅳb②類 二彩の草花文	口縁部					
		胴部					
		底部					
	Ⅳb③類 草花・丸文	口縁部	1	1			2
		胴部	3				3
		底部		1			1
	Ⅳb④類 正文・ワッタン	口縁部					
		胴部					
		底部	2				2
		計	2			2	

着が認められる。

碗Ⅲ類 (11) 内外面に異なる釉薬を付す一群である。器形はⅡ類と同様である。体部下半から高台は回転ヘラケズリとする。釉薬は、外面は鉄釉、内面は透明釉と、内外面に異なる釉薬を掛け付けている。外底には施軸するものとしなないものがある。高台畳付には白化粧土を塗布するものとしなないものがある。見込みは蛇の目釉剥ぎしており、重ね焼き痕跡が残る。

11は高台外面に2条の圈線を付す。畳付には部分的に白化粧土が残存する。見込みにも重ね焼きに伴う白化粧土が付着する。

碗Ⅳ類 内外面に白化粧土を塗布した後に透明釉を掛ける一群をⅣ類とした。このうち、加飾の有無・手法により、無文とするものをⅣa類、有文とするものをⅣb類と細分した。

・**碗Ⅳa類** (12～20) 腰部がやや張り、口縁部が外反する器形である。口径は14～16cmのものが中心である。底部は平坦である。高台は付け高台で、高さはやや高く1cm以上を測る。調整は回転ナデを基本とし、体部下半の高台との接着部分付近のみ回転ヘラケズリとする。白化粧土を塗布した後に透明釉を全面に施軸し、高台畳付および見込みの釉を剥いでいる。素地は黄灰色で、焼成は軟質のものが多い。見込みの蛇の目釉剥ぎは概ね1～2cm幅で、剥いだ部分には、重ね焼きの痕跡として、上位に置いた碗の畳付の痕跡が輪状に残る。P-04・05グリッドでの出土が目立つ。但し、Ⅳb類との区別の基準は文様の有無のみであり、Ⅳa類は厳密には「文様の確認できなかった破片」である。

12では外底に呉須が付着する。19の見込みには、畳付の痕跡のほか、3ヶ所のトチン痕が残る。12・16・20の高台畳付には白化粧の痕跡が残る。

・**碗Ⅳb類** (21～23) 白化粧・透明釉施軸の後に加飾をおこなう一群である。施文方法により、更にⅣb①～④類の4つに細分している。

Ⅳb①類：線彫りにより施文後、灰釉を掛ける(21)。

Ⅳb②類：コバルトと鉛釉との二彩で草花文を施文する。本遺跡では出土していない。

Ⅳb③類：呉須またはコバルトにより草花文や丸文を施文する(22・23)。

Ⅳb④類：イッチン技法により、コバルト(花卉)や鉛釉(花芯)などで花文を施文する。

21は口縁直下に線彫りで草花文を施文する。22は体部に呉須で草花文を描く。葉脈の一部は線彫りによる表現となる。呉須の発色は不良で、深緑色を呈する。23は外面体部全面に呉須で草花文を描くもので、呉須の発色は良好である。内面にも部分的に呉須が付着する。

〈小碗〉 (24・25)

2点を図化した。24・25は、施軸方法は碗Ⅲ類と同様で、外面に鉄釉、内面に透明釉を掛け、見込みは蛇の目釉剥ぎとする。素地は灰褐色で、焼成は堅緻である。24は高台が高く、底部から口縁部に向かって緩やかに内湾しながら立ち上がる器形である。外面の鉄釉は浸し掛けて、高台端部～外底は露胎とする。高台畳付には白化粧土を塗布する。25は口縁が外反する。外底まで鉄釉を付した後に畳付の釉を剥がしている。

〈鉢〉 (26)

1点を図化した。26は底部である。施軸方法は碗Ⅲ類と同様で、外面に鉄釉、内面に透明釉を掛け、高台畳付および見込みの釉を剥いでいる。畳付は平坦である。

〈急須〉 (27・28)

2点を図化した。27・28ともに底部のみの破片である。底部は平坦で、脚を有する。外面体部下半まで鉄釉を掛ける。内面体部下半から底部にかけて煤の付着が認められる。

〔酒器〕(29)

1 点を図化した。算盤形を呈する器形である。高台は外側側からの削り出しが明瞭で、高台の断面形態は三角形を呈する。素地は灰褐色を呈する。内外面に錆輪を掛ける。外面体部上半には、意匠は不明ながら、斜位にへら彫りによる沈線が付している。酒器にはこの他にも、白化粧の後に軸による加飾をおこなうのがみられる。

〔火取〕(30)

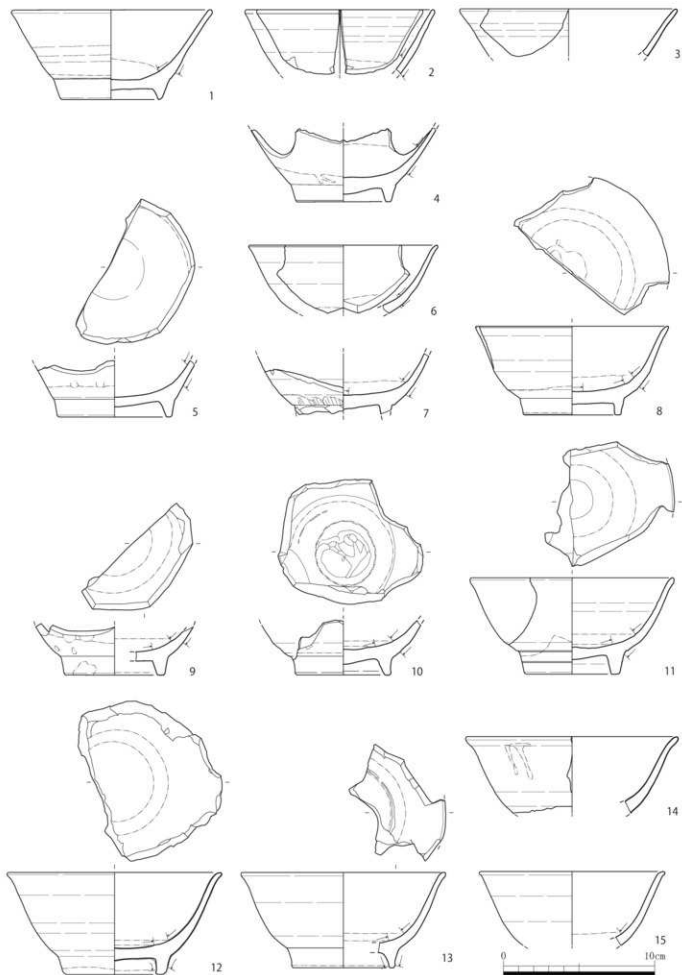
1 点を図化した。30は筒形の器形で、腰部が張り、腰部から口縁に向けて直立して立ち上がる。器厚は5mm前後と薄い。外面では、白化粧の後に透明釉を掛け、腰部下半および高台皿付の軸葉を剥がしている。内面は白化粧のみとする。

〔火炉〕(31)

1 点を図化した。31は、腰部が張り、腰部から口縁に向けて直立して立ち上がる器形で、復元直径3～4cmの火窓が1ヶ所存在する。外面には数条の圏線が認められる。軸葉は気泡の多い鉄軸で、体部下半を露胎とする。底部内面には油煙の付着が顕著である。焼成は不良である。

第10表-1 Ⅲ・Ⅳ層出土沖繩産施釉陶器 観察表(1)

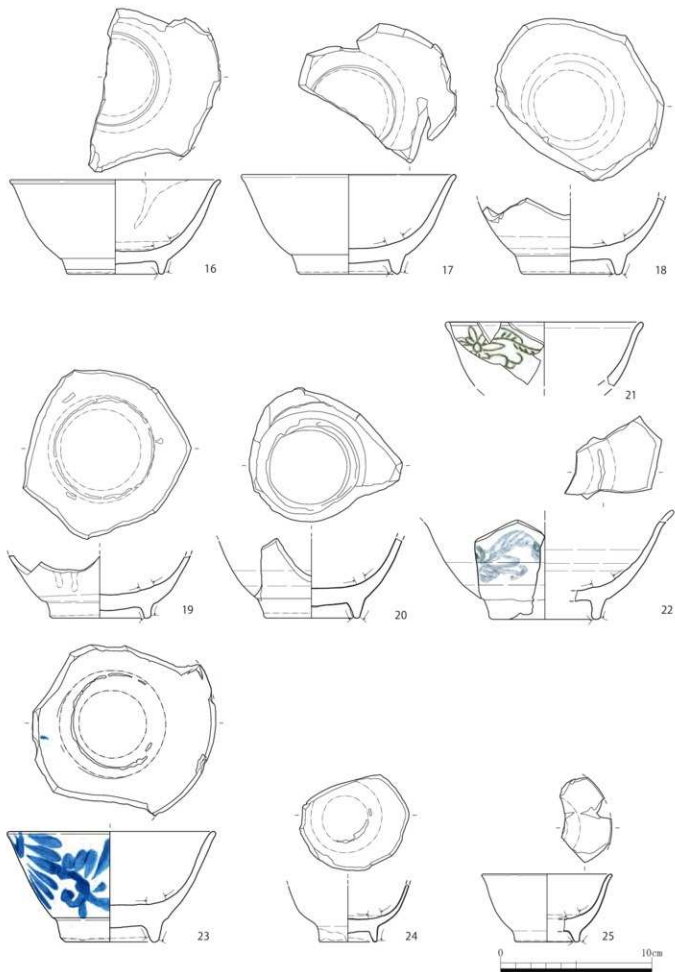
種別	形式	図番号	出土地	出土地	種別	器種	部位	法量 ()は推定値				観察事項	分類・時期・産地
								口径	器高	底径	重量		
23	8	1	P-05	Ⅲ層	沖縄産 施釉陶器	碗	口～ 底	(13.0)	5.9	6.4	-	直口口縁、削り出し高台。軸は内外面に灰緑(2.5YR/3淡黄色)を塗り掛け、細かな貫入あり。内外面ともに体部下半は露胎。素地は密。色調は2.5YR/4浅黄色。見込みは砂地付着あり、重ね焼きの痕跡あり。	碗Ⅰ類
23	8	2	P-01	Ⅲ層	沖縄産 施釉陶器	碗	口	(12.4)	(4.3)	-	-	口縁部は直線的に立ち上がる。軸は内外面に灰緑(5Y/2灰オリーブ色)でやや光沢あり。素地は密。色調は2.5Y/6/2灰黄色。	碗Ⅰ類
23	8	3	P-20	Ⅲ層	沖縄産 施釉陶器	碗	口	(14.1)	(3.2)	-	-	口縁部は直線的に立ち上がる。軸は内外面とも灰緑(5Y/2灰オリーブ色)を塗り掛け、光沢あり。素地は密で0.5mm以下の細かな砂粒。色調は2.5Y/6/1灰色。	碗Ⅰ類
23	8	4	P-05	Ⅲ層	沖縄産 施釉陶器	碗	底	-	(4.9)	(6.2)	-	口縁に向かって直立する。削り出し高台。高台脇に段を有す。軸は灰緑(10YR/2オリーブ灰色)。素地は密で白色微粒子。色調は2.5YR/7/4に淡い黄褐色。	碗Ⅰ類
23	8	5	O-04	Ⅲ層	沖縄産 施釉陶器	碗	底	-	(3.7)	(7.5)	-	高台からやや丸味をもち立ち上がる。軸は灰緑で2.5Y/2暗灰黄色。高台は露胎。素地は密で白色、黒色粒混入する。色調は2.5YR/7/4に淡い黄褐色。	碗Ⅰ類
23	8	6	Q-05	Ⅲ層	沖縄産 施釉陶器	碗	口	(12.3)	(4.5)	-	-	口縁やや外反。軸は鉄軸(10YR/2黒褐色)で光沢あり、貫入は細かな。素地は密で白色・灰色微粒子。細かな長石を含む。色調は10YR/7/4に淡い黄褐色。	碗Ⅱ類
23	8	7	P-04	Ⅲ層	沖縄産 施釉陶器	碗	体	-	(4.0)	-	-	削り出し高台。高台端部は残存無し。推定底径は5.0cm程度。高台から緩やかに立ち上がる。腰部に幾何学的による調整帯がみられる。内外面の軸は鉄軸(7.5YR/3ベークス)に鉄軸(10YR/3黒褐色)を塗り掛け、見込みに軸葉による丸文。素地は白色・黒色微粒子を少量含む。色調は10YR/7/4に淡い黄褐色。	碗Ⅱ類
23	8	8	P-04	Ⅲ層	沖縄産 施釉陶器	碗	口～ 底	(12.8)	5.9	(6.2)	-	腰部までは外反しながら立ち上がる。口縁部は直立する。軸は、内外面の口縁部～腰部は錆輪(7.5YR/4褐色)をベースに、鉄軸(10YR/3黒褐色)を塗り掛け、見込みに軸葉による丸文。墨付は白化粧。素地は白色微粒子。色調は2.5YR/3淡黄色。	碗Ⅱ類
23	8	9	P-04	Ⅲ層	沖縄産 施釉陶器	碗	底	-	(3.2)	(6.4)	-	口縁に向かって直立する。削り出し高台。軸は錆輪(2.5Y/3暗オリーブ褐色)をベースに、鉄軸(2.5Y/4暗灰黄色)を上塗り。見込みに軸葉による丸文。墨付は白化粧。素地は密で細かな砂粒少量含む。色調は2.5Y/7浅黄色。	碗Ⅱ類
23	8	10	P-05	Ⅲ層	沖縄産 施釉陶器	碗	底	-	(3.6)	6.2	-	底部から外に開く。軸は鉄軸(2.5YR/3暗赤褐色)をベースに鉄軸(2.5Y/3暗オリーブ褐色)を塗り掛ける。見込みに軸葉による丸文。墨付は白化粧。素地は密。色調は10YR/7/4に淡い黄褐色。	碗Ⅱ類
23	8	11	P-04	Ⅲ層	沖縄産 施釉陶器	碗	口～ 底	(13.3)	6.4	(6.0)	-	軸は鉄軸(6.5Y/4/2灰オリーブ色)。見込みは蛇の目輪刺ぎ、重ね焼き痕が残る。墨付は白化粧。素地は密で褐色。色調は2.5YR/7/6褐色。	碗Ⅲ類
23	8	12	O-04	Ⅲ層	沖縄産 施釉陶器	碗	口～ 底	(14.0)	6.8	6.2	-	外反口縁。付け高台。外面は狭い口ロ口内。内外面とも白化粧後に透明釉(2.5YR/2灰白色)。光沢・貫入あり。見込みに蛇の目輪刺ぎ。外底に痕跡が付着する。素地はやや密で径2mm以下の長石・黒色粒を含む。色調は10YR/7/4に淡い黄褐色。	碗Ⅳa類
23	8	13	P-04	Ⅲ層	沖縄産 施釉陶器	碗	口～ 底	(13.4)	6.3	(6.6)	-	外反口縁。内外面とも白化粧後に透明釉(7.5YR/1灰白色)。見込みに蛇の目輪刺ぎ。内外面とも貫入あり。素地は普通。色調は2.5YR/2灰白色。	碗Ⅳa類
23	8	14	P-04	Ⅲ層	沖縄産 施釉陶器	碗	口	(13.8)	(5.1)	-	-	外反口縁。口唇断面は円形。内外面とも白化粧後に透明釉(5YR/2灰白色)。貫入細かな。外面に軸葉あり。素地はやや密。色調は10YR/8/3淡黄褐色。	碗Ⅳa類



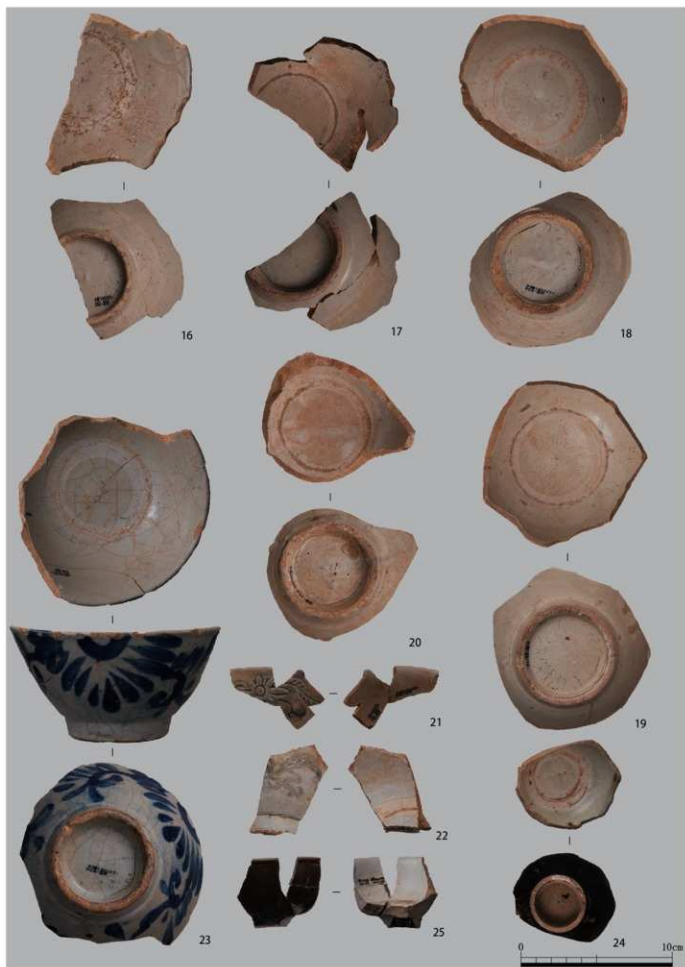
第 23 図 Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (1) 沖縄産施釉陶器 1



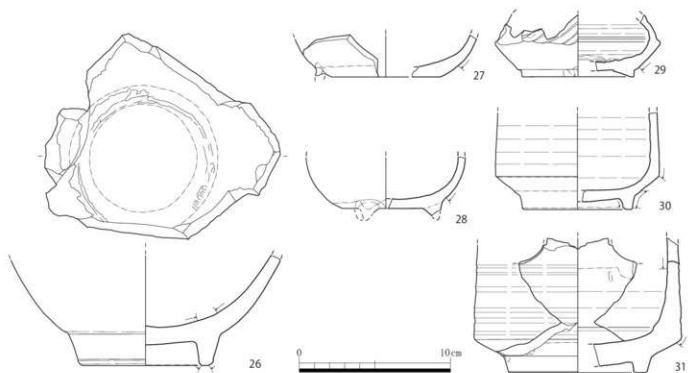
圖版 8 III・IV層出土遺物 (1) 沖縄産施釉陶器 1



第 24 図 Ⅲ・Ⅳ層出土遺物(2) 沖繩産施釉陶器 2



図版 9 III・IV層出土遺物(2) 沖縄産施釉陶器 2



第25圖 III・IV層出土遺物(3) 沖繩産施釉陶器3



図版10 III・IV層出土遺物(3) 沖繩産施釉陶器3

第10表-2 Ⅲ・Ⅳ層出土土沖繩産施釉陶器 観察表(2)

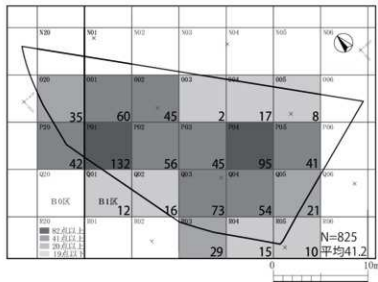
標号	写真	図号	出土地		器種	器種	部位	質量 (±標準偏差)			観察事項	分類・時期・産地	
			ブリード	遺跡				口径	器高	口径			器重
23	8	15	P-05	Ⅲ層	沖繩産 施釉陶器	碗	口	(12.1)	(4.9)	-	-	口縁はやや外反する。内外面とも白化斑痕に透明釉(10YR8/1灰白色)。光沢あり。貫入は細かい。素地は密で径1mm以下の白色微粒子。色調は5Y7/1灰白色。	碗Ⅳa類
24	9	16	O-02	Ⅲ層	沖繩産 施釉陶器	碗	底	(13.6)	6.2	(6.2)	-	口縁上部外反する。内外面とも白化斑痕に透明釉(10YR/1灰白色)。貫入細かい。見込みは蛇の目輪割ぎ。高台付は露胎。素地は密。黒色で白色砂粒を含む。色調は2.5YR/2灰白色。	碗Ⅳa類
24	9	17	O-02	Ⅲ層	沖繩産 施釉陶器	碗	口～ 底	(14.0)	6.6	(6.5)	-	外反口縁。内外面とも白化斑痕に透明釉。見込みは蛇の目輪割ぎ。素地は密。色調は10YR7/3にぶい・黄褐色。	碗Ⅳa類
24	9	18	P-04	Ⅲ層	沖繩産 施釉陶器	碗	底	-	(5.1)	6.3	-	高台部に段を付す。内外面とも白化斑痕に透明釉(5YR/2灰白色)。貫入やや粗い。見込みは蛇の目輪割ぎ。素地は密で白色微粒子。色調は10YR8/4淡黄褐色。	碗Ⅳa類
24	9	19	O-04	Ⅲ層	沖繩産 施釉陶器	碗	底	-	(4.1)	(6.5)	-	高台部に段を付す。内外面とも白化斑痕に透明釉(2.5YR/2灰白色)。光沢あり。見込みは蛇の目輪割ぎ。重ね焼きあり。貫入は露胎。素地は密で細かい砂粒少量含む。色調は10YR7/4にぶい・黄褐色。	碗Ⅳa類
24	9	20	P-04	Ⅲ層	沖繩産 施釉陶器	碗	底	-	(5.3)	5.9	-	高台から内溝し立ち上がる。内外面とも白化斑痕に透明釉(2.5YR/3赤褐色)。光沢あり。見込みは蛇の目輪割ぎ。貫入に白化斑。素地は密で白色微粒子。色調は10YR7/4にぶい・黄褐色。	碗Ⅳa類
24	9	21	P-04	Ⅲ層	沖繩産 施釉陶器	碗	口	(12.6)	(4.2)	-	-	外反口縁。内外面とも白化斑痕に透明釉(2.5Y7/2灰白色)。貫入は細かい。外面は露胎の草花文を施した後に貫入を吹付する。素地は白色粒を含む。色調は10YR7/4にぶい・黄褐色。	碗Ⅳb(1)類
24	9	22	P-04	Ⅲ層	沖繩産 施釉陶器	碗	底	-	(6.4)	(7.0)	-	口縁上部外反。体部に呉須による草花文を描く。内外面とも白化斑痕に透明釉(2.5YR/3淡黄色)。やや光沢あり。見込みは蛇の目輪割ぎ。重ね焼きあり。貫入露胎。素地は密で細かい砂粒を含む。色調は2.5Y7/4淡黄色。	碗Ⅳb(2)類
24	9	23	P-04	Ⅲ層	沖繩産 施釉陶器	碗	口～ 底	(13.5)	7.3	5.9	-	外反口縁。内外面とも白化斑痕に透明釉(7.5YR/2灰白色)。貫入は粗い。外面に呉須に2段草花文。見込みは蛇の目輪割ぎ。素地はやや密。色調は10YR8/4淡黄褐色。	碗Ⅳb(3)類
24	9	24	P-04	Ⅲ層	沖繩産 施釉陶器	小碗	底	-	(3.7)	(3.7)	-	腰部やや丸みを帯びる。内外面とも釉を掛け分け。高台部から体部は鉄釉(10YR3/1黒褐色)で貫入あり。光沢あり。貫入～外底は露胎。内面は透明釉で光沢あり。見込みは蛇の目輪割ぎ。素地は密で白色微粒子を含む。色調は2.5Y7/3淡黄色。	
24	9	25	O-04	Ⅲ層	沖繩産 施釉陶器	小碗	口～ 底	(8.4)	4.5	(4.1)	-	内外面釉掛け分け。外面は鉄釉(2.5Y3/2黒褐色)で光沢あり。内面は透明釉で貫入あり。素地はやや密で径1mm以下の長石、石英。黒色粒を含む。色調は5Y7/1灰白色。	
25	10	26	P-04	Ⅲ層	沖繩産 施釉陶器	鉢	底	-	(7.3)	(8.3)	-	高台部に段を持ち立ち上がり、やや丸みを持つ。貫付は平ら。内外面とも釉掛け分け。外面は鉄釉(2.5Y4/2黄褐色)で光沢あり。内面は鉄釉(10YR8/2灰白色)で光沢・貫入あり。見込みは蛇の目輪割ぎ。素地はやや密。色調は10YR8/3淡黄褐色。	
25	10	27	P-05	Ⅲ層	沖繩産 施釉陶器	急須	底	-	(3.9)	(5.8)	-	平底の底部に断面逆三角形の小さな脚が1つ残る(3足か)。釉は外面体部は鉄釉(7.5YR3/1黒褐色)で光沢あり。内面露胎。素地はやや密で径0.5mm以下白色微粒子。色調は10YR7/2にぶい・黄褐色。内面に施釉の付着がみられる。	
25	10	28	O-01	Ⅲ層	沖繩産 施釉陶器	急須	底	-	(2.8)	(7.2)	-	脚部欠損する。外面は施釉が顕著。釉は鉄釉(10YR2/1黒色)。内面露胎。素地は密。色調は10YR8/3淡黄褐色。	
25	10	29	P-04	Ⅲ層	沖繩産 施釉陶器	酒器	底	-	(4.3)	(7.4)	-	体部は尊盤玉形。底部は削り出し高台。内面はクロコナダ。外面は鉄釉(2.5YR3/2赤褐色)。やや気泡あり。上半は斜位の沈降。素地は密。色調は2.5Y7/1灰白色。	
25	10	30	P-04	Ⅲ層	沖繩産 施釉陶器	火取	底	-	(6.4)	(7.1)	-	体部下部より直立する。内面にクロコナダ。外面は白化斑痕に透明釉(10Y7/1灰白色)。部分的に呉須が付着する。内面は白化斑土(10Y7/1灰白色)で光沢なし。貫付露胎。屈曲部下部輪割ぎ。素地はやや密で白色微粒子を含む。色調は10YR7/4にぶい・黄褐色。	
25	10	31	P-04	Ⅲ層	沖繩産 施釉陶器	火取	底	-	(8.9)	(7.6)	-	体部から口縁に向かって直立して立ち上がる。高台部に段を有する。内外面ともクロコナダが残り、沈降状となる。釉は内外面とも鉄釉(2.5Y3/1黒褐色)でやや気泡多し。素地はやや密で白色微粒子を含む。色調は10YR7/8にぶい・黄褐色。見込みには施釉の付着が著しい。	

(2) 沖縄産無釉陶器 (第28～30図、図版11～13、第12表)

825点が出土しており、うち29点を図化した。

分布をみると(第26図)、P-01・02グリッド周辺と、P-04グリッド周辺との大きく2ヶ所に分布の中心を確認できる。

器種としては、碗・播鉢・鉢・壺・香炉・火炉・鍋・甕・瓶類などが出土しており、壺・甕などの貯蔵用の器種が過半を占める。形状の特徴的なものを中心に掲載した。素地は暗褐～赤褐色を呈するものが大半である。胎土には白色砂粒やスサ状のものを含む。釉薬としては、マンガン釉・泥釉を付すものが少なくない。



第26図 遺物分布図(Ⅲ層・沖縄産無釉陶器)

〈碗・小碗〉(1～4)

1・2は碗の口縁部である。口端部を面取りしており、断面形態は尖頭状となる。外面体部上半は回転ナデ、下半は回転ヘラケズリとする。1はマンガン釉を付しており、外面には縦長の重ね焼き痕跡を残す。3は碗の底部で、高台が直立する。削り出し高台で、壘付は平坦とし、底部はベタ底とする。4は小碗で、器壁は非常に薄い。外面は、体部上半を回転ナデ、下半を回転ヘラケズリとする。

〈瓶類〉(5・6)

5は徳利などの瓶類の口縁部である。内外面にマンガン釉を付す。6は底部で、高台端部が外側に開く。外面にはマンガン釉を付す。内面はナデ整形で、見込みには指ナデの痕跡を残す。

〈壺〉(7)

7は壺の口縁～頸部である。頸部は直立する口端部を外に引き出しており、断面形態は逆L字状となる。外面の頸部と体部の境には段を有する。

〈香炉〉(8)

8はやや上げ底で、腰部から口縁部まで直線的に立ち上がり、口端上面は平坦とする。体部には1条の圏線を付す。内面の体部から見込みにかけて油煙の付着が認められる。

〈水鉢〉(9)

方言名「ミジクサー」と呼称される一群である。体部は丸みを帯び、頸部で括れを有し、口縁部が内湾する器形のものが多くみられる。9は、口端が肥厚する。底部は静止ヘラ切りとする。頸部に1条の圏線を付し、その直下に5条1組の櫛状工具による波状文を施文する。内外面にマンガン釉を漬け掛けする。

〈火炉〉(10)

10は体部で、1ヶ所の火窓を有する。器形は体部中央で「く」字状に屈曲しており、屈曲部の直下に把手を付す。把手の形状は角柱状で、各面を面取りした上、上方から径1cm大の円孔を穿つ。把手の直下には外面から径5mm大の円孔を穿つが、こちらは内面まで貫通しない。把手を付した後、屈曲部の上下に各1条の圏線を付している。

〈鍋〉(11)

11は口縁～体部である。口縁部は外折し、受け皿状となる。口縁直下に紐状の突起を有する。体部下半は回転ヘラケズリとする。胎土には～1mm大の砂粒をやや多く含む。

〈甕〉(12)

12は甕の体部である。調整は、体部上半は回転ナデとし、下半は縦位のヘラナデによりロクロ痕跡をナデ消す。体部上半には圏線を反時計回りに付した後、圏線の間に7条1組の櫛状工具により波状文を施文し、白化粘土を塗布している。

〔播鉢〕 (13～28)

沖縄産無釉陶器の播鉢の分類は安里ほか〔1987〕に準拠したが、ここでは同分類の「式」を「類」に呼び換えた。また、安里ほか分類のⅣ類をⅣa類とⅣb類に細分した(第27図)。分類は、主に口縁部の作りの違いによるが、器形、底部調整、カキ目などにもそれぞれの特徴がある。以下に各型式の特徴について説明する。

I類：口縁部のくびれ部に凸帯がある。器形は、底部から朝顔状に大きく開いた胴部を口縁部で内側に折るように立ち上がらせて屈曲部をつくるが、この屈曲部に強く回転ヨコナデを加えて2条の凹面にして突帯をつまみ出している。突帯上部を先に回転ヨコナデし、つぎに突帯下部に回転ヨコナデを加えるので、突帯稜線は上へ押し上げられている。口縁端部は丸くおさまるものと、端面を強く回転ヨコナデしたために端面が押しつぶされて肥厚し端面下縁の断面に稜ができるものがある。前者が多い。カキ目は口縁部では間隔をあけて施されている。底部側面は回転ヨコナデ調整され、板ナデやヘラケズリは施されないと考えられる。底面はナデまたは未調整のまま、台形状になるものもある。口縁部には注口がある。本遺跡では確実なⅠ類は出土していない。

Ⅱ類：器形・底部・器面調整はⅠ類と同じだが、口縁部のくびれ部には突帯ではなく稜線がある。Ⅰ類の突帯は、突帯上部と下部に回転ヨコナデを加えてつまみ出しているが、Ⅱ類は下部側の回転ヨコナデを省略しているために稜線になる。Ⅰ類との区別は、見た目の突帯や稜線の強さではなく、下部側の回転ヨコナデの有無で判断した。口縁端部は肥厚して断面下縁に稜ができるものが多い。

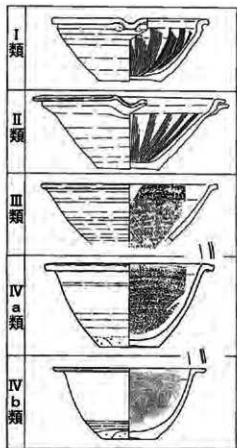
Ⅲ類：口縁部にくびれ部や稜線がない。痕跡的に稜線に見えるものもあるが、稜線を作り出すための回転ヨコナデはない。Ⅱ類とはこの回転ヨコナデの有無で区別する。胴部から口縁部が逆L形に短く外に張り出す。口縁部は、端面に回転ヨコナデを加えるので断面が四角形になり、口縁端部の下端に稜ができる。器形は、底部から大きく開いてⅡ類のように直線的に外に開くものと、Ⅳ類のように胴部に膨らみがあるものがある。カキ目は間隔を開けずに連続して施され、口縁部側上端のカキ目の回転ヨコナデによる消去が不十分なものが多い。胴部の大部分と底部の器面調整には、回転ヘラケズリまたは回転板ナデが多用される。底面はナデまたは未調整のまま。底部には高台が付くものもある。口縁部には注口がある。

Ⅳ類：口縁部は外に張り出し、口縁平坦面上に1条の凹線を巡らす。この凹線の有無でⅢ類と区別する。胴部が膨らみをもって立ち上がり、口縁部端部は逆L字形に外側へ張り出し長くなる傾向がある。カキ目は、口縁部付近まで重複して施される。カキ目上端もしっかりと消去されたものが多い。注口があるものとなないものがある。底部側面～底面の調整に特徴があり、手持ちヘラケズリで調整している。口縁端部の形状でⅣa類とⅣb類に細分できる。

Ⅳa類：口縁端部は、Ⅲ類のように端面に強くヨコナデを加えるので端面下端に稜線がある。口縁部に注口がある。

Ⅳb類：口縁部端面下端のヨコナデによる稜線を回転ヨコナデで潰して丸みをつける。また、口縁部は外側に長く張り出す傾向がある。注口はない。

沖縄産無釉陶器の播鉢については、各層の年代判断の指標になるので、小破片を含め全数チェックをおこなった。第11表は、I層(客土・攪乱)を除く各層の全数調査による各型式の層別出土数量表である。総数160点である。本遺跡出土の小破片では、Ⅰ類かⅡ類か判断がつかないものやⅣa類かⅣb類か判断がつかないものがあり、これらを「Ⅰ又はⅡ類」、「Ⅳ類ab不明」として集計した。確実なⅠ類は出土していないので、「Ⅰ類又はⅡ類」の殆どがⅡ類だと推定できる。第四章第1節で、各型式と出土層位から各層・遺構群の年代を検討した。



第27図 沖縄産無釉陶器・播鉢の分類 (安里ほか1987に加筆)

第29図13～第30図28は、Ⅲ層出土の沖縄産無釉陶器・播鉢である。13～18はⅡ類である。13は外面口縁直下に1段の段を有する。他のⅡ類と比べて、カキ目の各単位の間隔が密である。器面は暗赤色を呈し、焼成は堅緻である。14は稜の直下が面取りされる。15は外面に自然釉が掛かる。口端外面に強い回転ヨコナデを付す。16はやや軟質で、器面は黄褐色を呈する。口端部上面の面取りが顕著である。カキ目は原体の中央部のみ幅3mm前後の間隔を有する。18は片口を有する。体部外面の回転ナデ調整は粗雑で、器面にはロクロ痕跡が明瞭に残存する。

19～21はⅢ類である。19は口縁部で、口端部は外側に張り出す。体部の回転ナデは粗雑で、ロクロ痕跡が残存する。内面には6～8本単位のカキ目を斜位に付す。口縁部内面のカキ目の消去は不十分である。20・21は底部である。20はベタ底、21は上げ底で、いずれも底部は切り離し後無調整である。体部最下部は回転ヘラケズリ調整とする。カキ目は6～8本単位で、見込みから放射状に施す。施工順序は基本的に反時計回りである。21のカキ目は、工具の右端がやや深い。

22・23・25・26はⅣa類である。口縁部上面は平坦で、端部から5mm前後の位置に幅1～2mmの沈線1条を付す。口縁直下ではカキ目のナデ消しが丁寧である。22は口縁部から底部まで残存する。外面は、体部下端から底部は反時計回りの手持ちヘラケズリ調整とする。内面のカキ目は、底部から放射状に付した後に、見込み部分には別単位のカキ目を付している。外面の調整回転ヨコナデと回転ナデとの境界は不明瞭である。25・26はカキ目が丁寧になで消される。ともに胎土には砂粒を多く含んでおり、焼成は軟質である。26は外面口縁帯直下に1条の稜線がみられる。圏線を意図したものか。

24・27・28はⅣb類である。内面口縁直下ではカキ目の消去が丁寧である。24は口縁部から底部まで残存する。内面カキ目は密な間隔で付される。外面の調整は、体部上半はやや粗い回転ナデとする。体部下半から底部の手持ちヘラケズリが明瞭に観察できる。28の口端部の端面には強いヨコナデをおこなう。

なお、Ⅲ層の播鉢では、Ⅱ類が0・P-01グリッド、Ⅳ類がP-04・05グリッドが中心となるという分布の差異が認められる。

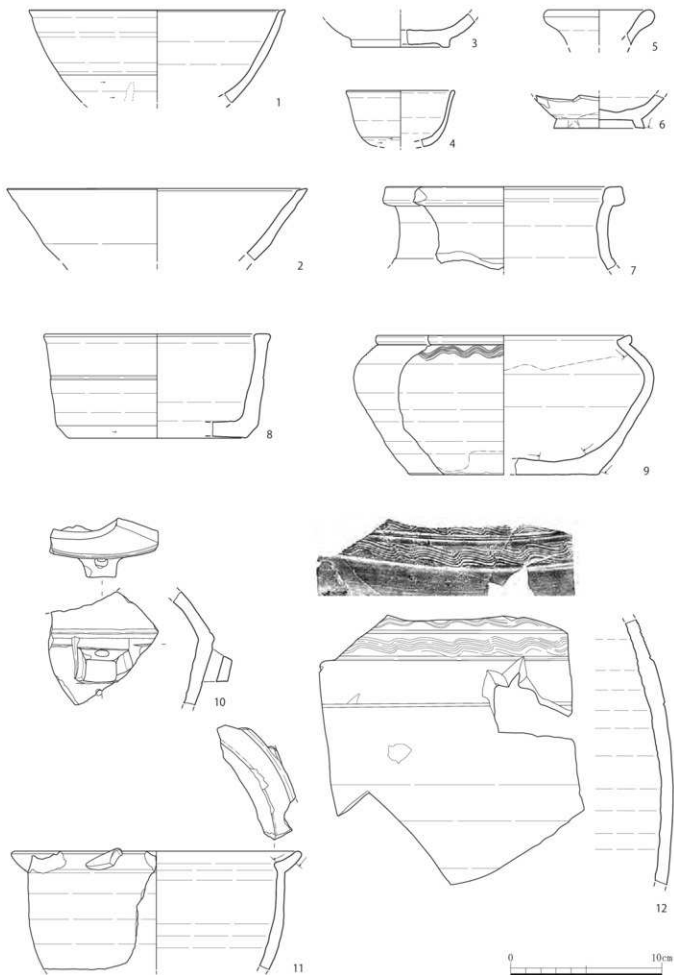
第11表 沖縄産無釉陶器・播鉢の部位別集計表

分類		Ⅱ層	Ⅲ層	遺構位	合計
総計	I類 _{a,b} Ⅱ類	4	30	6	40
	Ⅱ類	1	10	4	15
	Ⅲ類	3	11	2	16
	Ⅳ類ab不明	3	2		5
	Ⅳa類	1	11	1	13
	Ⅳb類	7	4		11
	分類不明	21	37	2	60
合計		40	105	15	160

I類 x,Ⅱ類	口縁部		4		4
	胴部	3	22	4	29
	底部	1	4	2	7
	計	4	30	6	40
Ⅱ類	口縁部	1	10	3	14
	胴部			1	1
	底部				
	計	1	10	4	15
Ⅲ類	口縁部	1	6	1	8
	胴部				
	底部	2	5	1	8
	計	3	11	2	16
Ⅳ類 ab不明	口縁部				
	胴部				
	底部	3	2		5
	計	3	2		5
Ⅳa類	口縁部	1	11	1	13
	胴部				
	底部				
	計	1	11	1	13
Ⅳb類	口縁部	7	4		11
	胴部				
	底部				
	計	7	4		11
分類不明	口縁部	1			1
	胴部	20	36	2	58
	底部	1			1
	計	21	37	2	60

第12表 III・IV層出土沖繩産無釉陶器 観察表

種別	年号	図番号	出土地 グリッド 遺構	位置	種別	器種	部位	寸法 ()は測定値			観察事項	分類・時期・産地		
								口径	器高	底径			重量	
28	11	1	P-01	Ⅲ層	沖縄産 無釉陶器	甕	口	(17.0)	(6.1)	-	-	外面口縁へ体部上半および内面はナデ調整、体部下半以下は回転ヘラケズリ、口縁まで直線的に立ち上がる。口縁断面は尖頭状。素地は密。色調は17.5R3/4暗褐色。		
28	11	2	Q-04	Ⅲ層	沖縄産 無釉陶器	甕	口	(20.0)	(4.6)	-	-	口縁は逆八字の外反する。口縁は17.5R3/4暗褐色。素地は密で、色調は12.5YR4/6赤褐色。		
28	11	3	O-01	Ⅲ層	沖縄産 無釉陶器	甕	底	-	(2.2)	(6.4)	-	低い巾出し高台。内面は轆轤痕跡明確。軸はマンガン軸(2.5YR3/1暗赤褐色)。素地はやや密で、径2mm以下の長石・赤鉄粒を含む。色調は17.5R4/2灰褐色。		
28	11	4	P-01	Ⅲ層	沖縄産 無釉陶器	小甕	口	(7.2)	(3.7)	-	-	直口口縁。口縁へ体部の途中までナデ調整。内外面に自然釉。素地は密で、～1mm大の砂粒やや多く含む。色調は10YR4/25灰褐色。		
28	11	5	P-01	Ⅲ層	沖縄産 無釉陶器	甕	瓶	口	(6.8)	(2.4)	-	-	口縁部は外反。口縁断面は丸棒状。外外面と内面ナデ調整。素地はやや粗で、～1mm大の白色粒やや多く含む。色調は12.5Y6/1黄灰色。	
28	11	6	P-04	Ⅲ層	沖縄産 無釉陶器	甕	瓶	底	-	(2.3)	(6.2)	-	体部は回転ナデ。底部下半から高台部分回転ヘラケズリ。素地はやや密で、白色粒子が層状に入る。色調は7.5YR3/3暗褐色。	
28	11	7	Q-04	Ⅲ層	沖縄産 無釉陶器	甕	壺	口	(14.8)	(5.1)	-	-	肩部と体部の間に段を有する。口縁部は逆L字状。口径幅11.2cm。内外面ナデ調整。軸はマンガン軸。素地は密。色調は12.5YR5/3に多い赤褐色。	
28	11	8	P-01	Ⅲ層	沖縄産 無釉陶器	香炉	口～底	(15.0)	(6.9)	(11.8)	-	-	底面から直線状に立ち上がる。外面肩部は回転ヘラケズリ。体部に1条の縦線。内面見込までナデ調整。口縁は平皿。やや上縁で内面に湯樋付着。素地は密で、～1mm大の白色粒少量含む。色調は12.5YR 3/4暗赤褐色。	
28	11	9	P-01	Ⅲ層	沖縄産 無釉陶器	木鉢	口～底	(16.6)	(9.2)	(12.6)	-	-	口縁部は内湾し、肩部は内湾する。外面口縁直下に波状又7条(8mm)。底部静止ヘラ切刃。肩部は切刃縁にナデ消し。素地は密。色調は15YR4/2灰褐色。	
28	11	10	P-05	Ⅲ層	沖縄産 無釉陶器	火炉	体	-	(7.5)	-	-	-	器蓋玉状の器形。体部上半に1か所の火窓を有する。有孔の把手1取(径約0.85cm)と器孔1ヶ所(径0.4cm)あり。把手は台形で外面は面取りする。器面部の直上・直下に各1条の沈線。軸はマンガン軸(5YR4/2灰褐色)。素地はやや粗。色調は12.5YR5/4に多い褐色。	
28	11	11	P-04	Ⅲ層	沖縄産 無釉陶器	甕	口	(18.8)	(7.8)	-	-	-	口縁外折。口唇断面は受け皿状を呈する。口縁に紐状の把手を付す。素地は密。色調は12.5YR5/4に多い赤褐色。	
28	11	12	P-04	Ⅲ層	沖縄産 無釉陶器	甕	甕	体	-	(17.9)	-	-	横位沈線の後に柳状工具6条(8mm)による波状文。沈線は反時計回り。素地は密。色調は12.5YR5/6明赤褐色。	
29	12	13	O-01	Ⅲ層	沖縄産 無釉陶器	甕	口	-	(5.2)	-	-	-	口縁部調整回転コナダ。口縁部直下の稜が顕著。カキ目8本/1.6cm。素地は密。色調は17.5YR5/4に多い褐色。	Ⅱ類
29	12	14	P-01	Ⅲ層	沖縄産 無釉陶器	甕	口	-	(5.0)	-	-	-	口縁部調整回転コナダ。カキ目数不明。素地はやや密、1mm大の白色砂粒多く含む。色調は10R2/3暗赤褐色。	Ⅱ類
29	12	15	O-02	Ⅲ層	沖縄産 無釉陶器	甕	口	-	(4.0)	-	-	-	口縁部調整回転コナダ。カキ目11本/1.3cm。素地は密。色調は12.5YR3/6赤褐色。	Ⅱ類
29	12	16	P-04	Ⅲ層	沖縄産 無釉陶器	甕	口	-	(3.7)	-	-	-	口縁部調整回転コナダ。カキ目10本/1.8cm。間隔不揃い。素地は密。色調は17.5R4/4に多い褐色。	Ⅱ類
29	12	17	P-02	Ⅲ層	沖縄産 無釉陶器	甕	口	-	(3.9)	-	-	-	口縁部調整回転コナダ。稜は明確。カキ目不明。素地は密。色調は12.5YR3/6暗赤褐色。	Ⅱ類
29	12	18	O-02	Ⅲ層	沖縄産 無釉陶器	甕	口	-	(5.1)	-	-	-	口縁部調整回転コナダ。体部外面に回転コナダ。カキ目8本/1.4cm。素地はやや密、1mm大の白色砂粒多く含む。色調は12.5YR4/8赤褐色。	Ⅱ類
29	12	19	R-03	Ⅲ層	沖縄産 無釉陶器	甕	口	-	(6.1)	-	-	-	口縁部調整回転コナダ。体部外面に回転コナダ。カキ目13本/2.4cm。素地は密、1mm大の砂粒を少量含む。色調は12.5YR5/8明赤褐色。	Ⅲ類
29	12	20	P-01	Ⅲ層	沖縄産 無釉陶器	甕	底	-	(7.3)	(10.0)	-	-	底部は9ヶ宙。カキ目10本/1.6cm。左→右の順着。工具両端がやや窪み。素地は密。色調は12.5YR2/4暗赤褐色。	Ⅲ類
29	12	21	R-04	Ⅲ層	沖縄産 無釉陶器	甕	底	-	(3.0)	(9.0)	-	-	器形若干下がり底。カキ目6本/1.2cm。素地は密。色調は2.5YR3/3暗赤褐色。	Ⅲ類
29	12	22	P-04	Ⅲ層	沖縄産 無釉陶器	甕	口～底	25.6	(13.1)	8.1	-	-	口縁部調整回転コナダ。口縁平坦面上に浅い凹線。底部は口縁上で回転させながらヘラケズリ。体部は底面方向へ手持ちヘラケズリ。カキ目10本/2.5cm。素地は密。色調は2.5YR5/6明赤褐色。	Ⅳb類
30	13	23	P-04	Ⅲ層	沖縄産 無釉陶器	甕	口	-	(8.8)	-	-	-	口縁部調整回転コナダ。口縁平坦面上に浅い凹線。カキ目12本/2.4cm。素地は密。色調は12.5YR4/8明赤褐色。	Ⅳa類
30	13	24	P-04	Ⅲ層	沖縄産 無釉陶器	甕	口～底	(27.3)	(12.7)	9.8	-	-	口縁平坦面上に浅い凹線。口縁端部は調整回転コナダで下端を丸くする。外面体部下半へ底部は静止ヘラケズリ。カキ目11本/1.9cm。素地は密で白色粒混入。色調は5YR3/6暗赤褐色。	Ⅳb類
30	13	25	P-05	Ⅲ層	沖縄産 無釉陶器	甕	口	-	(3.2)	-	-	-	口縁部調整回転コナダ。口縁平坦面上に浅い凹線。カキ目は丁寧に消される。素地は密。径1mm大の白色砂粒を多く含む。色調は15YR3/6暗赤褐色。	Ⅳa類
30	13	26	P-04	Ⅲ層	沖縄産 無釉陶器	甕	口	-	(2.2)	-	-	-	口縁部調整回転コナダ。口縁平坦面上に浅い凹線。カキ目は丁寧に消される。素地は密。色調は15YR4/6赤褐色。	Ⅳa類
30	13	27	P-04	Ⅲ層	沖縄産 無釉陶器	甕	口	(29.0)	(4.1)	-	-	-	口縁部調整回転コナダ。口縁平坦面上に浅い凹線。素地は密で径1mm大の砂粒を少量含む。カキ目数不明。素地は密。色調は15YR6/8褐色。	Ⅳb類



第28図 III・IV層出土遺物 (4) 沖縄産無釉陶器 1

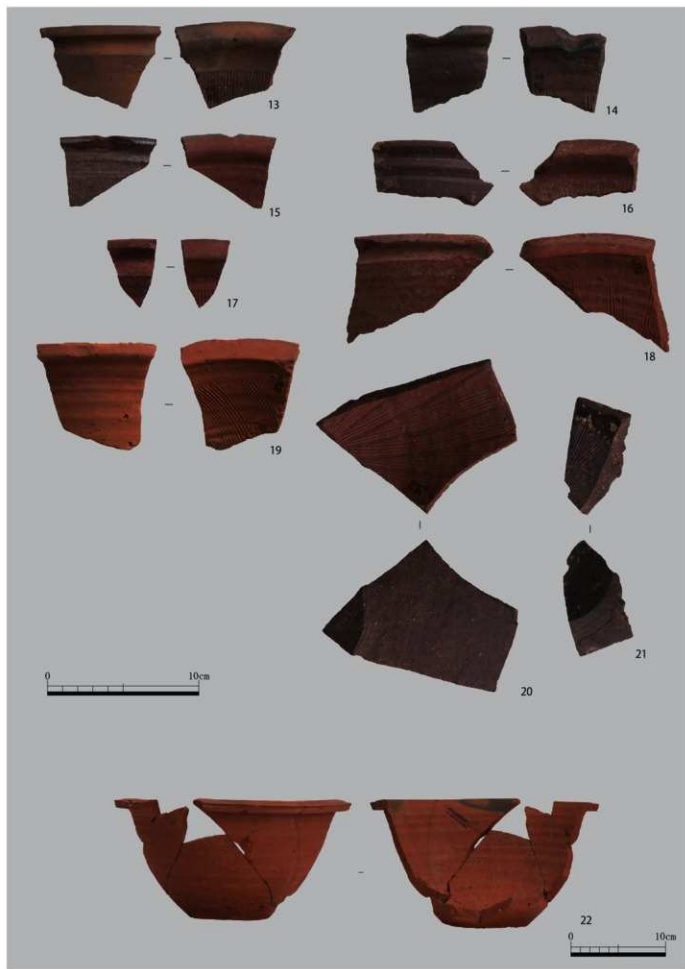


圖版 11 III・IV層出土遺物(4) 沖繩産無軸陶器 1

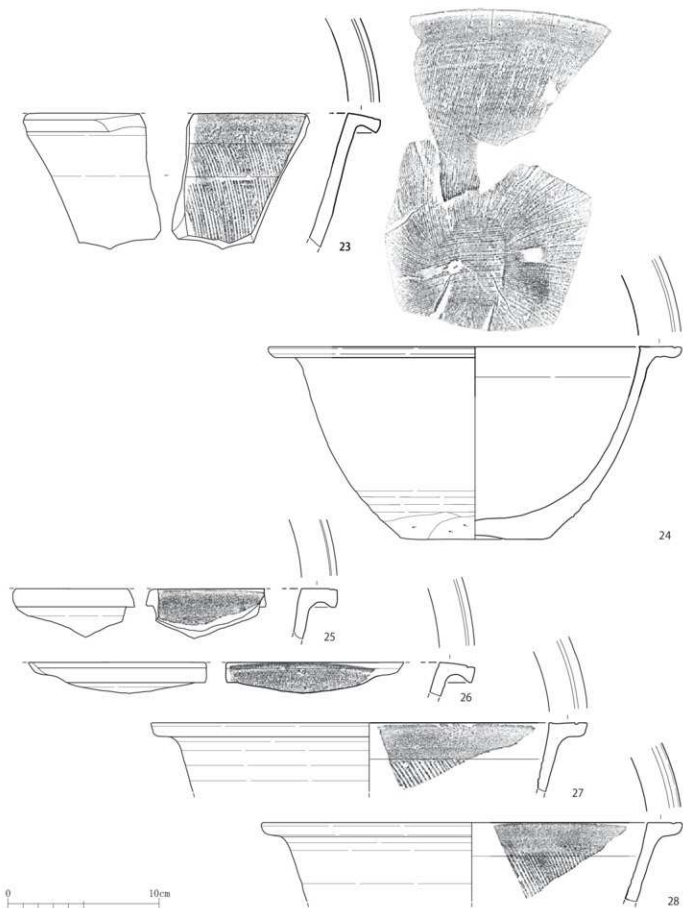


0 10cm

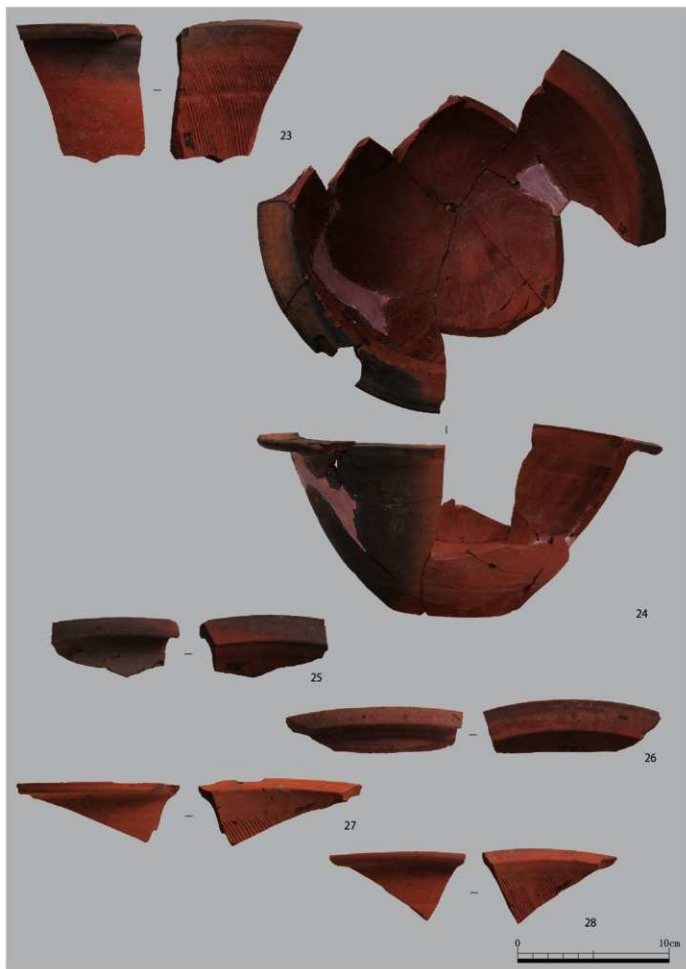
第29図 Ⅲ・Ⅳ層出土遺物(5) 沖縄産無釉陶器2



図版 12 III・IV層出土遺物(5) 沖縄産無釉陶器 2



第30図 III・IV層出土遺物(6) 沖縄産無釉陶器3

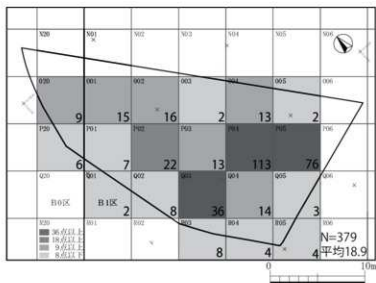


図版 13 III・IV層出土遺物(6) 沖縄産無釉陶器 3

(3) 沖縄産陶質土器 (第32図、図版14・15、第13表)

方言名「アカムヌー」と呼ばれる軟質の土器群である。Ⅲ・Ⅳ層では379点が出土しており、うち14点を図化した。

大多数が5cm以下の小片の形で出土するため、器種の判定が困難なものが多いが、判別できたものとしては、鍋・火炉・急須(ないし土瓶)などがみられる。焼成は軟質で、器色は橙色を呈する。胎土は細粒で、夾雑物として雲母や白色粒子などを含む。分布(第31図)をみると、P-04・05グリッドに集中しており、全体の約4割を占める。図化した資料も大半がこれらのグリッドでの出土である。その他のグリッドではやや希薄である。



第31図 遺物分布図(Ⅲ層・沖縄産陶質土器)

〈鍋〉(1～5)

方言名「サークー」と呼ばれる把手付き鍋である。丸底で、胴部は膨らみをもつ。頸部は「く」字状に外折し、口縁部に向かって内湾し受け皿状となる。成形の後、内面および外面体部上半は回転ナデ、外面体部下半は回転ヘラケズリ調整をおこなう。口径は、1が16cm程度と若干小型であるが、他は20cm以上を測る。口縁部には一対の紐状の把手が取り付け。1・5は把手の上端が口唇部に連続するが、3・4は口縁直下に取り付く。把手の規模(長さ・径)は概ね口径に比例しており、1では小型である。

1・3は外面での煤付着の痕跡が顕著である。2は部分的にハケ状の痕跡がみられる。3は内外面の口縁直下に圈線を付す。4では体部上半に2条の圈線を有する。

〈急須ないし土瓶〉(6～9)

6・7は急須の蓋である。天井部は緩やかに立ち上がる。6は、宝珠型で上面がやや凹む撮みを有する。撮みとの接合部は内面が凹んでいる。焼成時の焼け歪みが大きい。他の陶質土器と比較すると、胎土に雲母粒を多く含んでおり、焼成はやや硬質である。7は天井部がやや丸みを帯び、鐔の端部が内側に肥厚する。外面口縁直上では、帯状に煤の付着が認められる。

8・9は急須の身である。ともに腰部が「く」字状に屈曲し、腰部から口縁部まで緩やかに内湾して立ち上がる、算盤玉形の器形になるものと思われる。8は口縁直下がわずかにくびれる。正面形が台形を呈する吊り手を有し、その直下には注口部の接合痕が残る。内外面とも轆轤痕跡が顕著である。9は屈曲部に注口が取り付け。注口の基部には指オサエの痕跡が残る。



図版14 Ⅲ・Ⅳ層出土遺物(7) 沖縄産陶質土器1

(火炉) (10~13)

方言名「ヒールー」と呼ばれる一群である。

10は底部から直線的に立ち上がり、肩部が逆「く」字状に屈曲する器形である。肩部から口縁部にかけては、階段状に沈線を巡らせる。口唇部は幅広・平坦に成形する。

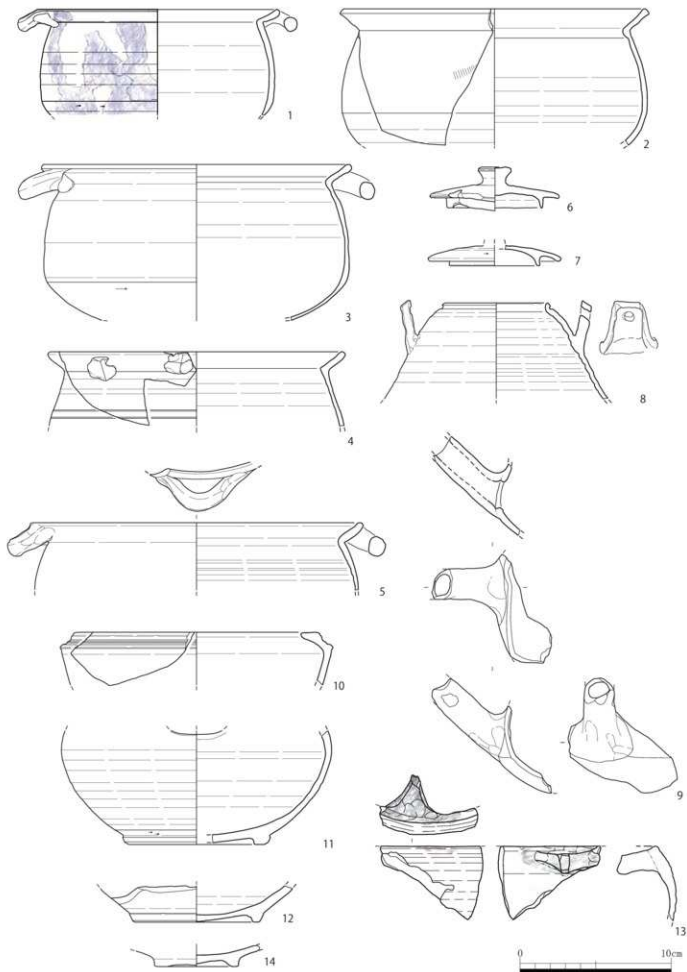
11~13は、体部上半を最大径とし、口縁部は緩やかに内湾して立ち上がる器形である。底部は丸底となる。11・12は体部下半~底部で、削り出し高台とする。高台は高さ5mm前後と低く、端部は平坦である。11は体部に1ヶ所の火窓を有する。体部外面には1cm前後の間隔で白化粧による圏線を付す。12は底面の中心が接地する。13は口縁部内面に器物を掛ける突起を付す。突起は上面を平坦とし、先端を縦直に面取りしている。口唇上から内面口縁直下にかけては、煤の付着が顕著である。

(器種不明) (14)

14は器種不明の底部で、削り出し高台を有する。皿であろうか。

第13表 III・IV層出土沖繩産陶質土器 観察表

器種	写真 図番号	出土地 グリの 遺構	層位	種別	器種	部位	法量 ()は推定量			観察事項	分類・時期・産地		
							口径	器高	底径				
32	14	1	P-04	皿層	沖繩産 陶質土器	鍋	口	15.8	(7.0)	-	-	胴部「く」字状に屈曲する。口縁に横耳貼付。外面は回転ナゲ調整。体部下半は回転→ラクスリ。素地はやや密。色調は5YR7.8褐色。外面は煤付着顕著。	
32	15	2	Q-04	皿層下層	沖繩産 陶質土器	鍋	口	(19.9)	(9.0)	-	-	胴部「く」字状に屈曲。口縁は受け皿状。体部上半は斜位の板ナゲ後に回転ナゲ。内外面とも薄く煤付着。素地はやや密。色調は5YR7.8黄褐色。	
32	14	3	P-04+ P-05	皿層	沖繩産 陶質土器	鍋	口	20.2	(10.3)	-	-	胴部「く」字状に屈曲。口縁直下より横耳貼付。体部上半は回転ナゲ。体部下半は回転→ラクスリ。素地はやや密で、白色・黒色粒を含む。色調は5YR6.6褐色。外面は煤付着顕著。	
32	15	4	P-04	皿層	沖繩産 陶質土器	鍋	口	(19.2)	(4.9)	-	-	胴部「く」字状に屈曲。口縁に横耳貼付。外面回転ナゲ。体部下半に圏線2条。素地はやや密。色調は5YR7.8褐色。	
32	15	5	P-04	皿層	沖繩産 陶質土器	鍋	口	(21.8)	(4.9)	-	-	胴部「く」字状に屈曲。口縁に横耳貼付。外面回転ナゲ。素地はやや密。色調は5YR6.6褐色。	
32	15	6	P-05	畦	皿層	沖繩産 陶質土器	急須	蓋	(6.2)	2.7	-	-	内外面クロコナゲ調整。蓋みみ形。逆台形状の蓋みを有する。蓋み最大径2.1cm。素地は密。色調は10YR6.2灰黄褐色。
32	15	7	Q-1	皿層	沖繩産 陶質土器	急須	蓋	(5.8)	(1.4)	-	-	縦いびつ型。蓋みは欠損。口部より2~4mm上に帯状に煤が付着する。素地はやや密で、径<1mm大の長石・石英・赤色粒・チャート・白雲母を含む。色調は5YR6.6褐色。	
32	15	8	P-04	皿層	沖繩産 陶質土器	急須	体	(6.8)	(6.3)	-	-	器形は算盤玉形になると思われる。注口部は欠損。把手口唇直下に1条の沈線を付す。内面は縦横筋線顕著。素地は密で、径1mm大の砂粒含む。色調は5YR5.8赤褐色。	
32	15	9	P-04	皿層	沖繩産 陶質土器	急須	体	-	(7.5)	-	-	器形は算盤玉形。唇部部に注口。口径は1.3cm。素地はやや密で、径2mm以下の長石、赤色粒、黒色粒・風化した雲母を含む。色調は5YR7.8褐色。	
32	15	10	Q-05	皿層下層	沖繩産 陶質土器	火炉	口	(13.8)	(3.5)	-	-	体部は逆「く」の字状に折れ曲がる。口唇部は平坦。内外面クロコナゲ。素地は密。色調は5Y7.1灰白色。	
32	15	11	P-04	皿層	沖繩産 陶質土器	火炉	底	-	(7.5)	(9.0)	-	体部は丸底を帯び、高台は低い。体部中央に火窓1ヶ所。器表面にクロコナゲ。外面ナゲ調整後に白化粧。素地はやや密。色調は5YR7.6褐色。	
32	15	12	P-04	皿層	沖繩産 陶質土器	火炉	底	-	(2.4)	(8.2)	-	高台はやや低い台形を呈す。器表面にクロコナゲ。外面は圏線を付して白化粧。素地はやや密。色調は5YR7.8褐色。	
32	15	13	P-05	畦	皿層	沖繩産 陶質土器	火炉	口	-	(4.9)	-	口縁は内湾しながら立ち上がる。口縁内面に突起を有する。内外面回転ナゲ。外面には圏線を付して白化粧。外面口縁部~内面に煤付着。素地は密。色調は5YR7.4Cぶい褐色。	
32	15	14	P-05	皿層	沖繩産 陶質土器	不明	底	-	(1.4)	(5.2)	-	器表面にクロコナゲ。内面に煤付着顕著。素地はやや密で径2mm以下の長石・石英・赤色粒・黒色粒・風化した雲母を含む。色調は5YR6.6褐色。	



第32図 Ⅲ・Ⅳ層出土遺物(7) 沖縄産陶質土器



圖版 15 III・IV層出土遺物(8) 沖縄産陶質土器 2

(4) 瓦質土器 (第33図、図版16、第14表)

瓦質土器はⅢ層で9点が出土した。器種としては、皿・播鉢・風炉?などがある。いずれも器面は灰～灰褐色を呈しており、湧田窯ないし本土での生産と考えられる。このうち、4点を図化した。

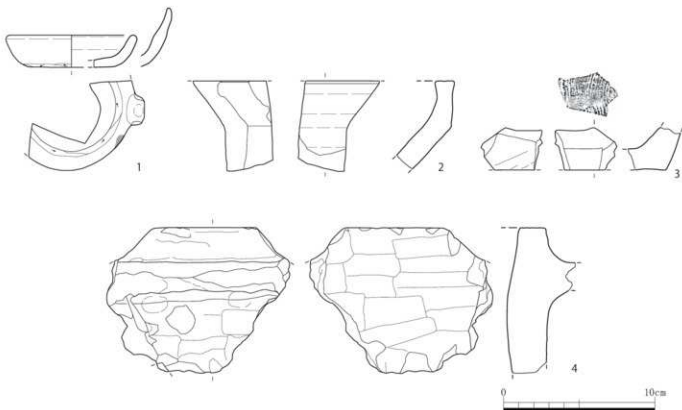
1は皿である。上半を回転ナデ、体部下半～底部を手持ちヘラケズリとする。口縁部には、幅約2cm・長さ2.5cmで上方に伸びる突起が取り付く。成形後、突起中央を指オサエにより凹ませることで把手状にしている。口縁部には部分的に油煙が付着しており、灯明皿として利用されたことが想定される。

2・3は播鉢である。2は口縁部で、口縁直下が逆「く」字状に屈曲し、口縁は直立する。口端は面取りしており、口唇の断面形態は角形を呈する。内外面とも丁寧な回転ナデをおこなっており、内面のカキ目をナデ消している。3は底部で、8本1組・溝幅1.5mm前後のカキ目を疎らな間隔で付す。見込みにもカキ目を付す。これらの播鉢は、17世紀前半の湧田窯の所産であろうか。

4は風炉?の口縁部と考えられる。上端には正面形が逆台形を呈する突起を、外面口縁直下には幅2.5cmの1条の突帯を有する。器面調整は内外面とも横位のヘラナデである。素地には砂粒を多く含む。

第14表 Ⅲ・Ⅳ層出土瓦質土器 観察表

図号	写真	調査番号	出土地		種別	器種	部位	法量 ()は推定値				観察事項	分類・時期・産地	
			グリッド	遺構				層位	口径	器高	底径			重量
33	16	1	P-01		Ⅲ層	瓦質土器	皿	口～底	(8.5)	2.1	(6.0)	-	口縁まで丸みを持って立ち上がる。上方に向くつまみ状の突起が取り付く。指オサエによる彫り。底部付近は手持ちヘラケズリ。素地は密。色調は10YR5/1褐色。口縁部外面に煤の付着あり。灯明皿として利用されたか。	
33	16	2	Q-02		Ⅲ層	瓦質土器	播鉢	口	-	(6.0)	-	-	逆「く」字状に開く。体部は逆「く」字状に屈曲し、口縁まで直線的に立ち上がる。内外面回転ナデ。内面カキ目をナデ消し。口端は平坦。色調は10YR5/1褐色。	17世紀前半 沖縄産
33	16	3	P-03		Ⅲ層	瓦質土器	播鉢	底	-	(2.8)	-	-	8本1組・溝幅1.5mm前後のカキ目を付す。底面ヘラケズリは板ナデ。素地はやや密。色調は17.5YR5/1褐色。	17世紀前半 沖縄産
33	16	4	R-03		Ⅲ層	瓦質土器	風炉?	口?	-	(9.6)	-	-	内外面横位のヘラナデ。素地は密で砂粒を多く含む。色調は10YR6/4に濃い黄褐色。	



第33図 Ⅲ・Ⅳ層出土遺物(8) 瓦質土器



図版 16 III・IV層出土遺物(9) 瓦質土器

(5) 本土産陶磁器 (第35・36図、図版17・18、第15表)

本土産陶器

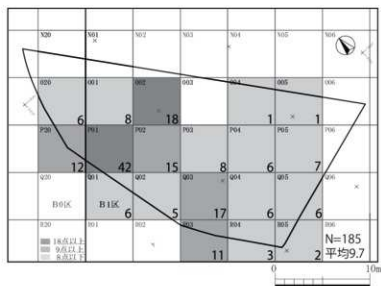
38点が出土しており、うち11点を図化した。産地が確認できたものとして、肥前・薩摩・備前などがある。

〈肥前〉(1～5・7)

19点が出土した。

1～4は素地が黄褐色～明褐色を呈するもので、唐津産と考えられる。1は鉄絵皿で、腰部で外折する器形である。低い削り出し高台を有する。見込みはやや凹む。内面には鉄絵で弧線などを描く。胎土目が1ヶ所残る。2は鉄絵鉢である。口縁は外折し鈎縁状を呈する。外面体部下半には、回転ヘラケズリ調整のうえ、鉄軸を掛ける。内面には鉄絵により草花文を描く。1・2は17世紀前半～半ばの所産である。3は瓶類の口縁部である。象嵌による施文で、外面に藁灰釉を掛けた後、飛びカンナによる沈線や印花による五弁花などを付して鉄軸を掛けている。4は鉢で、口縁部に向けて「ハ」字状に開く器形である。外面口縁直下に反時計周りに1条の圈線を付す。いずれも16～17世紀代の所産であろう。

5は銅緑釉を掛ける碗で、口縁部は外反する。肥前・内野山窯産である。銅緑釉の発色は不良で、緑灰色を呈する。体部には軸轆痕跡が顕著である。17世紀後半の所産か。当遺跡ではこの他、外面に緑釉、内面に透明釉を掛ける内野山窯産と思われる陶器が少なからず出土しており、近世段階に一定数流入していることが確認できる。



第34図 遺物分布図(Ⅲ層・本土産陶磁器)

7は小碗である。肥前産であろうか。素地は灰白色で、焼成は軟質である。外面には、黄灰色を呈する灰軸を掛けた後、白化粧土により梅花状の文様を施す。

〈備前〉(10)

1点のみの出土である。10は播鉢である。体部は回転ナデ、底部は切り離し後未調整である。内面には6条1組のカキ目を疎らに付す。16世紀頃の所産か。

〈薩摩〉

図化していないが、いわゆる白薩摩の体部から底部の破片が5点出土している。

〈産地不詳〉(6・8・9・11)

中国・朝鮮半島・東南アジアの陶器類および沖縄産陶器に類品がみられないものを、産地不詳の陶器として一括して報告する。

壺は、素地が赤褐色を呈するもので、九州地方の製品と考えられる。6は口径15cm程度の中型壺で、頸部は短く、口唇が肥厚する。内外面に暗褐色の釉薬を厚く流し掛ける。8は口径6cm程度の小型壺で、口縁部は受け口状となる。器壁は薄い。頸部と体部との境界には段を有する。内外面に褐色の釉薬を薄く掛ける。

9は鍋で、外面に緋緑釉を施軸する。素地は赤褐色を呈しており、こちらも九州地方の製品であろうか。

11は器種不明の口縁部である。体部に最大径があり、口縁直下でくびれ、口縁部がやや肥厚する。沖縄産陶器の火炉と同様に、口縁部内面に器物を架けるための突起を有する。突起は上面および端部を面取りする。体部外面には軸と白化粧土による象嵌で2条の圏線と草花文を付す。素地は灰褐色で、焼成は硬質である。釉薬の色調は深緑色を呈する。18～19世紀の所産であろうか。

本土産磁器

147点が出土しており、うち12点を図化した。近世の肥前産（または瀬戸・美濃産）と、近代の砥部産や瀬戸・美濃産などがある。

〈近世〉(12～18)

85点が出土した。

12～14・17は肥前・波佐見産の碗の口縁部である。口縁部に向けて緩やかに開く器形で、釉薬は灰白色を呈する。口縁直下に圏線を1～2条付し、体部には須貝で圏線や山水文などを施文する。18世紀頃の所産である。15・16は碗の底部である。15は釉薬に不純物を多く含んでおり、気泡が目立つ。見込みに梅花文を付す。16は須貝が緑灰色に発色する。18は小杯である。腰部に膨らみを有する。体部外面に草花文を施す。17世紀後半頃に比定される。

〈近代〉(19～23)

62点が出土した。

近代の磁器には、Ⅱ層と同様に型紙摺り・銅版転写・クロム青磁などがみられる。

20・22は砥部産の磁器碗である。型紙摺りによる施文で、所謂「スンカンマカイ」である。腰部が張り、口縁部が外反する器形である。文様構成は大きく2種類あり、Ⅱ層の砥部産品の様相と大差ない。20は、外面全体・内面口唇部ともに唐草地に草花文、見込みに花文である。発色は不良である。Ⅲ層の壁面から出土しており、Ⅲ層の上限を示すものである。22は点描地による三角文により窓枠を作り、枠内に菊花文を配するものである。

19は皿で、銅版転写による施文である。瀬戸・美濃窯産であろう。口唇部には緋軸を付し、口縁部内面には斜格子地に松などを施文する。

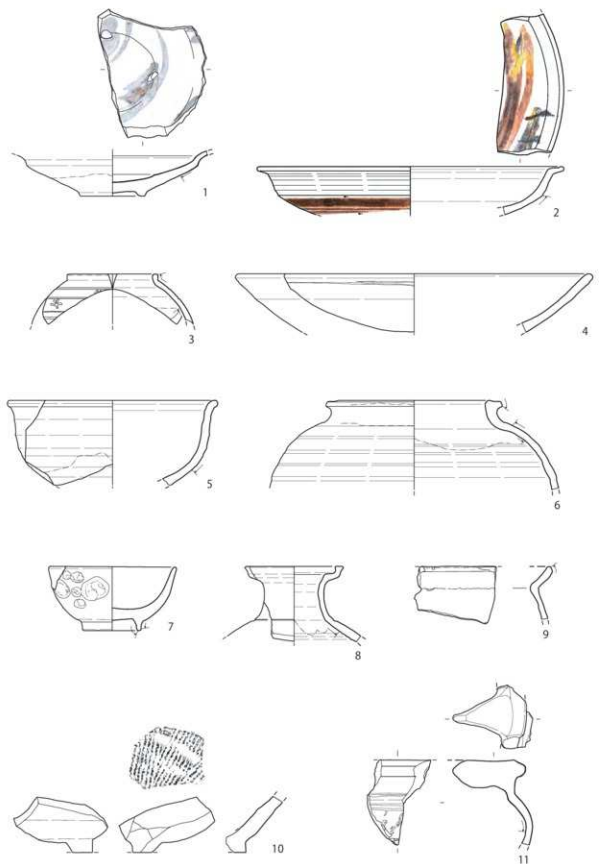
22はクロム青磁による小碗で、近代の瀬戸・美濃窯産である。縦位に飛びカンナを連続して施す。

第15表-1 Ⅲ・Ⅳ層出土本土産陶磁器 観察表(1)

標号	写真	調査番号	出土地 テラコッタ遺構 層位	種別	器種	部位	法量 ()は測定値			観察事項	分類・時期・産地		
							口径	器高	底径 重量				
35	17	1	P-20	Ⅲ層	本土産陶器	皿	底	-	(3.0)	4.0	-	低い高台より斜めに立ち上がり、口縁外反する、削り出し高台。見込みに鉄絵(草花文)。軸は内外面とも灰軸(10YR5/1褐灰色)でやや光沢あり。素地はやや密で、径0.5mm以下の微粒子。色調は5YR5/8明赤褐色。	17世紀代 唐津
35	17	2	P-01	Ⅲ層	本土産陶器	鉢	口	(20.0)	(3.2)	-	-	口縁短く外傾し、調縁状となる。内外面回転ナデ。内面に鉄絵による文様(黒一層の順で施文)。外面は体部下平に鉄軸(7.5YR3/1黒褐色)。素地はやや密で、径0.5mm以下の白い塵物を含む。色調は47.5YR/4にぶい・褐色。	17世紀代 唐津

第15表-2 III・IV層出土本土陶磁器 観察表(2)

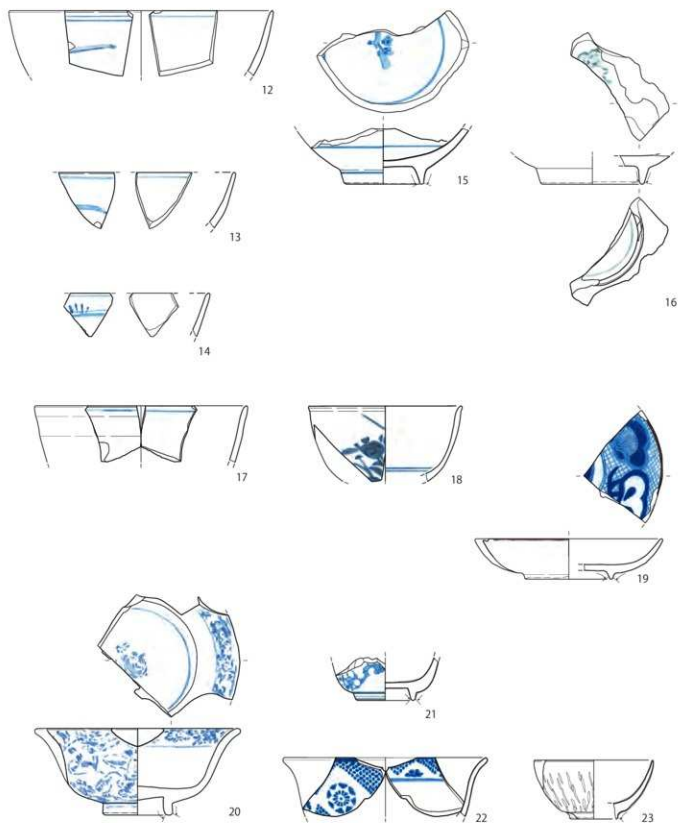
種別	年号	調査番号	出土地 グリッド	遺構	部位	種別	器種	部位	度量 ()は測定値				観察事項	分類・時期・産地
									口径	器高	底径	重量		
35	17	3	O-02		甕	本土産陶器	瓶または急須	口	(5.7)	(3.3)	-	-	口縁は短く、体部は丸みを帯び、飛びカンナによる施文の後に灰軸(5V6/2灰オリーブ色)。体部に15色の沈澱、その間に五弁の印花を施し、鉄軸(10VR3/1黒褐色)を象徴。外面口縁～内面体部は濃紺。素地は赤。色調は10VR6/3にぶい黄褐色。	唐津
35	17	4	Q-03			本土産陶器	鉢	口	(23.0)	(3.9)	-	-	口縁はハ字状に開く。口縁直下に1条の沈澱(反時計回り)。軸は17.5VR3/4暗褐色。色調は17.5VR7/6褐色。	唐津
35	17	5	P-02			本土産陶器	甕	口	(13.7)	(3.6)	-	-	外反口縁。体部下半は凹形ヘケプシ。軸は銅緑軸(7.5V6/2灰オリーブ色)でやや光沢あり。素地はやや密で紺5/4白色粒を含む。色調は10VR5/3にぶい黄褐色。	17世紀後半 内野山
35	17	6	N O-20		Ⅲ・Ⅳ層	本土産陶器	壺	口	(9.9)	(3.9)	-	-	胴部より縁や口の傾斜で口縁部は立ち上がる。口唇上面は凹みを持つ。内外面とも横溝縁飾あり。軸は銅軸(10VR4/2灰黄褐色)。外面は1にぶい光沢。内面は光沢あり。素地はやや密、1mm以下の白い塵物少量。色調は2.5VR5/6明赤褐色。	
35	17	7	P-04			本土産陶器	小碗	口～底	8.3	4.3	4.7	-	外反口縁。軸は外面灰軸(10VR5/2灰黄色)で光沢あり。顔が4貫入り。外面に白化粧による施文あり(梅花?)。内面は透明軸。にぶい光沢あり。素地はやや密。色調は5VR1灰白色。	肥前か
35	17	8	O-02			本土産陶器	壺	口	(6.3)	(4.9)	-	-	口縁は受口状を呈す。口縁上端部は平直。軸は外面～内面口縁部に銅軸10VR4/2灰黄褐色。素地は赤、帯色で1mmの白色粒物を含む。色調は10R5/6赤色。	
35	17	9	P-04			本土産陶器	鍋	口	-	(3.8)	-	-	口縁はくくの字状。外面薬種不明(5V3灰オリーブ)。素地は密で、径1mm以上の白色粒を多く含む。色調は5VR6/4にぶい褐色。	
35	17	10	O-30			本土産陶器	挿鉢	底	-	(3.7)	-	-	外面までやや粗。カキ目は8本以上。素地はやや密。色調は17.5VR3/3暗褐色。	16世紀 産前
35	17	11	P-04			本土産陶器	不明	口	-	(5.7)	-	-	体部に最大径を有し、頸部ですぼまる。口縁は外側に肥厚。口内面には粟粒の中筒に向かい出し、突起の先端は筒状に拡大して露み上げるようにして作られる。外面頸部と体部の間に腰線1条。体部には象眼による施文(彫り彫りによる化粧)。上から腰線2条、斜位の文様(草花?)、腰線。軸は薬種不明(5V4/3明オリーブ色)で貫入はやや粗い。素地は密で、褐色の砂粒をわずかに含む。色調は5V6/灰白色。	18～19世紀
36	18	12	P-01			本土産磁器	碗	口	(17.4)	(4.3)	-	-	直口口縁。外面は口縁部に腰線2条のうら。体部に文様あり。内面に縁下に腰線1条。軸は12.5GV8/1灰白色で貫入は見られない。素地は密で、暗灰色微粒子細に4/5白色粒を含む。色調は5VR1/灰白色。	18世紀代か 波佐見
36	18	13	O-01			本土産磁器	碗	口	-	(3.7)	-	-	直口口縁。内外面口縁直下に腰線1条。軸は透明軸で光沢なく、貫入は見られない。良質の発色はやや鮮明で淡青色。素地は密で白色微粒子。色調はN8/灰白色。	18世紀代か 波佐見
36	18	14	P-01			本土産磁器	碗	口	-	(2.9)	-	-	直口口縁。内外面口縁直下に腰線1条。外面体部に山水文を施す。軸は透明軸、内外面に粗い貫入あり。良質の発色は淡青色。素地は密で白色微粒子。色調はN8/灰白色。	18世紀代か 波佐見
36	18	15	O-05			本土産磁器	碗	底	-	(3.7)	(5.0)	-	外面体部と高台部に腰線各1条。内面体部に腰線1条。見込みには梅花文。高台登付は軸刺ぎ。軸は15GV7/1明オリーブ灰色で、良質の発色はにぶい。素地は密で、径0.1mm以下の長石・黒色粒を含む。色調はN7/灰白色。	18世紀代か 波佐見
36	18	16	O-02			本土産磁器	碗	底	-	(1.9)	(6.7)	-	高台端部は三角形を成す。高台～高台部に腰線3条。外底に腰線1条。見込みに花弁を施文。高台登付は腰刺ぎ。軸は透明軸で光沢あり。良質の発色は良好。素地は密。色調はN8/灰白色。	18世紀代か 波佐見
36	18	17	O-01			本土産磁器	碗	口	(14.0)	(3.7)	-	-	直口口縁。内外面口縁直下に腰線1条。軸は17.5VR1/透明軸で、内外面ともにやや粗い貫入あり。良質の発色は淡青色。素地は密で白色微粒子。色調は17.5VR1/灰白色。	18世紀代か 波佐見
36	18	18	P-01			本土産磁器	小杯	口	(10.2)	(5.0)	-	-	口縁は緩く外反し、唇はやや張る。外面体部に草花文。見込みに腰線2条。軸は透明軸(5VR1/灰白色)。貫入は無い。良質の発色は良好で淡青色。色調はN8/灰白色。	17世紀後半 肥前
36	18	19	O-01			本土産磁器	皿	口～底	(12.2)	2.7	(5.4)	-	直口口縁。内面に腰線彫りによる松竹梅文。軸は透明軸で、口縁部に縁刺ぎを付す。登付は腰刺ぎ。素地は密。色調は5VR1/灰白色。	瀬戸美濃
36	18	20			Ⅲ・2層南境 + Ⅱ層南境	本土産磁器	碗	口～底	(13.2)	3.8	(4.3)	-	腰部張る。外反口縁。型紙摺りによる施文。外面は口縁～体部下半に五弁花と草花、高台部に断文。内面は2条の腰線間に五弁花。見込みに花文。色調はN8/灰白色。	砥部焼碗(ノカマカ)
36	18	21	O-04			本土産磁器	小碗	底	-	(2.8)	(3.6)	-	腰部張る。外面体部に梅花・小さな実の文様を施す。高台部に腰線3条。軸は白色で光沢あり。登付は腰刺ぎ。素地は密で白色微粒子。色調は17.5VR1/灰白色。	
36	18	22	O-02			本土産磁器	碗	口	(13.3)	(3.9)	-	-	外反口縁。型紙摺りによる施文。外面高台部に梅花文。内面点描文柄に草花文。内面口縁端部に腰線1条と文様の下に腰線1条。素地は密。色調はN8/灰白色。	砥部焼碗(ノカマカ)
36	18	23	Q-03			本土産磁器	碗	口～底	(7.8)	3.9	(3.0)	-	外面に飛びカンナによる調整(0.8mm前後)。軸は2.5GV7/1オリーブ灰。貫入は無い。素地は密で微粒子。色調は10VR1/灰白色。	クロム青磁 瀬戸美濃



第 35 图 III·IV層出土遺物 (9) 本土產陶磁器 1



圖版 17 III・IV層出土遺物(10) 本土產陶磁器 1



第36図 III・IV層出土遺物(10) 本土産陶磁器 2



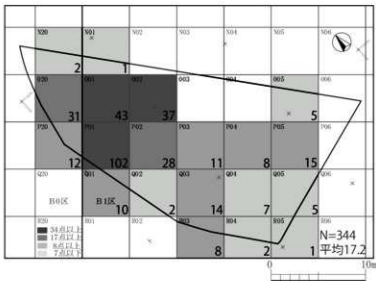
圖版 18 Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (11) 本土產陶磁器 2

(6) 染付 (第38・39図、図版19・20、第16表)

Ⅲ・Ⅳ層では344点の染付が出土した。このうち、32点を図化した。

全体の様相をみると、器種としては碗・皿が主体で、他に杯・散蓮華・合子がある。分布としては、P-01グリッドで102点が出土するなど、調査区北側で多く出土する(第37図)。産地としては、福建・広東系のものが過半を占め、景德鎮窯系が続く。色調や文様構成からみると、印青花や丸文など近世(18～19世紀)の所産と思われるものが主体である。グスク時代・古琉球に遡るものでは、15世紀後半～16世紀前半が中心である。

染付の時期・産地については、森達也氏(沖縄県立芸術大学)のご教示を得た。



第37図 遺物分布図(Ⅲ層・染付)

〈碗〉(1～23)

景德鎮窯系(1～4) 1～4は、素地が灰白色で、呉須が良好に発色し明青色を呈するもので、景德鎮窯系と考えられる。高台壺付は、内外面からの削り出しにより、断面形態は逆三角形を呈する。壺付には砂粒が付着する。

1は、底部は蓮子心で、腰部から口縁まで緩やかに立ち上がるものである。文様は、外面に波濤文帯と如意頭唐草文、見込みに牡丹文を描くもので、小野分類〔小野1982〕の碗C類、16世紀前半に位置づけられる。

2・3は口縁が外反する器形である。2は外面に圈線と唐草文、内面に圈線を付す。3は外面に波濤文帯と唐草文、内面に四方禪文帯と草花文を施す。これらは15世紀代に比定される。

4は碗の底部で、見込みに草花文を付す。目跡が1ヶ所残存する。15世紀前半に位置づけられる。

漳州窯系(5) 5は口縁が直線的に立ち上がる。素地が陶質で、釉薬は黄色がかかる。外面に芭蕉文を描く。16世紀末～17世紀初頭の所産であろう。

徳化窯系(6・7) 6は、口縁は直立する。呉須は発色が不良で、黒褐色を呈する。外面口縁直下に崩れた雷文帯を付す。18世紀後半～19世紀半ばの所産である。

7は、腰部が丸みを帯びる器形で、高台の断面形態は先端の丸い円形を呈する。体部外面には丸文の中に草花を描く。18世紀代に位置づけられる。

福建・広東系(8～23) 素地が灰白色で、呉須は淡青色や灰褐色など不鮮明な発色を成す一群であり、大半が18世紀後半～19世紀前半の所産と考えられる。

器形は、腰部から口縁まで直線的に立ち上がる一群(8・9・11、14～19)と、腰部が張り、口縁部がやや外反する一群(10・12・13)とに大別できる。いずれも明瞭な削り出し高台を有する。高台は外側に開くものが多く、断面形態は方形～逆台形を呈する。20・23は、内底中央が凹む器形である。

施軸範囲は、外面は高台壺付を露胎とし、見込みは蛇の目軸刺ぎとするものが多いが、15では内外面の体部上半までの浸し掛けとしている。16は、口唇部に紅を付すもので、他と比べて透明釉の発色が良好である。

文様は、圈線、手描きの芭蕉文・花卉文、印青花による丸文・菊花文・三角文などを基本要素としており、その組み合わせの種類は多くない。外面の文様構成は、14・17では印青花による花文と手書きの芭蕉文、8・9では印青花の花文、11・19では印青花の丸文、13・15は印青花の三角文、10・12では印青花の丸文+三角文となる。17・23では見込みに若干の絵付が認められるが、意匠は不明である。見込みの圈線は軸刺ぎ後に引いているものと思われ、17では軸刺ぎ後の露胎とした部分にも圈線に伴う呉須が確認できる。

〈皿〉(24～27)

景德鎮窯系(24～26) 高台の断面形態は逆三角形を呈する。壺付のみを露胎としており、部分的に重ね焼きに伴う砂粒の付着が認められる。24は粗製で、呉須の発色が不良である。内面には草花文を付す。高台が高く立ち上がる

器形で、15世紀代の所産と考えられる。25は腰部が張り、口縁部は反外気味に立ち上がる器形である。外面に唐草文、内面に芭蕉文などを施文する。小野分類の皿B群、15世紀後半に位置づけられる。26は体部外面下半に芭蕉文を付す。16世紀前半に比定される。

福建・広東系 (27) 27は、高台端部が角形で、高台は逆「ハ」字状に開く。見込みには印青花による菊花文を付す。18世紀後半～19世紀代の所産である。

〈小杯〉(28～30)

景德鎮窯系 (28・29) 素地や呉須の発色、高台端部の整形などからみて、景德鎮窯系の所産と考えられる。

28は八角杯となるもので、8等分に面取りをおこなったうえ、縦位の圏線で区画を明示する。各区画には縦位の唐草文を付す。いわゆる「芙蓉手」で、17世紀前半に比定される。

29は、墨付を露胎とし、腰部から口縁部まで直立する。内面見込みに草花文を付す。17世紀代の所産か。

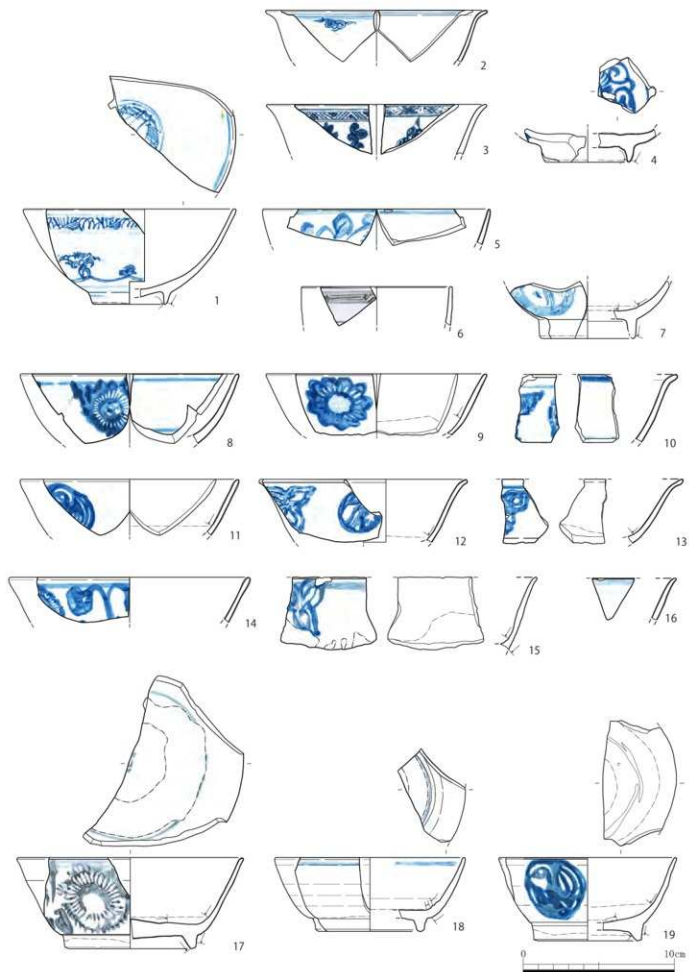
福建・広東系 (30) 釉薬・呉須の発色が非常に悪いもので、にぶい青色を呈する。文様は印青花の丸文か。18世紀後半～19世紀前半の福建・広東系の所産と考えられる。

〈合子〉(31)

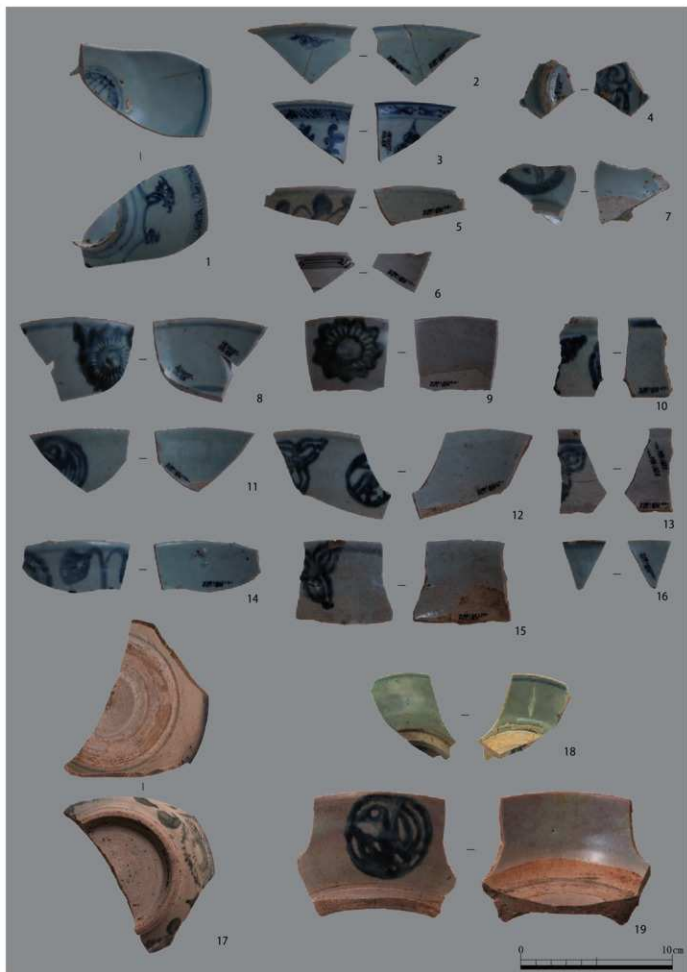
31は、赤絵染付による合子の蓋で、口端部を平坦に面取りする。口縁部は露胎とする。外面には、呉須で圏線を引き、天井部には赤絵で菊花文を描く。17世紀代の漳州窯系の所産であろう。

第16表-1 III・IV層出土染付 観察表(1)

標号	写真	調査番号	出土地		種別	器種	部位	流量 (単位:質量)				観察事項	分期・時期・産地
			フリット	遺構				口徑	器高	紋径	重量		
38	19	1	O-02		皿	口～底	(13.9)	6.3	(4.7)	-	直口口縁、外面口縁直下に波濤文書、腰部に如意雲唐草文、高台縁・その上部に圏線3条、内面口縁直下に圏線1条、見込みに牡丹文、高台端部は外縁から削り出し、墨付は露胎。軸は透明釉で光沢あり、呉須の発色は良好、素地は密で黒色微粒子。色調はN8/灰白色。	16世紀前半 景德鎮窯系	
38	19	2	P-05		皿	口	(14.3)	(3.4)	-	-	外反口縁、外面口縁直下に圏線3条、体部に唐草文、内面口縁直下に圏線2条、呉須の発色は淡い、貫入は無い、素地は密で径0.1mm以下の微粒子。色調は10Y8/1灰白色。	15世紀代 景德鎮窯系	
38	19	3	R-04		皿	口	(14.5)	(3.3)	-	-	外反口縁、外面口縁直下に波濤文書、体部に草花文、内面は口縁直下に四方格文書、体部に宝珠唐草文、軸は10Y8/1灰白色、貫入は無い、呉須の発色は良好、素地は密、色調はN8/1灰白色。	15世紀代 景德鎮窯系	
38	19	4	O-01		皿	底	-	(2.2)	(5.2)	-	外面体部下下に圏線1条、見込みに圏線、中央部に草花文、軸は17.5GY7/1明緑灰色で貫入は無い、墨付は露胎。素地は密で白色微粒子、黒色鉱物含む、色調は2.5Y8/1灰白色。	15世紀前半 景德鎮窯系	
38	19	5	P-01		皿	口	(14.9)	(2.4)	-	-	直口口縁、外面体部に芭蕉文、内外面口縁直下に圏線1条、軸は15GY8/1灰白色で光沢やや鈍く、内外面に細かき貫入、呉須の発色は淡く靑色。素地はやや密で、長石少量含む白色微粒子。色調は17.5Y8/1灰白色。	16世紀末～17世紀初頭 漳州窯系	
38	19	6	P-01		皿	口	(9.8)	(2.6)	-	-	直口口縁、外面口縁直下に磨砕された雷文、体部に圏線1条、呉須の発色は不良、貫入はやや細かき、素地は密で灰白色微粒子。色調は2.5Y8/1灰白色。	18世紀後半～19世紀前半 彰化窯系	
38	19	7	Q-04		皿	底	-	(3.8)	(5.9)	-	外面体部は丸文の内面に草・蝶を描く。軸は透明釉で光沢あり、貫入は無い、見込みに輪割ぎ、部分的に重ねぬき痕が残る。呉須の発色はやや鮮明で淡青色。素地は密で、白色微粒子に黒色の鉱物を含む。色調はN8/灰白色。	18世紀代 彰化窯系	
38	19	8	O-05		皿	口	(14.4)	(4.6)	-	-	直口口縁、外面口縁直下に圏線1条、体部に花卉文、内面口縁直下・見込みに圏線各1条、軸は淡灰色。呉須の発色は鈍くやや薄んでいる。素地は密で黒色の微粒子含む。色調はN8/灰色。	18世紀末～19世紀前半 福建・広東系	
38	19	9	O-01		皿	口	(14.5)	(4.1)	-	-	直口口縁、口端はやや角張る。外面は印青花による菊花文、軸は透明釉で光沢あり、貫入は無い、呉須の発色は淡く靑色で鈍く、内面腰部は露胎、素地は密で黒色微粒子径1mm以下の長石・黒色粒含む。色調は17.5Y7/1灰白色。	18世紀後半～19世紀前半 福建・広東系	
38	19	10	Q-05		皿	口	-	(4.5)	-	-	外反口縁。外面口縁直下に圏線1条、体部に丸文・三角文、内面口縁直下に圏線1条、軸は10GY8/1明緑灰色で光沢あり、細かき貫入あり、呉須は淡く靑黄色でやや鈍く、素地はやや密で白色砂粒少量含む。色調は2.5Y8/1灰白色。	18世紀後半～19世紀前半 福建・広東系	
38	19	11	P-20		皿	口	(14.3)	(3.7)	-	-	直口口縁。外面は印青花による花文、軸は10GY8/1明緑灰色で、やや鈍かき貫入あり、呉須の発色は淡く靑色。素地は密で白色微粒子。色調は17.5Y8/1灰白色。	18世紀末～19世紀前半 福建・広東系	
38	19	12	P-01		皿	口	(13.6)	(4.2)	-	-	外反口縁。体部に印青花による三角文と丸文を交互に配する文様構成と張り付。軸は透明釉で細かき貫入あり、呉須の発色は淡く靑色。素地はやや密で、径0.5mm以下の白色微粒子含む。色調は2.5Y8/2灰白色。	18世紀後半～19世紀前半 福建・広東系	



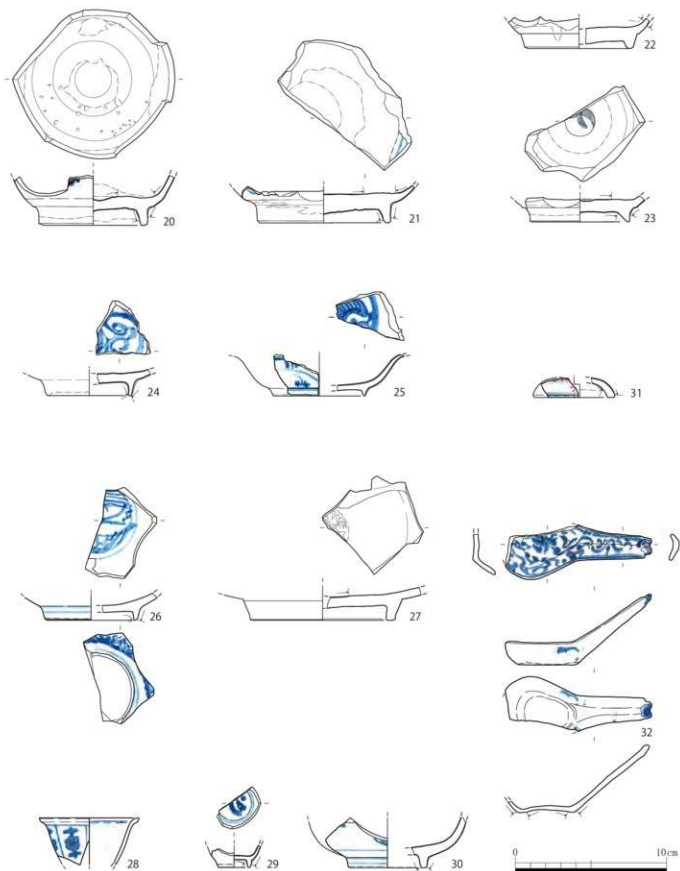
第 38 图 Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (11) 染付 1



圖版 19 III・IV層出土遺物(12) 染付1

〈散蓮華〉 (32)

32は散蓮華で、受け皿部分の一部が欠損する。柄の先端は指オサエにより整形される。内面には、周縁に沿って圏線を、中央に唐草文を付す。産地は、素地からみて景德鎮窯系と考えられるが、徳化窯系の可能性も残る。



第39図 III・IV層出土遺物 (12) 染付2



圖版 20 Ⅲ・Ⅳ層出土遺物(13) 染付 2

第16表-2 Ⅲ・Ⅳ層出土染付 観察表(2)

観測	写真	図号	出土地 グランド 遺構	層位	種別	器種	部位	法量 (1/5は推定値) 口径 器高 底径 重量	観察事項	分類・時期・産地			
38	19	13	P-20	Ⅲ層	染付	碗	口	- (4.3)	-	外反口縁、腰はやや折れる。外面口縁直下に團扇1条、内部に印青花による三角文。軸は透明釉で光沢あり、やや粗い貴人あり。素地は密で径1mm以下の黒色粒を含む。色調は5Y8/1灰白色。	18世紀末～19世紀前半 福雄・広東系		
38	19	14	P-01	Ⅲ層	染付	碗	口	(15.7)	(3.0)	-	直口口縁。外面口縁直下に團扇1条。外部に手書きの芭蕉文と印青花による菊花文を4単位施す。軸は透明釉(10GY8/1明緑灰色)で光沢あり、内外面共に貴人あり。見込みは蛇の目輪割。素地は密で灰白色。やや粗い貴人あり。素地は密で径1mm以下の黒色粒を含む。色調は5Y8/1灰白色。	18世紀後半～19世紀前半 福雄・広東系	
38	19	15	P-01	Ⅲ層	染付	碗	口	- (4.8)	-	-	外反口縁。外面口縁直下に團扇。外部に印青花の三角文。軸は2.5GY7/1明オリーブ灰色で、内外面共に貴人あり。一部で輪軸あり。負荷の色は淡青色でやや粗い。素地は密で黒色微粒子を含む。色調は2.5Y7/3浅黄褐色。	18世紀後半～19世紀前半 福雄・広東系	
38	19	16	O-01	Ⅲ層	染付	碗	口	(15.4)	(2.3)	-	外反口縁。外面口縁直下に團扇1条。口紅付。軸は45G7/1明緑灰色。口紅は17.5YR4/3褐色。内外面共に貴人あり。素地はやや密で白色微粒子。色調は17.5Y8/1灰白色。	18世紀～19世紀 福雄・広東系	
38	19	17	O-01	Ⅲ層	染付	碗	口～ 底	(14.8)	6.0	(8.0)	-	直口口縁。高台端部は外側から削り出す。外面口縁直下に團扇1条。外部に印青花の丸文と手書きの芭蕉・重文の組み合わせ。見込みに團扇1条。軸は27.5Y8/1灰白色で光沢あり。見込みは蛇の目輪割。高台部分に露胎。負荷は黄色鈍(深褐色)を呈する。素地は密で灰白色。やや粗い貴人が見られ黒色微粒子を含む。色調は22.5Y8/1灰白色。	18世紀後半～19世紀前半 福雄・広東系
38	19	18	O-01	Ⅲ層	染付	碗	口～ 底	(12.4)	4.9	(6.8)	-	直口口縁。内外面口縁直下、見込みに團扇各1条。見込みは蛇の目輪割。素地は良好。軸は21G7/1明緑灰色で貴人2線あり。素地は密。色調は5Y7/1灰白色。	18世紀後半～19世紀前半 福雄・広東系
38	19	19	P-01	Ⅲ層	染付	碗	口～ 底	(11.6)	5.5	(6.6)	-	高台輪に露胎。外面に印青花による丸文。軸は22.5GY8/1灰白色で、内外面に貴人あり。見込みは蛇の目輪割で黒は焼き残れる。負荷の色は淡青色。素地は密で黒色の微粒子を含む。色調は10YR8/3浅黄褐色。	18世紀後半～19世紀前半 福雄・広東系
39	20	20	P-20	Ⅲ層	染付	碗	底	- (3.3)	6.5	-	高台端部は平坦。高台輪で段を有し直線的に立ち上がる。外面に文様あり。軸は透明釉で光沢あり、粗い貴人あり。負荷の色は淡く淡青色。素地は密で径1mm以下の黒色微粒子を含む。色調は2N8/0灰白色。	18世紀後半～19世紀前半 福雄・広東系	
39	20	21	P-05	Ⅲ層	染付	碗	底	- (3.5)	8.6	-	外面文様不明。見込みに團扇1条。軸は10YR8/1灰白色。負荷の色は淡い。見込みに蛇の目輪割。素地は密で白色微粒子。色調は22.5YR7/3浅黄褐色。	18世紀後半～19世紀前半 福雄・広東系	
39	20	22	P-04	Ⅲ層	染付	碗	底	- (2.0)	(6.6)	-	腰は内側から斜めに削り出す。高台輪に段を有す。中心が凹む。軸は2N8/灰白色。見込み・外底は露胎。素地は密で白色微粒子。色調は5Y8/1灰白色。	18世紀後半～19世紀前半 福雄・広東系	
39	20	23	P-20	Ⅲ層	染付	碗	底	- (1.7)	6.3	-	高台輪で段を有しやや直線的に立ち上がる。高台端部は内側から削り出す。端部は平坦。見込みに文様(菊花文)あり。軸は透明釉で明緑灰色。見込みに輪割。負荷の色は淡い。素地はやや密で、1mm以下の長石・黒色微粒子を含む。色調は22.5Y8/2灰白色。	18世紀後半～19世紀前半 福雄・広東系	
39	20	24	O-20	Ⅲ層	染付	皿	底	- (1.8)	(5.6)	-	見込みに唐草文。軸は透明釉(5G7/1明緑灰色)で光沢あり、内外面にやや粗い貴人あり。唇付は露胎。負荷の色は鮮明で濃青色。素地はやや粗く1mm以下の白・黒色微粒子を含む。色調は5Y7/1灰白色。	15世紀前半 景徳鎮窯系	
39	20	25	P-20	Ⅲ層	染付	皿	底	- (2.8)	(6.0)	-	低い高台より外反し立ち上がる。外面口縁直下に團扇1条。高台に2条。外部に菊花文。内面は口縁直下に團扇1条。見込みに團扇2条と唐草文。軸は透明釉。負荷の色は良好で青色を呈す。素地は密。色調は2N8/灰白色。	15世紀後半 景徳鎮窯系	
39	20	26	O-01	Ⅲ層	染付	皿	底	- (1.8)	(5.7)	-	外面端部に手書きの重文。高台輪に團扇2条。見込みに牡丹文と團扇1条。軸は透明釉で光沢あり。貴人は無い。負荷の色は鮮明で淡青色。素地は密で白色微粒子。色調は2N8/灰白色。	16世紀初頭～前半 景徳鎮窯系	
39	20	27	P-04	Ⅲ層	染付	皿	底	- (2.2)	(8.6)	-	高台はやや内傾する。唇付は平坦。見込みに10Y6/2オリーブ灰色の軸。素地は密で径0.1mm以下の白・黒色微粒子を含む。色調は17.5Y7/1灰白色。	18世紀後半～19世紀 福雄・広東系	
39	20	28	P-01	Ⅲ層	染付	小杯	口	(6.6)	(3.1)	-	底部から直線的に立ち上がり口縁は外反。全体に角が取れた八角形。口縁直下に團扇1条。團扇から垂下する銀線を引き区画を作る。うち2単位残存。区画内に芙蓉文を施す。内面口縁直下に團扇1条。軸は透明釉。負荷は黄色良好で濃青色。素地は白色砂粒を含む。色調は5Y8/1灰白色。	17世紀前半 景徳鎮窯系	
39	20	29	P-20	Ⅲ層	染付	小杯	底	- (1.5)	(2.1)	-	高台より直線的に立ち上がる。外面高台輪に團扇1条。外部に文様あり。見込みに團扇2条と文様あり。軸は透明釉(10G7/1明緑灰色)で光沢あり。負荷の色は鮮明で青色。素地は密。色調は2N8/0灰白色。	17世紀代 景徳鎮窯系	
39	20	30	P-01	Ⅲ層	染付	小杯	底	- (3.4)	(4.7)	-	外面外部に丸文と團扇1条。高台輪に團扇2条を施す。軸は5GY6/1オリーブ灰色で光沢あり、内外面に細い貴人あり。唇付は露胎。負荷の色は淡く青色。素地はやや密で、白・灰黒色微粒子。色調は22.5Y7/1灰白色。	18世紀後半～19世紀 福雄・広東系	
39	20	31	P-01	Ⅲ層	色絵染付	合子	口	(5.3)	(1.4)	-	-	合子の腹。外面に赤絵を付す。軸は2N8/灰白色で光沢あり。素地はやや密。色調は10YR8/4浅黄褐色。	17世紀代 漳州窯系
39	20	32	P-04	Ⅲ層	染付	散蓮華	口～ 底	長 9.7	市 (2.4)	高 4.5	-	受け皿部分一部欠損。内面は最外縁に團扇、四縁に唐草文。受け皿中央に花文付。外面に部分的に唐草文を施す。コマルの発色は良好。軸は10GY8/1明緑灰色で貴人は無い。負荷の色は鮮明で濃青色。底面接地部分は露胎する。素地は白色微粒子。色調は白色。	18世紀～19世紀 景徳鎮窯系

(7) 青磁 (第41～43図、図版21～23、第17表)

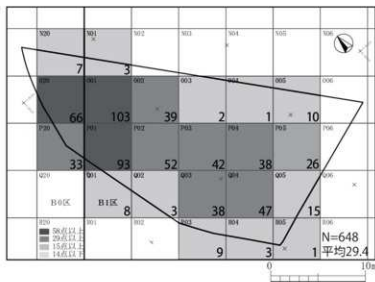
Ⅲ・Ⅳ層では、青磁が計649点出土した。このうち、52点を図示する。

全体の様相をみると、器種としては、碗・皿類が主体で、その他に盤・蓋・壺などが存在する。

文様構成としては、蓮弁文を有するものが多い。釉薬の色調は緑灰色を呈する。素地は精良で、白色の砂粒を含む。産地は大半が龍泉窯系の諸窯であると考えられる。

調査区全体での分布状況を見ると(第40図)、0-01・P-01グリッドで出土点数が各々90点以上と卓越しており、0-20・P-02グリッドでも50点以上が出土するなど、調査区北側で比較的分布が濃密である。これはⅣ層が分布する範囲とも重なるものだが、沖縄産陶器などの近世遺物とは分布の様相を異にする。

青磁の文様・時期については、森達也氏(沖縄県立芸術大学)のご教示を得た。



第40図 遺物分布図(Ⅲ層・青磁)

(碗) (1～35)

出土した青磁の4分の3を占める。35点を図化した。

1～18は有文の碗の口縁部である。

1は劃花文碗で、非常に器壁が薄く、口縁部に向けて厚さを減じる。口縁部は輪花とする。体部内面には劃花により蓮弁文などを描く。12世紀後半に位置づけられるものと考えられる。

2は直口縁で、口唇断面は尖頭状となる。体部外面には鎊蓮弁文を施文する。各弁の彫りが深く、鎊の作出が明瞭である。14世紀前半～半ばに比定される。

3・4は、口縁部までほぼ直立し、口端部がわずかに外反する器形である。3は口縁直下に4条の圓線を有するもので、いわゆる弦文帯碗である。14世紀後半に位置づけられる。4は外面にヘラ彫りの蓮弁文を付す。14世紀後半～15世紀前半か。

5～12は、体部に丸みを帯び、口縁部まで緩やかに立ち上がる器形である。

5～9は、各弁の幅1.5～2cmと比較的幅広い蓮弁文を付す一群である。5は外面にヘラ彫り蓮弁文を付す。個々の蓮弁は直線的で、剣頭は大きく左側に偏向している。6はやや緩い鎊を有する。7～9は体部外面に線彫り蓮弁文を施す。7は蓮弁と剣頭を描き分ける。8・9は、高台側から剣頭に向かって逆「J」字状に線彫りしており、右→左への施文順序が認められる。8は内面にヘラ彫りの草花文を施文する。これらは15世紀前半～半ばに位置づけられる。

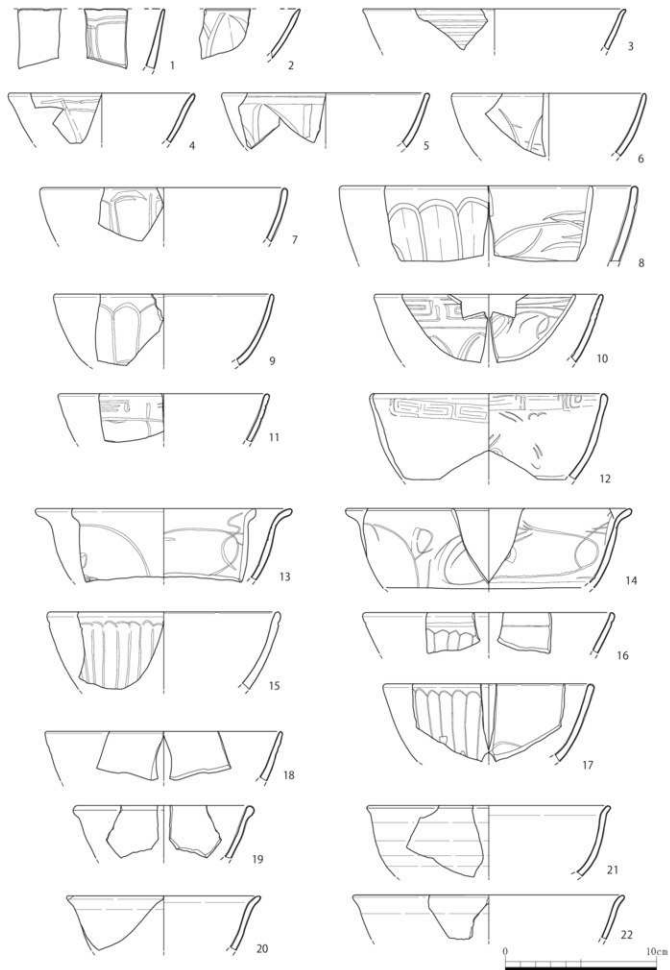
10・11は、口縁直下にヘラ彫り雷文帯を付す一群である。10は雷文の各辺の描き分けが明瞭である。雷文帯の下位には、1条の圓線を隔てて線彫りの蓮弁文を付す。11は、やや粗雑な雷文帯で、下位の圓線と一体化している。これらは15世紀前半～半ばに位置づけられる。

12は、内外面の口縁直下に回轉施文による雷文帯を付す、いわゆる「人形手」である。雷文帯は口縁とは平行しない。内面口縁直下の雷文帯は、縦方向の施文がほとんど認められない。内外面体部の文様は粗雑な型押しによるもので、意匠は判然としない。15世紀半ば～後半の所産である。

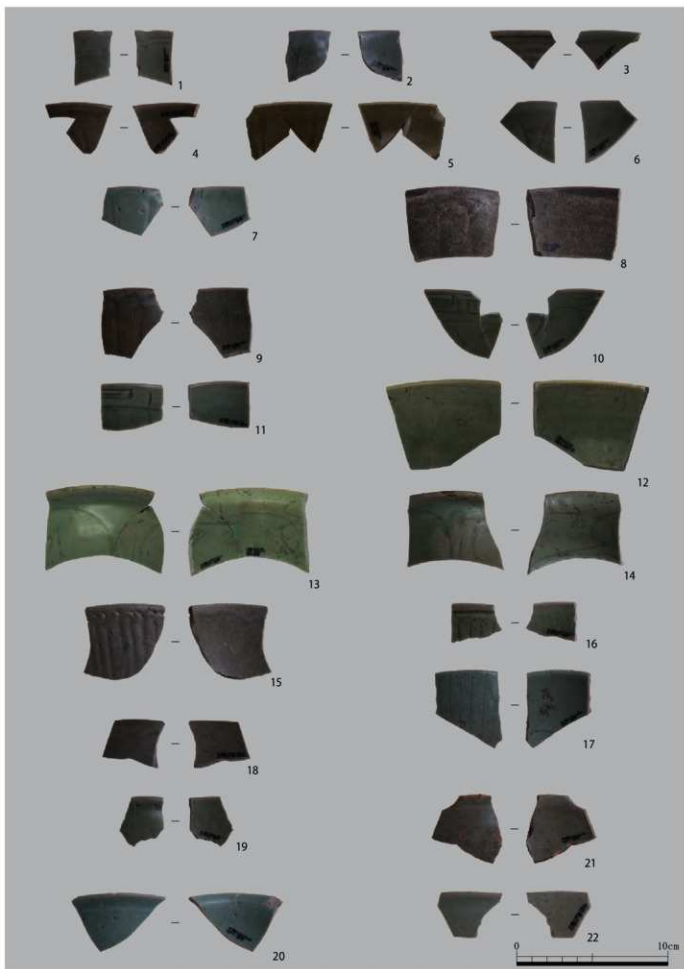
13・14は口縁が大きく外反する器形である。内外面にヘラ彫りのラマ式蓮弁文を付す。15世紀半ば～後半の所産である。

15～17は線彫りの細蓮弁文を付す一群である。いずれも剣頭は不均一である。15は各弁の蓮弁と剣頭を別に描いており、剣頭は描かない。16は口縁直下に圓線を有し、圓線より下位に剣頭に尖る蓮弁文を施文する。これらは15世紀後半～16世紀前半に位置づけられる。

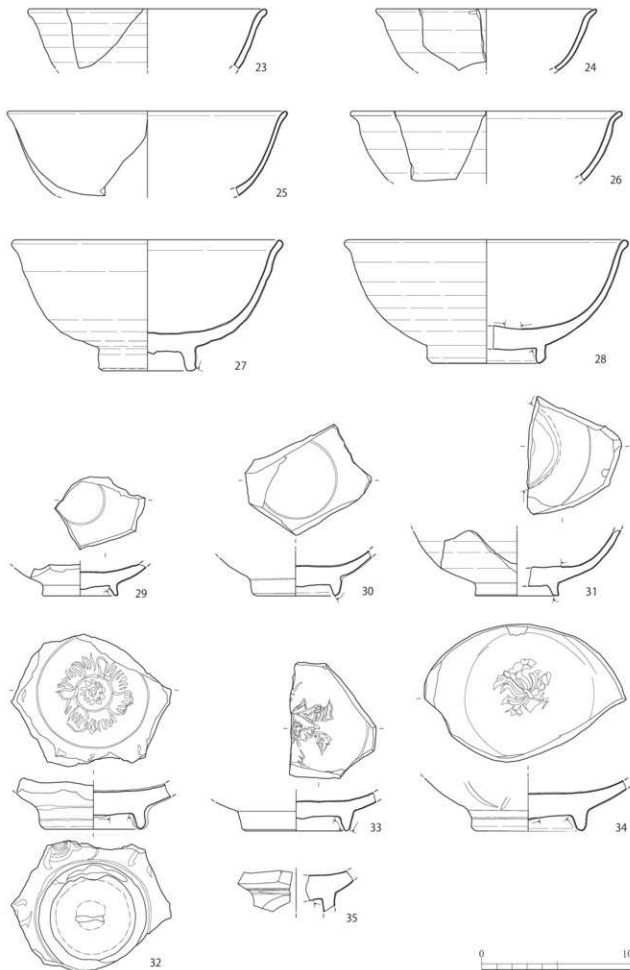
18～28は無文の碗の口縁部である。



第 41 图 Ⅲ・Ⅳ層出土物 (13) 青磁 1



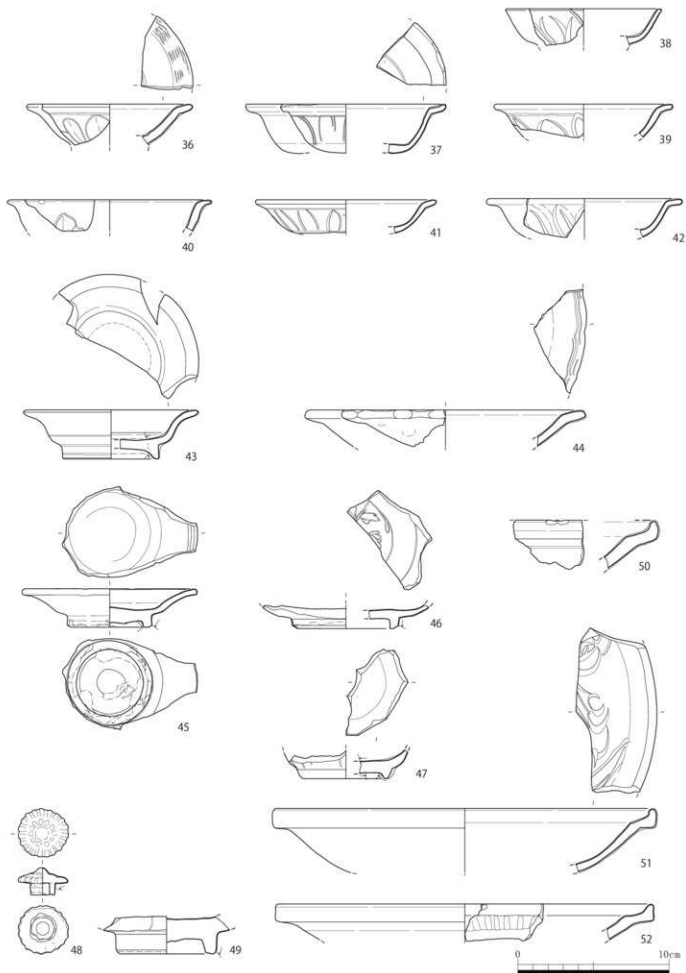
圖版 21 Ⅲ・Ⅳ層出土遺物(14) 青磁 1



第 42 図 Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (14) 青磁 2



圖版 22 III・IV層出土遺物 (15) 青磁 2



第 43 图 Ⅲ·Ⅳ 层出土遗物 (15) 青磁 3



圖版 23 III・IV層出土遺物(16) 青磁 3

18は直口口縁で、口縁部に向けて器壁を減じる。12世紀後半～13世紀初頭のいわゆる「無文直口碗」である。

19は、口唇の断面形態が玉縁状を呈する、「佐敷タイプ」である。15世紀前半の所産と考えられる。

20～28は口縁部が外反するもので、14世紀後半～15世紀初頭に位置づけられる。27・28は口縁部から底部まで残存する。高台が高く、断面形は角形を呈する。27は高台壘付～外底を露胎とするもので、高台内には回転台からの切り離し時の痕跡が残存する。28は素地がやや赤みを帯びる。総軸の上、外底および内面見込みの軸を削いでいる。

29～35は碗の底部である。

29～31は、高台壘付の削り出しが明瞭で、断面形は逆三角形を呈する。いずれも外底を露胎とし、見込みには圏線を付す。14世紀末～15世紀前半に位置づけられる。30は外面高台脇に圏線1条、体部下半には線彫り蓮弁文を施す。31は見込みの軸を削く。

32～34は、高台が高く、断面形態は角形ないし端部の丸い方形を成す。外底まで全体的に施軸した後に、高台内の蛇の目軸剥ぎをおこなう。見込みには圏線と印花による草花文を付す。32・33はともに高台高が1cm前後と高く、底部も厚く作られている。外面にへら彫りの蓮弁文を施文する。15世紀前半～半ばの所産である。34は外面に蓮弁文をへら彫りするが、単位が不明瞭である。見込みの圏線には数回りの描き分けをおこなった痕跡が認められる。15世紀後半の所産であろう。

35は、高台基部のみ残存する。左回りに圏線を引く。15世紀後半の所産か。

〈皿〉(36～47)

12点を図化した。

36は口折皿で、口縁の外折は弱い。外面に蓮弁文を線彫りする。蓮弁は一筆で描いており、剣頭は丸い。内面口唇には6条1単位の波状文を付す。14世紀末～15世紀前半に位置づけられる。

37は口縁部が鐮縁状を呈する。外面の圏線より下位には2本1組の工具により蓮弁文を付す。14世紀末～15世紀前半の所産である。

38は腰部から直線的に立ち上がる器形である。隣接する蓮弁間で新旧関係があり、左→右の順で施文する。15世紀前半。

39～42は、口縁部が外反する器形で、外面に蓮弁文を線彫りする。39～41は口縁の外折が顕著である。40・41は、口縁直下に圏線を引き、その下位にへら彫りの蓮弁文を施文する。41では剣頭は一致しない。42は口縁がわずかに外折する。15世紀前半。

43・45・46は腰折皿で、口縁は外反する。43は外面に2条の圏線を付す。高台端部を内側から削り出しており、断面が三角形状を呈する。外面高台内および内面見込みは露胎とする。45は高台が角形で高く、高台壘付を露胎とする。底部は厚く、兜巾状となる。内面口唇に圏線を付す。46は、高台端部を外側から削り出しており、壘付を露胎とする。内面見込みには印花の草花文を施文する。これらの皿は、15世紀前半～半ばの所産である。

44は稜花皿で、口縁を外折する。内面口唇には3条1組の波状文を付す。15世紀前半。

47は低い高台を有する。外面にへら描きの蓮弁文を施文する。総軸の後、外底を蛇の目軸剥ぎする。15世紀前半～半ばの所産である。

〈蓋〉(48)

48は完形で、長頸壺の蓋と考えられる。底部が長い。型作りによる成形で、上面を菊花状とする。かかり部の下半まで施軸する。15世紀前半。

〈瓶類〉(49)

49は玉壺春瓶の底部と考えられる。見込みでは成形時の轆轤痕跡が明瞭である。15世紀前半。

〈盤〉(50～52)

口縁を外折させ、口端部を上方から掴み上げており、口縁の断面形態は鐮縁状を呈する。

51は体部内面にへら彫りの草花文を施文する。15世紀前半。

52は体部内面に丸彫りの蓮弁文を施文する。15世紀後半。

本遺跡で出土した青磁は、12世紀代の劃花文碗・無文直口碗から15世紀後半～16世紀前半の細蓮弁文まで、多様な資料が得られたが、中でも15世紀前半～半ばの資料が量・器種ともに豊富で、当地のグスク時代・古琉球段階での盛期であると言えよう。

第17表-1 Ⅲ・Ⅳ層出土青磁 観察表(1)

棟号	号	出土地	形状	種別	器種	部位	法量 ()は測定値			観察事項	分類・時期・産地		
							口径	器高	底径				
41	21	1	O-01	皿唐	青磁	碗	口	-	(4.0)	-	-	輪花文。直口口縁。口縁に向かって厚さを減じる。内面に 新花文。軸は2.5GY7/1明オリーブ灰色で光沢あり、貫入は やや粗い。素地は密で微粒子。色調は10Y7/1灰白色。	12世紀後半 龍泉窯系
41	21	2	O-01	皿唐	青磁	碗	口	-	(3.3)	-	-	直口口縁。外面に片切り彫りによる縁部垂文。軸は 2.5GY6/1オリーブ灰色でやや細か。貫入あり、素地は密で 白色微粒子。色調はN8/1灰白色。	14世紀前半～半ば 龍泉窯系
41	21	3	O-03	皿唐	青磁	碗	口	(17.4)	(2.7)	-	-	直口口縁。外面に縁部3条(括文)。軸は2.5GY6/2オリーブ 灰色で貫入は粗い。素地は密で白色微粒子。色調は14.5Y7/ 1灰白色。	14世紀後半 龍泉窯系
41	21	4	O-20- P-20	皿唐	青磁	碗	口	(12.2)	(3.3)	-	-	直口口縁。ヘラ彫りによる扁凸の蓮弁文。軸は5Y5/3灰オ リーブ色で光沢あり、貫入は細か。素地は密で白色微粒 子。細かい黒色粒少量含む。色調は5Y8/1灰白色。	14世紀後半～15世 紀前半 龍泉窯系
41	21	5	O-01+ N-20	皿唐	青磁	碗	口	(13.6)	(3.6)	-	-	直口口縁。外面にヘラ彫り蓮弁文。軸は2.5Y5/3灰オリー ブで光沢あり、貫入は無い。素地は密で径1mm以下の長石多 く含む。色調は12.5Y7/1灰白色。	15世紀前半～半ば 龍泉窯系
41	21	6	O-01	皿唐	青磁	碗	口	(12.6)	(4.2)	-	-	直口口縁。外面にヘラ彫り蓮弁文。軸は10Y6/2オリーブ 灰色で貫入は無い。素地は密で淡灰色微粒子。色調は 7.5Y7/1灰白色。	15世紀前半～半ば 龍泉窯系
41	21	7	O-20- P-20	皿唐	青磁	碗	口	(16.0)	(3.2)	-	-	直口口縁。外面口縁下部よりヘラ彫り蓮弁文を施す。軸は 5GY7/1明オリーブ灰色で、光沢あり。素地は密で、黒色微 粒子。色調は5Y8/1灰白色。	15世紀前半～半ば 龍泉窯系
41	21	8	N-20	皿唐	青磁	碗	口	(19.3)	(5.0)	-	-	直口口縁。外面口縁下部より縁彫り蓮弁文を右から左に太 く描き、御前不明彫。内面はヘラ彫り草花文。軸は2.5GY5/ 1オリーブ灰色に5Y8/1灰白色の高伏の縞が多くなる。ふ い光沢あり。素地はやや密。色調は7.5Y7/1灰白色。	15世紀半ば～後半 龍泉窯系
41	21	9	O-01	皿唐	青磁	碗	口	(14.3)	(4.7)	-	-	直口口縁。外面に縁彫り蓮弁文を施す。軸は2.5Y5/2灰オ リーブ色でやや光沢あり、内外面貫入あり。素地はやや密 で白色微粒子。色調は4.5Y7/1灰白色。	15世紀半ば～後半 龍泉窯系
41	21	10	O-01	皿唐	青磁	碗	口	(15.0)	(4.5)	-	-	雷文帯輪。直口口縁。外面口縁直下にヘラ彫りの雷文帯。 外部にはヘラ彫り蓮弁文、内面にはヘラ彫りの草花文。軸は 7.5GY7/1明緑灰色で光沢あり、貫入は無い。素地は密で 径0.5mm以下の白色微粒子。色調はN8/1灰白色。	15世紀前半～半ば 龍泉窯系
41	21	11	N-20- O-20	皿唐	青磁	碗	口	(13.6)	(3.2)	-	-	雷文帯輪。直口口縁。外面口縁下部にヘラ彫りの雷文帯を めぐる。雷文帯は斜行化しており、下位の縁部と一体化 する。軸は10Y6/2オリーブ灰色で光沢あり、やや粗い貫入 あり。素地は密で、1mm以下の長石・黒色粒を含む。色調は N8/1灰白色。	15世紀前半～半ば 龍泉窯系
41	21	12	O-20	皿唐	青磁	碗	口	(15.2)	(5.7)	-	-	直口口縁。人形手。内外面口縁直下に同軸文による雷 文帯をめぐらす。内外面外部には複雑な彫刻による蓮 文。軸は2.5GY7/1明オリーブ灰色。貫入は無い。素地は密。 色調は17.5Y7/1灰白色。	15世紀半ば～後半 龍泉窯系
41	21	13	O-02+ O-20+ P-20	皿唐	青磁	碗	口	(16.8)	(4.9)	-	-	外反口縁。内外面にヘラ彫りのワニ文蓮弁文。軸は2.5GY7/ 1オリーブ灰色で貫入は無い。素地は密で灰色微粒子。 1mm以下の長石・石英を含む。色調はN8/1灰白色。	15世紀半ば～後半 龍泉窯系
41	21	14	O-01	皿唐	青磁	碗	口	(18.6)	(5.3)	-	-	外反口縁。内外面にヘラ彫りのワニ文蓮弁文。軸は 7.5GY7/1明緑灰色で貫入は無い。素地は密、淡灰色微 粒子で0.5mm以下の白い鉱物を含む。色調はN8/1灰白色。	15世紀半ば～後半 龍泉窯系
41	21	15	N-20	皿唐	青磁	碗	口	(15.0)	(5.1)	-	-	直口口縁。口縁下部より縁彫り細蓮弁文。軸は10Y8/1 灰色でやや光沢が多く、ふい光沢あり貫入は無い。内外面 に輪たまりあり。素地はやや密で微粒子を含む。色調は 7.5Y7/1灰白色。	15世紀後半～16世 紀前半 龍泉窯系
41	21	16	O-20- P-20	皿唐	青磁	碗	口	(16.2)	(2.7)	-	-	直口口縁。外面口縁直下に縁部1条。外部に縁彫り細蓮 弁文。蓮弁の頭部は不揃い。軸は17.5GY7/1明緑灰色で細 かい貫入あり。素地はやや密で、白色・灰白色微粒子含む。 色調は10Y8/1灰白色。	14世紀末～15世紀 後半 龍泉窯系
41	21	17	Q-01	皿唐	青磁	碗	口	(14.5)	(5.2)	-	-	直口口縁。口縁下部より縁彫りの細蓮弁文。内面にはヘ ラ彫り草花文。軸は10GY7/1明緑灰色で光沢あり。内外面 貫入はやや細かい。素地はやや密で1mm以下の白色微粒 子。色調は5Y7/1灰白色。	15世紀後半～16世 紀前半 龍泉窯系
41	21	18	N-20- O-20	皿唐	青磁	碗	口	(15.5)	(3.3)	-	-	無文碗。直口口縁。軸は2.5GY5/1オリーブ灰色で光沢な い。素地は密で灰色微粒子。色調はN6/1灰白色。	12世紀後半～13世 紀初頭 龍泉窯系
41	21	19	O-20- P-20	皿唐	青磁	碗	口	(11.3)	(3.5)	-	-	無文碗。玉縁口縁。軸は2.5GY5/1オリーブ灰色でふ い光沢あり。素地はやや粗く細か。白色微粒子。色調は 10YR6/2黄褐色。	15世紀前半 龍泉窯系
41	21	20	O-01	皿唐	青磁	碗	口	(12.6)	(3.6)	-	-	無文碗。外反口縁。軸は17.5GY7/1明緑灰色でやや細か い貫入あり。素地はやや密。色調は10Y8/1灰白色。	14世紀後半～15世 紀初頭 龍泉窯系
41	21	21	O-01	皿唐	青磁	碗	口	(15.7)	(4.7)	-	-	無文碗。外反口縁。軸は2.5GY7/1明オリーブ灰色で光沢 はにぶく、貫入は粗い。素地は径0.5mm以下微粒子。色調は N7/1灰白色。	14世紀後半～15世 紀初頭 龍泉窯系
41	21	22	N-20 O-20	皿唐	青磁	碗	口	(17.8)	(3.0)	-	-	無文碗。外反口縁。軸は2.5GY7/1明オリーブ灰色でやや細 かい貫入あり。素地は密で淡灰色微粒子。0.1mm以下の 長石・黒色粒・石英を含む。色調はN8/1灰白色。	14世紀後半～15世 紀初頭 龍泉窯系
42	22	23	Q-04	皿唐	青磁	碗	口	(15.6)	(4.0)	-	-	無文碗。外反口縁。軸は10Y7/1灰白色で貫入はやや粗 い。素地は密で灰色微粒子。色調は5Y7/1灰白色。	14世紀後半～15世 紀初頭 龍泉窯系

第17表-2 Ⅲ・Ⅳ層出土青磁 観察表(2)

時期	写真	図番号	出土地 ブロード 遺構	層位	種別	器種	部位	法量 口径	高さ	底径	重量	観察事項	分類・時期・産地
42	22	24	O-01	Ⅲ層	青磁	碗	口	(14.4)	(4.1)	-	-	無文盤。外反口縁。軸は5V6/25灰オレンジ色でやや光沢あり、貫入は少ない。素地はやや密で白色微粒子。色調は5V6/1灰白色。	14世紀後半～15世紀初頭 龍泉窯系
42	22	25	N-20- O-20	Ⅲ・Ⅳ層	青磁	碗	口	(18.2)	(5.6)	-	-	無文盤。外反口縁。軸は2.5GV7/1明オレンジ灰色で光沢あり、貫入はやや細かい。素地はやや密で白色微粒子。1mm以下の白い薬物含む。色調は2.5V7/1灰白色。	14世紀後半～15世紀初頭 龍泉窯系
42	22	26	O-20- P-20	Ⅲ層	青磁	碗	口	(17.7)	(4.6)	-	-	無文盤。外反口縁。軸は10GV7/1明緑灰色で光沢あり、貫入は細かい。素地は密で白色微粒子。色調はN8/1灰白色。	14世紀末～15世紀初頭 龍泉窯系
42	22	27	P-04	Ⅲ層	青磁	碗	口～ 底	(17.4)	8.7	5.8	-	無文盤。外反口縁。内外面とも口縁が残り、縁が顕著。軸は15V5/3灰オレンジ色で細かい貫入あり、素地は白色微粒子で黒色粒を少し含む。色調は10YR/2灰白色。	14世紀後半～15世紀初頭 龍泉窯系
42	22	28	P-04	Ⅲ層	青磁	碗	口～ 底	(18.3)	8.2	(6.9)	-	無文盤。外反口縁。軸は2.5GV7/1明オレンジ灰色でぶい光沢あり、細かい貫入あり。外底露胎。見込みは蛇の目輪割ぎ。素地はやや密で、0.5mm以下微粒子含む。色調は2.5V3/5明赤褐色。	14世紀後半～15世紀初頭 龍泉窯系
42	22	29	O-01	Ⅲ層	青磁	碗	底	(2.1)	(4.8)	-	-	見込みは露胎1条。軸は2.5GV7/1明オレンジ灰色で細かい貫入あり、外底露胎。素地はやや密で白色微粒子。色調は5V8/1灰白色。	14世紀末～15世紀初頭 龍泉窯系
42	22	30	O-20	Ⅲ層	青磁	碗	底	(3.0)	5.1	-	-	外面露胎の細垂弁文。見込み・高台輪に露胎各1条。外底露胎。軸は21GV7/1明緑灰色でぶい光沢あり、貫入は細かい。素地は密で0.5mm以下の灰白微粒子。色調はN8/1灰白色。	14世紀末～15世紀前半 龍泉窯系
42	22	31	P-01	Ⅲ層	青磁	碗	底	(4.3)	(3.5)	-	-	見込みは露胎1条露胎。軸は2.5V5/25灰オレンジで貫入は粗い。見込みは輪割ぎ。外底は輪を縁取る。見込みには重ね焼き痕跡。素地は密で、白色粒を少し含む。色調は2.5V7/1灰白色。	14世紀末～15世紀初頭 龍泉窯系
42	22	32	Q-04	Ⅲ層	青磁	碗	底	(3.0)	(6.0)	-	-	高台から縁やかに立ち上がる。高台の断面形は逆舟形を成す。高台輪に露胎1条。体部にへろ彫り垂弁文、見込みは印花文(捺子花)。周縁に露胎1条。体部内面にはへろ彫りによる扇文(唐草文)。軸は15GV5/1オレンジ灰色。外底は蛇の目輪割ぎ。素地は1mm以下の白色黒色微粒子を少し含む。色調は5V7/1灰白色。	14世紀後半～15世紀初頭 龍泉窯系
42	22	33	P-01	Ⅲ層	青磁	碗	底	(2.5)	(6.7)	-	-	高台は端部を外側から斜めに削り出す。見込みに露胎1条とその内面に印花文(唐草文)を施す。軸は10GV7/1明緑灰色で貫入なし。外底面は輪を縁取る。素地は密で白色微粒子と白色微粒子を少し含む。色調は2.5GV7/1灰白色。	15世紀初頭～前半 龍泉窯系
42	22	34	O-01	地山 上面	青磁	碗	底	(3.5)	7.1	-	-	垂弁文露胎。垂弁の単位は不明瞭。高台に露胎1条。見込みに露胎。その内面にへろ彫り垂弁文。高台唇付と外底は露胎。軸は2.5GV7/1明緑灰色。素地は密。色調は2.5V7/1灰白色。	15世紀後半 龍泉窯系
42	22	35	O-01	Ⅲ層	青磁	碗	底	(2.2)	-	-	-	外面高台輪に露胎1条。中央部に2条めぐらす反時計回りに施文。軸は15GV7/1オレンジ灰色で貫入はやや粗い。素地は密で白色微粒子。色調は5V8/1灰白色。	15世紀後半 龍泉窯系
42	23	36	O-01	Ⅲ層	青磁	碗	口	(10.7)	(2.7)	-	-	外反口縁。外面口縁下方に露胎1条。外面体部に露胎の垂弁文。内口縁直下に磨擦流水文。見込みに印花文。軸は2.5GV7/1明緑灰色でぶい光沢あり、貫入は粗い。素地は密で白色微粒子。色調はN8/1灰白色。	14世紀末～15世紀後半 龍泉窯系
42	23	37	O-20	Ⅳ層	青磁	皿	口	(13.1)	(3.2)	-	-	外反口縁。口端は外折す。外面口縁直下に露胎1条。体部に二重の磨擦り垂弁文。見込みに露胎1条。軸は明オレンジ色6.5GV7/1。貫入は見られない。素地は密。色調はN6/1灰白色。	14世紀末～15世紀前半 龍泉窯系
42	23	38	O-01	Ⅲ層	青磁	碗	口	(10.1)	(2.5)	-	-	直口口縁。縁はやや折れる。外面に片切彫りによる垂弁文。軸は2.5GV7/1明緑灰色。貫入はやや粗い。素地は密で、径0.5mm以下の白い薬物含む。色調はN8/1灰白色。	15世紀前半～半ば 龍泉窯系
42	23	39	O-20- P-20	Ⅲ層	青磁	碗	口	(11.5)	(2.2)	-	-	外反口縁。口端は外折す。外面に露胎1条。その直下に幅広い工具による磨擦り垂弁文。軸は10GV7/1明緑灰色でぶい光沢あり、貫入はみられない。素地は密で、白色・灰黒色微粒子。色調はN8/1灰白色。	15世紀前半～半ば 龍泉窯系
42	23	40	P-02	Ⅲ層	青磁	皿	口	(13.4)	(1.9)	-	-	外反口縁。口端は外折す。口端部に小型の梅花。外面体部に露胎垂弁文(弁先は縁)。軸は10V6/2オレンジ灰色で貫入はみられない。素地は密で細かい磨擦り流水文。色調はN8/1灰白色。	15世紀前半～ 龍泉窯系
42	23	41	N-20- O-20	Ⅲ・Ⅳ層	青磁	碗	口	(11.8)	(2.2)	-	-	外反口縁。口端は破く外折す。口縁下方に露胎1条。体部に露胎の垂弁文。弁先は縁をむく。軸は10V6/2オレンジ灰色で光沢あり、貫入はみられない。素地は密で1mm以下の長石・黒色粒を含む。色調はN8/1灰白色。	15世紀前半 龍泉窯系
42	23	42	O-01	Ⅲ層	青磁	碗	口	(12.6)	(2.6)	-	-	外反口縁。外面に露胎り垂弁文。弁が突出している。軸は10V6/2オレンジ灰色で貫入はみられない。素地は密で1mm以下の長石・黒色粒を含む。色調は2.5V7/1灰白色。	15世紀前半 龍泉窯系
42	23	43	O-01	Ⅲ層	青磁	碗	口～ 底	(11.1)	3.3	(6.1)	-	縁は丸く口縁に向かって大きく開き、口縁は外反する。高台唇付は端部平用。高台輪、外面体部に露胎。軸は7.5GV7/1明緑灰色でぶい光沢あり、体部下手に全や粗い貫入あり。見込みおよび外底は輪割ぎ。素地はやや密、淡灰白色で微粒子0.5mm以下の白い薬物含む。色調はN8/1灰白色。	15世紀前半 龍泉窯系
42	23	44	O-01	Ⅲ層	青磁	皿	口	(18.0)	(2.4)	-	-	口縁部梅花(花弁2×8=6枚)で外折す。内面にへろ彫りによる流水文。外面輪に口端部あり。軸は10GV7/1明緑灰色。光沢あり、貫入は粗い。素地は密で径0.5mm以下の長石・黒色粒を含む。色調はN7/1灰白色。	15世紀前半 龍泉窯系

第17表-3 Ⅲ・Ⅳ層出土青磁 観察表(3)

探検	年号	調査番号	出土地		種別	器種	部位	法量 ()は推定量			観察事項	分類・時期・産地		
			グリッド	遺構				層位	口径	器高			底径	重量
43	23	45	O-03		圓筒	青磁	皿	口へ底	(11.2)	2.6	5.0	-	外反口縁。腰は折れる。へう彫りによる圓筒1条。見込みに口縁。口縁部輪花(花弁数不明)。軸は2.5GV6/1オリーブ灰色で光沢あり。部分的に貫入あり。外底に部分的に軸付き。素地は密で白色微粒子。色調は2.5V7/1灰白色。	15世紀前半 龍泉窯系
43	23	46	N-20 O-20		皿・高脚	青磁	皿	底	-	(1.5)	(6.3)	-	高台層付は外側から斜めに削り出す。見込みに露胎1本と印花文。軸は2.5GV7/1明緑灰色で貫入は無い。外底は基本露胎。素地は密で灰白色微粒子。色調は2.5V7/1灰白色。	14世紀後半 龍泉窯系
43	23	47	P-02		圓筒	青磁	皿	底	-	(1.9)	(5.6)	-	高台は疊付外側を三角形に切り出す。体部外面にへう彫りの差付文。軸は2.5V7/1明緑灰色で光沢あり。内外面にやや密か。貫入あり。高台疊付まで厚く染釉される。外底は乾の目軸刺ぎ。素地はやや密で、緑か白色細砂を含む。色調は2.5V8/1灰白色。	15世紀前半～半ば 龍泉窯系
43	23	48	N-01		圓筒	青磁	蓋	完形	3.3	1.8	1.5	-	小蓋の蓋。蓋の上と下方を分けて成形する。上方は菊花状で、型作りによる成形か。蓋上面は2.5GV7/1オリーブ灰色の釉で、底部の直下まで染釉。貫入は無い。内面は露胎。素地は密。色調は2.5V5/6弱赤褐色。	15世紀前半 龍泉窯系
43	23	49	P-04		圓筒	青磁	瓶	底	-	(2.5)	(6.2)	-	蓋蓋春形か。高台疊付は平坦。内底は縦線状跡が明瞭。軸は2.5GV6/1灰色で貫入は無い。外底は軸を極取る。素地は密で、白色・黒色微砂を少し含む。色調は2.5V7/1灰白色。	15世紀前半 龍泉窯系
43	23	50		上面	青磁	盤	口	-	(3.3)	-	-	-	口縁部は外側に屈折する。口縁は摺鉢状となる。軸は2.5GV7/1明緑灰色で光沢あり。内外面に細か。貫入あり。素地はやや密で、白色微粒子含む。色調は2.5V8/1灰白色。	14世紀後半～15世紀前半 龍泉窯系
43	23	51	N-01		圓筒	青磁	盤	口	(24.9)	(4.2)	-	-	口縁は摺鉢状を成す。内面体部にへう彫り印花文。軸は2.5GV7/1明緑灰色で光沢あり。貫入はやや密か。素地はやや密で白色微粒子。色調は2.5V8/1灰白色。	15世紀前半 龍泉窯系
43	23	52	O-01		圓筒	青磁	盤	口	(24.6)	(2.4)	-	-	口縁は上方で外縁する。口縁は摺鉢状にする。内面に丸彫り蓮華文。軸は2.5V5/3黄褐色で光沢あり。貫入・軸のちりあり。素地はやや密で、径0.1mm以下の長石・赤色粒・黒色粒・石英を含む。色調は2.5V7/4に近い褐色。	15世紀後半 龍泉窯系

(8) 白磁 (第45図、図版24、第18表)

132点が出土しており、うち5点を図化した。器種としては碗・皿が中心である。その他に、小片のため図化していないが、小杯(八角杯含む)や壺・瓶類などもみられる。帰属時期は、明代のもの清代のものがある。

分布をみると(第44図)、調査区北側(0-01・02グリッド、P-01グリッド)でやや出土量が多い。

白磁の時期・産地については、森達也氏(沖縄県立芸術大学)のご教示を得た。

〈碗〉(1・2・4・5)

出土した白磁の大半を占める。

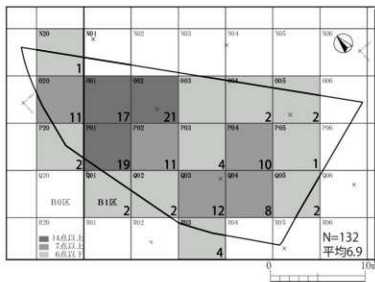
1・2は、腰部がやや丸みを帯び、口縁部が外反する器形である。軸葉は薄手で青みがかかる。14世紀後半～15世紀前半の「ピロースタイプⅢ類」に分類される。

4は、腰部から口縁に向かって直線的に開く器形である。高台はやや外側に開いており、外底の削り出しは浅い。内底は緩く窪む。軸の色調は青みが強い。見込みを輪状に軸刺ぎし、外面体部下半は露胎とする。いわゆる「今帰仁タイプ」であり、14世紀後半～15世紀初頭の福建省諸窯での所産である。

5は、「ハ」字状に開く高い高台を有し、腰部から口縁部まで直線的に立ち上がる器形である。高台疊付および見込みの軸を剥く。見込みには重ね焼き痕が残る。14世紀後半～15世紀後半の福建省・閩江流域の諸窯での所産と考えられる。

〈皿〉(3)

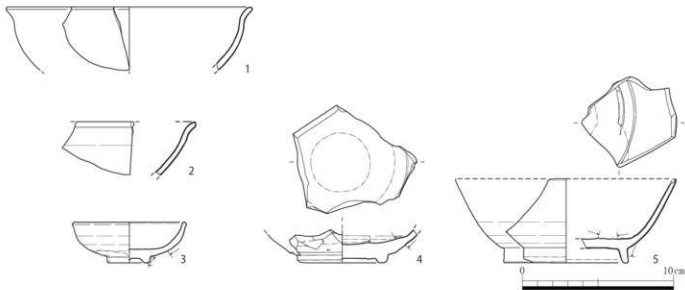
3は小皿である。口縁部は内湾して立ち上がる。疊付は平坦に切られる。産地は福建省・邵武窯で、14世紀末～15世紀前半の所産と考えられる。



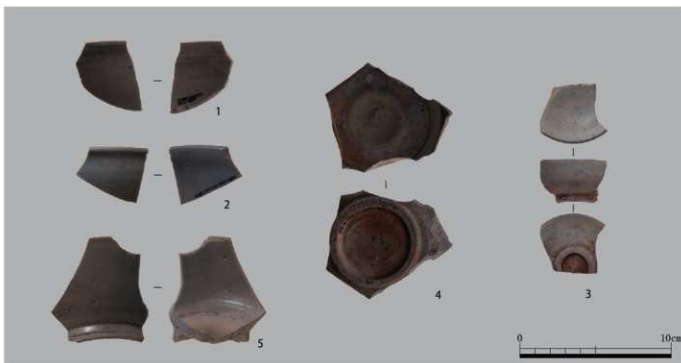
第44図 遺物分布図(Ⅲ層・白磁)

第18表 Ⅲ・Ⅳ層出土白磁 観察表

探検	写真	調査号	出土地			種別	器種	部位	法量 ()は測定値				観察事項	分類・時期・産地
			グランド	遺構	層位				口径	器高	底径	重量		
45	24	1	O-01		Ⅲ層	白磁	碗	口	(16.0)	(4.2)	-	-	外反口縁。軸は10V7/1灰白色で光沢あり。貫入は著しい。素地は密で白色微粒子。色調は2.5V7/1灰白色。	ビロースクⅢ 14世紀後半～15世紀前半
45	24	2	P-02		Ⅲ層	白磁	碗	口	-	(3.6)	-	-	外反口縁。軸は2.5GV7/1明オリーブ灰色で光沢あり。内外面に細い貫入が見られる。素地は密で細かな砂粒少量含む白色微粒子。色調は2.7.5V5/1灰白色。	ビロースクⅢ 14世紀後半～15世紀前半
45	24	3	O-01		Ⅲ層	白磁	皿	口～底	(7.5)	2.7	2.8	-	口縁は内湾気味に立ち上がる。高台器付は外面が斜めに舟形出す。軸は透明軸2.5V8/2灰白色で貫入は細かい。器付～裏底は露胎。素地は密。色調は10V8/2灰白色。	14世紀末～15世紀前半 福徳・徳武堂
45	24	4	N-20 O-20		Ⅲ・Ⅳ層	白磁	碗	底	-	(2.2)	5.0	-	高台低い。軸は2.5GV7/1明オリーブ灰色で光沢あり。外面高台～外底面露胎。内面蛇の目輪割ぎ。素地はやや密で灰白色微粒子。色調は2.5V8/1灰白色。	今細仁タイプ 14世紀後半～15世紀初葉
45	24	5	P-01		Ⅲ層	白磁	碗	口～底	-	(5.5)	(8.2)	-	高台は台形状を呈す。器付は露胎。見込みに蛇の目輪割ぎ。脇に隆線1条。軸は灰白色で気泡目立つ。素地は密で白色微粒子。色調は4.7.5V7/1灰白色。	14世紀後半～15世紀前半 福徳・關江流域



第45図 Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (16) 白磁



図版24 Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (17) 白磁

(9) その他の輸入陶磁器 (第46図、図版25、第19表)

ここでは青磁・白磁・染付以外の輸入陶磁器を一括する。

合計で169点が出土した。内訳は、褐釉陶器が94点と圧倒的である。この他に確認できたものとして、タイ産半練土器6点、天目、彩釉陶、高麗青磁の可能性のあるもの、などがある。褐釉陶器・半練土器以外は、小片のため図化に耐えなかった。

〈褐釉陶器〉(1・2)

壺・甕などの大型の器種の破片が大半を占められると思われるが、形状を判断し得る資料は多くない。

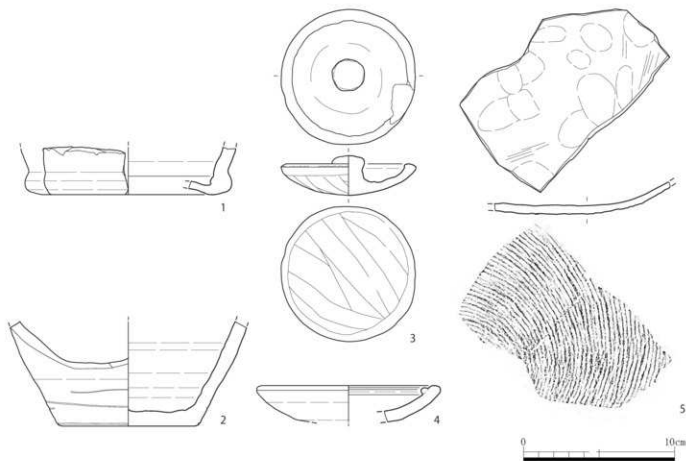
1・2は壺の底部である。1は上げ底で、底部上位にくびれを有する。轆轤痕跡が顕著である。15～16世紀代の福建省諸窯での所産である。2はベタ底の底部から直線的に立ち上がる器形で、比較的厚手である。体部下半には沈線を反時計回りに巡らす。素地は黄灰色を呈する。18世紀頃の所産であろう。

〈タイ産半練土器〉(3～5)

壺の蓋が4点、身が2点出土している。

3・4は蓋である。3は完形で、饅頭状の抓みを有する。口縁部は弱く折り返す。外面体部は斜位のヘラナデ調整とする。4は口縁より5mm程度下位に粘土帯を貼付し、かえりとしている。

5は壺(身)の底部である。外面は平行タタキ調整で、内面には無文の当て具痕が残る。



第46図 Ⅲ・Ⅳ層出土遺物(17) その他の輸入陶磁器

第19表 Ⅲ・Ⅳ層出土その他の輸入陶磁器 観察表

標記	写真 番号	図 番号	出土地		種別	器種	部位	法量 ()は推定値				観察事項	分類・時期・産地
			グランド 遺構	層位				口径	器高	底径	重量		
46	25	1	P-02		中国産 脱胎陶器	壺	底	-	(3.1)	(11.4)	-	脱胎陶器(中国産)。底部はくびれて逆「ハ」の字状に開く。上げ底。釉は外面は10VR4/2灰黄色色。内面露胎。素地は密で白色砂粒含む。色調は2.5Y6/1黄灰色。	15～16世紀 福建か
46	25	2	O-01		中国産 脱胎陶器	壺	底	-	(6.9)	8.7	-	底部より直線的に体部へ立ち上がる。釉は5Y5/2灰オリーブ色で、部分的に剥かる。内面露胎。素地はやや密。灰黄色で白色細粒子含む。色調は2.5Y6/1黄灰色。	18世紀代
46	25	3	O-20	■W7M	タイ産 半練土器	蓋	口～ 底	8.2	2.6	-	-	ほぼ完形。蓋み部分は鐘形を示す。口縁端部は折り返しにより作出。外面底部はナデ調整がなされる。素地はやや粗く、径1mm大の赤色粒を含む。色調は5YR7/6褐色。	
46	25	4	O-20	IV層ナ	タイ産 半練土器	蓋	口	(11.2)	(2.0)	-	-	口縁部にはいすりを添らす。外面ナデ調整。ナデに伴う擦痕が明確に認められる。色調は5Y7/4に5近い褐色。	
46	25	5	O-20	■W7M	タイ産 半練土器	壺	底	-	(2.1)	-	-	釉の底部と考えられ、外面は平行明き目。内面は指オサエ。素地は密で、～1mm大の赤色砂粒を含む。色調は7.5YR8/6浅黄褐色。	



図版 25 Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (18) その他の輸入陶磁器

(10) 土器・カムイヤキ (第48図、図版26、第20表)

土器はⅢ層で88点、Ⅳ層で4点出土した。Ⅲ層での分布をみると(第47図)、0-01グリッドで19点と約3分の1を占めるほかは、調査区全体で疎らに出土している。土器の内訳は、貝塚時代後期の土器が35点、グスク時代の土器が41点となる。カムイヤキはⅢ層で4点が出土した。

〈貝塚時代後期の土器〉(1~3)

口縁部および体部については、小片が多いため図化していないが、口唇上に刺突のある口縁部破片なども確認された。

底部は5点出土しており、いずれもくびれ平底土器であった。外面は指オサエないし指ナゲにより調整している。このうち、1~3の3点を図化した。底径は5cm前後を測る。底厚をみると、1.5cmを超える厚手のもの(1・2)と、1.2cm未満の薄手のもの(3)とがある。1は内面に横~斜位のハケメがみられる。2はくびれが特に明瞭で、鐙状を成す。3は底部外面にハケメの痕跡が僅かに残る。

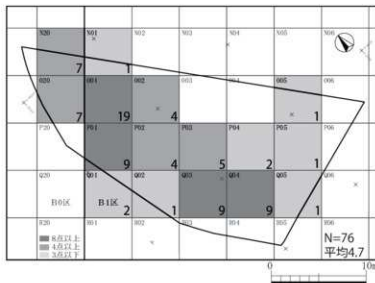
〈グスク土器〉(4・5)

グスク土器は、内外面とも橙色~黄褐色を呈し、~2mm大の白色砂粒を混和材とする。こちらも小片が多く、器形の復元が可能なものは少なかった。

口縁部2点を図化した。4は口縁部が内湾する。口縁部は指オサエ、体部は斜位のヘラナゲ調整とする。口端は平坦でない。5は頸部が屈曲し、口縁部は外反する。

〈カムイヤキ〉(6)

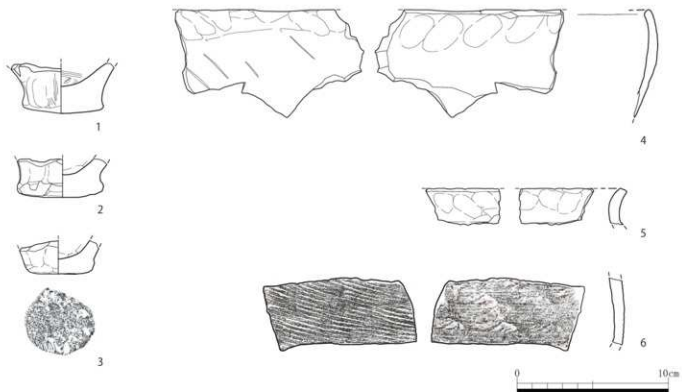
カムイヤキは、甕と思われる体部破片が4点出土しており、うち1点を図化した。6は輪積みみの単位で破損する。外面に斜位の平行線文の叩き痕、内面に円形の当て具痕が残るもので、新里亮人氏の分類のA群(新里2003)に該当する。還元焼成で、器面は暗褐色を呈する。



第47図 遺物分布図(Ⅲ層・土器)

第20表 Ⅲ・Ⅳ層出土土器・カムイヤキ 観察表

探取 番号	図 番号	出土地		種別	器種	部位	法量 (Nは推定値)			観察事項	分類・時期・産地	
		グリッド	遺構・層位				口径	器高	底径			重量
48	26	1	P-02	Ⅲ層	土器	底	-	(3.3)	(5.0)	-	くびれ平底。底部やや突出する。外面は指オサエ・指ナゲ。部分的に斜位のハケメ。内面に横~斜位のハケ。素地はやや粗い。色調は7.5YR6/6褐色。	くびれ平底系
48	26	2	P-03	Ⅲ層	土器	底	-	(2.5)	5.5	-	底厚が薄い(底厚1.5cm)。内外面指ナゲ・指オサエ。素地は砂質でやや粗い。色調は7.5YR5/4に近しい褐色。	くびれ平底系
48	26	3	P-01	Ⅲ層	土器	底	-	(2.2)	3.9	-	底厚が薄い(厚さ1.0cm)。底部のくびれは弱い。外面は指オサエ。内面は板状工具によるナゲ。素地は密で炭質。径1mm大の白色砂粒含む。色調は2.5Y5/3黄褐色。	くびれ平底系
48	26	4	N-01・ O-01	Ⅲ層	グスク土器	胴	口	-	(7.1)	-	口縁は内湾する。内外面口縁部は指オサエ。外面体部は斜位のヘラナゲ。素地はやや密で径2mm大の白色砂粒やや多く含む。色調は5YR7/6褐色。	
48	26	5	O-01	Ⅲ層	グスク土器	胴	口	-	(2.4)	-	外反口縁。口縁端部は平坦。内外面とも指オサエ後にナゲ。素地は密で径2mm大の白色砂粒多く含む。色調は2.5Y6/2既黄色。	
48	26	6	O-20・ P-20	Ⅲ層	カムイヤキ	甕 体	-	(4.5)	-	-	輪積みみの単位で破損。外面は平行線状の叩き。内面に円形の当て具痕残る。素地は密。色調は7.5YR4/4褐色。	A群



第48図 Ⅲ・Ⅳ層出土遺物(18) 土器・カムイヤキ



図版26 Ⅲ・Ⅳ層出土遺物(19) 土器・カムイヤキ

(11) 円盤状製品 (第49図、図版27、第22表)

Ⅲ層では、20点の円盤状製品が出土した。14点を図化したほか、図化しなかった6点も写真・観察表で提示する(図版・観察表中a～f)。

円盤の素材と規模は第21表の通りである。素材は、青磁2点(碗・底部)、沖繩産施釉陶器1点(碗の底部)、白磁または染付4点(碗の底部)、天目茶碗1点(底部)、褐釉陶器1点(体部)、沖繩産無釉陶器10点(類瓶の底部1点、壺または甕の体部9点)、土器または瓦1点となる。規模は、最大が長径7.6cm、最小が長径3～5cmの枠内に収まるも

第21表 Ⅲ層出土円盤状製品 組成表

素材	種別	部位	長径(cm)				合計
			～3	3～5	5～7	7～	
青磁	底部		1	1		2	
染付(または白磁)	底部		1	2	1	4	
沖繩産施釉陶器	底部				1	1	
沖繩産無釉陶器	底部		1			1	
	体部		9	1		10	
その他	底部		1			1	
	体部		1			1	
合計			1	13	4	20	

第22表 Ⅲ・Ⅳ層出土円盤状製品 観察表

図版番号	写真番号	出土地	種別	器種	部位	寸法			重量	観察事項 (調整・文様・釉薬・粘土・色調)	分類・時期・産地
						長さ	幅	厚さ			
49	27	1	O-02	Ⅲ層	円盤状製品	5.0	5.0	2.4	65.6	青磁・碗?の底部を転用。高台登付は露出。外面側から大ぶりの剥離。染付にも部分的に剥離あり。素地はやや密で、色調は2.5Y7/2灰白色。	
	27	a	Q-02	Ⅲ層	円盤状製品	5.7	(2.5)	2.6	28.0	青磁・碗の高台部を転用。外縁は露出。縁辺に大ぶりの剥離。高台にも部分的に剥離あり。	
49	27	2	P-05	Ⅲ層	円盤状製品	7.6	7.3	2.1	100.2	沖繩産施釉陶器の碗(底部)を転用。釉は灰緑(7.5YR5/2灰グリーン)色。剥離は破面のみ。縁から剥離が連続する。素地は密。色調は2.5Y7/2灰黄色。	
	27	c	O-01	Ⅲ層	円盤状製品	4.2	4.3	1.5	28.2	天目茶碗?の底部を転用。縁辺に大ぶりの剥離。	
49	27	3	O-02	Ⅲ層	円盤状製品	7.2	(4.3)	1.6	50.3	染付・壺の底部を転用。高台は比較的高い。外面側から大ぶりの剥離を行う。外底から高台にかけての付着が著重。蓋が割れた後に、打明として利用していた可能性がある。素地は普通。色調は10YR8/1灰白色。	
49	27	4	O-02	Ⅲ層	円盤状製品	5.0	(4.0)	1.4	34.0	染付・壺の底部を転用。着り出し高台。見込みは約の目録割ぎ。内面側から大ぶりの剥離を行う。釉は2.5PB6/1青灰色。にぶい光沢。素地はやや密。色調は2.5Y8/2灰白色。	
	27	b	P-05	Ⅲ層	円盤状製品	6.3	6.2	1.8	67.5	染付・碗(底部)を転用。内外面とも露出。見込み側からの大ぶりの剥離の後、外側からの剥離剥離。	
49	27	5	P-04	Ⅲ層	円盤状製品	5.0	2.7	1.3	15.0	染付・碗(底部)を転用。内面に草花文。呉須の着色は不良で緑灰色。澤州京赤。縁片に細かな剥離が連続する。大半は外面側からの打撃。釉は2.5Y8/1灰白色で光沢ない。素地はやや粗い。色調は10YR8/4浅黄褐色。	
49	27	6	P-05 + P-02	Ⅲ層 + Ⅳ層	円盤状製品	4.9	5.1	2.2	39.3	沖繩産無釉陶器の瓶箱?の底部～高台を利用。釉はマンガン・鉄(10YR3/2黒褐色)で、登付露出。素地は普通。色調は5YR6/4にぶい暗褐色。	
49	27	7	O-02	Ⅲ層	円盤状製品	3.0	2.5	0.6	6.7	褐釉陶器。壺(体部)を転用。剥離は大振り、各辺に直線的。素地はやや粗い。色調は1.5YR4/2灰赤色。	
	27	d	P-05	戦前に伴う石列	円盤状製品	4.5	4.6	1.6	31.2	沖繩産無釉陶器の体部を転用。縁辺に大振りな剥離をおこなう。	
	27	e	Q-04	Ⅲ層	円盤状製品	3.8	3.6	1.0	18.7	沖繩産無釉陶器の体部を転用。縁辺は大振りな剥離で、各辺とも直線的。	
49	27	8	Q-05	Ⅲ層	円盤状製品	4.4	4.1	1.2	16.5	沖繩産無釉陶器・壺?の体部を利用。内面側から剥離をおこなう。縁片の剥離は粗雑。素地は普通。色調は1.5YR5/3にぶい暗褐色。	
49	27	9	Q-03	Ⅲ層	円盤状製品	4.9	5.0	1.4	43.8	沖繩産無釉陶器・壺?の体部を転用。両縁の剥離はやや大振り。外面側からの打撃が明瞭。素地はやや密。色調は2.5YR4/4にぶい暗褐色。	
49	27	10	P-02	Ⅲ層	円盤状製品	3.8	3.1	1.0	12.7	沖繩産無釉陶器・壺?(体部)を転用。右縁を除いて縁片には細かな剥離が連続する。基本的に内面側からの打撃。素地は普通。色調は2.5YR5/2にぶい暗褐色。	
49	27	11	Q-02	Ⅲ層	円盤状製品	5.3	4.7	0.8	52.9	沖繩産無釉陶器・壺?の体部を転用。外面にははらからの刻みが見られる。内面側からの大ぶりな剥離の後に外面からの剥離。右縁縁以下部に整形される。素地は密。色調は2.5YR5/6明赤褐色。	
	27	f	O-02	Ⅲ層	円盤状製品	3.6	4.3	1.3	20.5	土器又は瓦の体部を転用し円盤状とする。縁辺の剥離は不明瞭。	
49	27	12	O-05	Ⅲ層	円盤状製品	4.4	4.1	1.0	18.3	沖繩産無釉陶器・壺(体部)を転用。剥離は大振り、平面形は方形に近い。素地は普通。色調は2.5YR4/4にぶい暗褐色。	
49	27	13	Q-04	Ⅲ層	円盤状製品	4.1	4.1	1.2	20.2	沖繩産無釉陶器・壺?の体部を転用。内面側から大ぶりの剥離をおこなった後、外面側から細かな剥離をおこなう。両縁を整形する。素地は普通。色調は5YR4/6赤褐色。	
49	27	14	P-05	Ⅲ層	円盤状製品	4.8	4.4	1.1	25.9	沖繩産無釉陶器・壺(体部)を転用。縁片に細かな剥離が連続する。素地は普通。色調は1.5YR4/2灰褐色。	

のが過半を占める。

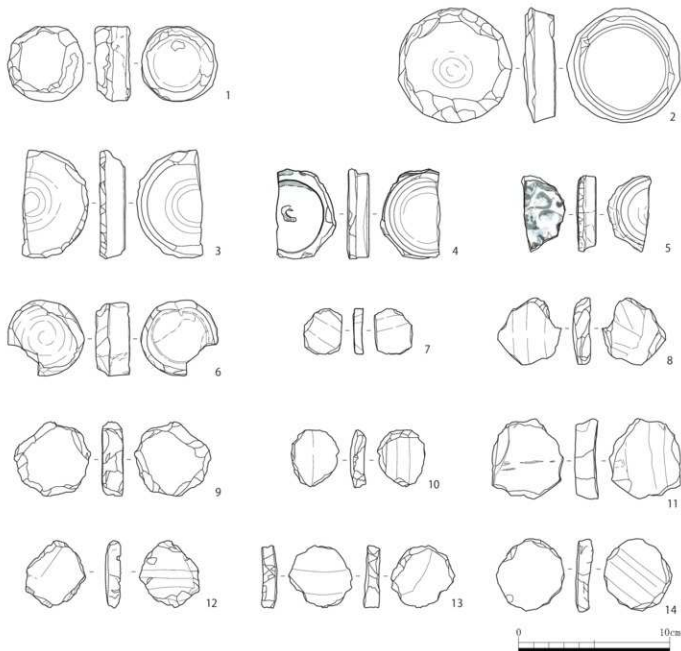
〈底部破片利用〉(1～6)

高台を有する底部破片を利用するもので、断面は平板である。いずれも、最初の工程として、外面側から剥離をおこなって腰部を除去し、縁辺を円形に整形している。2・3は更に連続して調整剥離を施している。高台はそのままでするものが大半であるが、1・aでは高台畳付も剥離の対象としている。

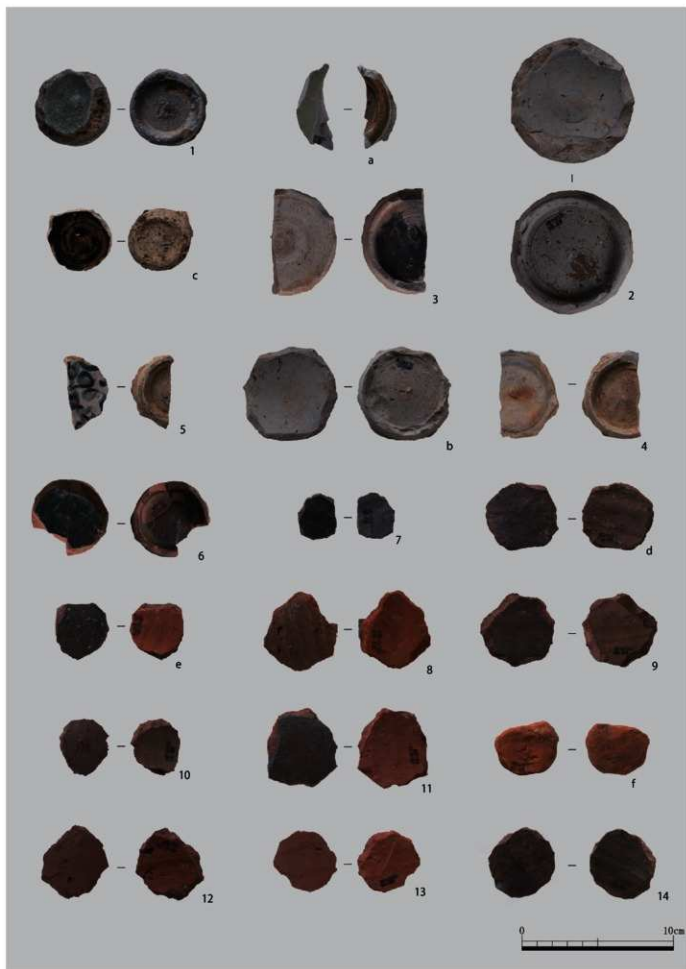
3は高台畳付から外底にかけて煤が広範囲に付着していることから、一時的に灯明皿などとしても利用されていた可能性がある。4・5は腰部を残す。6は、P-02グリッドⅢ層とP-05グリッド石列部分とで破片の接合を確認した。なお、素材としては、染付は清代の福建・広東系と思われる碗、沖縄産施釉陶器は灰釉碗を利用している。

〈体部破片利用〉(7～14)

壺・甕類の体部破片を利用するもので、断面形態はやや湾曲する。加工の度合いをみると、内外どちらか片面からの大振りな剥離に留まるもの(7～9)と、大振りな剥離の後に周縁に調整剥離を施すもの(10～14)とがみられる。後者には内外両面から調整剥離するものもある。このことから、第1工程として、使用する破片を大きく打ち割って方形の素材を作成する過程、続く工程として縁辺に調整剥離を施す過程、の大きく2工程が認められる。11には外面体部に数条の短い沈線が認められる。窯印であろうか。



第49図 Ⅲ・Ⅳ層出土遺物(19) 円盤状製品



圖版 27 III・IV層出土遺物(20) 陶盤狀製品

(12) 土製品・瓦 (第50図、図版28、第23表)

本項では、円盤状製品以外の各種土製品、瓦などを一括して報告する。

(土製品) (1・2)

1 は土鍾である。土師質の管状土鍾で、孔径1.2cm、器高5cm、重量6.4gを測る。棒に粘土を巻いて作出し、上下両側の端面を面取りする。体部は指オサエによる整形とする。本遺跡では有孔貝製品(貝鍾)が多量に出土するが、それらと重量を比較すると、本資料はハナマルヌキやリュウキュウマスオなど中型の貝鍾と同程度であり、これらとの代用であろうか。なお、土鍾の出土はこの1点のみである。

2 は陶製の歯ブラシの柄で、端部に径5mmの円孔を穿つ。断面形態は半円形を呈する。近代の所産であろう。

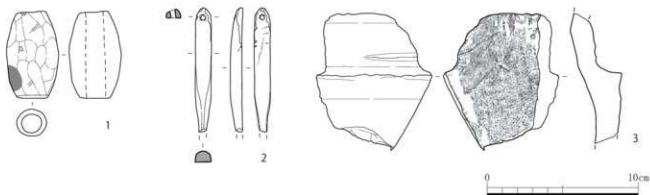
(瓦) (3)

瓦は28点出土した。灰色瓦が2点みられる他は、全て明朝系の赤色瓦である。軒瓦はみられない。

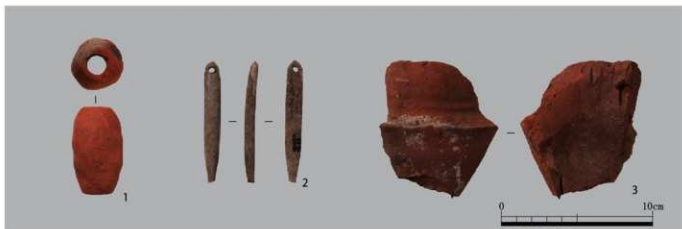
3 は丸瓦の狭端部の破片である。玉縁は、平面形態は台形を呈し、端部は面取りする。

第23表 Ⅲ・Ⅳ層出土土製品・瓦 観察表

標頭	写真	図 番号	出土地		種別	器種	部位	法量 (1は残存量)			観察事項	分類・時期・産地	
			ブリード	遺構・層位				長さ	幅	厚さ			重量
50	29	1	Q-03		土製品	土鍾		5.8	1.8	1.8	6.4	赤褐色の土鍾。棒状のものに粘土を巻いて作出。上・下端には切り出し時の痕跡が残る。外面は指オサエにより整形。孔は径1.2cm。素地は密。色調は2.5YR4/6赤褐色。	
50	28	2	O-02		土製品	歯ブラシ		(8.2)	1.1	0.8	9.0	陶製。裏面は平塗に加工され、断面形態は半円形を呈する。裏面には使用に伴う擦痕がみられる。上部に円孔1ヶ所あり。	
50	28	3	R-04		瓦	丸瓦		(6.5)	(7.0)	(2.9)	140.2	丸瓦の狭端部。凸面ナデ。凹面布目肌。狭端側は面取り。素地はやや密。色調は2.5YR5.6明赤褐色。	



第50図 Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (20) 土製品・瓦



図版28 Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (21) 土製品・瓦

(13) 煙管 (第51図、図版29、第24・25表)

煙管は、Ⅲ層で3点、遺構群で5点の計8点出土した。全て吸口と雁首を別に作る羅宇煙管で、内訳は雁首が5点、吸口が3点である(第24表)。各々の素材別でみると、雁首は、石製2点(砂岩)、陶製2点(沖縄産無釉陶器)、金属製1点(真鍮ないし銅)である。吸口は、金属製2点(銅製)、陶製1点(沖縄産施釉陶器)と多様である。基本的な構成は平安山原A遺跡をはじめ県内の近世遺跡とも概ね共通する。遺構群とⅢ層では大きく組成が異なり、前者においては雁首が多いという特徴がある。

本項では、Ⅲ層で出土したものを報告する。

〈雁首〉(1)

1は銅製の雁首で、火皿部分が欠損する。補強帯部分で径が細くなる。鍛造による作出であり、接合痕が認められる。なお、Ⅲ層では陶製・石製の煙管雁首は出土しなかった。

〈吸口〉(2・3)

2は銅製の吸口で、小口側から口付側へ向かって先細りとなる。鍛造による作出であり、溶接の継ぎ目が認められる。横断面形は円形を呈する。小口側にはわずかに羅宇の木質が残存する。材質・小口径とも概ね一致すること、ともにP-01グリッドで出土することから、1の雁首とはセット関係にある可能性がある。

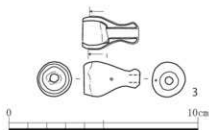
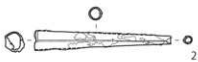
3は沖縄産施釉陶器製の吸口である。小口部分は面取りにより平坦となる。縦断面をみると、口付側は筒状で、中央部で段を有する。中央部には径1mm大の円孔を1ヶ所穿つ。内外面とも小口付近を除いて透明釉を掛ける。

第24表 煙管 組成表

層位	雁首					吸口		合計
	陶製	石製	金属製	小計	陶製	金属製	小計	
Ⅲ層				0			0	0
Ⅲ層			1	1	1	1	2	3
遺構群	2	2		4		1	1	5
合計	2	2	1	5	1	2	3	8

第25表 Ⅲ・Ⅳ層出土煙管 観察表

層位	写真	探番号	出土地			種別	器種	部位	法量 ()は推定値				観察事項	分類・時期・産地
			グリッド	遺構	層位				長さ	小口内径	口付内径	重量		
51	29	1	P-01		Ⅲ層	金属製品	煙管雁首		(5.4)	0.9	-	14.7	銅板の接合面(接線)わずかに欠る。	
51	29	2	P-01		Ⅲ層	金属製品	煙管吸口		7.3	0.8	0.2	7.9	羅宇側の管が潰れている。小口側には木質が残存する。	
51	29	3	O-02		Ⅲ層	沖縄産施釉陶器	煙管吸口		3.1	1.1	0.5	7.5	外面体部から内面に向かって1ヶ所穿孔あり。表面は白色微粒子で貫入は細かい。内面体部から小口外面は露胎。吸口側は内外面とも施釉。羅宇側は研磨し平坦にする。釉は2.5GY/1明オリーブ灰色。色調は7.5YR/1灰白色。	



第51図 Ⅲ・Ⅳ層出土遺物(21) 煙管



図版29 Ⅲ・Ⅳ層出土遺物(22) 煙管

(14) ガラス製品・金属製品・銭貨 (第52図、図版30・31、第26・27表)

〈ガラス製品〉(1)

ガラス製品が1点出土した。1はガラス製の勾玉で、穿孔部分は欠損する。器面は緑色を呈し、気泡が目立つ。また、螺旋状の筋がみられることから、巻きつけにより作出されたものと考えられる。

〈金属製品〉(2～7)

金属製品は29点が出土した。器種としては、簪・緑飾り金具・柱・釘などのほか、鍛造鉄板、鉄滓などもみられる。

2は青銅製の簪で、細身のジーファー(女性用の本簪)である。頭部は匙状、下端は四角錐状となる。首部から竿部にかけては直線的で、断面形態は方形を呈する。

3は銅製の緑飾り金具である。平面形態は弧状を呈する。内側には幅3mm・深さ5mm前後の溝を有し、下端には釘留めしたと思われる円孔が表裏両面から穿たれる。

4～6は鉄製品である。4は農具の柱である。5は釘で、断面形態は長方形を呈する。表面には木質の付着が顕著である。6も釘と思われるが、錆膨れが著しく、全形を窺うことはできない。

7は鍛造鉄板である。破断面をみると、鍛冶により鉄板を4枚に折り重ねている状況が認められる。

鉄滓は9点が出土した。写真のみの提示とする(図版30)。形状としては、碗形滓、厚みのある塊状の鉄滓などがみられる。碗形滓は、器体の厚さが1～2cmを呈する。埴場からの剥離面には、貝類と思われる白色の付着物が認められる。



図版30 III・IV層出土遺物(23) 鉄滓

〈銭貨〉(8～16)

銭貨は、III層で10枚、遺構群で4枚の計14枚が出土した(第26表)。銭種は、五銖銭・政和通宝・永楽通宝・寛永通宝?などのほか、無文銭が多く出土する。

8は、政和元(1111)年初鑄の「政和通宝」で、字体は真書である。

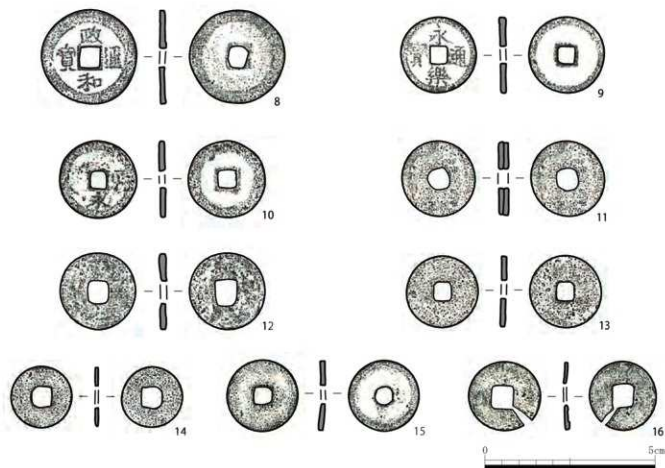
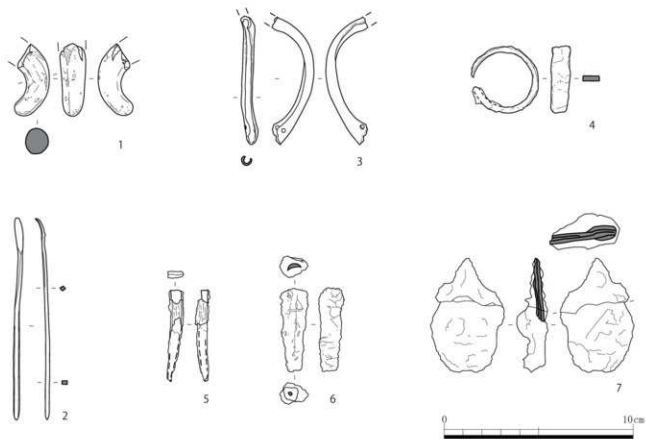
9は、永楽9(1411)年初鑄の「永楽通宝」である。銭文は鮮明である。土坑SK17の直上で出土した。

10は、銭文が錆膨れにより不鮮明であるが、「永」(下側)・「通」(右側)の時のみ判読できることから、「寛永通宝」と思われる。背文字はない。

11～16は無文銭である。直径は2.2～2.4cmの範囲に収まるものが大半であり、14のみ小型で直径2cm以下とする。いずれも断面形は縁辺まで平坦である。孔は、方孔を企図しているものと思われるが、孔の隅部の整形が粗雑で、15などでは円形に近いものとなっている。11は2枚が重なった状態で出土した。

第26表 銭貨 組成表

層位	五銖銭	政和通宝	永楽通宝	●水通●	判読不明	無文銭	近代硬貨
II層						1	1
III層		1	1	1		7	10
遺構群	1				1	2	4
合計	1	1	1	1	1	9	15



第 52 図 Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (22) ガラス製品・金属製品・銭貨



図版 31 III・IV層出土遺物 (24) ガラス製品・金属製品・銭貨

第27表 Ⅲ・Ⅳ層出土ガラス製品・金属製品・銭貨 観察表

種別	写真番号	遺物番号	出土地		種別	器種	部位	法量 (1/10残存量)			観察事項	分類・時期・産地	
			グリッド	遺構				長さ	巾	厚さ			重量
52	30	1	P-04	畦	皿層	ガラス製品	勾玉	14.3	6.0	0.9	13.8	表面は風化のため艶がなく不透明。端面は欠損し、3面にわたる割れがある。色調は暗緑灰色。	
52	30	2	O-20		皿層	金属製品	管	10.8	0.4	0.2	3.2	青銅製のグーファー。塞は叩いて四角形に仕上げている。端面は匙状となる。	
52	31	3	Q-04		皿層	金属製品	棒振り金具	6.7	2.4	0.6	7.4	銅製。折り曲げて折り取られている。釘穴が両面にある。	
52	31	4	O-02		皿層	金属製品	柱	3.5	3.5	0.9	7.7	鉄製。全体が錆びている。	
52	31	5	O-20		皿層	金属製品	釘	4.8	0.9	0.4	2.1	鉄製。横断面は長方形(0.7×0.3cm)を呈する。跡による木目が付着。	
52	31	6	Q-04		皿層	金属製品	鉄製品	4.4	1.4	1.4	9.8	鉄製。全体が錆びた。原形は不明。	
52	31	7	O-02		皿層	金属製品	鍍金板	6.0	3.9	1.9	32	製造途中と思われる。鍍金により鉄板を四重に折り曲げている。全体的に錆びかかっている。	
52	31	8	O-01		皿層	銭貨	政和通文	3.1	0.15	7.3	7.3	文字は萬壽。	
52	31	9	O-01		皿層	銭貨	永樂通文	2.5	0.18	4.1	4.1		
52	31	10	P-02		皿層	銭貨	○未通○	2.5	0.18	3.7	3.7	銭文は「永」「通」のみ判読可能。背文字なし。	
52	31	11	P-03		皿層	銭貨	無文銭	2.4	0.3	7.2	7.2	二枚が重なっている。	
52	31	12	P-03		皿層	銭貨	無文銭	2.5	2.2	4.5	4.5		
52	31	13	Q-04		皿層	銭貨	無文銭	2.35	0.2	3.2	3.2		
52	31	14	Q-05		皿層	銭貨	無文銭	1.95	0.2	1.2	1.2	方孔の整形は粗雑。	
52	31	15	O-20		皿層	銭貨	無文銭	2.3	0.1	2.9	2.9		
52	31	16	P-02		皿層	銭貨	無文銭	2.2	0.1	2.3	2.3	表から裏へ縁が曲がる。緑青の付着が著しい。	

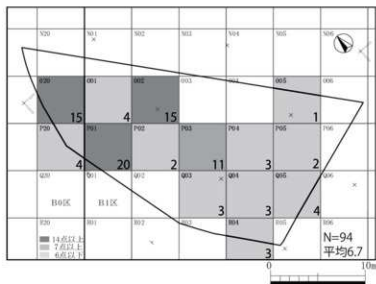
(15) 石器・石製品 (第54・55図、図版32・33、第29表)

本遺跡では、石器・石製品が合計で94点出土した。器種としては、磨製石斧、敲打器類(敲石・磨石・敲石兼磨石)、台石ないし凹石、砥石、石弾などがある。その多くは、本来は貝塚時代〜グスク時代・古琉球に属するべき遺物であり、後世の攪乱により移動が少なからずあったものと思われる。層序毎の出土点数は第28表の通りであり、Ⅲ・Ⅳ層と遺構群とで組成に大きな差異は見出せない。石材については、実測したものについては、大城逸朗氏(理学博士)に鑑定していただいたが、抽出対象外の資料については報告者の肉眼観察による。

本項では、Ⅲ・Ⅳ層で出土したものについて報告する。分布は第53図の通りである。調査区北側のO-20・O-02・P-01グリッドなどで比較的多く認められる。

(磨製石斧) (1～5)

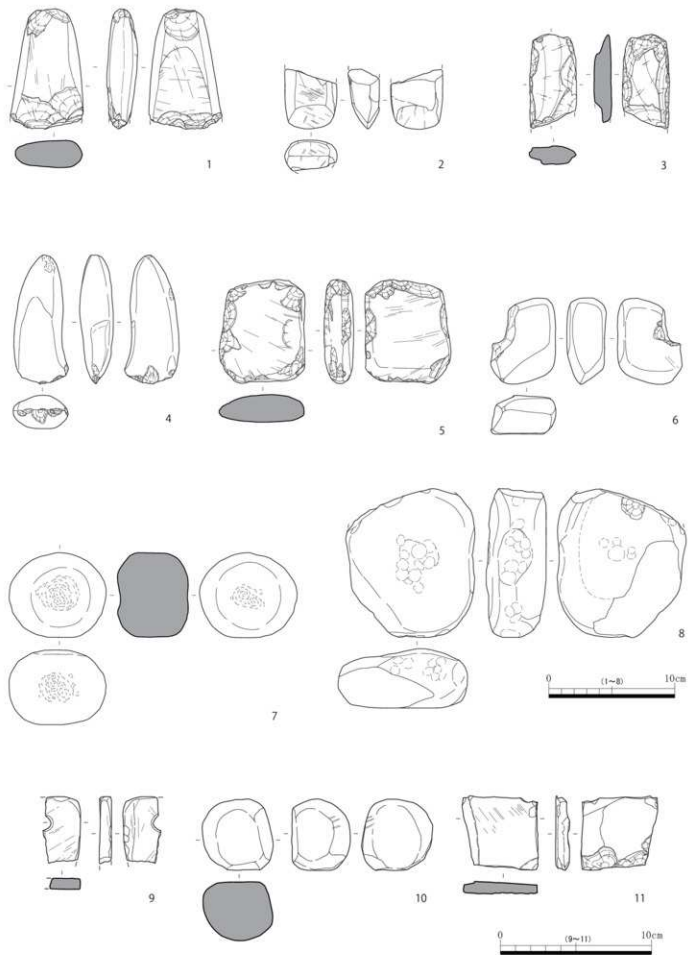
未成品・転用品を含めて14点が出土しており、うち5点を図化した(1～5)。平面形態を見ると、撥状のものと短冊状のものとがあり、後者が



第53図 遺物分布図(Ⅲ層・石器)

第28表 石器・石製品 組成表

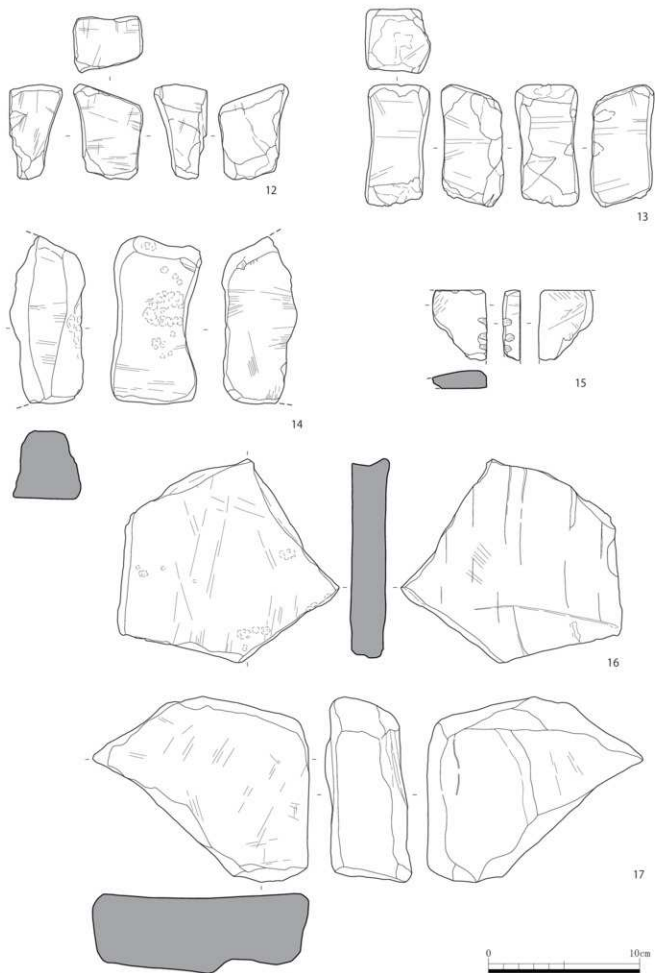
層序	磨製石斧	磨石	敲石	敲石兼磨石	台石	凹石	石皿	砥石	石弾	その他	合計	備考
Ⅱ層		2			1	4		1		4	12	
Ⅲ層	14	18	11	4	17	3	5	19	2	15	94	Ⅳ層含む
地山直上		1	1								2	
遺構群	2	2	5		4	2	8	2	3	13	39	
合計	16	23	17	4	22	9	13	22	5	32	147	



第54図 III・IV層出土遺物(23) 石器・石製品 1



圖版 32 III・IV層出土遺物 (25) 石器・石製品 1



第 55 圖 III・IV層出土遺物 (24) 石器・石製品 2



圖版 33 Ⅲ・Ⅳ層出土遺物(26) 石器・石製品 2

主体を占める。短冊形では体部の幅が3～4cmとなるものが多い。断面形態は長楕円形で、両側縁は調整剥離・敲打により調整している。点数には含まれていないが、板状の素材剥片の周縁に剥離を施した打製石器も2点ほど確認されており、こちらも石斧の目的剥片であると考えられる。石材としては、緑色岩・片岩・斑レイ岩・閃緑岩・砂岩などが認められる。

1は撥打で、基部頭端・側縁とも敲打の段階で終了している。研磨は正裏面の平坦部を対象とする。刃部は欠損しており、下縁側から刃部再生のための剥離が認められる。2は短冊状で、基部から刃部まで直線的な形態である。刃部の作出は明瞭で、表裏両面から研ぎ出している。側縁は敲打のみとする。3は短冊状の石斧の未成品である。黒色片岩の板状剥片を素材としており、器体中央には大きく素材面を残す。側縁には剥離痕が連続する。4は撥形で、下縁に刃部を作出する。体部の敲打・研磨はほとんど認められない。5は側縁や下縁に稜が作出されており、石斧の破損品を転用したものと考えられる。本来は短冊状の器形であったものと思われる。正裏面とも研磨が顕著である。縁辺には再加工によると思われる剥離痕が連続する。

〈敲打器類〉(6～8)

敲打は敲打の痕跡が目立つもの、磨石は研磨痕のあるものを対象とした。敲打が11点、磨石が18点、敲打兼磨石が3点、敲打器類で合計32点出土した。石材としては砂岩・花崗岩・斑レイ岩などが使用されており、このうち砂岩の比率が高い。素材の産状は、大きさが拳大～10cm大、平面形態が円～楕円形の自然礫が中心である。

6は磨石で、器面全体に研磨の痕跡が認められる。下縁は正裏面からV字状に研ぎ出されていることから、磨製石斧の破損品を転用したものである可能性がある。7は敲打で、平面形態が円形を呈する砂岩の自然礫を利用する。正裏面の中央部が度重なる敲打により窪むほか、下面にも敲打痕が認められる。8は敲打兼磨石で、楕円形の自然礫を

第29表 Ⅲ・Ⅳ層出土石器・石製品 観察表

調査年度	発掘位置	出土地	種別	器種	部位	法量	長さ	幅	厚さ	重量	観察事項	分類・時期・産地
54	32	1	O-02	圓形	石器	磨製石斧	長9.7	0.5.8	厚2.2	213.0	緑色岩を素材とする。平面形は楕円形。断面は短楕円を呈する。刃部は欠損する。基部は剥離・敲打により作出され、研磨されない。体部は研磨が明瞭。	
54	32	2	O-02	圓形	石器	磨製石斧	長14.8	0.4.2	厚2.5	76.0	斑レイ岩を素材とする。平面形は短冊状。体部側面には敲打の痕跡が良く残る。刃部は両方より、研ぎ出しが明瞭。刃先には刃こぼれが多く見られる。	
54	32	3	O-02	圓形	石器	磨製石斧	長17.6	0.4.3	厚1.5	67.8	磨製石斧の未成品。平面形は短冊状を呈す。黒色片岩の板状の剥片を素材とし、器体中央に素材面を大きく残す。縁辺には敲打による調整の痕跡が顕著。	
54	32	4	P-03	畦	石器	磨製石斧	長10.4	0.4.4	厚2.1	182.1	斑レイ岩を素材とする。上部と側面に叩いた痕跡が若干あり、敲打としても使用した可能性が示唆される。	
54	32	5	P-02	圓形	石器	磨石(石斧転用)	長8.3	0.6.9	厚2.2	263.2	磨製石斧を転用したもの。閃緑岩を素材とする。形状は長方形で、側面には敲打の痕跡がよく残る。磨石としての利用後は、側面の敲打痕を含めてよく研磨される。	
54	32	6	O-02	圓形	石器	磨石	長6.9	0.5.2	厚3.1	160.5	砂岩を素材とする。全面に研磨の痕跡が残る。	
54	32	7	Q-05	圓形	石器	敲打	長6.8	0.7.8	厚0.0	685.5	砂岩を素材とする。正裏面中央と下面に敲打痕。特に正裏面中央の窪みが大型で深い。下面には部分的に被熱痕跡がある。	
54	32	8	Q-05	楕円上面	石器	敲打兼磨石	長11.9	0.10.1	厚4.8	889.0	砂岩を素材とする。正裏面中央・右側面中央・下面に敲打痕。いずれも3～5cmの範囲。叩みはいずれも不明瞭。正裏面中央に研磨痕が認められる。	
54	32	9	O-02	圓形	石製品	サンゴ加工品	長14.4	0.2(2.5)	厚0.8	8.8	サンゴ塊を板状にしたもの。部分的に磨痕がみられる。中央部に穿孔あり。両側からの穿孔で、孔径は約1センチ。	
54	32	10	P-01	圓形	石製品	サンゴ加工品	長4.7	0.4.2	厚3.9	60.1	石弾か、サンゴ殻を素材とする。下方は欠損している。	
54	32	11	P-01	圓形	石製品	砥石	長4.9	0.5.1	厚0.8	35.0	粘板岩を素材とする。	
55	33	12	P-01	圓形	石製品	砥石	長6.3	0.4.6	厚3.5	96.5	閃緑岩を素材とする。形状は角柱状を呈する。下方及び背面には欠損。使用面は5面(正・裏・左・右・上)。正面前左右の使用面が顕著で、大きく湾曲する。	
55	33	13	P-01	圓形	石製品	砥石	長8.1	0.4.3	厚4.2	200.2	風化した凝灰岩を素材とする。形態は角柱状を呈する。5面(正・裏・左・右・上)に使用面。特に正面及び左右両側面が顕著で中央が湾曲する。数頁の石材を使用しており、万物の痕跡も確認される。	
55	33	14	P-03 Q-03	圓形	石製品	砥石	長11.1	0.4(4.2)	厚4.3	360.1	凝灰岩を素材とする。左半分破損。側面には比較的直線的で、本来は方形～長方形であったと考えられる。正裏面・右側面に使用痕が認められる。特に裏面には使用痕が顕著で大きく湾曲する。上面には敲打痕が多く残る。	
55	33	15	P-03	圓形	石製品	砥石	長14.2	0.3(3.6)	厚1.2	24.3	粘板岩の薄く板状の素材剥片を利用する。正・裏面と左側面に使用痕。右側面に3ヶ所の研磨痕が見られる。	
55	33	16	O-01	圓形	石製品	砥石	長13.2	0.14.4	厚2.3	688	砂岩の扁平な素材を利用する。正・裏面に使用痕が認められる。裏面には角状の痕跡が顕著である。被熱の痕跡もみられる。	
55	33	17	P-04	圓形	石製品	砥石	長12.3	0.14.3	厚5.3	1025	凝灰岩を素材とする大型の。裏きとして使用したもので、正面での使用痕が明瞭。側面・裏面には使用痕はほとんどない。	

利用する。正裏両面中央および左側面・下面中央に敲打痕が、面の側方に研磨が認められる。

〔サンゴ製品〕(9・10)

サンゴ塊を利用したものが4点出土した。石弾や板状の製品として存在する。9は5mm厚の薄い板状としたサンゴ塊を素材としており、上縁・左側縁も研磨する。中央には径1cm大の円孔を穿つ。10は上面を削る。

〔砥石〕(11～17)

19点が出土しており、うち7点を図化した(11～17)。形状・規模は、手持ち砥と思われるもの(12～15)と、置き砥と思われる10cmを超える大型のもの(16～17)とがある。石材としては、流紋岩・粘板岩・砂岩・片状砂岩などが認められる。前者の形態では粘板岩や流紋岩などの比較的目の細かい石材が多く使用されるようである。

12・13は、本来は1辺4～5cm、高さ10cm前後の角柱型を呈していたものと考えられる。ともに流紋岩を素材とする。使用面は4～5面とほぼ全面を砥面としており、使用による湾曲が顕著である。14は上下面に自然面を残す。正・裏面および右側面を砥面とするほか、右側面には敲打痕も認められる。15は小型で、平面形態が長方形、厚さ5mm程度の板状のもので、粘板岩を素材とする。正裏両面・右側面に擦痕がみられるほか、正面左側縁には3ヶ所の刻みが認められるが、その意図は不明である。16は筋状の痕跡が残る。17は細粒砂岩製の大型の砥石で、正面にのみ擦痕が残る。中央が使用に伴い大きく凹む。

11は、粘板岩を素材とする。正面は丁寧に研磨される。小型で板状を呈しており、砥石と認識したが、既報告で「石板」とされているものに当たる可能性もある。

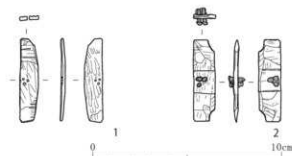
(16) 骨製品 (第56図、図版34、第30表)

骨製品が2点出土した。

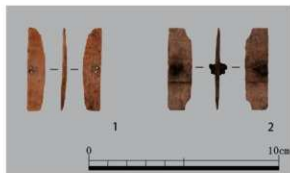
1・2は裁縫用の笥で、ウシまたはウマの四肢骨を素材とする。平面形態は隅丸長方形を呈する。正裏両面および左右の側縁を面取り・研磨して縦4cm・厚さ2mm前後の板状素材を作出し、その上下両端を刃部のように研ぎ出す。中央に径1mm大の釘穴を3ヶ所に施す。1は正裏両面とも研磨が顕著で、裏面には海绵体の痕跡のみ残る。上下を各2条の紐で結束して利用していたと思われ、紐ずれの痕跡が認められる。2は端部を円形に削る。正面側から3ヶ所の釘を打設している。錆跡が著しいが、長さ9mm・頭部径2mmの円頭の釘を使用している。

第30表 Ⅲ・Ⅳ層出土骨製品 観察表

標号	写真	図版	出土地		種別	器種	部位	法量 ()は推定値			観察事項	分類・時期・産地		
			グリッド	遺構				層位	長さ	幅			厚さ	重量
56	34	1	P-01		Ⅲ層	骨製品	笥		4.4	1.0	0.2	1.0	平面長方形の板状にした骨片より作出。器面全体を研磨しており、縦・側位の擦痕が残る。上下の紐を紐で縛って使っていたと思われる。紐ずれの痕跡をはじめ横位の擦痕が顕著である。中央に3ヶ所の釘穴あり。径1mm大で、いずれも正面側からの穿孔。	
56	34	2	P-01		Ⅲ層	骨製品	笥		4.3	1.2	0.2	1.7	平面長方形で正面の右上・右下隅のみ円形に切り出す。扁平で厚さは均一。製作時の面取りの痕跡と、器面全体の研磨による擦痕が顕著である。中央に釘3本を打設する。釘は錆跡が著しいが長さ9mm・巾2mmで円形の頭部を有する。	



第56図 Ⅲ・Ⅳ層出土遺物(25) 骨製品



図版34 Ⅲ・Ⅳ層出土遺物(27) 骨製品

(17) 貝製品 (第59～61図、図版35～38、第31～34表)

Ⅲ・Ⅳ層では、貝製品が262点出土した。器種としては、有孔貝製品(貝鍾:タカラガイ・二枚貝)、貝玉、巻貝製品などがある。

有孔貝製品(貝鍾)

タカラガイや二枚貝の背面に穿孔した有孔貝製品で、漁網用の貝鍾と考えられている。Ⅲ層を中心に194点出土した。タカラガイが152点、二枚貝が42点である。

タカラガイのうち4点には、打ち欠いた背面の殻断面に部分的だが磨痕が認められた。貝鍾以外の機能も考えられるが、便宜的に有孔貝製品(貝鍾)に含めた。タカラガイの死殻で、背面が欠損した有孔タカラガイ類似品が20点あったが、これらは風化で貝殻の体層部が薄くなったために背面が非人為的に破損した可能性が高く、確実に人工品と判断する根拠がないので有孔貝製品(貝鍾)の数には含めていない。

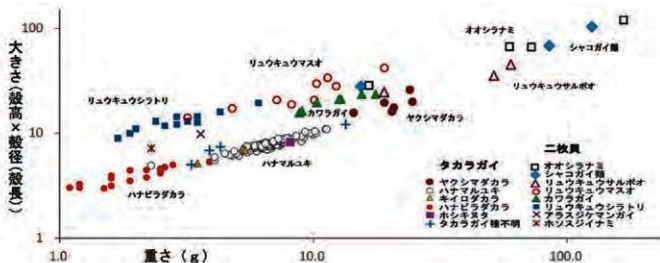
第31表は、本遺跡から出土した有孔貝製品の貝種別・層位別の集計表である。タカラガイは、ハナマルユキが圧倒的に多く、ついでハナビラダカラがつづき、ヤクシマダカラ、キヨロダカラ、ホシキヌタが数点ある。二枚貝は、リュウキュウシラトリ、リュウキュウマスオ、カワラガイが比較的多いが、特定貝種に偏ることがない。層位で見ると、各層でタカラガイが最も多く出土している。二枚貝は、Ⅱ層での出土はなく、Ⅲ層と遺構群での出土数が多い。

第33表に、有孔貝製品(貝鍾)の殻高、殻径(二枚貝は殻長)の計測値一覧表を掲げた(付録CDにも収録)。第57図は、有孔貝製品の重さと大きさ指数(殻高×殻径(殻長))の対数表グラフの散布図である。重さで小型・中型・大型に分類できるが、貝種と重さが概ね対応していることがわかる。タカラガイでは、小型の主体はハナビラダカラ、中型の主体はハナマルユキとヤクシマダカラである。二枚貝では、小型はリュウキュウシラトリが主体で、中型はリュウキュウマスオ、カワラガイが多い。大型はオオシラナミ、シャコガイ類、リュウキュウサルボオが占める。有孔貝製品(貝鍾)の重さは、漁網の種類と関係していると考えられる。言い換えれば、漁網の種類ごとに鍾として利用する貝種を選別したと推定できる。

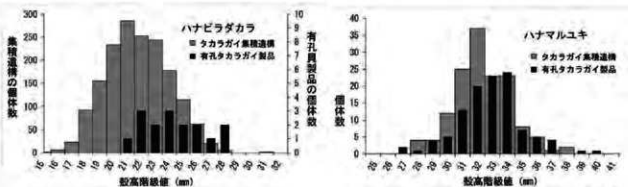
本遺跡では、Ⅲ層中で検出されたタカラガイ集積遺構から多数のハナビラダカラとハナマルユキが回収されている。第三章第4節で述べるように、この遺構のタカラガイは、殻高ヒストグラムからみて個体選別することなく一

第31表 有孔貝製品(貝鍾)の貝種・層位別集計表

	タカラガイ					種不明	二枚貝							小計	総計			
	ハナマルユキ	ハナビラダカラ	ヤクシマダカラ	キヨロダカラ	ホシキヌタ		リュウキュウシラトリ	リュウキュウマスオ	カワラガイ	リュウキュウサルボオ	オオシラナミ	シャコガイ類	リュウキュウシラトリ			リュウキュウマスオ	リュウキュウサルボオ	ハナマルユキ
I層	3					3												4
Ⅱ層	4	4				9												9
Ⅲ層	74	8	5	2	1	93	4	5	5	2	2	1			1	1	1	22
遺構																		115
地山上面	1	1				2		1										3
遺構群	39	5	1			45	8	3	2	1	2	1	1					63
合計	121	18	6	2	1	152	12	9	7	3	4	2	2	1	1	1	1	42



第57図 有孔貝製品(貝鍾)の重さ×大きさ指数の分布(対数表グラフ)



第 58 図 有孔タカラガイ製品（貝鍾）とタカラガイ集積遺構の殻高ヒストグラムの比較

括採取されたと考えられる。この遺構と有孔タカラガイ製品（貝鍾）のハナピラダカラとハナマルユキについて、殻高ヒストグラムを比較したのが第 32 表と第 58 図である。ハナピラダカラでは、有孔製品が集積遺構より大きくなる傾向が顕著に認められる。ハナマルユキでも顕著とはいえないが有孔製品が大きくなる傾向がある。タカラガイ集積遺構のハナピラダカラやハナマルユキが北谷沿岸における自然状態を反映しているとすれば、両種の有孔製品は大振りの貝を選別して利用したことになる。

以下、図版・写真に掲載したⅢ層出土の貝鍾について記述する。

〈タカラガイ有孔製品〉(1～11)

素材は、1～3 がハナマルユキ、4 はキイロダカラ、5 はホシキヌタ、6～9 はハナピラダカラ、10・11 はヤクシマダカラなどを素材としており、特にハナマルユキの比率が約 8 割と高い。死殻の使用は認められない。いずれも、背面を割り取り、扁平な貝素材の作出を企図する点、タカラガイの殻軸を（一部欠損はあるものの）残す点は共通する。背面の加工の状況を見ると、周縁が研磨され平坦になるもの（第 76 図 35 など）、平坦ではあるが敲打の単位が確認できるもの（1～3、7・8 など）、平坦化が進んでおらず、敲打の単位が明瞭に確認できるもの（4～6、9 など）がある。殻軸を残しながらも平坦な素材を作出するため、数回に亘る敲打をおこなっていたことが窺える。ハナマルユキ・ハナピラダカラとも各過程の資料が得られており、貝鍾製作はほぼ同一の技術であったと言える。8 は腹面側に磯金状の工具によると思われる刺突の痕跡が残る。中～大型のタカラガイの利用は低調で、加工も敲打の段階までとなっている。

なお、漁網鍾の可能性のあるものとしては、タカラガイでは背面を平坦にする加工の認められるもの、二枚貝では人為的な穿孔のあるものを製品として扱った。小堀原遺跡〔北谷町教育委員会 2012〕や伊礼原 D 遺跡〔北谷町教育委員会 2013〕など他の町内遺跡の調査で提示されてきた条件に比べると広く取っていることを留意しておく。

〈二枚貝有孔製品〉(12～20)

素材としては、大型貝のオオシラナミ (12)、リュウキュウサルボオ (13・14)、ナガジャコ (15)、中型貝のリュウキュウマオ (16)、カワラガイ (17・18)、小型貝のアラスジゲマンガイ (19)、ホソスジナミ (20) などを利用して、左右の選好は特に見出せない。

シャコガイ類を素材とするものでは、殻頂部の直下に長径 1～2 cm の粗孔を穿つ。外面には数回に亘る打割の痕跡がよく残る。15 は孔の周辺を除いて貝表面全体の磨耗が著しい。

リュウキュウサルボオでは、最も器壁の薄い殻頂部に穿孔をおこなう。何度も使用されたとみられ、特に孔の周囲では器面の磨耗が顕著である。

第 32 表 タカラガイ集積遺構と有孔タカラガイ製品の殻高階級値

ハナピラダカラ			ハナマルユキ		
デ イ タ 区 間 mm	頻度		デ イ タ 区 間 mm	頻度	
	タ カ ラ 集 積 遺 構	有 孔 貝 製 品		タ カ ラ 集 積 遺 構	有 孔 貝 製 品
15.00～	1	0	25.00～	0	0
16.00～	6	0	26.00～	0	0
17.00～	23	0	27.00～	0	2
18.00～	92	0	28.00～	4	1
19.00～	155	0	29.00～	4	4
20.00～	233	0	30.00～	12	5
21.00～	285	1	31.00～	25	13
22.00～	253	3	32.00～	37	20
23.00～	244	2	33.00～	23	23
24.00～	178	3	34.00～	23	24
25.00～	115	2	35.00～	8	7
26.00～	62	2	36.00～	5	5
27.00～	21	1	37.00～	1	4
28.00～	5	2	38.00～	2	0
29.00～	0	0	39.00～	0	1
30.00～	0	0	40.00～	0	1
31.00～	1	0	41.00～	0	0
32.00～	0	0			

第33表-1 有孔貝製品(貝鏝)の計測値一覧(1)

種別 No.	袋 No.	グリッド	層位	タカラガイ(152点)	殻高 (mm)	殻径 (mm)	重量 (g)	備考
1	49	P-02	I層	ハナマルユキ	30.45	23.34	6.3	覆乱
2	118	R-03	I層	ハナマルユキ	35.85	26.64	10.0	畦, 覆乱
3	770	P-02・Q-02	I層	ハナマルユキ	—	—	2.7	トレンチ, 覆乱 / 欠損
4	24	Q-03	II層	ハナマルユキ	31.93	22.50	5.4	
5	23	P-02	II層	ハナマルユキ	33.26	25.44	8.2	
6	24	Q-03	II層	ハナマルユキ	33.26	24.55	7.8	
7	182	Q-05	II層	ハナマルユキ	33.45	25.00	8.0	下層
8	24	Q-03	II層	ハナヒラダカラ	20.51	14.38	1.5	研磨又は切断痕あり / 第19図43
9	24	Q-03	II層	ハナヒラダカラ	23.44	17.70	2.5	
10	24	Q-03	II層	ハナヒラダカラ	25.29	17.42	1.9	研磨又は切断痕あり / 第19図42
11	119	P-03	II層	ハナヒラダカラ	27.62	19.32	3.9	畦
12	112	Q-04	III層	ハナマルユキ	26.70	20.60	4.1	
13	87	P-04	III層	ハナマルユキ	26.88	—	2.5	欠損
14	123	P-02	III層	ハナマルユキ	26.92	18.06	2.3	畦
15	63	P-01	III層	ハナマルユキ	27.58	21.22	4.1	
16	55	P-03	III層	ハナマルユキ	28.75	21.25	4.8	
17	168	Q-05	III層	ハナマルユキ	28.81	22.72	5.5	下層
18	96	N-01	III層	ハナマルユキ	28.92	21.25	4.7	
19	55	P-04	III層	ハナマルユキ	29.54	23.49	6.6	
20	57	Q-03	III層	ハナマルユキ	29.55	21.55	5.0	
21	61	O-05	III層	ハナマルユキ	29.60	22.64	6.0	
22	76	P-02	III層	ハナマルユキ	29.97	22.23	4.9	
23	148	Q-03	III層	ハナマルユキ	30.32	22.25	5.6	
24	65	P-05	III層	ハナマルユキ	30.62	23.41	6.6	第59図1
25	86	P-01	III層	ハナマルユキ	30.64	23.14	6.8	
26	91	O-01	III層	ハナマルユキ	30.66	23.92	6.4	
27	31	Q-03	III層	ハナマルユキ	30.70	22.06	5.3	
28	82	O-01	III層	ハナマルユキ	30.82	24.14	5.5	
29	36	Q-03	III層	ハナマルユキ	30.84	22.42	5.4	
30	55	P-03	III層	ハナマルユキ	30.85	23.03	6.4	
31	75	P-01	III層	ハナマルユキ	30.90	24.12	6.3	
32	72	O-20	III層	ハナマルユキ	30.93	23.45	6.2	
33	46	Q-04	III層	ハナマルユキ	31.01	21.97	5.4	
34	86	P-01	III層	ハナマルユキ	31.05	23.56	6.3	
35	47	Q-05	III層	ハナマルユキ	31.19	23.54	6.3	
36	31	Q-03	III層	ハナマルユキ	31.25	23.78	6.8	
37	83	O-02	III層	ハナマルユキ	31.36	23.47	6.6	
38	91	O-01	III層	ハナマルユキ	31.55	22.81	6.4	
39	56	P-05	III層	ハナマルユキ	31.58	24.54	7.2	
40	128	O-20	III層	ハナマルユキ	31.62	23.50	6.6	
41	62	P-20	III層	ハナマルユキ	31.65	23.63	6.5	
42	158	Q-04	III層	ハナマルユキ	31.68	23.62	5.9	
43	128	O-20	III層	ハナマルユキ	31.80	22.76	5.9	
44	35	P-04	III層	ハナマルユキ	31.82	23.75	6.2	
45	81	O-20・P-20	III層	ハナマルユキ	32.11	24.47	7.2	
46	81	O-20・P-20	III層	ハナマルユキ	32.11	24.47	7.2	
47	31	Q-03	III層	ハナマルユキ	32.18	23.38	6.6	
48	54	P-02	III層	ハナマルユキ	32.18	24.21	6.6	
49	96	N-01	III層	ハナマルユキ	32.21	24.29	7.0	第59図3
50	96	N-01	III層	ハナマルユキ	32.23	23.87	7.0	
51	140	O-02	III層	ハナマルユキ	32.24	23.92	6.4	
52	81	O-20・P-20	III層	ハナマルユキ	32.40	24.34	7.5	
53	74	P-20	III層	ハナマルユキ	32.43	23.49	6.0	
54	92	O-02	III層	ハナマルユキ	32.46	24.35	6.5	
55	81	O-20・P-20	III層	ハナマルユキ	32.50	24.49	7.0	
56	92	O-02	III層	ハナマルユキ	32.71	23.76	6.9	
57	42	P-03	III層	ハナマルユキ	32.72	24.09	6.7	
58	123	P-02	III層	ハナマルユキ	32.76	23.71	6.3	畦
59	91	O-01	III層	ハナマルユキ	32.82	25.23	9.0	
60	28	P-02	III層	ハナマルユキ	32.86	23.68	6.6	
61	91	O-01	III層	ハナマルユキ	32.86	—	3.6	欠損
62	157	Q-03	III層	ハナマルユキ	32.91	24.51	7.0	
63	92	O-02	III層	ハナマルユキ	32.95	—	3.6	欠損
64	122	P-01	III層	ハナマルユキ	33.07	24.20	6.9	上層
65	159	P-05	III層	ハナマルユキ	33.08	23.48	7.3	地山直上
66	91	O-01	III層	ハナマルユキ	33.16	24.55	7.0	

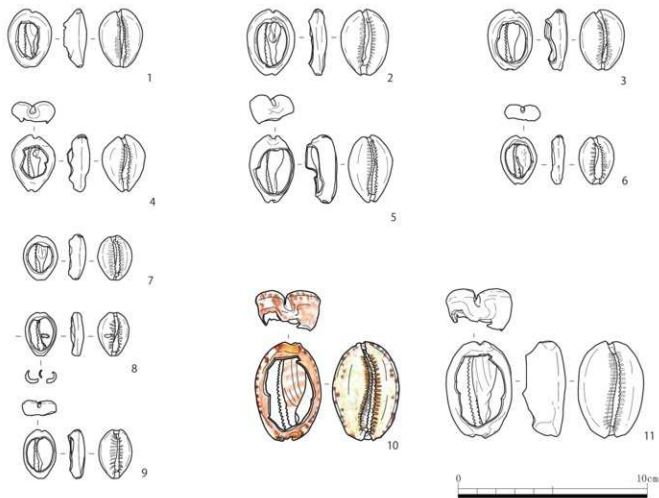
第33表-2 有孔貝製品(貝鍾)の計測値一覧(2)

種別 No.	袋 No.	グリッド	層位	タカラガイ(152点)	最高 (mm)	殻径 (mm)	重量 (g)	備考
67	149	Q-04	Ⅲ層	ハナマルユキ	33.16	24.21	6.5	
68	62	P-20	Ⅲ層	ハナマルユキ	33.34	25.83	8.3	
69	145	P-04	Ⅲ層	ハナマルユキ	33.35	23.16	6.2	
70	91	O-01	Ⅲ層	ハナマルユキ	33.40	25.00	7.3	
71	140	O-02	Ⅲ層	ハナマルユキ	33.49	25.22	7.3	
72	75	P-01	Ⅲ層	ハナマルユキ	33.59	—	3.6	欠損
73	81	O-20・P-20	Ⅲ層	ハナマルユキ	33.83	25.70	7.7	
74	86	P-01	Ⅲ層	ハナマルユキ	33.92	24.91	7.8	
75	140	O-02	Ⅲ層	ハナマルユキ	33.95	24.11	8.0	
76	86	P-01	Ⅲ層	ハナマルユキ	33.97	24.53	7.1	
77	86	P-01	Ⅲ層	ハナマルユキ	34.05	25.13	7.9	
78	57	Q-03	Ⅲ層	ハナマルユキ	34.13	24.58	7.4	
79	110	P-05	Ⅲ層	ハナマルユキ	34.39	26.12	9.2	
80	143	P-02	Ⅲ層	ハナマルユキ	34.66	25.53	8.0	第59図2
81	74	P-20	Ⅲ層	ハナマルユキ	35.24	26.14	9.0	
82	63	P-01	Ⅲ層	ハナマルユキ	35.25	26.42	8.6	
83	92	O-02	Ⅲ層	ハナマルユキ	36.42	27.21	10.3	
84	48	R-04	Ⅲ層	ハナマルユキ	36.56	27.76	9.3	
85	83	O-02	Ⅲ層	ハナマルユキ	36.60	27.97	10.2	
86	86	P-01	Ⅲ層	ハナビラダカラ	21.84	15.01	1.2	
87	34	P-03	Ⅲ層	ハナビラダカラ	21.93	13.82	1.2	
88	144	P-03	Ⅲ層	ハナビラダカラ	22.58	16.46	1.6	研磨又は切断痕あり / 第59図8
89	148	Q-03	Ⅲ層	ハナビラダカラ	23.56	18.21	2.5	第59図7
90	28	P-02	Ⅲ層	ハナビラダカラ	24.98	18.17	2.5	第59図6
91	82	O-01	Ⅲ層	ハナビラダカラ	25.31	17.61	2.2	第59図9
92	92	O-02	Ⅲ層	ハナビラダカラ	25.44	18.70	2.6	
93	91	O-01	Ⅲ層	ハナビラダカラ	27.20	18.33	2.8	
94	35	P-04	Ⅲ層	ヤクシマダカラ	50.05	32.02	20.4	
95	48	R-04	Ⅲ層	ヤクシマダカラ	51.30	34.08	20.8	第59図10
96	39	R-03	Ⅲ層	ヤクシマダカラ	55.50	35.53	24.6	
97	56	P-05	Ⅲ層	ヤクシマダカラ	56.61	34.44	19.1	第59図11
98	155	P-05	Ⅲ層	ヤクシマダカラ	64.62	39.78	24.0	下層
99	53	P-04	Ⅲ層	キイロダカラ	26.91	19.25	3.5	
100	76	P-02	Ⅲ層	キイロダカラ	30.33	22.78	5.4	第59図4
101	96	N-01	Ⅲ層	ホシキスタ	35.47	23.34	8.1	第59図5
102	240	Q-04・Q-05	遺構群	ハナビラダカラ	21.41	14.05	1.1	P136・P137
103	702	P-02	遺構群	ハナビラダカラ	22.15	17.15	2.2	P356
104	474	P-05	遺構群	ハナビラダカラ	22.25	15.67	1.9	SK5、2層 / 第76図36
105	560	P-04	遺構群	ハナビラダカラ	23.26	15.80	1.6	P7
106	596	P-01	遺構群	ハナビラダカラ	24.87	15.83	1.6	P226、1層 / 第76図37
107	823	Q-04	遺構群	ハナマルユキ	28.26	21.51	5.1	SK37・SD1
108	829	Q-04	遺構群	ハナマルユキ	29.67	21.41	4.5	P632、1層
109	170	Q-03	遺構群	ハナマルユキ	29.84	—	4.0	SK4 / 欠損
110	552	P-05	遺構群	ハナマルユキ	30.40	22.42	5.7	SK8、2層
111	887	O-01	遺構群	ハナマルユキ	30.73	22.81	5.4	SK17
112	758	P-03	遺構群	ハナマルユキ	30.90	23.53	5.9	P583、1層 / 研磨又は切断痕あり / 第76図33
113	192	P-05	遺構群	ハナマルユキ	31.00	—	3.3	P68・P69 / 欠損
114	191	P-05	遺構群	ハナマルユキ	31.26	24.30	7.4	P64
115	879	P-20	遺構群	ハナマルユキ	31.52	23.76	6.9	P651
116	873	Q-04	遺構群	ハナマルユキ	31.59	—	2.5	P634、1層 / 欠損
117	777	P-05	遺構群	ハナマルユキ	31.62	22.96	6.9	P613
118	296	O-02	遺構群	ハナマルユキ	31.72	23.71	6.6	P273・P274
119	732	Q-03	遺構群	ハナマルユキ	31.78	—	5.2	SK27 / 欠損
120	336	O-02	遺構群	ハナマルユキ	31.96	24.29	6.8	P274
121	699	P-02	遺構群	ハナマルユキ	32.04	23.45	6.5	P336
122	478	Q-03	遺構群	ハナマルユキ	32.34	23.13	5.8	P2
123	170	Q-03	遺構群	ハナマルユキ	32.41	25.51	7.0	SK5
124	594	P-04	遺構群	ハナマルユキ	32.54	24.65	7.7	P174
125	796	P-01	遺構群	ハナマルユキ	32.69	24.30	7.0	P304、2層
126	731	Q-03	遺構群	ハナマルユキ	32.74	24.45	7.4	SK26、2層
127	292	N-01・O-01	遺構群	ハナマルユキ	33.01	24.96	7.6	P261
128	596	P-01	遺構群	ハナマルユキ	33.17	—	3.9	P226 / 欠損
129	887	O-01	遺構群	ハナマルユキ	33.24	24.27	7.7	SK17
130	798	P-01	遺構群	ハナマルユキ	33.25	25.47	8.2	P305、2層
131	351	O-02	遺構群	ハナマルユキ	33.44	24.53	7.4	P348・P349・P350

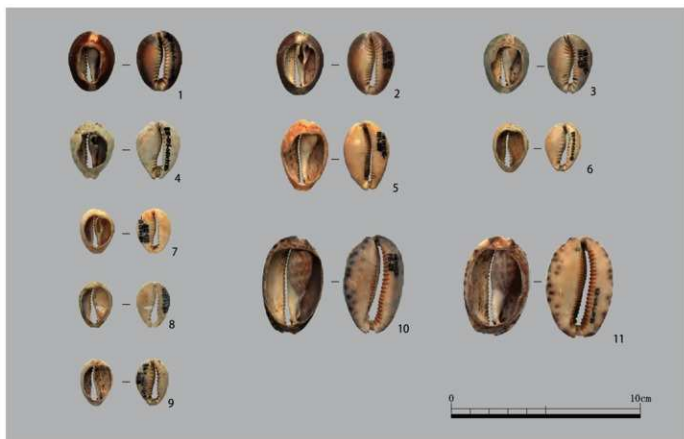
第33表-3 有孔貝製品(貝鍾)の計測値一覧(3)

種別 No.	袋 No.	グリッド	層位	タカラガイ(152点)	最高 (mm)	殻径 (mm)	重量 (g)	備考
132	887	O-01	遺構群	ハナマルユキ	33.54	24.27	7.9	SK17
133	482	P-04	遺構群	ハナマルユキ	33.57	24.22	7.7	P32
134	823	Q-04	遺構群	ハナマルユキ	33.63	25.32	7.4	SK37・SD1 / 第76図35
135	351	O-02	遺構群	ハナマルユキ	33.65	26.30	7.9	P348・P349・P350 / 第76図34
136	365	O-02	遺構群	ハナマルユキ	33.91	25.46	7.6	P289, 1層
137	526	O-20	遺構群	ハナマルユキ	34.04	25.23	8.3	P399
138	587	Q-05	遺構群	ハナマルユキ	34.06	24.21	7.2	P115, 1層
139	700	P-02	遺構群	ハナマルユキ	34.07	25.70	7.3	P340
140	589	P-05	遺構群	ハナマルユキ	35.16	24.17	7.7	P138, 1層
141	181	P-05	遺構群	ハナマルユキ	35.31	25.07	7.9	SK5
142	894	O-01	遺構群	ハナマルユキ	35.50	—	5.8	SK20, 2層/ 欠損
143	270	O-01	遺構群	ハナマルユキ	36.43	27.00	9.8	P212
144	422	P-01	遺構群	ハナマルユキ	38.94	27.77	11.3	P441・P442・P443・P444, 半截
145	431	P-02	遺構群	ハナマルユキ	39.01	27.74	11.2	P462・P463・P464・P465・P466, 半截
146	617	O-20	遺構群	ヤクシマダカラ	50.69	30.74	14.4	P424
147	746	Q-05	地山上面	ハナビラダカラ	20.96	14.96	1.6	
148	389	N-01・N-02	地山上面	ハナマルユキ	31.36	23.38	6.5	IV層?
149	23	P-02	Ⅱ層	不明	43.08	27.98	13.4	第19図41
150	90	O-20	Ⅲ層	不明	35.75	20.89	4.3	
151	81	O-20・P-20	Ⅲ層	不明	31.37	22.01	3.9	
152	228	Q-04	Ⅲ層	不明	26.53	18.99	3.3	下層

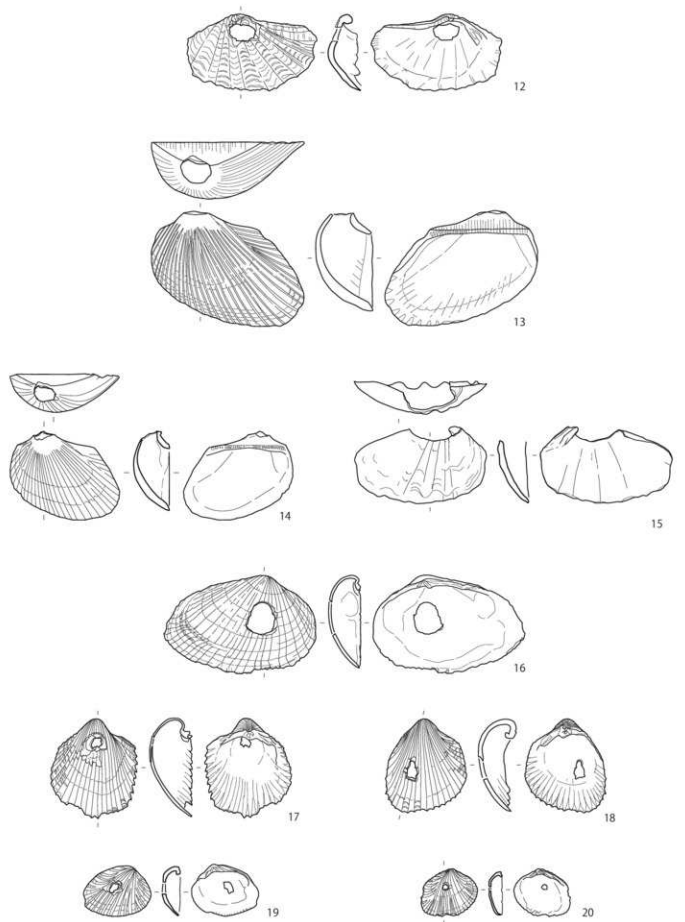
種別 No.	袋 No.	グリッド	層位	二枚貝(42点)	最高 (mm)	殻長 (mm)	重量 (g)	備考
1	839	P-02・Q-02	I層	ヒメジャコ	68.46	99.24	84.8	トレンチ、覆乱
2	87	P-04	Ⅲ層	リュウキュウシラトリ	26.88	32.95	1.7	
3	157	Q-03	Ⅲ層	リュウキュウシラトリ	31.96	40.31	3.2	
4	157	Q-03	Ⅲ層	リュウキュウシラトリ	32.27	44.37	3.5	
5	66	Q-01	Ⅲ層	リュウキュウシラトリ	38.89	49.64	6.1	
6	151	N-20・O-20	Ⅲ層	リュウキュウマスオ	29.00	47.92	3.2	Ⅲ・IV層/ 残存高
7	75	P-01	Ⅲ層	リュウキュウマスオ	36.30	51.58	8.2	
8	96	N-01	Ⅲ層	リュウキュウマスオ	37.11	55.58	7.2	
9	156	Q-02	Ⅲ層	リュウキュウマスオ	39.82	51.55	10.1	
10	106	O-20	Ⅲ層	リュウキュウマスオ	51.86	80.35	19.1	第60図16
11	36	Q-03	Ⅲ層	カララガイ	40.48	38.74	8.8	残存高
12	91	O-01	Ⅲ層	カララガイ	49.14	42.98	12.8	第60図18
13	152	O-02	Ⅲ層	カララガイ	49.38	42.50	12.6	
14	74	P-20	Ⅲ層	カララガイ	51.57	46.02	17.6	
15	151	N-20・O-20	Ⅲ層	カララガイ	52.13	45.12	15.5	Ⅲ・IV層/ 第60図17
16	123	P-02	Ⅲ層	オオシラナミ(シラナミ)	41.31	68.54	16.6	Ⅲ・IV層/ 第60図12
17	91	P-01	Ⅲ層	オオシラナミ(シラナミ)	61.00	108.25	59.6	残存高
18	57	Q-03	Ⅲ層	リュウキュウサルボオ	40.01	61.24	19.0	第60図14
19	133	P-01	Ⅲ層	リュウキュウサルボオ	52.83	85.34	60.0	第60図13
20	158	Q-04	Ⅲ層	リュウキュウザルガイ	43.01	42.86	6.3	
21	140	O-02	Ⅲ層	ナガシヤコ(トガリシラナミ)	40.27	69.36	15.4	残存高/ 第60図15
22	104	Q-04	Ⅲ層	ホソズシヤナミ	24.29	29.65	2.3	第60図20
23	151	N-20・O-20	Ⅲ層	アラスシケマンガイ	27.85	35.01	3.6	Ⅲ・IV層/ 第60図19
24	389	N-01・N-02	地山上面	リュウキュウマスオ	46.46	72.32	11.4	IV層?
25	387	O-02	遺構群	リュウキュウシラトリ	27.43	35.92	1.9	P382・P383・P384・SK16, 半截
26	777	P-05	遺構群	リュウキュウシラトリ	27.87	42.04	2.6	P613/ 残存高
27	327	P-02	遺構群	リュウキュウシラトリ	28.83	37.68	2.0	SX1
28	796	P-01	遺構群	リュウキュウシラトリ	30.58	42.20	2.4	P304, 2層
29	181	P-05	遺構群	リュウキュウシラトリ	31.60	38.05	2.9	SK5
30	327	P-02	遺構群	リュウキュウシラトリ	32.60	38.28	3.5	SX1 / 第76図41
31	475	P-05	遺構群	リュウキュウシラトリ	33.44	42.55	2.9	SK5, 3層/ 残存高
32	315	P-01	遺構群	リュウキュウシラトリ	34.01	46.38	4.3	P300・P301・P302・P303, 半截
33	778	P-04	遺構群	リュウキュウマスオ	33.70	50.70	4.8	P619
34	706	P-20	遺構群	リュウキュウマスオ	45.00	65.82	10.3	P454
35	331	P-01	遺構群	リュウキュウマスオ	45.10	61.81	12.3	P235
36	472	O-05	遺構群	カララガイ	41.34	39.42	9.0	SK1 / 残存高・残存長
37	466	Q-03	遺構群	カララガイ	48.43	40.43	10.3	P486
38	402	O-02	遺構群	オオシラナミ(シラナミ)	61.17	106.62	72.4	P350, 1層 / 第76図39
39	402	O-02	遺構群	オオシラナミ(シラナミ)	79.02	150.76	167.4	P350, 1層・2層
40	845	O-01	遺構群	リュウキュウサルボオ	47.43	74.24	51.5	P210
41	475	P-05	遺構群	リュウキュウサルガイ	43.29	41.22	7.1	SK5 / 残存高 / 第76図40
42	906	Q-04・R-04	遺構群	ヒメジャコ	91.45	113.01	125.5	P50・SK7 / 第76図38



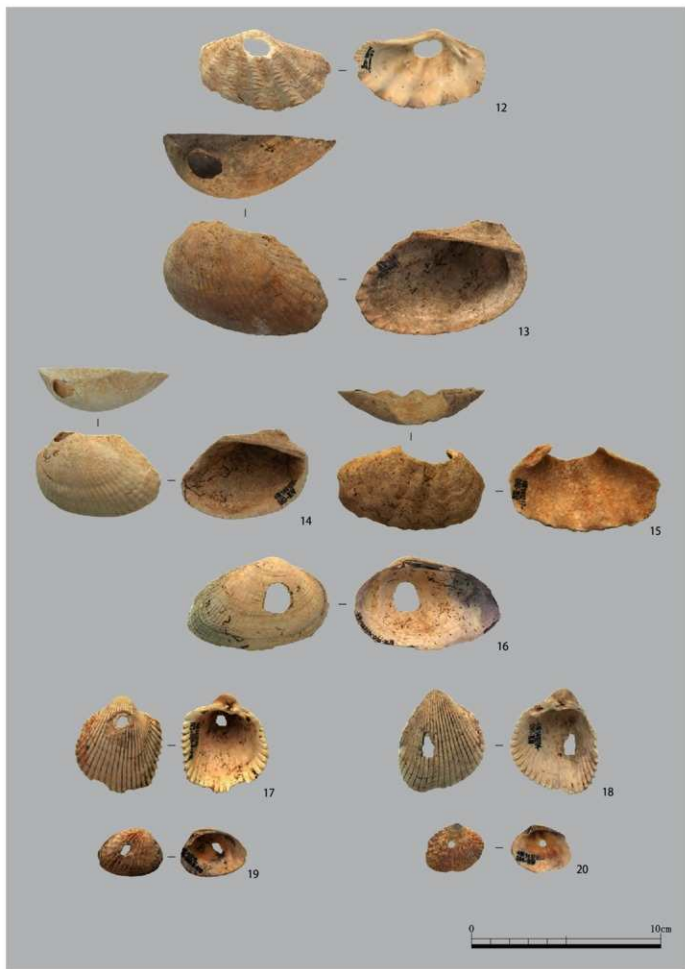
第 59 図 III・IV層出土遺物 (26) 貝製品 1



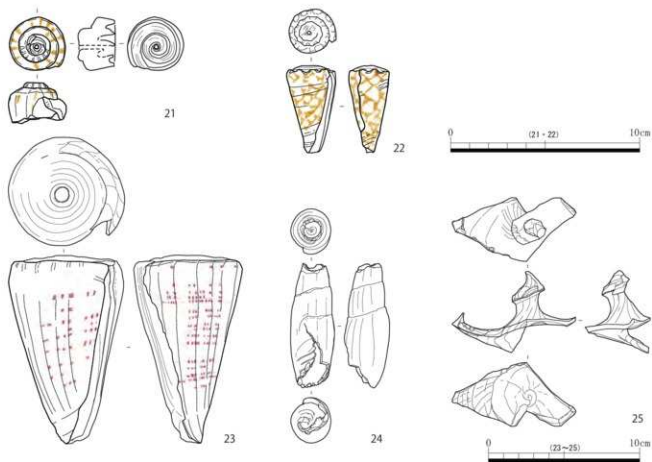
図版 35 III・IV層出土遺物 (28) 貝製品 1



第 60 圖 Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (27) 貝製品 2



圖版 36 III・IV層出土遺物 (29) 貝製品 2



第 61 圖 Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (28) 貝製品 3



圖版 37 Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (30) 貝製品 3

リュウキュウマスオでは、背面中央に穿孔する。孔の周囲には剥離痕が連続する。腹縁には、使用に伴うと思われる微細剥離痕が認められる。

カワラガイでは、孔の位置が殻頂付近のもの(17)と、中央のもの(18)があり、穿孔場所に規則性は見出し難い。いずれも、孔の規模は長径0.5~1mmで上述の二枚貝ほどには大きくないが、孔の周囲には剥離痕が連続する。また、17では孔の下部に、18は殻頂付近に磨耗が認められる。

ホソズジナミ・アラスジケマンガイは、貝殻そのものも穿孔も小さく、貝錘として使用されたかは疑問も残る。

その他の貝製品

〈貝玉〉(21)

貝玉は、本遺跡では製作途中のものも含めて19点の出土がある。それらを見ると、大きく以下の工程が窺われる。

- ①手回しの独楽に似た形状で、体層を除去するが殻軸を残す段階のもの。
- ②体層と殻軸を除去し、円柱状の素材を作出する。殻口側の体層の螺旋構造が残るもの(第61図21)。
- ③殻口側を敲打・研磨により平坦にしたもの(第76図32)。

21は貝玉の未成品である。マガキガイを素材とする。螺旋部を切断し、上方からの敲打により孔を貫通させる。殻口側では体層を除去するとともに殻軸を切断しており、円柱状の貝玉素材の作出が企図されている。切断面への調整は及んでおらず、体層内部の螺旋構造がよく残る。

〈巻貝製品〉(22~25)

22・23は螺旋部を横断に切断するもので、22はナンヨウクロミナシを、23はクロフモドキを素材とする。22は切断面を丁寧に研磨しており、成長線が鮮明に観察できる。23は殻頂部に径1cmの粗孔を穿つ。表面は磨耗が著しく、研磨の痕跡は不明瞭である。両者とも、螺旋部の穿孔をおこなうものの、体層に何らの人為的な痕跡もみられず、貝玉としての加工の意図は認められない。

24はチョウセンソデを素材とする。殻口・殻頂の双方を、敲打により割り取っている。破面は特に整形されない。同様な製品は周辺の遺跡でも報告事例はあるものの、性格は不明である。

25はサラサバテイラを素材とする。体層の大部分を除去し、底面と殻軸のみとしたものである。体層を螺鈿細工などに素材として利用するために取り去った痕跡であろう。

穿孔貝(図版38)

有孔製品とはしていないものの、巻貝の体層に穿孔をおこなうものが少なからず認められた。穿孔の目的が貝製品の製作か貝肉の獲得か判断がつかないため、可能性のあるものとして写真のみの提示とした(図版38)。同様の事例は、キャンプ桑江地区でも伊礼原D遺跡[北谷町教育委員会2013]などで報告されている。

Aはナガイトマキボラを素材とするもので、体層の中央に粗孔を穿つ。従来「ホラガイ有孔製品」とされてきたものか。

B・Cはオニツノガイである。穿孔のあるオニツノガイは17点あり、穿孔の状態により、以下の3段階に分類が可能である。穿孔の目的は不明であるが、オニツノガイの突起の部分を選んで穿孔の対象とするという共通点が見られる。穿孔場所は、貝の中心より殻口側が中心であるが、殻頂付近をも打ち割っているものも少なくない。

○体層に穿孔するもの。1点。

○体層に穿孔するとともに、殻口からも打ち欠きをおこなうもの。19点(図版中Cなど)。

○体層の穿孔と殻口からの打ち欠きが繋がったもの。14点(図版中Bなど)。

Dはチョウセンソ



図版38 穿孔のある貝

ザエである。穿孔の位置は背面と腹面とがあり、それぞれ穿孔の規模・進行状況により細分が可能である。

E はホシキヌタを利用したもので、径 1mm 大の工具による穿孔が認められる。

F はヤクシマダカラを利用する。背面の水管溝側に、打ち割りによる穿孔をおこなう。同様な箇所への穿孔の事例は、古墓などで見つかっている〔宜野座村立博物館 2006〕。タカラガイ類は、先述のように貝錘の素材としての利用も目立つものだが、この穿孔が貝錘成形のための打ち欠きか、捕獲の際の傷かは不明である。

本遺跡出土の貝製品は、グスク時代・古琉球ないし近世に帰属するものが大半である。製品の組成は、貝錘などの実用品と、貝玉などの小型の装飾品が中心となる。貝種としては、貝塚時代後期以前に多用されるイモガイ・ヤコウガイなどの大型巻貝、メンガイなどの二枚貝は殆ど利用されない。

第 34 表 Ⅲ・Ⅳ層出土貝製品 観察表

種類	写真 番号	図 番号	出土地		種別	器種	部位	法量 () は残存量			観察事項	分類・時期・産地	
			ブワッド	遺構				長さ	巾	厚さ			重量
59	35	1	P-05		貝製品	タカラガイ 有孔製品		径0.3	径0.2	高1.2	6.6	ハナマルユキを利用。背面から数回打割し穿孔する。打割後の整形は殆ど成されず發輪は残存する。色残りは良好。	
59	35	2	P-02		貝製品	タカラガイ 有孔製品		径0.3	径0.2	高1.0	8.0	ハナマルユキを利用。色残りは良好。發輪残存。背面に数回の敲打により穿孔する。穿孔後孔の周囲を平滑にする。	
59	35	3	N-01		貝製品	タカラガイ 有孔製品		径0.3	径0.4	高1.2	7.0	ハナマルユキを利用。背面から数回打割を行っている。打割後の整形は殆ど成されていない。發輪は残存する。	
59	35	4	P-02		貝製品	タカラガイ 有孔製品		径0.3	径0.3	高1.2	5.4	キノビダカラを使用。背面を削り取っている。打割後の整形は不明瞭。發輪は残存する。	
59	35	5	N-01		貝製品	タカラガイ 有孔製品		径0.3	径0.3	高1.7	8.1	ホシキヌタを使用。背面を削り取っている。光沢あり、敲打痕が連続する。色残り良好。	
59	35	6	P-02		貝製品	タカラガイ 有孔製品		径0.2	径0.1	高0.7	2.5	ハナビタダカラを使用。背面を削り取っている。研磨は見られない。發輪残存せず。色残り不良。	
59	35	7	Q-03		貝製品	タカラガイ 有孔製品		径0.2	径0.1	高0.8	2.5	ハナビタダカラを使用。背面を削り取り角縁の一部を研磨している。	
59	35	8	P-03		貝製品	タカラガイ 有孔製品		径0.2	径0.1	高0.7	1.6	ハナビタダカラを使用。背面削りとれている。	
59	35	9	O-01		貝製品	タカラガイ 有孔製品		径0.2	径0.1	高0.9	2.2	ハナビタダカラを使用。背面から敲打により穿孔を行う。	
59	35	10	R-04		貝製品	タカラガイ 有孔製品		径0.3	径0.3	高2.2	20.8	ヤクシマダカラを使用。背面を数回叩いて打ち割りし、穿孔している。孔の周辺は殆ど整形されない。色残り良好。	
59	35	11	P-05		貝製品	タカラガイ 有孔製品		径0.3	径0.3	高2.2	19.1	ヤクシマダカラを使用。背面を数回の敲打により穿孔する。孔の周辺は殆ど整形されない。	
60	36	12	P-02	畦	貝製品	二枚貝 有孔製品		径0.4	径0.4	厚1.3	16.6	オオシナト(右殻)を利用。孔は長径1.5cmの長楕円形。上方中央部と内側から外側に向けて穿孔する。孔の上方に磨耗が見られる。	
60	36	13	P-01		貝製品	二枚貝 有孔製品		径0.6	径0.6	厚2.9	60.0	ユウケウツナルボ(右殻)を利用。發輪部に1箇所あり、孔の大きさは径1.5cm。敲打・研磨の痕跡は不明瞭。全体的に磨耗する。	
60	36	14	Q-03		貝製品	二枚貝 有孔製品	(径高 4.7)	径0.6	径0.6	厚1.9	19.0	ユウケウツナルボ(右殻)を利用。發輪部に内側からの穿孔を行う。孔径1.2cm。穿孔に伴う敲打の痕跡は不明瞭。器表面は磨耗著しい。	
60	36	15	O-02		貝製品	二枚貝 有孔製品		径0.4	径0.7	厚1.7	15.4	ナガジヤコ(左殻)を利用。器面は磨耗著しい。發輪部に穿孔を行う。孔で破断するが、約2mmの楕円形と思われる。	
60	36	16	O-20	東屋下	貝製品	二枚貝 有孔製品		径0.5	径0.8	厚1.6	19.1	ユウケウツナルボ(右殻)を利用。中央部に内側面に数回の敲打により穿孔する。孔は長径1.5cm前後の楕円形。	
60	36	17	N-20- O-20	第-Ⅳ層	貝製品	二枚貝 有孔製品		径0.5	径0.4	厚2.2	15.5	カララガイ(右殻)を利用。中央より上位に、内側面に数回の割削をおこなった穿孔する。孔の大きさは3mm前後。	
60	36	18	O-01		貝製品	二枚貝 有孔製品	径長 4.4	径0.4	径0.4	厚2.0	12.8	カララガイ(左殻)を利用。中央部に内側から外側に向けて穿孔。孔の大きさは径1.0mm、縦6mm前後。	
60	36	19	N-20- O-20	第-Ⅳ層	貝製品	二枚貝 有孔製品		径0.2	径0.3	厚0.9	3.6	アラシジメ(右殻)を利用。中央に内側から穿孔。孔径5mm前後。	
60	36	20	Q-04		貝製品	二枚貝 有孔製品		径0.5	径0.3	厚0.7	2.3	ホシキヌタ(右殻)を利用。殻の中央に穿孔。孔径3mm前後。正面には敲打の痕跡が認められる。	
61	37	21	O-02		貝製品	貝玉		長2.8	巾2.9	厚2.1	17.9	貝玉未成品。マガキガイを利用。螺塔部を切断し穿孔する。体層部分は横位に切断。螺塔部・体層部とも研磨は未了で成形時の痕跡を多く残す。	
61	37	22	P-02	畦	貝製品	巻貝製品		長4.6	巾2.6	厚2.3	15.4	ヤコウワコロメ(ナシ)を利用。螺塔部を切断し研磨したもの。横位・斜位の磨削が確認される。体層は部分的に研磨される。色残りは良好。	
61	37	23	Q-04		貝製品	巻貝製品		長12.4	巾7.6	厚7.1	400.0	ヤコウワコロメ(ナシ)を利用。色残りはやや不良で、断面がわずかに残存するのみ。螺塔部は磨耗著しい。螺塔部先端を切断し、頂部より穿孔する。孔の大きさは1cm前後の内径。切断部分の加工は不明瞭。	
61	37	24	P-04		貝製品	巻貝製品		長8.2	巾3.0	厚3.0	0.3	チウケンツダを使用。發輪および殻口を打ち割っている。縁から割削痕が連続する。	
61	37	25	Q-03		貝製品	巻貝製品		長8.1	巾4.2	高5.4	42.8	チウケンツダを使用。外殻を打ち割り、体層表面と發輪のみに残存する。	

第4節 遺構と出土遺物

1. 遺構概要

今回報告する千原遺跡にて確認された遺構は、壁面のみ確認されたものを含めて溝状遺構（SD）が3条、ピット（P）が692基、土坑（SK）が38基、性格不明遺構（SX）が15基、そして固有名称として報告する石列、方形石組遺構、タカラガイ集積遺構、動物遺体集中部2ヶ所を合わせて753基であった。遺構の検出面はⅡ層下面、Ⅲ層中、地山（V層）上面の3面で、それぞれ近代～戦前、近世、近世～グスク時代・古琉球に相当する。

以下、近代～戦前の遺構、近世の遺構、そして、地山上面の遺構について詳述する。第64図には遺構配置図を、付録CDには全ての遺構名を記した遺構配置図、および遺構の位置・法量などを記した遺構一覧表を収録した。

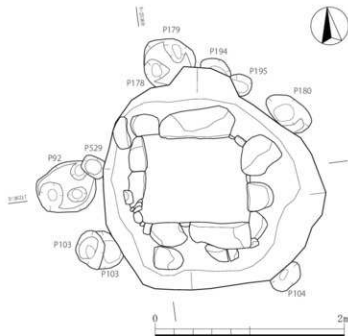
2. 近代～戦前の遺構

本遺跡で確実に近代～戦前の遺構と認められるのは、方形石組遺構、石列の2基である。ともにⅡ層が厚く堆積する調査区南側に存在している。空中写真や戦前の地図との比較から、戦前における浜川集落の一部に比定される（第IV章第3節）。なお、現地調査においては、近世以前の包含層、遺構群の調査に注力するため、写真のみの記録とした。

〈方形石組遺構〉（第62図、図版39）

方形石組遺構はP-05グリッドにて確認された石組遺構である。石灰岩の切石でやや長方形に石組みする。長軸はほぼ東西方向で、内壁の幅は1.10m、短軸の内壁では0.90mを測る。構築時の掘力は丸みを帯びた略方形を呈する。方形石組遺構は近代の包含層（Ⅱ層）掘削時に石組みを構成したと思われる転石を除去しながら検出を行い、最終的に石組みの形状を保っていたのは床面から一段ないし二段積み上げた状況であった。底面の遮水処理の方法は不明であるが、規模・形状や構築方法は平安山原A遺跡【北谷町教育委員会2016】のものと近似している。

出土遺物は沖縄産陶器の小片数点にとどまることから、少なくともゴミ等の生活残滓を廃棄するために使用されたものではないと考えられる。



第62図 方形石組遺構



戦前石列検出状況（西から）

図版39 近代～戦前の遺構



方形石組遺構検出状況（東から）

〈石列〉(図版39)

石列はⅡ層の掘削時にP-04～Q-05グリッドにて3列確認された。一部面取りされた石灰岩をほぼ南北方向に並列して走らせている。検出状況の写真撮影のみとした。

3. Ⅲ層中検出の遺構

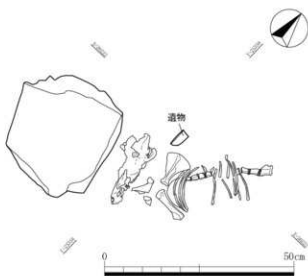
近世の遺構は、近世遺物包含層であるⅢ層の掘削時に確認された動物遺体集中部2ヶ所とタカラガイ集積遺構である。いずれも地山上面より10cm前後上位で検出されたものである。Ⅲ層として一括した層内においても、本来は2～3面の遺構面が存在していたと考えられる。

〈動物遺体集中部〉(第63図、図版40)

動物遺体集中部は、P・Q-03グリッド、0-20グリッドの2ヶ所で確認した。

1ヶ所はP・Q-03グリッドで検出したブタ埋葬遺構である。Ⅲ層中からブタの上半骨格が解剖学的位置を保った状態で検出された。骨盤、後足などの下半骨格は検出段階で既に取り上げられていたが、頭骨、脊椎、肋骨等が残存しているため、埋葬されたものと考えられる。乳歯が残存すること、関節は未癒合であることから、年齢は幼～若獣である。頭位の方向は西向きに置かれている。ただし、埋葬するための掘り込みの有無は判別できない。頭骨に隣接して板状に加工したピーチロックを配しており、埋葬時における墓標のような機能を持たせていたものと考えられる。

もう1ヶ所の動物遺体は、調査区北端部に位置するN-20グリッドの東壁のⅢ層中で検出した、ウマの下顎骨の吻合部～下顎体である(第64図中「獣骨2」)。上顎骨より上部の頭骨及び頸椎以下の骨格は残っていない。清代の染付の底部が隣接して出土した。上記のブタの埋葬遺構と同様、掘り込みは確認されていない。



第63図 ブタ埋葬遺構

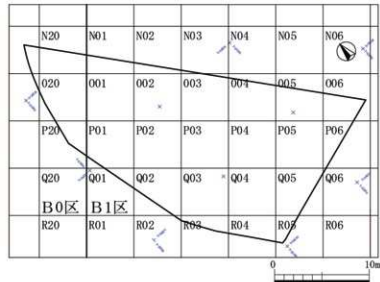
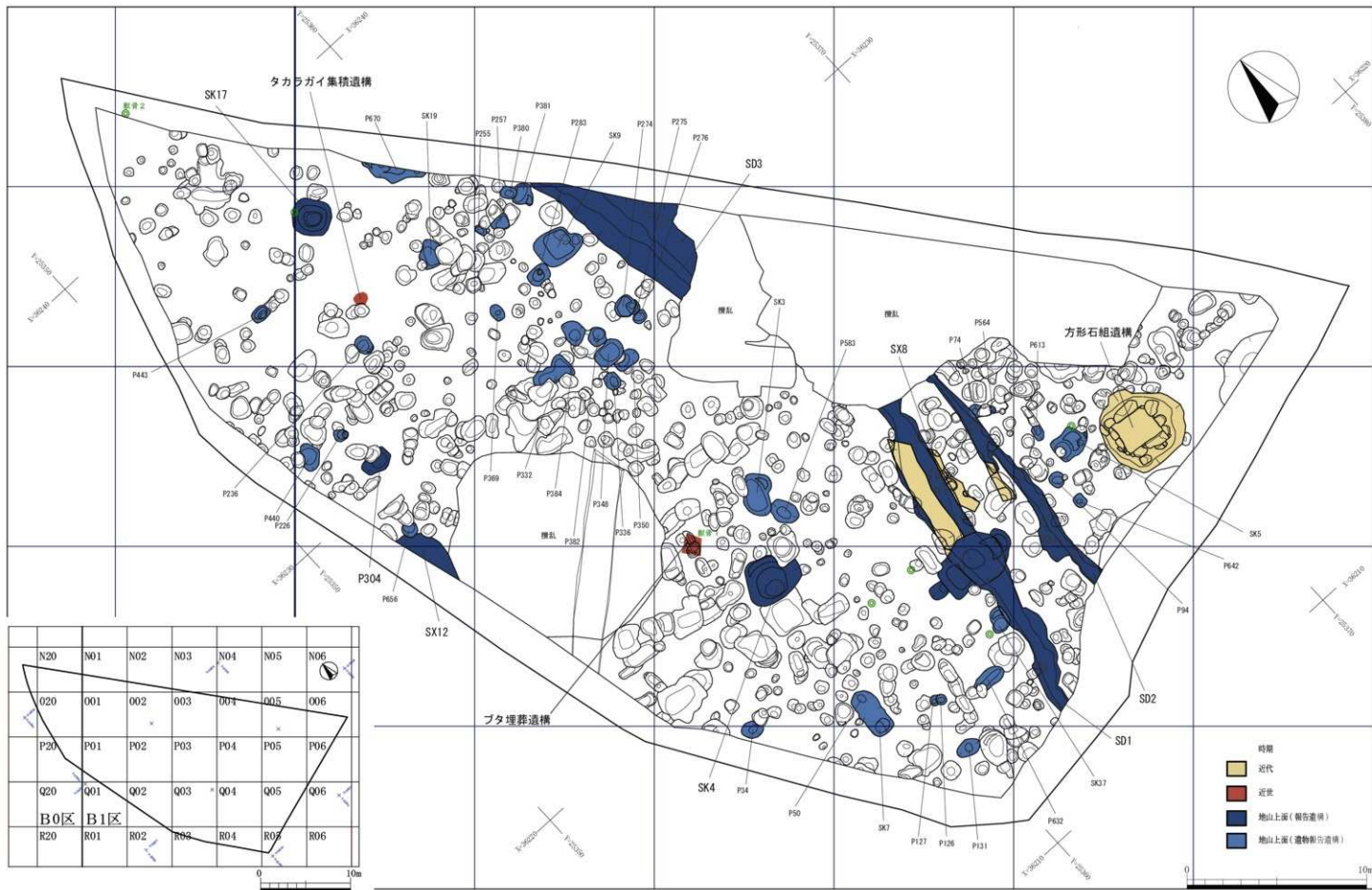


N-20グリッド ウマ下顎骨出土状況(西から)

図版40 動物遺体集中部



P・Q-03グリッド ブタ埋葬遺構検出状況(東から)



第 64 図 遺構配置図

〈タカラガイ集積遺構〉(第65・66図、図版41・巻首図版4、第35・36表)

タカラガイ集積遺構が0-01グリッドⅢ層中で検出されている。遺物台帳では「Ⅲ層(Ⅳ層?)」とあり、Ⅲ層かⅣ層か判然としないが、地山上面の遺構群検出時点ではこの遺構は削除されているので、ここではⅢ層として扱った。検出・断面の記録がないので詳細は不明だが、遺構の検出状況写真(巻首図版4・図版41)をみると、小ピットにタカラガイがびっしりと詰まっているように見える。

検出された貝は、1,862個体がタカラガイ科で、タカラガイ科以外の貝類が6個体あった(第35表)。6個体の貝種は、二枚貝のヒメジャコ、ミドリアオリ、リュウキュウマサオ、カワラガイ、イソハマグリと、巻貝のマルアマオブネの各1個体で、これらは遺物取り上げの際に混入した貝類と思われる。

タカラガイ科の貝種内訳は、第35表のとおりで、90%近くをハナビラタカラが占め、次いでハナマルユキ7.7%、キイロダカラ2.2%と続く。ハナビラタカラだけに亜成員が38個体含まれていた。死殻は1個体もなかった。

本遺構は、意図的にタカラガイ類だけを一括採取した後、小ピットに一括して廃棄または保管していたと考えられる。本遺構の性格については、食用後の廃棄か別の目的による保管かは判断し難い。

付録CDに本遺構から出土したすべてのタカラガイの計測データを掲載した。第65図は、出土個体数が多かったハナビラタカラ、ハナマルユキの殻高のヒストグラムである。殻高の大きさに偏りがない度数分布から、個体選別することなく採取されたと考えられる。

ハナマルユキ成員の水管溝側背面に径数mmの小孔が1ヶ所穿たれたものが2個体あった(第66図1・2)。小孔は、殻の硬さを考えると先端が尖った金属などで外側から打撃を加えて穿孔したと考えられる。このほか、ハナビラタカラの成員7個体と亜成員4個体にも径1mmから数mmの微孔や小孔があった。孔の形状は不定形から正円形があり、孔の位置も腹面側や背面の水管溝側、側面側、頂部にもあって一定していない。正円形微孔は溶食痕の可能性があり、不定形の小孔は殻厚が薄いために自然に破損した可能性がある。

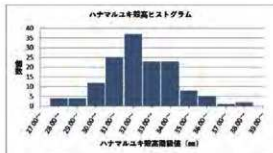
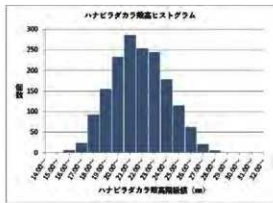
近隣の平安山原A遺跡〔北谷町教育委員会2016〕や伊礼原D遺跡〔北谷町教育委員会2008〕の出土例では、小穿孔があるハラダカラ、ホシキスタ、ハチジョウダカラ、ヤクシマダカラが報告されている。このほかグスク時代以降の墓地を中心にグスクなどで出土している。いずれも大型のタカラガイの水管溝側背面に小孔が穿たれている〔宜野座村立博物館2006〕。

これらの事例と本遺跡事例を比較すると、本遺跡事例は一括採取したタカラガイ群に小孔が穿たれた個体が含まれていた点に特徴があり、小孔がタカラガイ採取時に穿たれたことを示唆している。また、これまでの出土事例はタカラガイの大型貝種が殆どだったのに対し、本遺跡事例は小型貝種であった。小孔の位置は水管溝側背面である点は従来の事例と共通している。

第35表 タカラガイ集積遺構の貝種集計表

貝種	成員	亜成員	合計	
ハナビラダカラ	1636	38	1674	89.9%
ハナマルユキ	144		144	7.7%
キイロダカラ	41		41	2.2%
ナツメモドキ	3		3	0.2%
合計	1824	38	1862	100.0%

上記の他に6個の混入貝と思われる個体が含まれていた。貝種は、ヒメジャコ、マルアマオブネ、ミドリアオリ、リュウキュウマサオ、カワラガイ、イソハマグリ各1個体。



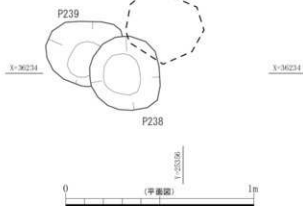
第65図 タカラガイ2種の殻高ヒストグラム

タカラガイ集積遺構
検出状況図

Y-25306



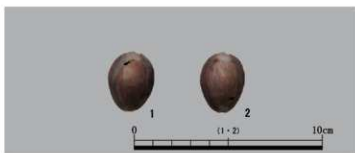
タカラガイ集積遺構



タカラガイ集積遺構 検出状況 (北から)



出土遺物



出土遺物

第 66 図 タカラガイ集積遺構

図版 41 タカラガイ集積遺構

第 36 表 タカラガイ集積遺構出土遺物 観察表

標図	写真 番号	図 グリッド	出土地 遺構	部位	種別	器種	部位	定数 ()は推定値				観察事項	分類・時期・産地
								長さ	殻径	高さ	重量		
66	41	1	O-01	タカラ ガイ集 積遺構	貝製品	有孔製品		3.2	2.6	1.6	8.4	ハナマルユキを利用。ツヤがかなり模様もよく残っている。上方に穴が開けられている。	
66	41	2	O-01	タカラ ガイ集 積遺構	貝製品	有孔製品		3.1	2.4	1.4	6.5	ハナマルユキを利用。ツヤがかなり模様もよく残っている。下方に穴が開けられている。	

本遺構のようなタカラガイの集積は、那覇市の渡地村跡〔那覇市教育委員会 2012〕や御物城〔新田 1977〕などで類例が認められる。渡地村跡ではグスク時代・古琉球に帰属する「タカラガイ集中部」が多数検出されている。その存在形態は、不定形に広がるものから、平面形が円形で楕円状の掘り込みを伴うものまでであるという。貝種は本遺跡と同様にハナヒラダカラヤハナマルユキにほぼ限定されている。性格については、琉球王国の歴史書『歴代宝案』に「海巴」(タカラガイ)が55000個献上されたことがみえることから、交易品の集積地の可能性が指摘されている。本遺構は近世の所産であり、グスク時代の那覇の遺構群とは単純には比較できないものの、貝種が共通することから、両種が近世以降も交易品としての価値を持ち続けていたものと思われ、沿岸部集落から那覇など最終集積地に向かうまでの一時的な集積であったと考えられる。

4. 地山上面の遺構群

上記以外の遺構は地山(V層)上面にて確認された。調査面積 427 m²のうち、調査区東側と西側に見られる攪乱坑(73.6 m²)を除いた部分に748基もの遺構が残存していたことから、調査面積に対しての遺構密度はかなり高いと言えるだろう。調査区内においては、北側部分で密度が少し低くなる以外は満遍なく分布している状況であり、遺構の切り合い関係も随所に見ることができる。遺構検出面の地形は、調査区北側部分が最も高く標高2.40～2.50 m、調査区中央部が最も低く標高2.05～2.10 m、そして調査区南側部分は標高2.20～2.25 mとなる。

概ねの帰属時期の検討のため、第67図では、上段に地山上面遺構群の埋土断面、下段に遺物が出土した遺構の配置を示した。埋土分類は、現地調査段階での所見を基に、大きくⅢ層系(暗褐～黒褐色)とⅣ層系(黒褐～黒色)に区分した。遺物については、近世遺物(沖繩産陶器・本土産陶磁器・清代染付・煙管)の出土した遺構と、グスク時代・古琉球の遺物のみが出土した遺構を示した。Ⅲ層系の埋土を有する遺構が調査区北端を除くほぼ全域に分布する一方、北側ではⅣ層系の埋土の遺構が少なくない。遺物はⅢ層系と近世、Ⅳ層系とグスク時代・古琉球と、概ね相関関係があり、Ⅳ層系埋土を有する遺構が若干相を示すようである。

〈溝状遺構〉

SD1・SD2(第68図、図版42、第37表) P-04～Q-05グリッドにて確認された。両溝の芯芯間距離は約4m前後で並行しており、幅は50cm～最大100cm、深さは概ね10cm～15cmで推移する。近代～戦前の遺構で述べた石列とほぼ同位置、同方向に検出されているが、Ⅲ層の地山上面まで掘り下げて確認できたこと、南壁断面で見るとⅢ層に被覆されていることなどから、石列とは構築時期に差があるものと考えられる。

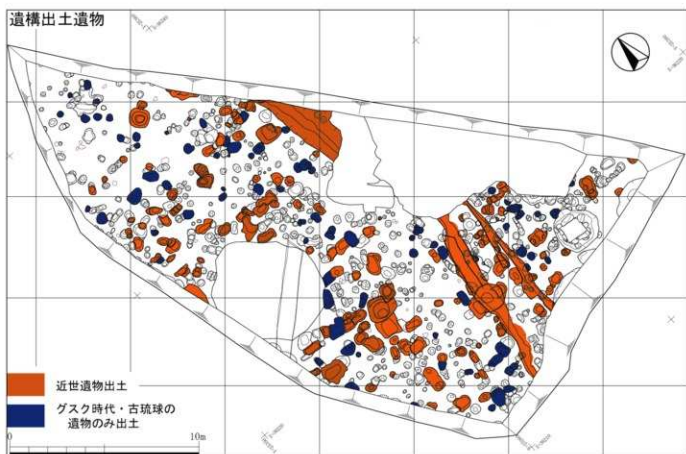
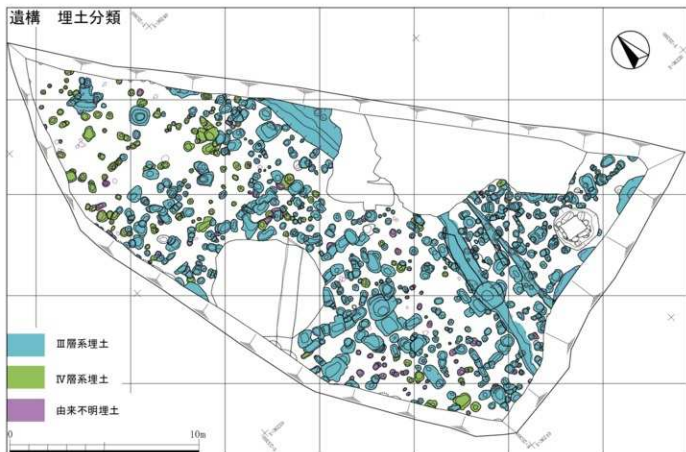
SD1では銭貨1点・石製品2点・貝製品1点が出土した。1は五銭銭である。紀元前118(元狩5)年初鋳の前漢代の銭貨である。遺構の年代とは大きな開きがあり、貨幣として用いたとは考え難い。

SD2では、染付(清代)・沖繩産陶器(施釉陶器・無釉陶器・陶質土器)・本土産磁器などが出土した。このうち3点を図化した。2は沖繩産施釉陶器の小碗である。立ち上がりが直線的で、灰釉を浸し掛けする。3は急須など瓶類の口縁部である。外面に鉄軸を掛ける。頸部が短く、体部は丸みを帯びる。4は陶質土器の鍋の口縁部である。

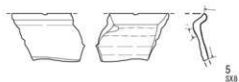
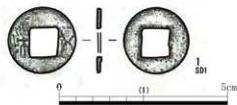
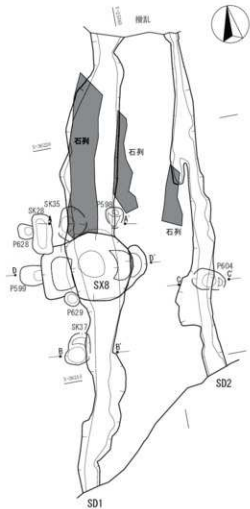
SD3(第69図、図版42、第37表) 0-02～03グリッドで確認された。東側の攪乱から東壁に掛かるまで残存しており、東側の立ち上りがは確認できなかった。主軸をほぼ南北方向とするが、SD1・SD2とは若干方向がずれており、幅(約2m以上)、深さ(50cm以上)ともに異なる。SD3は、Ⅲ層起源の黒褐色砂質土を主たる埋土としており(断面図2～7層)、出土遺物からみても近世段階で掘削されたものと考えられるが、近代以降(Ⅱ層)でも掘り直しが行われている(断面図1層)ことが東壁にて見て取れる。

第37表 SD1～3・SX8出土遺物 観察表

探検	写真	図号	出土地		種別	器種	部位	法量 ()は推定値				観察事項	分類・時期・産地	
			グリッド	遺構 層位				口径	器高	径深	重量			
68	42	1	P-04	SD1	完整	銭貨	五銭銭		2.1	厚0.1	1.3		五銭銭	
68	42	2	P-04	SD2上層	Ⅲ層埋土	沖繩産施釉陶器	碗	口	(11.2)	(4.0)	-	-	口縁まで直線的に立ち上がる。内外面とも同軸ナゲ。軸は灰釉(7.5YR 5/2灰ナリーブ色)を浸し掛け、空泡目立つ。内外外面体部下半は露地。素地は赤や茶色。色調は14YR7/6褐色。	碗Ⅰ類
68	42	3	P-04	SD2上層	Ⅲ層埋土	沖繩産施釉陶器	瓶	口	(4.2)	(4.7)	-	-	頸部は短く、体部短らわ。口縁部軸割き、内面露地。軸は鉄軸(5Y2/1茶色)で濃い光沢あり。素地は赤。色調は5Y6/1灰色。	
68	42	4	P-04	SD2上層	Ⅲ層埋土	沖繩産陶質土器	鍋	口	(19.4)	(3.5)	-	-	胴部は「く」字状に屈曲する。色調は内外面とも5YR7/8褐色。	
68	42	5	Q-04	SX8	完整	沖繩産施釉陶器	鍋	口	-	(3.2)	-	-	胴部は「く」字状に屈曲する。軸は内外面鉄軸(10YR1/2黒褐色)。内面裏受け部軸割き、体部下半は露地。素地は赤。色調は10YR7/1灰白色。	
69	42	6	O-02・O-02	SD3	完整	沖繩産施釉陶器	小碗	口～底	(8.6)	4.7	(3.8)	-	口縁上端で外見。見込み部の目軸割き。重ね焼き残存。軸は鉄軸(2.5Y3/2黒褐色)。内面は透明釉(2.5Y8/2灰白色)。量付に白化粒土。素地は赤。色調は10YR8/3浅黄褐色。	
69	42	7	O-02	SD3	2層	沖繩産施釉陶器	碗	口～底	12.6	5.9	(6.0)	-	灰白口縁。軸は内外面とも灰軸(10Y7/2灰白色)を浸し掛け、貫口はやや暗い。素地は普通。色調は14.5YR8/1灰白色。	碗Ⅰ類
69	42	8	O-02・O-03	SD3	1層	沖繩産施釉陶器	急須	体	-	(7.9)	-	-	体部は丸みを帯びる。外面に隅丸三角形の把手を有する。口径は5mm前後。軸は鉄軸(2.5Y2/1黒色)。内面露地。素地は赤。色調は12.5YR8/2灰白色。	
69	42	9	O-02・O-04	SD3		沖繩産無釉陶器	挿鉢	口	-	(3.6)	-	-	口縁部調整用軸コナゲ。内面口縁直下に磨輪跡。カキ目数不明。素地は赤。色調は12.5YR4/8赤褐色。	挿鉢Ⅲ類



第 67 図 地山上面遺構群の埋土と出土遺物の様相



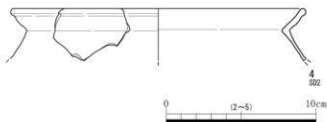
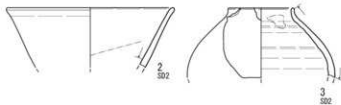
SD1
1 10YR4/1 褐色土 灰・焼土わずかに入る。5mm次の小礫の混入が多い。



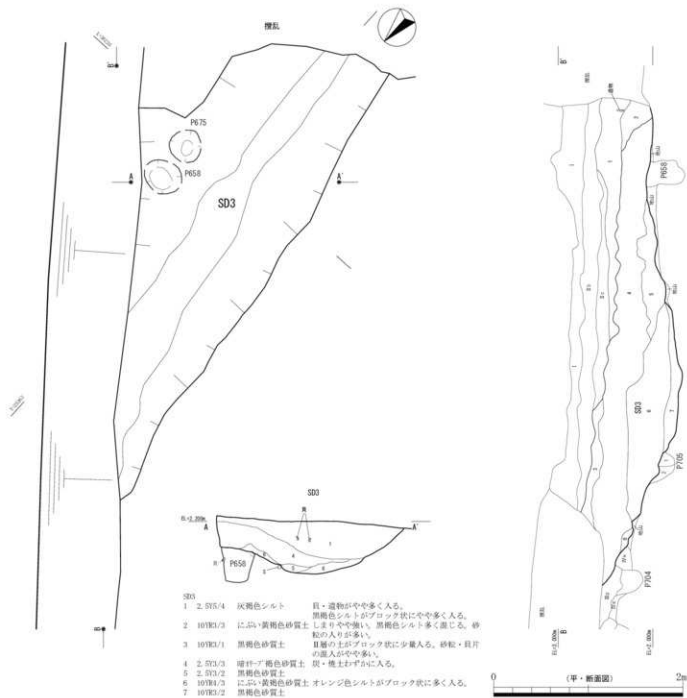
SD2
1 10YR4/2 褐色土 灰・焼土わずかに入る。



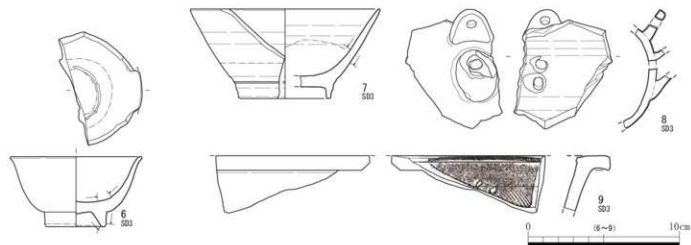
SX8
1 10YR3/2 黒褐色砂質土 灰・焼土わずかに入る。
2 10YR3/4 暗褐色砂質土 灰・焼土わずかに入る。
3 10YR4/3 濃い黄褐色砂質土 砂がまばらに多く入る。
4 10YR5/6 黄褐色シルト すじ状・塊状にハの字状に堆積する。粘土を多く含む。
5 10YR3/3 暗褐色砂質土 灰・焼土わずかに入る。
6 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト 灰・焼土わずかに入る。
7 10YR3/3 暗褐色砂質土 灰・焼土わずかに入る。
8 10YR3/2 黒褐色砂質土 灰・焼土わずかに入る。
9 10YR4/2 灰黄褐色砂質土 砂がブロック状にやや多く入る。灰・焼土わずかに入る。
10 2.5Y5/3 黄褐色砂質土 焼土わずかに入る。



第 68 図 SD1・2、SX8



- SD3
- 1 2.5Y5/4 灰褐色シルト 瓦・遺物がやや多く入る。
 - 2 10YR3/2 にごい黄褐色砂質土 黒褐色シルトがブロック状にやや多く入る。しまりやや強い。黒褐色シルト多く混じる。砂の入りは多い。
 - 3 10YR3/1 黒褐色砂質土 目地の土がブロック状に少量入る。砂粒・瓦片の混入がやや多い。
 - 4 2.5Y3/2 暗赤〜ア 褐色砂質土 灰・焼土わずかに入る。
 - 5 2.5Y3/2 黒褐色砂質土
 - 6 10YR3/2 にごい黄褐色砂質土 オレンジ色シルトがブロック状に多く入る。
 - 7 10YR3/2 黒褐色砂質土



第69図 SD3



SD1 土層 (B断面) (南から)



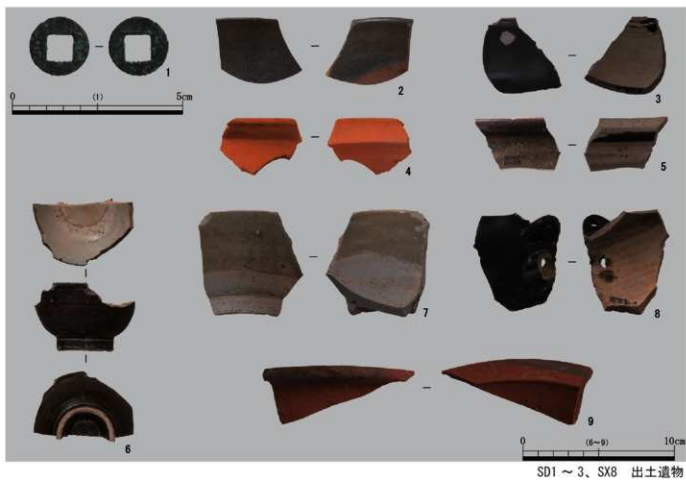
SX8 土層 (南から)



SD3 土層 (A断面) (北西から)



調査区東壁 (SD3部分) (西から)



SD1 ~ 3、SX8 出土遺物

図版 42 SD1 ~ 3、SX8

SD3では、染付（清代）・沖縄産陶器（施釉陶器・無釉陶器・陶質土器）・本土産磁器・石器・木片など計46点が出土した。このうち沖縄産陶器を4点図化した。施釉陶器の釉種は、灰釉・鉄釉・白化粘土と各種がみられる。6は小碗で、外面に鉄釉、内面に透明釉と掛け分けをおこなう。高台皿付には白化粘土を付す。7は碗I類である。8は急須で、外面に鉄釉を付す。隅丸三角形で円孔を穿つ把手を有する。9は無釉陶器の播鉢で、口縁部形態からIII類に分類できる。内面口縁直下に圏線がみられる。SD3は、碗・播鉢の組成からみて、構築時期は18世紀前半に求められよう。

〈ビット・土坑・不明遺構〉（第71～73図、図版43～45）

本遺跡で遺構数のほとんどを占めるビット・土坑・性格不明遺構を、規模の大小は問わず、素掘り土坑状のものとして一括して報告する。

ビットは、検出面からの深さ（第70図）をみると、平均で24.5cm、最も深いもので80cmである。性格としては、根石や礎石を有するもの、断面で柱痕を有するものも多いことから、ビットの多くは掘立柱建物構築する柱穴として機能したものと考えられる。直径が15～20cm前後の小さいものは建物に付随する柵痕等の可能性があると思われる。現地調査中および整理作業段階において、いくつか建物プランの推定を試みたが、遺構密度が濃密な地山上面では、明確な建物プランを提示することは出来なかった。

土坑および性格不明遺構は、石灰岩礫とともに獣骨（ウシ）や貝、陶磁器が廃棄されたと思われる遺構（SK4、SX12）も見られるが、基本的に性格は不明である。ただし、本調査区内においてQ-03グリッドを中心に土坑が比較的多くまわっている傾向が見られ、先述したSK4はその一つである。

以下、遺構・遺物の点で特筆される遺構について紹介する。

P304（第71図、図版43、第38表） P-01グリッドに位置する。平面形態は楕円形で、長径0.8mを測る。埋土は黒褐色を呈する。

出土遺物は、沖縄産陶器・染付・青磁・煙管・石製品・貝製品など14点で、比較的多い。うち3点を図化した。

1は沖縄産無釉陶器の水鉢の口縁部である。口縁部直下および口端部に櫛状工具による波状文を付す。口端の波状文は不鮮明である。2は染付で、外面に印青花を付す。呉須の発色は薄い。18世紀以降の福建・広東系の所産である。3は石製の羅字煙管の雁首である。釣鐘型〔石井2011〕に分類でき、火皿から底部に向けてやや窄まる六角柱形である。下端部を段状に削り出す。器面は磨耗が顕著である。

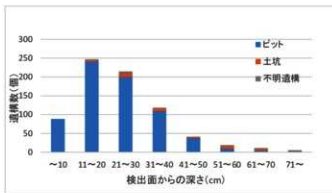
SK4（第72図、図版44） Q-03グリッドに位置する。平面形態は隅丸方形で、長径1.6mを測る。埋土の上位には焼土粒や人頭大の石灰岩礫を多く含む。一部の礫は被熱する。獣骨（イノシシ・ブタ）や陶磁器類が計20点以上出土する。陶磁器には、いずれも小片であるが、印青花による染付、沖縄産無釉陶器の火がなどがある。

SK17（第72図、図版44） 0-01グリッドに位置する。平面形態は楕円形で、長径1.1mを測る。1層では、出土状況は不明ながら、ハナマルユキが52点出土しており、小規模な貝集積が形成されていた可能性がある。ハナマルユキの産状は、葦高3cm前後のものを中心に大小存在しており、先述のタカラガイ集積遺構と同様に選択性は見出せない。2層では焼土を多く含む。

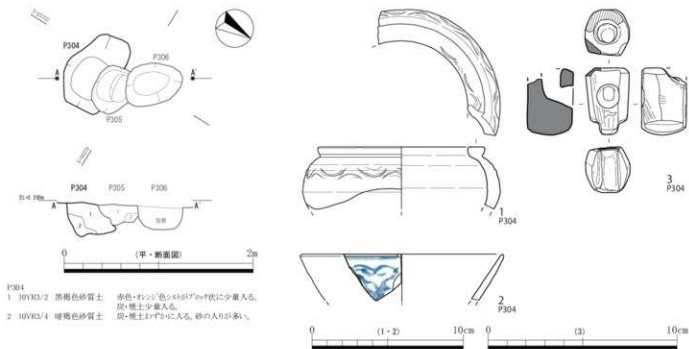
遺物としては、小片のため図化していないが、褐釉陶器・本土産陶器が各1点出土する。

SX8（第68図、図版42、第37表） P・Q-04グリッドに位置する。長径2.2mの不整形を呈する。現地調査ではSD1に先行するものとして認識されていたが、東壁断面II層で確認したものと同様のごく新しい時期の粘土なども検出されており（埋土4層）、帰属時期は近代にまで降る可能性がある。

出土遺物は沖縄産陶器・本土産陶磁器・染付・瓦など25点で、うち1点を図化した。第68図5は沖縄産施釉陶器の鍋の口縁部で、口縁部が「く」字状に屈曲する。釉は鉛釉で、蓋受けとなる口縁部内面を釉刺ぎしている。



第70図 ビット・土坑・不明遺構 深度



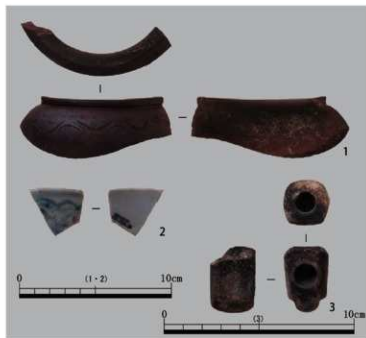
P304
 1 10YR3/2 黒褐色砂質土 赤色・オレンジ色シボがわずかに少量入る。炭・焼土少量入る。
 2 10YR3/4 暗褐色砂質土 炭・焼土わずかに入る。砂の入りが多い。

第71図 P304



P304 土層 (東から)

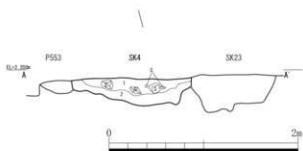
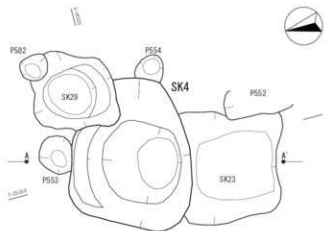
図版 43 P304



P304 出土遺物

第38表 P304 出土遺物 観察表

図版	写真	図号	出土地	種別	器種	部位	法量 ()は推定値	観察事項	分類・時期・産地		
			グリッド	遺構	層位		口径 器高 底径 重さ				
71	43	1	P-01	P304	2層・完履	沖調成 無輪陶器	木鉢	口	(10.7) (4.1) - -	内湾口縁。口唇肥厚する。口唇上と外面体部に波状文(雁状工具3本/5mm)。素地は密。色調は2.5YR4/2灰赤色。	
71	43	2	P-01	P304	2層	染付	碗	口	(13.2) (3.1) - -	直口口縁。口端部は面取りされる。外面口縁直下に黒線2本(一体化している)。体部に印青花による草花文。気孔の染色は濃い青色。貫入は無い。素地は密で、白色微粒子。色調はNS/灰白色。	18世紀末～19世紀 福豊・広東系
71	43	3	P-01	P304	2層・完履	石製品	排管 扉首	長3.5 幅3.4 厚2.4	27.0	ヘラケズリ。面取りにより八角形に成形。下端は段状に削り出す。火皿・小口とも外径1.2cm。砂岩を素材とする。	



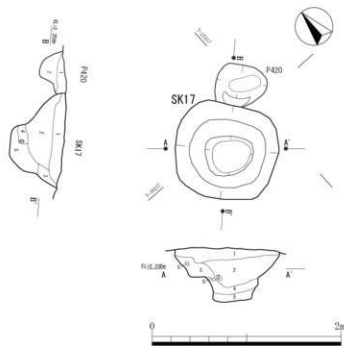
- SK4
- 1 10YR3/2 黒褐色シルト オレンジ色シルトが多く入る。粘土が乾状に多く入る。少量入る。被熱を受けた石がある。10~20cm大の縦おび板瓦など遺物も多くみられる。埋藏土肌か。
 - 2 10YR4/2 灰黄褐色砂質土 砂の入りが多い。



SK4 遺物出土状況 (西から)



SK4 土層 (西から)



- SK17
- 1 10YR3/2 黒褐色砂質土 やや黒色が強い。即・焼土わずかに入る。貝殻がやや多く入る。
 - 2 10YR4/2 濃い黄褐色砂質土 オレンジ色シルトがフック状に多く入る。少量入る。
 - 2.5Y5/2 暗灰色砂質土 砂の入りが多い。灰わずかに入る。
 - 2.5Y4/1 黄灰色砂質土 砂の入りが多い。
 - 5 10YR3/2 黒褐色砂質土 灰わずかに入る。



SK17 土層 (西から)



SK17 出土 タカラガイ

第72図 SK4・17

図版44 SK4・17

SX12 (第73図、図版45、第39表) P・Q-01 グリッドに位置する。西壁に掛かるため全容は不明であるが、長径1.5m程度の範囲で、拳大～人頭大の石灰岩礫が多量に混入する集石範囲を確認した(図中トーン部分)。この集石は、灰褐色シルトから成り、西壁の断面をみると、20cm以上の層厚を有する。礫に混じって沖縄産陶器なども投棄されており、廃棄土坑としての性格も認められよう。

出土遺物は2点を図化した。1は沖縄産施釉陶器の小壺で、口縁部のみ欠損する。外面に鉄軸を浸し掛ける。外底は別途施釉する。2は沖縄産無釉陶器の播鉢で、I類またはII類に比定される。内外面にマンガン軸を掛ける。内面のカキ目は6条1単位で、左端の単位がやや深く刻まれる。この他、施釉陶器、陶質土器の火炉、仙丈祝寿文を描く清代の染付碗など、18世紀代の遺物群がみられる。

第39表 SX12出土遺物 観察表

種別	図号	図号	出土地	グリッド	遺構	層位	種別	器種	部位	法量 ()は測定値			観察事項	分類・時期・産地	
										口径	器高	底径			重さ
73	45	1	P-01-Q-01	SX12	平坑		沖縄産施釉陶器	小壺	底	-	(12.0)	5.9	-	外反口縁。体部上半に最大径を持つ。頸部～体部下半は回転ずば、体部下半～底部は回転ずば。軸は鉄軸(10YR 1.7/1黒色)浸し掛け。外底には軸による丸文。内面は口縁部のみ施釉。裏地は密。色調は10YR7/2に近い黄褐色。	
73	46	2	P-01-Q-01	SX12			沖縄産無釉陶器	播鉢	底	-	(4.5)	(10.0)	-	底部は無調整。弁半19mm×1.6cm。裏地は密。1mm大の白色砂粒を多く含む。色調は2.5YR2/4暗赤褐色。	I～II類

その他遺構の出土遺物

個別に紹介した遺構以外から出土した遺物について、第74～76図、図版46～48に掲げる。出土遺構については観察表(第40表)および断面図を参照されたい。

(沖縄産陶器)(1、6～9)

沖縄産施釉陶器は、碗・小碗など61点が出土した。軸種は灰軸や鉄軸が主体で、白化粘土を用いるものは数点に留まる。1は小碗で、体部を縦位に面取りする。面取りの単位は不均一で、全体で19単位を数える。体部外面全体に灰軸を掛けた上、外面の面取りした稜の部分に白化粘土を付している。

沖縄産無釉陶器は、碗、播鉢、鉢、甕、壺・瓶類、鍋、火炉など157点が出土した。甕の破片を円盤に転用したとみられるものも認められる。6は壺の底部で、内面に煤の付着が認められる。底部から直線的に立ち上がる器形である。外面には縦位に短い沈線がみられる。窯印であろうか。7は壺の頸～体部で、外面にマンガン軸を掛ける。播鉢は13点出土している。大半がI～II類・III類で、IVa類は1点のみである。8はIVa類に比定される。9はI類またはII類の底部で、P255(P-02グリッド)と0-02グリッドIII層との間で接合関係が認められた。暗色に焼き締まる。底部は高台状に削り出しており、外底はヘラ切り無調整とする。

陶質土器は、鍋類や火炉と思われる破片が出土しているが、全形を窺うことのできる資料はごく少ない。これは、P-04・05グリッドなどのIII層で残存状態の良い資料が多く得られたのとは対照的な結果である。

瓦質土器では、図化していないが、沖縄産の播鉢や風炉と思われる小片が出土している。

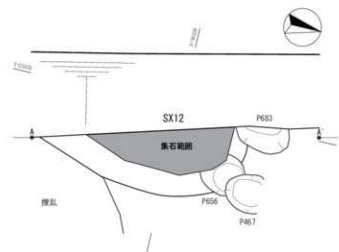
(本土産陶磁器)(2・3)

本土産陶磁器は21点出土した。肥前産と思われる陶器・磁器がみられる。確実に近代以降の資料はみられない。2は唐津産と思われる碗である。口縁下部に飛びカンナにより5条の平行沈線を付し、灰軸と白化粘土を用いて象嵌する。3は、黒色の顔料で描線を描いた後に貝須で絵付けをおこなう。

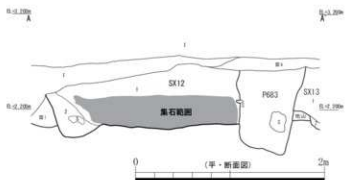
(輸入陶磁器)(4・5、10～16)

染付は74点出土した。このうち、器形や施文方法・文様構成からみて、清代の徳化窯系ないし福建・広東系の所産と考えられるものが約7割を占める。4は直口口縁碗で、体部下半を削り出す。発色は不良で、軸は黄灰色、貝須は灰褐色～黒褐色を呈する。外面口縁下部には2条の圓線の間に唐草文を描く。18世紀頃の所産である。5は底部である。明代に遡る古手の資料としては、図化していないが、景德鎮窯系と考えられる小杯などがみられる。

青磁は134点が出た。器種には碗・皿・盤などがある。文様の有無の判断が可能な破片についてみると、無文が碗・皿とも過半を占めるが、次いで碗では線彫りの細蓮弁文が多く、以下、雷文・蓮弁文が続く。底部は、高台置付まで施釉するものも多く、遺構群出土青磁のおおよその年代幅としては15世紀半ば～16世紀前半が中心となろう。10は細蓮弁文を付す碗の口縁部である。蓮弁と剣頭を別に描く。11は碗の底部で、底厚が厚い。外底は磨胎とする。12は輪花皿で、口縁部内面には波状文を付す。軸葉は淡い水色で、気泡が目立つ。15世紀前半～半式。

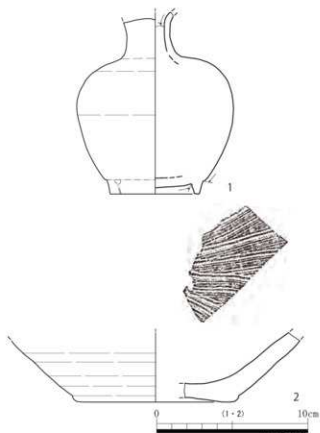


集石範囲検出状況 (東から)



調査区西壁 (SX12部分) (東から)

- SX12
 1 10VH3/2 黒褐色砂質土 10~20cm大の礫が多く入る。段・地土わずかに入る。沖縄産陶器などを多く含む。集石遺構から。
 2 10VH3/4 暗褐色砂質土 段・地土わずかに入る。



出土遺物

第73図 SX12



出土遺物

図版45 SX12

白磁は15点が出土した。器種には碗・皿・小杯などがあり、いずれも無文である。13は口紅付の碗で、口端部の断面形態は角形となる。皿付は外面から削り出す。18～19世紀代の福建・広東系に比定される。14は皿で、蓮子心となる。高台皿付には砂目が付着する。15～16世紀代の景德鎮窯系の所産であろう。この他、時期比定の可能なものとしては、図化していないが、ピロースクタイプⅢ(P402: N-20 グリッド)や今帰仁タイプ(P422: 0-01 グリッド)などがあり、調査区北側では比較的古手の資料が少なくない。

褐釉陶器は49点出土した。器種は大半が壺または甕と思われる。口縁部2点を図化した。15は口縁端部を面取りし、断面形態を角頭状とする。16は外反口縁で、口端部を折り返して作出する。

〈滑石製品〉(17)

滑石製品は1点出土した。17は石鍋の体部片である。P274などの半截中に出土したもので、12と伴出する。全形は窺えないが、外面は縦～斜位のノミによる整形、内面には丁寧な研磨痕が残る。直径5mm程度の孔を3ヶ所に穿つほか、転用時のものと思われる穿孔途中の孔も1ヶ所にみられる。

〈煙管〉(18～21)

煙管は5点が出土した。いずれも羅字煙管である。

18・19は沖縄産無釉陶器による煙管雁首で、火皿・小口とも八角形に面取りされる。火皿は内径1.2cm、小口は内径0.7cmを測る。羅字差し込み口には棒を押し当てた痕跡があり、棒に粘土を巻き付けて成形したものと考えられる。18は首部が短い作りである。

20は石製の煙管雁首で、火皿・小口とも外径1.4cmを測る。縦位に面取りされ、八角柱状を呈する。外面には使用による摩滅と煤の付着が顕著である。素材は砂岩であろう。

21は金属製の煙管吸口である。小口から口付に向けて細くなるが、口付側はわずかに太くなる。銅板を丸めて接合しており、横断面は円形を呈する。

〈金属製品・銭貨〉(22～27)

22は鉄鍔である。鍔身は捻って作出しており、断面は円形を呈する。刃部形状は平頭式〔勝連町教育委員会1990〕で、先端はやや丸みを帯びる。刃部幅は鍔身幅の1.5～2倍を測る。23は銅製の円形の座金で、外面には鍍金を施す。厚さ2mmを測る。中央には不整な円形の孔を穿つ。内面には加工は認められない。24は青銅製の錠前座金である。錠前部分は裏面側から丸めている。基部は裏面中央に縦位の鑿の痕跡がある。周縁には放射状に釘状の工具による刻線を施しており、刻線部分に鍍金が残存する。

25～27は銭貨である。25の銭文は判読不能である。26・27は無文銭である。薄手で平坦であり、中央の穿孔は隅部の作出が不十分である。

〈石器・石製品〉(28～31)

石器は39点が出土した。器種は磨製石斧・台石・石皿・砥石などのほか、石錘未成品などがある。組成にⅢ層と大きな差異はない。

28は磨製石斧で、平面形態は幅6cmの短冊形を呈する。刃部は正裏両面から研ぎ出される。基部・両側縁は丁寧に面取りする。29は磨製石斧を転用した磨石であろう。刃部は大きく破損する。裏面には素材面を大きく残す。30は砥石で、片状砂岩を素材とする。目がやや粗いことから、荒砥として利用したものであろう。砥面は正面1面のみである。31はサンゴ礁を利用した石弾である。礁の角を丸めて成形している。

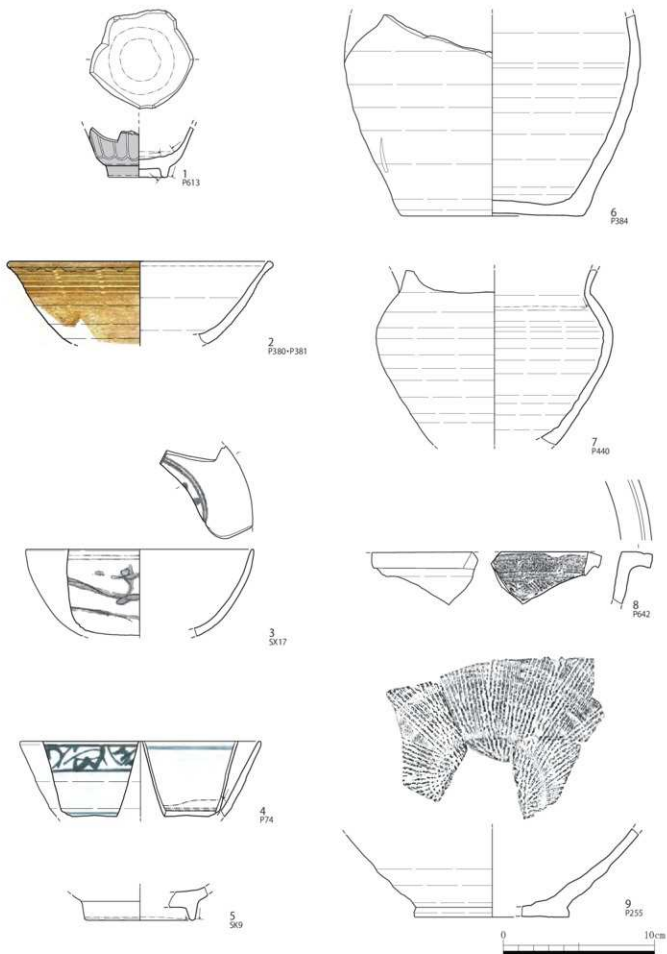
〈貝製品〉(32～40)

貝製品は69点が出土した。

32は貝玉で、マガキガイを利用する。螺旋部および体層部を切捨・除去した上、切断面を丁寧に研磨する。体層部は根元まで除去する。

有孔貝製品(貝鐺)のうち、タカラガイを用いるものでは、素材はハナマルユキが39点、ハナビラダカラが5点と、Ⅲ層と同様に前者が主体を占める。33～35はハナマルユキを、36・37はハナビラダカラを利用する。いずれも背面からの敲打により穿孔する。殻軸は残存する。33は上端面の研磨が顕著である。

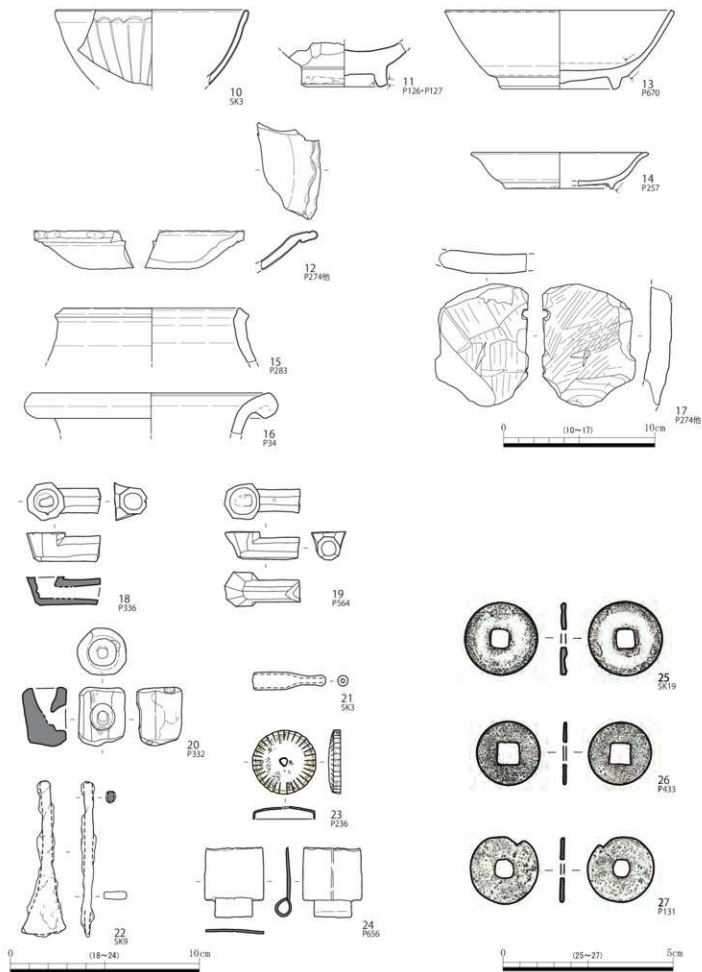
二枚貝製の貝鐺は、素材の組成にⅢ層と大差ない。38・39はオオシラナミを利用しており、殻頂部に径2cm大の円形の穿孔を付す。穿孔の縁辺には剥離痕が連続する。38は穿孔部分を除いて貝表面の磨耗が著しい、40はリュウキュウザルガイ、41はリュウキュウシラトリを素材とする。中央部に長さ1cmの穿孔をおこなう。



第74図 その他遺構の出土遺物1



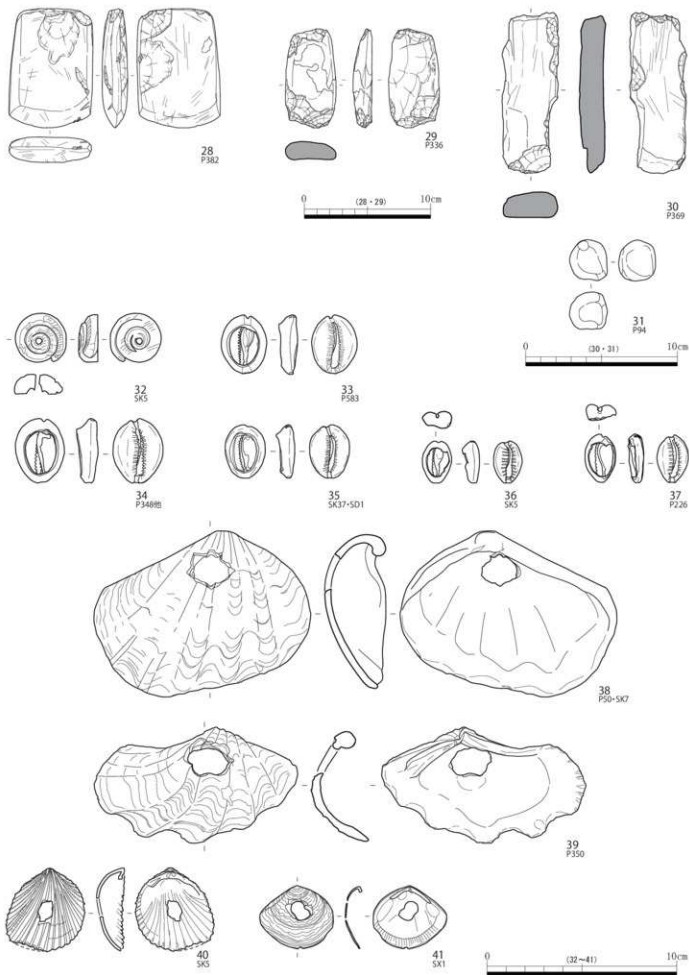
図版 46 その他遺構の出土遺物 1



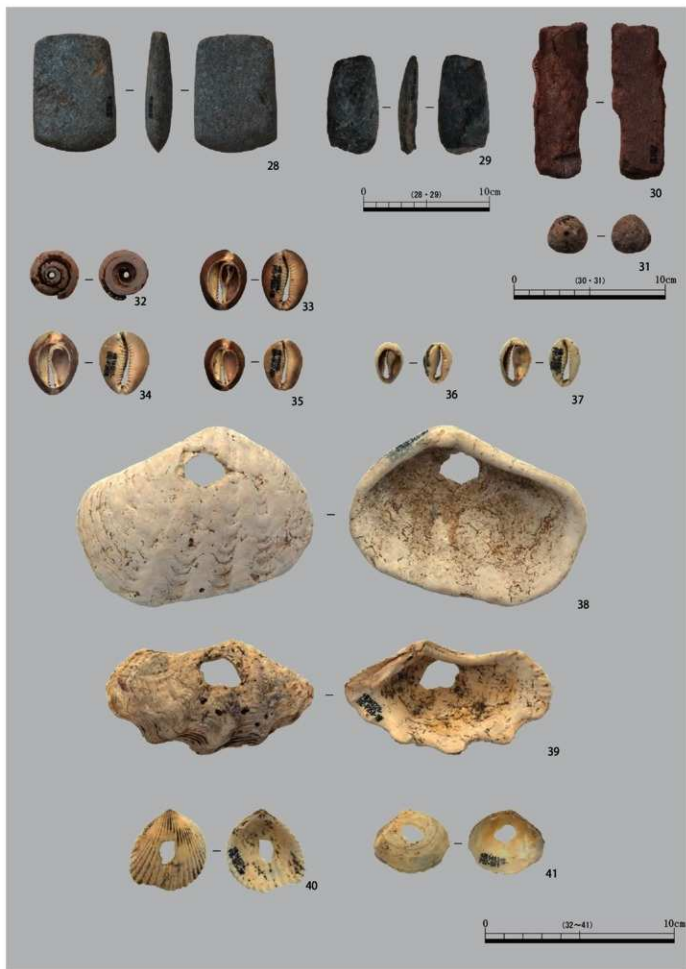
第75図 その他遺構の出土遺物2



図版 47 その他遺構の出土遺物 2



第 76 図 その他遺構の出土遺物 3



図版 48 その他遺構の出土遺物 3

第40表-1 その他遺構の出土遺物 観察表(1)

棟号	写真	調査番号	出土地 遺構	出土 層位	種別	器種	部位	法量 (口徑×器高×底径×重さ)			観察事項	分類・時期・産地	
								口徑	器高	底径			重さ
74	46	1	P-05	P613	沖縄産 無軸陶器	小碗	底	-	(3.3)	3.8	-	底口縁、外面は上方から面取りを行う計9単位、間隔は不均一、面取りの境・量付には白化現象、見込みは砂の目触り強。軸は25GY7/1明オリーブ灰。素地は密。色調は5Y5/1灰色。	
74	46	2	O-02	P380- P381	本土産 陶器	碗	口	(17.6)	(5.5)	-	-	底面から「ハ」の字状に開く。口縁直下に黒線6条。内外表面無軸後白化粧土による象嵌。軸は灰緑(2.5Y6/3)に近い黄色。素地は密。色調は2.5Y6/8/4黄褐色。	
74	46	3	P-20- P-01	SX17	本土産 磁器	碗	口	(14.4)	(5.7)	-	-	内湾口縁、外面口縁直下に黒線2条。体部に唐文字、内湾口縁と見込みに黒線各1条。器蓋の着色は淡青色。素地は密で白色微粒子。色調は5Y7/1灰白色。	肥前
74	46	4	P-04	P74	半灰	染付	碗	口	(15.8)	(5.0)	-	底口口縁、内湾口縁直下に黒線1条。見込みで黒色。軸は透明釉(10YR7/3)に近い黄褐色。素地は普通で黒色微粒子を多く含む。色調は2.5Y8/3淡褐色。	18世紀～19世紀 薩摩・広東系
74	46	5	O-02	SK9	半灰	染付	碗	底	-	(2.2)	(7.4)	高台肩部は内側から削り出す。軸は透明釉5Y7/1灰白色で内外面とも貫入細かい。高台肩付・見込みは釉割さ。重ね向きあり。素地は密。色調は10YR8/2灰白色。	18世紀 薩摩・広東系または 徳化系
74	46	6	O-02	P384	沖縄産 無軸陶器	壺	底	-	(13.3)	11.5	-	底面から外側へ開き立ち上がる。若干上り坂。体部内面に部分的に窪付着。外面に頸口の5分角のみあり。素地は密。色調は5Y8/4淡褐色。	
74	46	7	P-01	P440	1層・ 上部 完整	沖縄産 無軸陶器	壺	体	-	(11.6)	-	肩から強く張り、全体的に器表面に凹凸あり。外面に窪付着。軸はツツク(種10YR4.5/6)に近い黄褐色。素地はやや密で白色微粒子を含む。色調は5Y8/4(3)に近い赤褐色。	
74	46	8	P-05	P642	沖縄産 無軸陶器	播鉢	口	-	(3.4)	-	-	口縁部調整調整回転コナダ。口径7mm/1.4cm以下。素地は密。1mm以下の白色微粒子を含む。色調は2.5Y8/5明赤褐色。	IVa類
74	46	9	O-02 + P-02	P255	沖縄産 無軸陶器	播鉢	底	-	(5.9)	(10.2)	-	底部静止への切り無調整。口径は本2.1cm、1本あたり巾0.1～0.15mm。素地は密で、～2mmの砂粒を含む。焼成は弱い。色調は10YR 6/2灰褐色。	I～II類
75	47	10	P-03	SK3	半灰	青磁	碗	口	(12.8)	(5.0)	-	底口口縁、口端のみやや膨らむ。外面は陶器に施す青文、刺繍と書字は別に施してあり、赤文字は施さず。軸は10Y6/2オリーブ灰色。内外面とも貫入粗い。素地は密で微粒子。色調は2.5Y7/1灰白色。	15世紀後半 龍泉系
75	47	11	Q-04	P126- P127	半灰	青磁	碗	底	-	(2.9)	(5.0)	高台肩付は外側から斜めに削り出す。高台脇に黒線1条。軸は10GY8/1明緑灰色で光沢あり。内外面とも貫入粗い。外底面は露胎。素地はやや密で0.5mm以下の微粒子。色調はN8/灰白色。	龍泉系
75	47	12	O-02	P274- P275- P276	半灰	青磁	皿	口	-	(2.5)	-	櫻花皿。内湾口縁直下に波状文。内外面無軸。軸は5GY7/1明オリーブ灰色。素地は密で灰白微粒子。色調は2.5Y7/2灰黄色。	15世紀前半～半ば 龍泉系
75	47	13	N-01	P670	完整	白磁	碗	口～ 底	14.8	5.2	7.2	高台は外側から斜めに削り出す。体部は「ハ」字状に開く。口縁は直立、口唇は四角。内湾見込みは外面高台部～高台内湾部。内外面に細かい貫入あり。口端部には紅付あり。素地は密。色調は2.5Y8/1灰白色。	18～19世紀か 薩摩・広東系
75	47	14	O-02	P257	半灰	白磁	皿	口～ 底	(11.8)	2.4	(7.0)	腰はやや膨らみ口縁は外反。高台低く断面は逆台形を呈する。軸は透明釉(2.5Y7/2灰黄色)。貫入は殆どみられない。高台肩付は釉割さ。量付に砂目付着。素地は密で黒色微粒子を含む。色調は2.5Y8/1灰白色。	16世紀 筑後・薩摩系
75	47	15	O-02	P283	2層 完整	無軸陶器	意	口	(11.8)	(3.6)	-	同軸子調整。口端部は外に向いて面取りを行った上で調整。素地はやや密で、灰褐色・白色微粒子の混合物入り。色調は10YR 6/1灰褐色。	中国産
75	47	16	P-03	P34	半灰	褐釉陶器	壺	口	(15.6)	(2.7)	-	口端部は外反し、口端部を折り返して作出。内外面に黒輪(7.5Y3/1黒褐色)、やや気泡が多い。素地は密で、～1mmの白色微粒子を含む。色調は2.5Y8/1灰褐色。	タイ産
75	47	17	O-02	P274- P275- P276	半灰	滑石製品	石鍋	高8.1	巾6.2	厚1.3	122.3	口縁・底部とも不明。外面は縦～斜位の穴が多く残る。内面は丁寧に研磨される。3分所の穿孔を確認。色調は灰褐色。	
75	47	18	P-02	P336	沖縄産 無軸陶器	樽管 扉首	長3.9	高1.5	径2.0	8.8	-	素焼きの扉首。ヘラケズリ・面取りにより断面八角形に成形する。扉首部から縁で挟んで孔を広げている。素地は密。色調は5Y8/6明赤褐色。	
75	47	19	P-04	P564	沖縄産 無軸陶器	樽管 扉首	長4.0	高1.4	径1.9	7.1	-	素焼きの扉首。ヘラケズリ・面取りにより断面八角形に成形する。成形時に黒輪を用いた痕跡がある。素地は密。色調は5Y8/5明赤褐色。	
75	47	20	O-02- P-02	P332	2層 完整	滑石製品	樽管 扉首	長3.2	巾2.5	厚2.4	26	砂削を素材とする。外面を縦状に面取りする。全体に使用による塵や微塵がある。火皿外径1.4cm、小口外径1.4cm、色調は2.5Y8/1灰褐色。窪付着。	
75	47	21	P-03	SK3	半灰	金属製品	樽管 吸口	長3.8	巾0.9	-	4.8	小口から先端に向って砂が詰まっている。全体が細輪状になっている。小口内径0.7mm、口内径0.2mm。	
75	47	22	O-02	SK9	金属製品	鉄線	長8.3	巾2.3	厚0.7	(11.4)	-	全体に錆で凸凹が強い。蓋は断面が四角と思われる。断面はほぼ直線状。	
75	47	23	O-01	P236	半灰	金属製品	鍍金 座金	3.4	厚0.7	7.8	-	円形の鍍金。中央に径2mmの円孔。周縁に菊花文の彫刻。外面には鍍金を施すのが剥落している。砂の付着物と青錆がところどころあり。	
75	47	24	P-01	P656	青銅製品	錠前 金	長(3.7)	巾(3.1)	厚(0.9)	16.8	-	体部の縁辺は鋸に切り切断。体部裏面中央には鑿打ちによる窪み。	
75	47	25	O-01	SK19	半灰	鉄貨	板文銭	2.4	厚0.18	3.3	-	銭文は判読不能。	
75	47	26	O-20	P433	半灰	鉄貨	板文銭	2.1	厚0.1	1.3	-	方孔は1方角1cmで、縁辺四角。	
75	47	27	R-04	P131	2層 完整	鉄貨	板文銭	2.1	厚0.1	1.4	-	2つに割れている。方孔は縁辺の加工が不十分。	

第40表-2 その他遺構の出土遺物 観察表(2)

探洞	序典	調査 番号	出土地		種別	器種	部位	法量 ()は測定値				観察事項	分類・時期・産地		
			グリッド 遺構	層位				口径	器高	底径	重さ				
76	48	28	O-02	P382	2層 完備	石器	磨製石斧			長9.5	06.6	厚2.0	253.0	平面は短冊状を呈する。全面に研磨痕残る。刃部は両面から研ぎ出される。度レイ砂を素材とする。	
76	48	29	P-02	P336		石器	磨製石斧			長7.9	04.1	厚1.5	81.0	右斧頭用。右斧としての機能終了後、磨石ないし磨石として使用されたか。右側縁には石の斧側縁の調整が残存する。砂質片岩を素材とする。	
76	48	30	O-02	P369	平裁	石製品	砥石			3.7	10.6	1.8	108.0	砥石。平面は長方形を呈する。正・裏両面に使用痕が見られる。磨状痕は比較的深い。荒砥として使用されたか。片状砂岩を素材とする。	
76	48	31	P-05	P94	完備	石製品	石鏃			2.5	2.7	2.4	21.7	上面に穿孔を試みた痕あり。サンゴ片鏃を利用。	
76	48	32	P-05	SK5	2層	貝製品	貝玉			縦2.8	横2.7	高1.1	9.5	ツガキガイを利用。縦塔部を切り取り平玉状にして上下面を研磨している。特に下面は丁寧に研磨される。	
76	48	33	P-03	P583	1層	貝製品	ツガキガイ 穿孔製品			縦3.1	横2.4	高1.0	5.9	ハナマルユキを利用。背面を削り取り縁辺を整える。背面の研磨が明確。魚残りは良好。	
76	48	34	O-02	F248・ F349・ F250		貝製品	ツガキガイ 穿孔製品			縦3.4	横2.6	高1.1	7.9	ハナマルユキを利用。背面を削り取り縁辺を整える。上面に研磨はみられない。	
76	48	35	Q-04	SK7・ SD1		貝製品	ツガキガイ 穿孔製品			縦3.2	横2.1	高1.0	5.1	ハナマルユキを利用。数回の敲打により背面に穿孔する。穿孔後、孔の上面を平滑にする。魚残りは良好。	
76	48	36	P-05	SK5	2層	貝製品	ツガキガイ 穿孔製品			縦3.2	横1.8	高0.9	1.9	ハナビタダカウを利用。背面を削り取っている。研磨は見られない。	
76	48	37	P-01	P226	1層	貝製品	ツガキガイ 穿孔製品			縦3.5	横1.7	高0.8	1.6	ハナビタダカウを利用。背面を削り取っている。研磨は見られない。骨髄は残存しない。	
76	48	38	Q-04・ B-04	F50・ SK7	完備	貝製品	二枚型 穿孔製品			縦3.8	横11.3	厚3.2	125.5	ヒメジャコ(左型)を利用。器面は磨耗著しい。發頂付近に1ヶ所の穿孔を有する。	
76	48	39	O-02	P350	1層	貝製品	二枚型 穿孔製品			縦3.9	横6.1	厚3.0	72.4	オシシナ(左型)を利用。發頂部に径1.5cm程度の粗孔を持つ。表面の風化が著しい。	
76	48	40	P-05	SK5	3層	貝製品	二枚型 穿孔製品			縦3.2	横4.4	厚1.4	7.1	リュウキュウザルガイ(右型)を利用。中央部に内側から刺突した穴がある。孔径1cm前後。周縁の一部に新しい欠けあり。	
76	48	41	P-02	SK1		貝製品	二枚型 穿孔製品			縦3.3	横4.0	厚0.1	3.5	リュウキュウシロ(左型)を利用。外側から穿孔する。孔径1cm前後。	

第IV章 遺構と遺物の検討

第1節 沖繩産播鉢と碗の型式からみた各層・遺構群の年代の検討

分析の方法

本遺跡では、第III章第3節「各層の遺物概要」で述べたように、遺物包含層および地山上面の遺構群から、近世～近代の沖繩産陶器などの遺物が多数出土しているが、一方で、貝塚時代後期やグスク時代・古琉球期の遺物も多数出土している。この状況から考えると、本遺跡の遺物包含層と遺構群の年代は近世～近代で、これに古い時代の遺物が混在しているといえる。そこで、遺物包含層と遺構群の年代を具体的に把握するために、沖繩産の無釉播鉢と施釉碗について、型式別に各層の出土数量を定量分析する作業を行った。

播鉢と碗を定量分析対象にした理由は、①播鉢は力を入れて食材をすり潰すという機能上破損しやすいため消耗頻度が高く、また、碗も食器として日々使用されることから破損による消耗頻度が高いと考えられるからである。②消耗頻度の高さは、この2つの器種が長期間にわたって使用されることが少なく時期を限定しやすいこと、③破損・廃棄に伴う出土量が比較的多く定量分析に適していること、④型式編年が行われていること、などである。

分析対象にした層位は、I層（客土・表土）を除く全ての遺物包含層と地山上面の遺構群だが、IV層は出土遺物の全体数量が数点と少なく、播鉢と碗の出土も認められなかった。これらの各層と遺構群から出土した沖繩産陶器の播鉢と碗の全数（大小全ての破片）を対象に型式分類を行い、層位・遺構群別に出土点数を調べた。播鉢・碗の型式分類は第III章で述べた。播鉢については、16～17世紀の沖繩産瓦質土器の播鉢（以下「瓦質播鉢」）を含めて検討した。碗についても、近代のいわゆるスンカンマカイ（本土産磁器碗）を加えて分析した。スンカンマカイは、出土点数が少ないため碗に限定せず全ての破片をカウントした。

播鉢各型式の層別割合の検討

第41表は、第III章第3節に掲げた播鉢各型式の層別出土数量表（第11表）から、型式不明を除く各型式の層別出土数量を抜き出し、これと瓦質播鉢の出土割合を示したもので、第77図はそのグラフである。第III章でも述べたが、本遺跡では、確実なI類は出土していないので「I類又はII類」のほとんどがII類と考えられる。

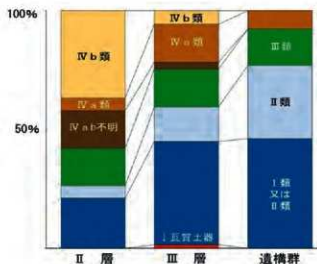
地山上面の遺構群は「I類又はII類」とII類が併せて77%。III層も「I類又はII類」とII類が主体（57.2%）。II層ではIV類（IVa類・IVb類・IVa類不明の合計）が主体（57.9%）である。このことから、II類→IV類という傾向が層位的に押さえられる。また、IVa類とIVb類の関係を見ると、III層とII層で両型式の出土割合が逆転しているので、IVa類→IVb類という傾向も層位的に確認できる。III類は層位的増減の傾向を確認することができない。

播鉢各型式の盛行期について、安里・上原・家田（1987）の編年では、I類：17世紀代、II類：17世紀末～18世紀前半、III類：18世紀後半～19世紀前半、IV類（IVa類とIVb類）：19世紀後半～20世紀に設定している。

この年代設定は良好な出土資料で検証する必要があるが、この年代を前提にして各層の「中心となる年代」を推定すると次のようになる。第III章で述べたように本遺跡では確実なI類は出土しておらず、I類又はII類と分類したものの殆どがII類と考えられることや、16～17世紀の瓦質播

第41表 播鉢の層別数量と割合

	II層	III層	遺構群	合計
瓦質播鉢				
I類orII類	4 (21.1%)	30 (42.9%)	6 (46.2%)	40 (39.0%)
III類	1 (5.3%)	10 (14.3%)	4 (30.8%)	15 (14.9%)
IV類	3 (15.8%)	11 (15.7%)	2 (15.4%)	16 (15.8%)
IV類ab不明	3 (15.8%)	2 (2.9%)		5 (5.0%)
IVa類	1 (5.3%)	11 (15.7%)	1 (7.7%)	13 (12.9%)
IVb類	7 (36.8%)	4 (5.7%)		11 (10.9%)
合計	19 (100.0%)	70 (100.0%)	13 (100.0%)	101 (100.0%)



第77図 播鉢の層別割合

鉢の出土がわずかに2点にとどまることなどから、本遺跡の包含層と遺構群の年代は、播鉢Ⅱ類以後で、17世紀に遡らないと推定できる。地山上面の遺構群は、Ⅱ類を主体にⅢ類が多いので18世紀代。Ⅲ層は、Ⅱ類を主体にしながらもⅣa類も一定量出土しているため18～19世紀。Ⅱ層は、Ⅳb類が主体を占めるため、19～20世紀と推定したい。

碗各型式の層別割合の検討

第42表は、第三章の沖繩産施軸碗各型式の層別出土数量表(第9表)にスカンマカイを加えたもので、第78図はそのグラフである。グラフでは、出土数が4点の遺構群のデータは省いた。

層単位でみると、Ⅲ層ではⅣa類(44.9%)を主体にして次いでⅠ類(26.3%)が多い。Ⅱ層もⅠ類(35.2%)とⅣa類(31.0%)が主体だが、明治期以後に流通したスカンマカイ(15.5%)と、Ⅳb類(8.5%)が増大している。Ⅲ層からⅡ層への増減をみると、Ⅰ類とⅣb類・スカンマカイがⅢ層からⅡ層へと増大し、Ⅱ類・Ⅲ類・Ⅳa類は減少している。概ね従来の碗型式の型式変遷の知見に対応しているが、Ⅰ類は逆に増大しており、従来の知見とは異なる結果になった。

碗各型式の年代については、瓦質土器が16～17世紀〔家田1998、瀬戸2011〕と考えられているが、施軸碗の各型式の年代設定については議論があり確定していない。灰軸碗(本書のⅠ類)については、池田〔2000〕が壺屋統合の1682年前後～18世紀中葉、家田(2000)が17世紀後半～18世紀後半とみている。本書のⅣ類碗の特徴である白化粧掛けの出現時期については、18世紀中葉(池田)、18世紀後半(家田)と違いがある。また、家田は、白化粧に線彫りや色絵付けを行う製品(本書のⅣb類)は、18世紀末～19世紀前半代に集中し、釉薬にコバルトを用いる製品(本書のⅣb③④類)は19世紀後半以後とみている。

碗型式の年代をめぐる先行研究をふまえると、Ⅲ層の年代は、17世紀後半～18世紀中・後期以後のⅠ類も多いが18世紀中・後期以後のⅣa類が主体になっているので、17世紀に遡ることはないと考えられる。また、18世紀末～19世紀のⅣb類や明治以後に流通するスカンマカイの出土が少数であることから19世紀以降と推定される。したがってⅢ層の中心年代は18世紀代に設定できる。Ⅱ層の中心年代は、Ⅳb類やスカンマカイが増大していることから19～20世紀と推定したい。

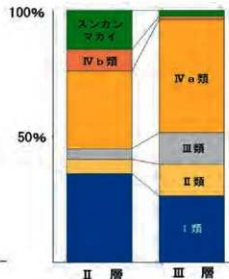
播鉢と碗の年代検討の整理

以上検討したように、本遺跡の各層・遺構群の中心年代の推定は、播鉢型式では、Ⅱ層が19～20世紀、Ⅲ層が18～19世紀、遺構群が18世紀である。一方、碗型式では、Ⅱ層が19～20世紀、Ⅲ層が18世紀と推定した。両者ともⅢ層と遺構群が17世紀には遡らないという点で一致している。Ⅲ層の年代については播鉢と碗ではズレがあるが、これは碗型式の年代が妥当だと考えている。碗Ⅰ類(灰軸碗)は、17世紀後半～18世紀中葉ないし後半と考えられているが、本遺跡では19～20世紀のⅡ層で増大している理由についてはよく分からない。

各層・遺構群の年代を上記のように考えると、遺構群やⅢ層で多数出土した輸入陶磁器など14～16世紀の遺物の位置づけが問題となる。この時期の輸入陶磁器には大破片もあり、次に検討する近世以前と考えられる鍛冶関係遺物も多数出土している。14～16世紀の確実な土層や遺構が確認できないので推定するほかはないが、おそらく14～16世紀の遺物包含層やピット、鍛冶遺構などが存在していたところに、18世紀以後の人間活動(新たなピット・土坑群の形成=集落形成)によって古い土層や遺構が攪乱されⅢ層や遺構群が形成されたと推定しておきたい。

第42表 碗各型式と層別数量と割合

	Ⅱ層		Ⅲ層		遺構群	合計		
Ⅰ類/灰軸	25	35.2%	44	26.2%	1	25.0%	70	28.8%
Ⅱ類/濃胎釉・鉄軸	4	5.6%	21	12.5%	1	25.0%	26	10.7%
Ⅲ類/折分け施軸	3	4.2%	21	12.5%	1	25.0%	25	10.3%
Ⅳa類/白化粧無文	22	31.0%	75	44.6%	1	25.0%	98	40.3%
Ⅳb類/白化粧有文	6	8.5%	3	1.8%			9	3.7%
スカンマカイ	11	15.5%	4	2.4%			15	6.2%
合計	71	100.0%	168	100.0%	4	100.0%	243	100.0%



第78図 碗各型式の層別割合

第2節 鍛冶関係遺物の検討

鍛冶遺物と焼土の関係

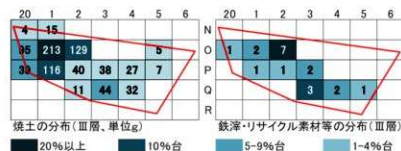
鍛冶に伴うと考えられる遺物がⅢ層と遺構群から多数出土している。第43表は、鉄滓などの鍛冶遺物とリサイクル素材と考えられる遺物の集計表である。鍛冶遺物は、桶形滓を含む鉄滓や4枚に折り曲げた鍛造鉄板などで、0-02グリッド周辺で出土している。リサイクル素材と考えた遺物は、鑿による切崩痕がある銅製錠前座金や銅製留め金具、折り取った銅製金具の一部、摩耗した鍍金銅製座金、鉄鏝、五銖銭、政和通宝、永楽通宝、中世無文銭などである。いずれも16世紀以前の遺物と考えられる。特に銭貨は、発掘面積が427㎡という小範囲にもかかわらず14枚も出土しているが、これは鍛冶にともなうリサイクル素材と考えると説明がつく。

第44表は、焼土の個数と重量のグリッド・層別集計である。出土グリッドが「遺物台帳」に複数記載されている場合は、出土数量を各グリッドに按分した。焼土には、炉壁面やフイゴの羽口などは確認できなかったが、鍛冶に伴う遺物と考えられる。焼土と鉄滓などの鍛冶遺物やリサイクル素材との対応関係を検証するために、出土量が多いⅢ層におけるグリッド単位の平面分布図(第79図)を作成した。図には、各グリッドに出土数量を注記し、その%を色で示した。鍛冶遺物・リサイクル素材と焼土の分布は、両者とも調査区北側(0-01・02グリッド)に中心があり、ともにセットになる鍛冶関係遺物と考えてよいだろう。

鍛冶関係遺物の所属時期

鍛冶関係遺物は、Ⅲ層と遺構群から多数出土している。これらの層位からは18～19世紀の近世沖繩産陶器とグスク時代・古琉球の遺物が多数混在して出土しており、鍛冶関係遺物がいずれの時期に所属するのか検討が必要である。

リサイクル素材と考えられる銭貨や鉄鏝からみて、グスク時代・古琉球期に属すると考えられるが、これは遺物の平面分布からも確認できる。第79図のⅢ層における焼土と鉄滓・リサイクル素材等の平面分布は、15世紀前半～半ばを主体にした青磁の平面分布(第40図)とよく対応している。いずれも0-01グリッド周辺に分布の中心がある。これとは逆に、Ⅲ層における18～19世紀の沖繩産釉陶器の平面分布(第22図)や沖繩産無釉陶器の平面分布(第26図)とは一致しない。



第79図 Ⅲ層における焼土と鉄滓・リサイクル素材の平面分布

第43表 鍛冶遺物・リサイクル素材の集計

種類	点数	層位・グリッド/遺構	検出No.	写真No.	図No.	備考
鉄滓/桶形滓	1	Ⅲ層				
鉄滓/桶形滓	1	Ⅲ層				
鉄滓/桶形滓	1	Ⅲ層	O-02			
鉄滓	1	Ⅲ層				
鉄滓	1	Ⅲ層				
鉄滓	1	Ⅲ層	P-01			
鉄滓	1	Ⅲ層	Q-03			
鍛造鉄板	1	Ⅲ層	O-02	52	31	7
鍍金留め金具	1	Ⅲ層	P-01	19	7	36 鑿で切崩
鍍金縁の金具	1	Ⅲ層	Q-04			3 金具の一部
銭貨/永楽通宝	1	Ⅲ層	O-20			9
銭貨/政和通宝	1	Ⅲ層	O-01			8
銭貨/無文銭	1	Ⅲ層	Q-05			15
銭貨/無文銭	1	Ⅲ層	P-02	52	31	16
銭貨/無文銭	1	Ⅲ層	P-03			12
銭貨/無文銭	1	Ⅲ層	Q-04			13
銭貨/無文銭	1	Ⅲ層	Q-05			14
銭貨/無文銭	1	Ⅲ層	P-03/Q-03			11 2枚接着
銭貨/五銖銭	1	遺構群	P-04 / SD1	68	42	1
銭貨/無文銭	1	遺構群	O-20 / P-03			26
銭貨/無文銭	1	遺構群	R-04 / P131			27
銭貨/銭文不明	1	遺構群	O-01 / SK19	75	47	25
錠前錠前座金	1	遺構群	P-01 / TK56			24 鑿で切崩
銅金留め金具	1	遺構群	O-01 / P200			23
銅金留め金具	1	遺構群	O-02 / SK30			22
合計	28					

第44表 焼土のグリッド・層別の集計

グリッド	重量(g)					遺構群	備考
	I層	II層	III層	IV層	地上		
N-20			36		36		7.2 3
N-01			149				14.9 1
O-20	27.0		95.4			5.6	128.0 23
0-01			213.3			34.8	248.1 30
0-02			128.6			45.7	174.3 29
0-04						4.0	4.0 2
0-05			4.6				4.6 1
0-06						22.5	22.5 2
P-20			39.1			30.6	69.7 16
P-01			116.2			66.9	183.1 32
P-02	37.2		40.4			40.7	118.3 27
P-03			37.7			23.9	61.6 29
P-04			17.8	27.0		74.8	119.6 21
P-05			6.6			13.1	19.7 7
Q-01						8.3	8.3 2
Q-02	33.7		11.0			6.8	51.5 6
Q-03	5.8		44.2			65.8	115.8 25
Q-04			32.2			7.9	40.1 9
R-03			3.7			3.2	6.9 3
合計	107.4	17.8	814.8			3.6	454.6 1398.2 265

第3節 遺構と遺物の様相

遺構と層序の検討

今回報告する千原遺跡の遺構は、近代～戦前、近世、そして地山（V層）上面の3面にて確認された。

近代～戦前の遺構としたのが方石組遺構や石列である。調査区南部に位置する両遺構は、ともに近代～戦前の遺物包含層（II層）掘削時に石組を構成したと思われる転石が出土したこと、石列の形状が認められたことから、近代以降に構築されたものとして捉えた。空中写真や戦前の屋号図〔北谷町教育委員会2006〕などの史資料に照らし合わせると、当地は浜川集落のうち、屋号「運天小」「島袋」の敷地の北縁に該当する（第80図）。検出された石列は、主軸方向が近代の浜川集落の地割と一致していることから、屋敷、もしくは屋敷境の区画に伴う施設としての可能性が考えられる。この石列は、地山上面で検出された溝SD1・2と同位置・同軸にあり、区画の位置は近世（18世紀頃）から踏襲されていたものと考えられる。ただし、区画に伴うと考えられる遺構は調査区南部のみで、遺構の範囲も限定的で残存状況も良好とは言い難い状況であった。

次に近世の遺構とした動物遺体集中部2ヶ所とタカラガイ集積遺構については、ともにIII層中から確認された遺構である。黒褐色砂質土が全面的に展開するIII層を掘削、除去していく段階で発見されたものであり、ブタの埋葬状況、ウマの下顎骨の検出時はその掘り込みが確認できなかった。但し、タカラガイ集積遺構については掘り込んで埋めたのか、もしくは当時の地表面にマウンド状にして集積したのか、両方の可能性が指摘できる。

そして、地山（V層）上面にて確認された750基余のビット及び土坑は、白砂層の至るところを掘り込んでおり、平均深度は24.52cm、深いところでは75cm以上掘り込んでいる土坑も複数あった。これらの遺構埋土からは沖繩産陶器とともに青磁や染付といった輸入陶磁器も出土しているものが過半数を占める。遺物から判断すると地山上面の遺構は、基本的に近世以降に掘り込まれたものと捉えられるが、遺構から輸入陶磁器も混在して出土する状況を考えるにあたって、基本層序の特にIII層との関係について検討してみたい。近世の遺物包含層として捉えているIII層は、本遺跡から出土した遺物総量の63.5%を占める。そのうち沖繩産陶器は45%、輸入陶磁器は32%となる。輸入陶磁器が層内遺物の3割以上の割合を占めることから、III層はグスク時代から近世にかけて堆積していったものと考えられる。そして、近世期に堆積が進む過程で建物等を構築する際の掘り込みが行われたこと、その後も頻りに建て替えが行われたことなどから、地中に内包した遺物が攪乱されてしまったものと考えられる。

遺構と遺物からみた千原遺跡の消長

当調査では、貝塚時代から近代に亘る様々な時期の遺物が出土した。主要遺物の分布図は第82図、時期毎の大枠の遺物の変遷は第83図の通りである。

〈貝塚時代〉

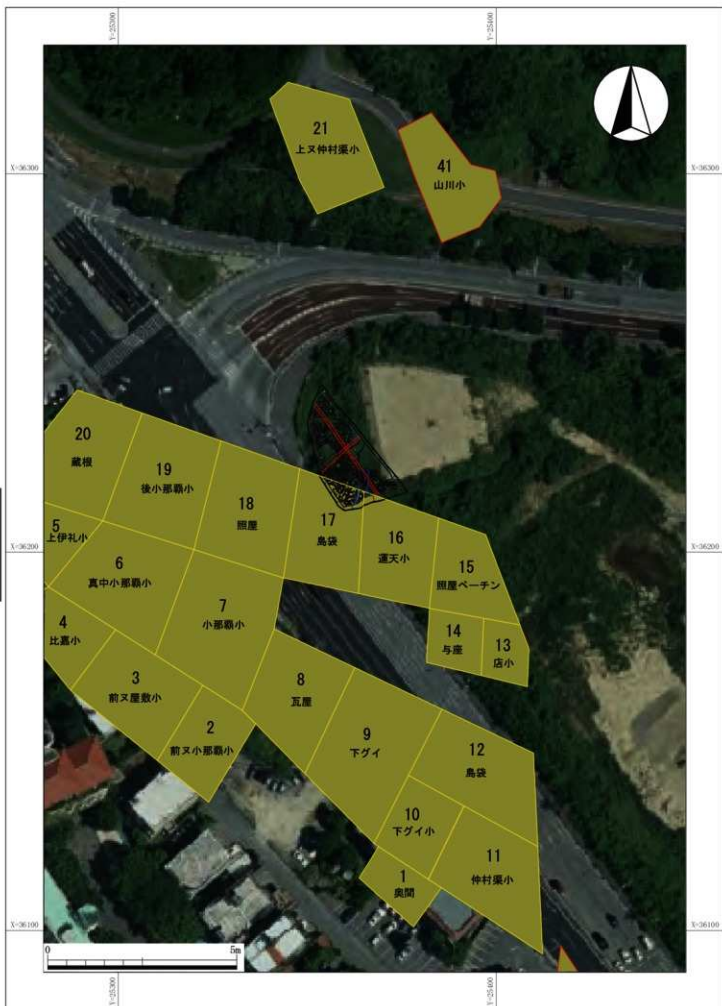
貝塚時代の遺物としては、土器や石器がある。土器まぐびれ平底期のものが主体で、それより遡る資料は認められない。石器には磨製石斧や磨石などがある。出土点数・分布とも限定的で、遺構も確認できない。

〈グスク時代・古琉球〉

グスク時代・古琉球の遺物としては、輸入陶磁器やグスク土器などがある。青磁は、12世紀後半～16世紀前半までの幅広い時期に亘る資料が揃っている。器種は碗・皿が主体で、それ以外は少ない。文様には、蓮弁文（ヘラ彫り蓮弁文／細蓮弁文／ラマ式蓮弁文）、弦文、雷文などがみられる。白磁は、ピロースクタイプⅢ・今帰仁タイプなど14世紀以降に比定される福建省諸窯の製品が主体である。染付は、15～16世紀頃の景德鎮窯系の碗や小杯のほか、少量ながら漳州窯系の碗や色絵もみられる。グスク時代・古琉球に帰属する輸入陶磁器は、全体的にみると15世紀代に位置づけられるものが多いようである。鍛冶関係物もこの時期のものと考えられる。

古手の資料としては、青磁の割花文碗（第41図1）や無文直口碗（第41図18）、グスク土器、カムイヤキA群、滑石製石鍋（第75図17）などが少量であるが認められる。本遺跡では、グスク土器やカムイヤキに比して石鍋や白磁玉縁碗が少ない。基本層序IV層中で確認した炭化物集中箇所から採取した炭化物からは、放射性炭素年代測定で13世紀後半（較正值）の値が出ており（第V章第3節参照）、13世紀頃にグスク時代の生活域の初現が認められよう。これは平安山原A・B・C遺跡でも同様な状況である。

14～16世紀頃の遺物の分布をみると、青磁が調査区北側の0-20・01およびP-01グリッドで出土点数が多く、この3グリッドで青磁全体の3割以上を占めている。遺構では、IV層を起源とする埋土を有するビット・土坑が北側



第80図 千原遺跡と近代浜川集落（北谷町教育委員会『北谷町の地名』に加筆）

で少なからず分布しており、出土遺物もやや古手であると思われる。IV層系遺構と青磁などグスク時代・古琉球の遺物とは、分布範囲が概ね重なることから、これらが密に分布する範囲が、当時の主たる居住域であった可能性が高い。但し、当期の遺物包含層や遺構は後世の人的活動により攪乱されているため、遺構の厳密な時期比定、および掘立柱建物や築造関係遺構をはじめとした集落構成要素を明らかにすることはできなかった。

(近世)

当該時期の遺物として、輸入陶磁器では白磁・染付が目立つ。産地は、いずれも碗は福建・広東系が主体で、杯は徳化窯系や景德鎮窯系のものが認められる。染付碗の施文方法は、印青花など簡略化されたものが中心となる。沖縄産陶器は、碗・播鉢をはじめ諸々の生活道具が出土。施釉陶器では、釉種・施釉技法として、①灰釉浸し掛け・②鉄釉浸し掛け・③内外面掛け分け・④白化粧・透明釉の各種が認められる。III層では全種類が出土する。遺構群では白化粧土を塗布するものが少ないのに対し、II層では灰釉と白化粧土が主体となる。碗の時期別変遷は本章第1節でみた通りだが、他の器種についても釉種・施釉技法は同様で、大きく鉄釉一掛け分け一白化粧の順序が追認できる。灰釉の位置づけは本遺跡では十分確認できない。沖縄産陶質土器は、II・III層では良好な資料が多いが、遺構群では少量であり、当地における陶質土器の初現時期は、碗IV類が主体となる18世紀後半以降に認められるであろう。

17世紀代の遺物としては、染付(芙蓉手など)、本土産陶器(肥前・鉄絵皿、備前・播鉢(わか)、沖縄産瓦質土器(播鉢(わか)など)など数点みられるのみで、沖縄産無釉陶器の播鉢I類なども認められない。前代のグスク時代・古琉球、後代の18～19世紀と比較すると非常に少ない。該期の人々の活動の痕跡は低調であったと言える。

続く18～19世紀は、III層や遺構群の形成時期に当たる。特に地山上面では、調査区南半を中心に、夥しい数の遺構が形成されており、幾度となく建物の建て替えや土坑類の再掘削などがおこなわれていたことが窺われる。遺構群は、III層に近似した黒褐～灰褐色砂質土を埋土とするものが北側を除いて密に分布する。近世段階でも建物の抽出など厳密な集落要素の検討はできなかったものの、居住域の範囲としてはある程度把握することが可能である。タカラガイ集積遺構などは、居住域の縁辺に位置しているものと思われる。

(近代)

近代の遺物としては、本土産磁器、沖縄産陶器などがある。磁器は砥部産のスカンマカイや瀬戸美濃産のクロム青磁、陶器は沖縄産の碗IV類や播鉢IV a・b類などを主たる構成要素とする。碗の組成としては、本土産磁器よりも沖縄産陶器が優勢である。

遺物分布は、P-04グリッドに中心が求められる。これは、II層の分布範囲、および近代～戦前の屋敷に伴う遺構群が確認された範囲に重なる。ただし、屋敷地の性格を示すような遺物の抽出には至らなかった。

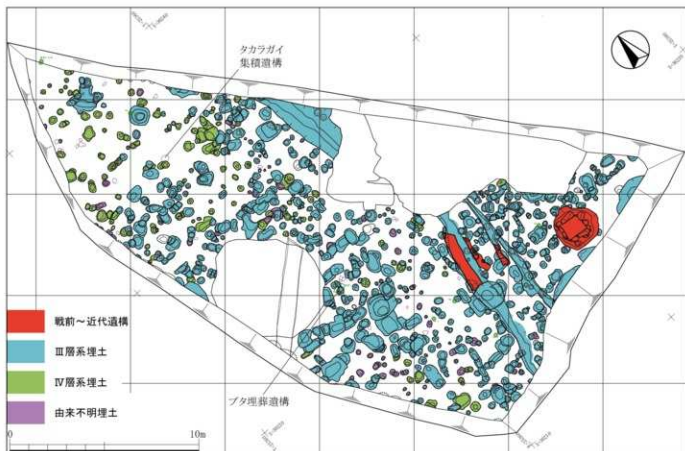
(各種遺物)

煙管は、素材に注目すると、吸口では金属製と陶製、雁首では石製・陶製・金属製がみられる。石製は柱状形と釣鐘形がある。無釉陶器製の雁首は八角形に面取りされる。施釉陶器製の吸口は透明釉を掛けるものである。遺構群とIII層では、第24表で掲げたように、使用する煙管素材の組み合わせが異なる。煙管の大枠での年代観としては、石製・瓦製・陶製の雁首がやや古手で、陶製吸口や金属製煙管などは17世紀後半以降の所産であるという〔たばこと塩の博物館 2012〕。石製・陶製雁首→金属製煙管の推移も、遺構群→III層という層序の中で押さえることができる。

貝製品では、タカラガイおよび二枚貝の背面に穿孔をおこなう有孔製品が多量に出土した。様相を改めて確認すると、遺構群およびIII層では各種のタカラガイ・二枚貝が使用されるのに対し、II層では二枚貝が殆どなく、タカラガイも前段階まで多用されたハナムルユキの比率が減少する。このことから、II層段階では有孔貝製品(貝鍾)が小型化するとともに、錘を用いた漁撈活動そのものが低調となる過程を読み取ることができよう。

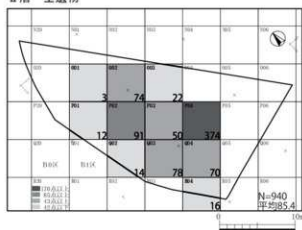
グスク時代・古琉球から近代までの遺物分布の様相を通時的に眺めてみると、グスク時代・古琉球では調査区北側に中心が認められる。近世段階では、沖縄産陶器をみると、継続して北側で濃密に分布する一方、P-04グリッドをはじめ調査区南側でも比肩する程に増加している。そして近代の段階では、P-04グリッドに分布の中心が移動する。即ち、分布域の中心が次第に南へ向かうことが確認できる。

ここで遺構の様相を改めて確認する(第81図)と、北側ではIV層に近似した埋土を有する遺構群が少なくない。近世に形成された遺構群(≒III層系埋土)は北半でやや希薄である一方で調査区南半では特に密に分布する。II層の堆積とII層中遺構(≒近代～戦前帰属)は南東側に限定される。戦前の浜川集落の北限は当調査区南端に掛かる位置に比定できることから、巨視的にみると居住域が近世から徐々に南へと移動していることが認められる。

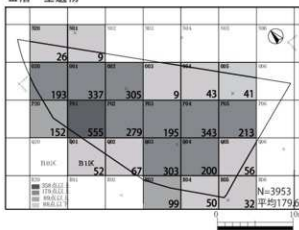


第81図 遺構変遷図

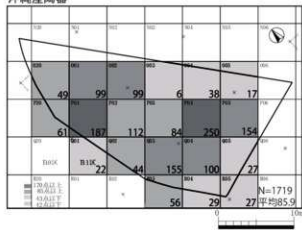
Ⅱ層 全遺物



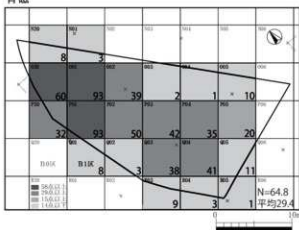
Ⅲ層 全遺物



沖縄産陶器



青磁



第82図 主要遺物分布図

時期	層位	主要陶磁器	その他の遺物
11～13世紀	(III・IV層)	<p>青磁</p> <p>カムイヤキ</p> <p>土器</p>	
14～16世紀	(III・IV層)	<p>白磁</p> <p>染付</p> <p>半練土器</p>	
17～18世紀	(III・IV層)	<p>本土産陶器</p> <p>瓦質土器</p> <p>摺鉢</p>	
18～19世紀	<p>地山土面遺構群</p> <p>III・IV層</p> <p>タカラガイ</p> <p>集積遺構</p>	<p>沖縄産旋軸陶器</p> <p>碗</p> <p>沖縄産無軸陶器</p> <p>摺鉢</p> <p>沖縄産陶質土器</p>	<p>煙管</p> <p>石</p> <p>雁首</p> <p>吸口</p> <p>無釉陶器</p> <p>旋軸陶器</p> <p>金属</p>
近代～戦前	II層	<p>本土産磁器</p> <p>(スカンマカイ)</p>	

第83図 時期別出土遺物変遷図

第V章 科学的分析

第1節 千原遺跡の調査で得られた貝類遺体

黒住 耐二（千葉県立中央博物館）

千原遺跡は沖縄島中部西岸・北谷町に位置する遺跡で、主に近世（≒王国時代）を中心とした遺跡であり、本遺跡の南に位置する平安山原地区（島袋 2008；黒住 2015, 2016a, b）と伊礼原地区（中村 1989；黒住 2007a, 2008, 2010a, 2014a, 2017）からは、これまでの発掘調査により、貝塚時代から現代までの詳細な出土貝類遺体の報告が行われてきた。千原遺跡は、これらの遺跡群の最北端に位置している。今回、北谷町教育委員会による本遺跡の調査で出土した貝類遺体を検討する機会を与えて頂いたので、ここに結果を報告したい。報告に先立ち、種々お世話になった國分篤志氏をはじめとする島田組の各氏に御礼申し上げる。

1. 対象サンプルについて

今回報告するサンプルの大部分はピックアップ法（現地採集資料）によって得られたもので、一部には遺跡の堆積物サンプルから抽出されたものも含まれている。本遺跡のうち、貝類遺体を分析できた部分の基本的な層序と考古年代は、以下のとおりである。

II層：近代で、大きな擾乱はなかったと判断されている。分析した遺構のうち、SD3はII層に帰属するとされる。

III層：近世主体。分析した柱穴（P）は、この時期のものと考えられている。

地上上面：グスク時代～近世初頭の年代か、とされる。

ピックアップ法で抽出された貝類は、各グリッドの層ごとにまとめられており、各層の4/5程度は検討を終了した。これらは、筆者による詳細な同定・出土部位・水磨等の観察・カウントを行ったものと、補助者による優占する種や分類群（シャコガイ類等）および巻貝/二枚貝として、完形・破片を問わず出土数（≒同定標本数）をカウントしたものに分離される。本遺跡では北谷町教育委員会によって、いくつかの遺構から堆積物が採取されており、そのうちの一部に関しては、筆者による従来の方法（黒住 1997:乾燥後、9.5/4/2/1mmのメッシュを用いた水洗選別を行い、浮遊部分（LF）を0.5mm未満のネットで回収する）で水洗選別を行った。これらのうち、主に浮遊部分の陸産貝類については、種の同定・出土部位・成長段階（大形幼貝は成貝の1/2、中形幼貝は1/2-1/4、小形幼貝は1/4未満）・焼けの有無等を確認した。

2. 結果および考察

今回の発掘調査（ピックアップ法）で確認された貝類の分類学的位置と生息場所を第45表に示した。全体として、少なくとも海産腹足類23科86種、海産二枚貝類16科44種、淡水産腹足類2科2種、陸産腹足類2科2種、その他の分類群1種が確認された。なお、堆積物サンプル沈殿部分中の微小貝類のうち、海産種で磨滅しており、明らかに海浜の砂として存在したものに関しては、焼けているかどうかの確認と概数のカウントを行い、詳細な同定結果と個体数を示していない。

(1) 食用貝類遺体

1) 遺体の組成

ピックアップ資料の筆者による詳細なカウントを第46表に、補助者による同定標本数を第47表に、それぞれ示した。これまでの平安山原地区の遺跡と比較するために、第46表に基づいて、同定標本数（NISP）と最小個体数（MNI）を示した（第48表）。ただし、この値には食用とは考えにくいタカラガイ集積遺構と、第46表のP-05グリッドの篩われたと考えられ、採集効率が他と異なると考えられた小形のウミノナ類が集中していたサンプルの個体数は含まれていない。また、同定標本数では、二枚貝の左右殻や大形種の破片を、それぞれ別にカウントするため、これらでは当然値が大きくなる。一方、左右殻の多い方や重複を避けた部位を考慮した最小個体数（MNI）で比較すると精度は増すことになる。平安山原 A 遺跡の貝塚時代後期の遺体群では、優占種を中心に同定標本数と最少個体数の関係を検討し、NISPはMNIの1.38～1.68倍となり、当然二枚貝でNISPが大きくなり、MNIでは巻貝のマガキガイで割合が増加すること

などを示した(黒住 2015)。今回も第 48 表に示したように、第 46 表の両者の関係でも、NISP は MNI の 1.21 ~ 1.53 倍であった。絶対値としての MNI は求められず、MNI で遺跡間の比較を行う場合には、この第 48 表の両者の関係を用いることで、かなり精度の高い比較が可能となる。

第 46 表と第 47 表を合わせた同定標本数による本遺跡の優占種は、時代により異なっていた(第 49 表)。地山直上のグスク時代~近世初頭?とされる層では内湾の二枚貝のヌノメガイ・リュウキュウマスオが多く、マガキガイが次いでいた。近世期に入った III 層下層では、地山直上で多かった 2 種の二枚貝の割合が減少し、リュウキュウシタリ等の他の二枚貝も多くなり、同時にマガキガイやサンゴ礁に生息するシャコガイ類の割合も高くなっていった。III 層の近世期でも、およそ同様であったが、マガキガイの割合が少し増加していた。近代の II 層では、マガキガイの割合が更に増加し、イノー内を中心としたサンゴ礁の貝類も多く、内湾の二枚貝はかなり割合が減少していた。

本地域における近世から近代~戦後の貝類遺体を、多くの遺跡で報告してきた(黒住 2008, 2016a, b, 2017)。貝類では魚類とは異なり、遠方へ出ることなく遺跡前面(=地先)での採集が主であり、採集地点の僅かな違いに採集された種の組成が反映されると考えられる。ただ、これまでの結果から、1) サンゴ礁のイノー内のマガキガイが常に優占する、2) 内湾の二枚貝類も多い、3) ただ内湾の二枚貝類では遺跡等によって優占種が相違する傾向にある、4) 貝塚時代に多かったイソハマグリが優占することはない、5) 干瀬のチョウセンサザエと礁斜面のサラサバテイラは、目立つものの優占度は常にそれ程高くない、という点を指摘することができる。そして、平安山原 A 遺跡で明らかであったように(黒住 2016a)、地点によって内湾性二枚貝のリュウキュウシタリの割合は全体の 1/3 というような高率の場合から、1%未満という例まで大きく変化し、各家庭のような小集団の嗜好による選択を示している可能性もある。これらは、これまでも指摘してきたが(黒住 2016b)、近世以降の貝類遺体の分析では、遺跡全体の集団としての貝類利用から、個別の小集団での種類の選択という面も考慮に入れなければならないことを示していると考えている。

2) ウミナ類の利用

前述したように、P-05 の II 層では堆積物が 5 mm 程度のメッシュで篩われたものから抽出されたと考えられ、リュウキュウウミナが 911 個体と極めて多く、同じく塔型のカヤノミカニモリヤフトヘナタリも確認された(第 46 表)。同様に、筆者の処理した柱穴の堆積物からも、リュウキュウウミナは少数ながら多くのサンプルから得られた(第 51 表)。前述のピックアップ法では評価できていないが、他のグスク時代の遺跡で指摘してきた通り(黒住・金城 1988)、ウミナ類の利用は本地域でも近代まで継続していたと考えられる。

なお、以前にも指摘した通り(黒住 1996)、近世・近代の本遺跡でもウミナ類を含めても 4 mm メッシュで食用貝類をほとんど抽出することができている。遺跡堆積物中の食用貝類遺体を詳細に検討する場合でも、4 mm メッシュを用いることによって組成に関しては精度高い結果が得られることを示している。

3) イソハマグリの減少

本地域では、貝塚時代後期前半等には小形二枚貝のイソハマグリの優占する遺跡が認められ(黒住 2016b)、その後、本種は激減しており、今回の千原遺跡では極めて少なかった(第 49 表)。イソハマグリは、淘汰の良い粗粒の潮間帯砂底に生息する種で、イソハマグリの減少は農耕地の拡大に伴う土砂流出によって海岸に泥が堆積したために生じたことと捉えることも可能である。この可能性を否定できないものの、筆者は本地域では近世期にイソハマグリの優占する地区が存在すること、本地域周辺の海域全体として屋敷集落の形成後も貝類組成に大きな変化を認めたいこと(黒住 2008)、むしろ過去の農耕地は周辺雑草等により開墾地の土砂がトラップされていたのかもしれないと想定されること(黒住 2011)等のことから、本遺跡でも土砂流出の影響はそれほど大きなものではなく、人間の側の選択の結果であろうと考えている。

(2) グスク時代から近代での貝類利用

今回の千原遺跡では、これまでに発掘された平安山原・伊礼原両地区とは異なり、下部に貝塚時代後期等の先史時代貝層は認められておらず、古い時代の貝類遺体の混入を想定する必要がなかった。そのためグスク時代末から近代までの貝類遺体を精度高く検討できた。本地域のまとめとして、この時期の利用貝類の変化に関して考察し、1) グスク時代から「薩摩の琉球入り」で区分される近世期への貝類利用の変化は明瞭でなく、廃棄は連続する可能性が高く、貝類遺体を通じてみた場合、「庶民層」の採集活動に大きな変化はなかったと想定される、2) 近世から近代にかけても同様だと考えられる、ということを示唆した(黒住 2016b)。

今回の千原遺跡でも、第 49 表に示したように、内湾の二枚貝優占からサンゴ礁のマガキガイ等への緩やかな変化は

認められたものの、時代を画するものとは考えられず、前述の傾向を追認したと言えよう。

ただ、本遺跡では、近世期の中でも貝類採集量が多くなる時期のあることを明確に示すことができたと考えている。今回は全面発掘で、およそ同じ精度で中大形貝類がピックアップ法で取り上げられ、各層出土量の4/5程度は分析を行っており、各層の貝類遺体の“絶対量”を評価できると考えられた。第48表に示したように、Ⅲ層の出土量は他の層のおよそ20倍と突出していた。もちろん、Ⅱ層が削られている可能性等はあるものの、Ⅲ層の産棄貝類が極めて多いことは確実である。そして、繰り返しになるが、量が増えただけであり、新たな種類の貝類を利用するようになった訳ではないことにも注意しておく必要がある。

ここで区分した各層の詳細な考古年代は不明瞭なので、貝類産棄の具体的な年代と琉球王国内部での政策との関連等は今後の検討課題である。ただ、貝類採集量の増加は、グスク時代から近世という時代の画期よりは後に生じた事象であることは確実と考えられ、ある程度社会状態が安定していたようにも思える。

(3) 貝類から想定される問題

ここでは、得られた貝類遺体の情報に基づいて考えられるいくつかの点について述べる。

1) タカラガイ集積遺構

本遺跡では、0-01グリッドのⅢ層/近世期に属するとされる極めて興味深いタカラガイ集積遺構が確認され、本報告書に詳述されている(第三章第4節)。ここでは、貝類からみた本遺構に関するコメントを記しておくたい。

本集積遺構で認められた組成等を第50表に示したが、ハナピラダカラの成員が合計1862個体のうちの87.8%と全体の9割近くを占めており、同種の亜成員(外唇は形成されているものの、十分に肥厚していない)も比較的多かった。次いで、ハナムルユキが7.7%、キヨロダカラが2.2%、ナツメモドキは0.2%であった。また、僅かではあるが、底面等に数mmの小孔を有する個体があった。これらの全標本を確認したが、現生標本とも言えるような残存状態で、死殻は含まれていなかった。

今回の資料で興味深かったのは、第50表に示した“小孔”の存在である。この小孔は数mmで、縁は溶けておらず、断面は鋭利であった。この孔は、図版49に示すような“磯金”と総称される岩礁域の貝類等の採集に用いられる金属器の先端によって、タカラガイ採集時につけられた可能性も高い。この小孔は殻の薄い亜成員で高いことも採集時の破損を裏付けていよう。また、木器や石器では、このような小孔を残す形態のものは考えにくく、先端の尖った金属器の存在も想定できる。

本遺構のタカラガイが生貝であったことから、この遺構はタカラガイの身(肉/軟体部)を腐らせて除くため(徐肉)に埋めたものとも理解されよう。ただ、筆者は、腐敗し液状化した身によってタカラガイ特有の光沢のある層が損なわれるので、貴重なタカラガイを地中で腐敗させるは避けるのではないかと考えている。しかし、各地の聞き取りではタカラガイを地中で腐らせるという方法は普通に行われており、管理状態が良ければ光沢のある層に影響はないのかもしれない。今回のタカラガイ集積では遺構の“掘り込み”は不明瞭なようであり(第66図・図版41)、砂質堆積物からなる沖縄の海浜低地の遺跡では、徐肉のための埋設かどうかの検証はかなり難しいと思われる(島2012のタカラガイ集中部の図も参照)。地中に埋めていないとすると、この集積はカゴ等に入れられていたものが放置され、埋まったと考えられよう。

この遺構のタカラガイはハナピラダカラを主体とした中小形の種のみで、第44表に示したヤクシマダカラやホンダカラのような大形種は含まれていなかった。ハナピラダカラ・ハナムルユキ等の中小形タカラガイの“交易品としての利用”は、断片的な交易品集積地の那覇市の御物グスクの資料(新田1977)からも想定され(島袋1997)、文献資料では「耳たぶくらいの大きさ」(真栄平1991)とされ、近年の那覇市・渡地村跡の発掘調査で多数のタカラガイ集中部が確認され、中国との交易にも触れられている(島2012)。これらの例はグスク時代のもと考えられており、今回のような近世期の例はないようである。筆者も当然非食用の利用だと考えており、搬出先は中国あるいはヤマトなのかは判断できない。伝統的な中国向けという想定以外にも、黒住(2014b, p.66)で触れたように商人を経ない“江戸上り”等の機会に、ヤマトのコレクター(≒本草学者)向けの“お土産”とされた可能性も否定できないと考えている。



図版 49 現在、利用されている磯金
(1990年代に八丈島で購入)

グスク時代の中国向けの大量のタカラガイ供給（例えば三島 1971）から、筆者は当時の各間切で採集し、王府へ提供されていた可能性もあると考え（黒住 1995）、本遺跡に近い伊礼原 D 遺跡ではグスク時代にハナビラダカラ・ハナマルユキが前後の時代より割合が高くなっていることを、前述の間切でのタカラガイ採集を示すのではないかと考えたことがある（黒住 2008）。しかし、この遺跡では破損した個体も多く、またタカラガイ集積も確認されていないので、“交易品”のタカラガイ採集を明確には示していない。近年の発掘調査によりタカラガイの最終集積地（あるいは仕出地）が渡地村跡であったと考えられ、交易の一端が明らかになってきている（島 2012）。渡地村跡ではグスク時代層を中心に出土しており、ハナビラダカラが 2/3 を占め、ハナマルユキ・キイロダカラが続くという千原遺跡と同様な組成であった。ただ、アミメダカラやチドリダカラのような生貝を得ることが極めて困難で死殻であったと思われる種やヒロクチダカラのような球形ではない種・ヤクシマダカラのような大形種も少数ではあるが含まれており、集められたものを再度種分けすることが行われたと想定され、一部の集積は集まってきたものの最初の段階のものだと考えられる。

沖縄では、交易用の貝類集積として貝塚時代後期のゴホウラ・イモガイ集積が良く知られている（例えば島袋 2004）。そして発掘調査の進展とともに、ゴホウラ等の供給地である沖縄に残存している集積遺構の数は着実に増加している。貴重な交易品でありながら残存していることの原因として、貝殻の質やサイズが最終利用様式等に合わないためではないかという考えが示され、ある種適当なようにも思える。ただ、筆者としては、ゴホウラ等は、“ある種の贈答品”という位置づけで、“出荷し忘れても、根本的に困ることはなかった”のではないかと考えている（黒住 2014b）。一方、タカラガイは権力者側からの指示により各間切で集めさせた可能性もあると考えたが、渡地村跡を除くと、今回の例が初めてではないかと思われる。特に、平安山原・伊礼原地区では、グスク時代から近世期まで広大な面積の注意深い発掘調査が行われたにも関わらず、タカラガイ集積遺構は確認できていない。この未確認の状況を、筆者はゴホウラ等の集積とは異なり、「確実に回収されたため」に残っていないと考えたい。いずれにしても、今後の沖縄各地での類例確認が待たれる。

また、今回のタカラガイ集積を貝鍾素材のストックと考えることも可能かもしれないが、貝鍾に利用されることの少ないハナビラダカラが多いことや、前述の渡地村出土組成、文献上のサイズから、貝鍾利用とは考えにくい。

2) 漁撈活動—魚類と貝類

前述のタカラガイ集積では、干瀬のハナマルユキも 2 番目に多かったものの、同じ場所に生息し、食用貝類としての時代でもターゲットになっているチョウセンサザエ等は決して多くはなかった（第 48 表）。本地域では、貝塚時代の早い時期から干瀬の貝は少なく、ハナマルユキもタカラガイを集める中では重要な目的の種ではなかったのかもしれない。

食用貝類は前述のように、Ⅲ層でマガキガイを中心にかなり多く出土しており、ある種“サンゴ礁域での活発な漁撈活動”が想定される。しかし、本遺跡の脊椎動物遺体の分析では、魚類遺体は極めて少ないことが示されている（資料実見）。ただ、資料はピックアップ法によるものであったので、小形種が多い可能性も残されていた。第 50 表の堆積物サンプルの分析結果に脊椎動物骨の情報も組み込んであるが、多くのサンプルで 2 ~ 1 mm メッシュ上から魚骨が抽出されているものの、肋骨のような小破片を含めたものであり、出土数は極めて少ないと評価されるであろう。

本地域の他遺跡での近世期以降の魚類遺体の出土は、平安山原 A・B・C の各遺跡では極めて少ないことが示されている（樋泉 2016a, b）。一方、伊礼原 D 遺跡では、魚類遺体は比較的多く、その組成も約半数がフエフキダイ科で、クロダイ属・ブダイ科・ハリセンボン科も目立っている（樋泉 2017）。貝類と類似して、集団間で魚類採集の状況が異なっていた可能性が指摘できるものの、平安山原地区での少なさは顕著であろう。

魚類遺体は稀であるものの、ハナマルユキ等の貝鍾は比較的多く確認されている（第三章第 3・4 節）。実際に貝鍾として利用されたのかどうかの検討が必要かもしれないが、魚を捕るための網は存在するので、漁を行っていたことは確実である。そのため、千原遺跡と平安山原地区の遺跡で、魚骨が稀であった要因について、いくつかの点から考えてみたい。

1 点目は、食用後の魚を骨ごと肥料として利用したために、遺跡に残らなかったという考えである。ヤマトの近世期には、この状況が存在したようであり、遺跡での検証として東京湾港区の雑魚場跡の貝層を詳細に検討したが、魚骨は極めて稀であったという事例がある（黒住ほか 2007）。遺跡の名称に「雑魚」と名のある海岸部の遺跡でありながら、魚骨が含まれていないということの理解として、“廃棄されなかった” / “施肥として利用された” と考えるわけである。ただ、これまでに筆者が見聞きした限りでは、沖縄において魚類を施肥に利用するということは広く行われているように思えない。

2 点目は、沖縄では“シーリー”と称される“ゴミ廃棄構造物”と“その内容物の施肥利用”が知られている。首里城・御内原北地区のシーリー遺構（16世紀頃）では、貝類遺体・哺乳類遺体は稀であったが、フエフキダイ類等の中大形魚類を含む魚類遺体は極めて多いという報告がある（菅原2010；黒住2010b）。この場合、魚骨はある程度溶けた状態で施肥に利用された可能性も想定できる。ただ、平安山原A遺跡では、シーリー様の石組み遺構が複数検出されているものの、“ゴミ廃棄空間”を示す遺物は稀なようで（島袋2016）、魚骨もほとんど見られないようである（黒住2016aのデータ）。このことから、千原遺跡でもシーリーに魚骨が廃棄されていなかったことも想定されよう。

3 点目は、単純に、漁で得られた魚は全て販売され、遺跡には廃棄されなかったと考えることである。網漁でまともな得られたものの中には、食用として販売されない種や不完全な状態で水揚げされるもの等が存在しているはずなので、この考えは妥当ではないように思える。

その他にも、食用後あるいは漁の残滓は陸上ではなく海に廃棄された、ブタなどの家畜の餌とされた等々、様々な考えることが可能であろう。結論や見通しを示すことは出来なかったが、今後も沖縄各地の同時期の遺跡を多方面から検討することによって、魚骨残存状況の理解と、そこから想定される利用法を考えることによって、これまで明らかになっていなかった面に新しい展開があるものと期待できよう。そして、同時に得られる貝類遺体と比較することも必要だと思われる。

3) 海藻の利用

筆者は、遺跡出土海産微小貝から、藻塩焼き製塩を含めて海藻の利用を意識して検討してきた。沖縄においては、これまでも海産微小貝から海藻利用は確認できておらず（黒住2002）、今回の千原遺跡でも堆積物サンプル中に、海藻上に生息する葉上性種の磨滅していない個体の出土・焼けた個体の存在・集中性等は認められなかった（第50表）。今回の分析堆積物は、近世期の状態の良い遺構内のサンプルであったので、本遺跡では海藻利用は、もし存在していたとしてもかなり低調だったと言えよう。

4) 農耕との関連

筆者は炭化穀類がどのようなプロセスを経て遺跡堆積物から抽出されるのかという点に興味を持っており、本遺跡での近世期の例は、利用穀類遺体の検証を含めて興味深いものと考えられた。

その結果は、第51表のように、処理量が少なかったことが大きな原因とも考えられるが、穀類の可能性のあるものが2破片得られただけであった。少なくとも、大量に含まれてはいないと理解できる。

水田農耕を遺跡から出土する微小種を含む淡水産貝類から様々な検討してきたが（黒住2002, 2007b）、本遺跡では淡水産貝類の出土は非常に少なかった。本遺跡は砂地に営まれた集落遺跡と考えられているため、当然であるが、後述する攪乱の及んでいると考えられ、途中で水生堆積物と考えられる粘土層（4層）も存在しているSX8を含めても、伊礼原地区のグスク時代層に極めて多かったヌノメカワニナ（黒住2007a）は全く確認されなかった。このことは、遺跡内に水田や水路がなかったか、稀であったことを示していると思われる。また、水田稲作に由来すると考えているマルタニシもごく少数がピックアップ資料中に認められただけであった（第45表）。マルタニシは、食用となる淡水巻貝である。このタニシの稀な出土は、本遺跡の人々の水田利用が多くなかったことを示しているのかもしれない。

一方で、微小陸産貝類からは、農作物について持ち込まれたと考えられるソメワケダワラ・オオオカチョウジガイ等（黒住2016c）が確認され、想定されることではあるが、集落内での耕作を示していると考えられた。

貝類遺体からの僅かなデータであるが、大胆に想定するならば、近世期のⅢ層の時代には、本遺跡の人々は水田稲作ではなく、サツマイモ耕作を行っていたと考えることもできる。生活形態を半農半漁と考えれば、ある種当然の結果ではあるが、貝類遺体から検証の可能性を示すことには大きな意義があると考えている。さらに、各地の貝類遺体群と比較することによって、その差異やより具体的な在り方を示すことができよう。

(4) 微小陸淡水産貝類からみた古環境

第51表に示した3つの遺構の堆積物中には、多くの微小貝類が認められ、その大部分が沈殿部分で確認された磨滅した“砂粒”としての海産種がほとんどであったが、一部には浮遊部分で陸産・淡水産の種も多く確認された。

その詳細を見やすくするために、最小個体数(MNI)を第52表に示した。なお、考古年代は全てⅢ層に属し、近世期の堆積物という見解であるものの、SX8は新しい攪乱が認められるという。このSX8では、下部の7層から他の2つの柱穴では得られなかった戦後の移入種(=外来種)であるシモチキバサナギと復帰後の可能性のある移入種のイシノシタ類が抽出された。このことから、陸産貝類からも、「かなり新しい攪乱の存在を追認」することができた。これ

までも述べてきたように、遺跡堆積物から抽出される微小陸淡水貝類では、移入種の存在や現生個体の確認等により混入を排除できる場合もあり、当時の種組成から古環境のより精度の高い復元が行えると考えている。植物の様々な微化石では、堆積物中の間隙による混入を否定できない場合もあり、堆積物の特性により分析対象を広げる必要のあることを示している。

擾乱の少ないと考えられたP594とP299の2つの柱穴は比較的組成が類似しており、P299では遺構内の分層により大きな相違は認められないようであった。この柱穴内部の上下で相違が少ない可能性から、1)柱穴が短期間に埋められた、2)柱穴が埋まる期間に周辺の環境に大きな変化はなかった、ということが想定でき、今回の場合は、両者が合わせていたのかもしれない。ただ、P594からは淡水産種のハブタエヒロマキヤが、P299からは海浜部に生息するクビキレガイが得られ、微細な環境が異なっていたと考えられる。具体的には、前者は一時的であっても水の溜まることがあったことを、後者はクビキレガイの現在の生息環境から、より汀線に近く、“海風が通る”ような植生であったと想定される。

全体としては、得られた種のほとんどが、開放地生息種とする草地のような環境で見られる種であり、近世期には遺構周辺は人為的に開かれていたことがわかる。擾乱の存在したSX08では僅かながらオキナワヤマキサゴのような林の縁に生息する種も抽出されているが、他の2つの柱穴からは林縁生息種は認められなかった。ある種、常識的に想定されるが、本遺跡では多数の柱穴があり、建物が存在していた訳であり、その周囲はかなり開けていたことを微小陸産貝類は明瞭に示しているのである。

今回は、3地点の少量の堆積物を処理しただけの結果であったが、このように微小貝類から当時の古環境と人間の利用様式にかなり迫ることができたと考えている。

<引用文献> (五十音順)

- 黒住耐二. 1995. スビにまつわる世界. In 久保弘文・黒住耐二, 生態/検索図鑑. 沖縄の海の貝・陸の貝. p. 243. 沖縄出版, 沖縄.
- 黒住耐二. 1996. 用見崎遺跡のコラムサンプルから得られた貝類遺存体(予報). 用見崎遺跡, 熊本大学文学部考古学研究室活動報告, (31): 31-37.
- 黒住耐二. 1997. 1996年の用見崎遺跡調査でコラムサンプルから得られた貝類遺存体. 用見崎遺跡 III, 考古学研究室報告, (32): 35-41. 熊本大学考古学研究室.
- 黒住耐二. 2002. 貝類遺体からみた奄美・沖縄の自然環境と生活. In 木下尚子(編), 先史琉球の生業と交易—奄美・沖縄の発掘調査から—, pp. 67-86. 熊本大学.
- 黒住耐二. 2007a. 貝類遺体からみた伊礼原遺跡. In 中村 暁(編), 伊礼原遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (26): 535-555.
- 黒住耐二. 2007b. 胎生淡水産貝類からみた先史時代の沖縄諸島における根栽農耕の可能性. 南島考古, (26): 121-132.
- 黒住耐二. 2008. 伊礼原 D 遺跡から出土した貝類遺体. In 東門研治・島袋春美(編), 伊礼原 D 遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (28): 168-183, 197-200.
- 黒住耐二. 2010a. 伊礼原 E 遺跡から得られた貝類遺体. In 山城安生・島袋春美(編), 伊礼原 E 遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (31): 41-56.
- 黒住耐二. 2010b. 貝類遺体(シーリ遺構内). In 仲座久宜(編), 首里城跡, 御内原北地区発掘調査報告書(I), 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書, (54): 472-476.
- 黒住耐二. 2011. 琉球先史時代人とサンゴ礁資源: 貝類を中心として. In 高宮広土・伊藤真二(編), 先史・原始時代の琉球列島〜ヒトと景観〜, pp. 87-107. 六一書房.
- 黒住耐二. 2014a. 伊礼原遺跡(国指定外)・伊礼原 A 遺跡の調査で得られた貝類遺体. In 島袋春美(編), 伊礼原遺跡(国指定外)・伊礼原 A 遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (36): 397-428.
- 黒住耐二. 2014b. 貝類遺体からみた沖縄諸島の環境変化と文化変化. In 高宮広土・新里貴之(編), 琉球先史・原始時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究, 研究論文集, 第2集, 琉球列島先史・原始時代の環境と文化の変遷, pp. 55-70. 六一書房.
- 黒住耐二. 2015. 平安山原 B 遺跡の調査で得られた貝類遺体. In 島袋春美(編), 平安山原 B 遺跡, 北谷町文化

- 財調査報告書, (37): 388-404.
- 黒住耐二. 2016a. 平安山原 A 遺跡の調査で得られた貝類遺体. In 島袋春美 (編), 平安山原 A 遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (38): 408-423. 北谷町教育委員会, 沖縄.
- 黒住耐二. 2016b. 平安山原 B 遺跡と同 C 遺跡の貝類遺体および本地域の遺跡出土貝類のまとめ. In 島袋春美 (編), 平安山原 B・C 遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (40): 372-401.
- 黒住耐二. 2016c. 首里城跡銭蔵東地区から得られた貝類遺体. In 瀬戸哲也・新垣 力・大堀皓平・宮城淳一・大谷 匡史 (編), 首里城跡, 銭蔵東 [地] 区発掘調査報告書, 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書, (80): 220-238.
- 黒住耐二. 2017. 伊礼原 D 遺跡から出土した貝類遺体 (第 2 報). In 島袋春美 (編), 伊礼原 D 遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (41): 351-375. 北谷町教育委員会, 沖縄.
- 黒住耐二・金城亀信. 1988. 豊見城村の長嶺、保栄茂および平良グスク試掘調査により出土した貝類. In 金城亀信 (編), 豊見城村の遺跡, 豊見城村文化財調査報告書, (3): 137-153. 豊見城村教育委員会, 沖縄.
- 黒住耐二・樋泉岳二・山根洋子・西野雅人・鶴岡英一. 2007. 港区芝の稚魚場跡鹿島神社境内地点から得られた動物遺体—近世のバカガイ貝剥きの検証. 港区立港郷土資料館研究紀要, (9): 11-26.
- 島 弘 (編). 2012. 渡地村跡, 那覇市文化財調査報告書, (91): 1-399. 那覇市教育委員会.
- 島袋春美. 1997. 県内出土の「タカラガイ製品」について. 南島考古, (16): 61-70.
- 島袋春美. 2004. 遺跡別に見る奄美・沖縄諸島の貝製品. In 高宮廣衛・知念 勇 (編), 考古資料大観, 第 12 巻, 貝塚後期文化, pp. 231-241. 小学館.
- 島袋春美. 2008. 貝類遺体. In 東門研治・島袋春美 (編), 平安山原 B 遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (29): 104-114.
- 島袋春美 (編). 2016. 平安山原 A 遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (38): 1-482. 北谷町教育委員会, 沖縄.
- 菅原広史. 2010. 脊椎動物遺体 (シーリ遺構内). In 仲屋久宜 (編), 首里城跡, 御内原北地区発掘調査報告書 (I), 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書, (54): 477-493.
- 樋泉岳二. 2016a. 平安山原 A 遺跡から採集された脊椎動物遺体の概要. In 島袋春美 (編), 平安山原 A 遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (38): 396-407. 北谷町教育委員会, 沖縄.
- 樋泉岳二. 2016b. 平安山原 B 遺跡・C 遺跡で採集された脊椎動物遺体. In 島袋春美 (編), 平安山原 B・C 遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (40): 331-371.
- 樋泉岳二. 2017. 伊礼原 D 遺跡から採集された脊椎動物遺体. In 島袋春美 (編), 伊礼原 D 遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (41): 282-350. 北谷町教育委員会, 沖縄.
- 中村 愿 (編). 1989. 伊礼原 B 遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (8): 1-54, 24 pls.
- 新田重清. 1977. 基地内文化財調査概要—御物城の考古学的知見. 沖縄県立博物館紀要, (3): 34-37.
- 真栄平房昭. 1991. 大航海時代のイギリス・オランダと琉球. In 池宮正治ほか (編), 新琉球史—古琉球編一, pp. 319-341. 琉球新報社.
- 三島 格. 1971. スビとスビ甕. えとのす, (2). (三島 格. 1977. 貝をめぐる考古学. 学生社. より)

第46表-2 ピックアップ資料の詳細分析(2)

グリッド	N-01-02	O-02	P-02	O-01	O-01	Q-03	P-05	P-Q-01	P-Q-01	O-01	Q-04	P-01	P-01	Q-01-05	N-01	O-02	P-02	P-04	Q-03	P-05			
遺構等	下層 掘削				貝集中部	SK17	SK4	SK5	SX12	SX8	P212	P246	P299	P304	P394	P670						SD3	戦国 の遺 構
層位	ヒコ ノツ 下層	地山直上	III層	III層	III層	III層	III層	III層	III層	III層	III層	III層	III層	III層	III層	III層	III層	II層	II層	II層	II層	II層	II層
						1層	1層	2層	3層	4層			2層	4層	1層	3層	2層	3層	4層	5層	1層	2層	
アジロイキ		1												1e									
ヒコホシトシ	1A?e																						
アカンマナシ			1bc?f																			1e	
ナンコウロミナシ		2	1c?f																				1
コヤマイキ		1	1bc?f																				
クロサモロキ		2(1e),1f																					1f
アサシノクサメ			1bc?f																				
中形ノキ																							
ナツメガイ			2(1b)																				1b
スズカワナ			1b																				
シロクマノイ			2a	1ab																			
ハンダチノイ			2a																				
ニガイ(秋貝類)	0/1a	2/2	1/1	0/1	0/1			1/0						0/1									
ベニガイ		1/1	1/0	1/0																			1/0
リュウキュウサルゴオ	1u/3(1d)	8(3d),1u/11(9)	0/2?	7/2(1e),1f		0/1e				0/1,1f	1e/1	1/0											0/1
ヒドリヤオシ			1/0	1/0	0/2u		1/0				1/0			1/1									
クロササガイ							1u/0																
ヒコガイ類	2(1d),0,1f	4(1d),1u/1(1d)	1/0	1/1,1f					1/0		0/1e		2(1e)	1u/0									1/0
クサニツキガイ			1/0	0,1,1f																			
ウツキアサガイ			0/1	0/2		0/1		0/1e					1/0										
ヒコサガイ			1uc/0	1d/0				0/1		0/1e			1/1										
カサツキガイ	0/1a		1uc/0	1d/0				0/1		0/1e													
シロササ			1d/0																				
カワウガイ	0/1a	4/3	2(1d),3u/6(3d)	2,3(1d),3/4,1u	1f	1e?/0	1/0	0/1e	1/0	1e/0	1/0		0/1uc										
リュウキュウサルゴイ		1/0	2(1d),0,1e	2(1d),1					1/0														1/0
オホシツナミ	1f/1		2,1u/0	4,3u/2,1u				1f															1/0
オサガサ			1,1uc/0																				
シナツキ			1u/1u,8(3d)	5(2d)				1f	1f	0/1u													
ロシヤコ		2/0	2(1d)	3e/2(0,1f)				1f															
ヒコサ			5,1u/2u	1e/0,2f						0/1													0/1e
シヤツキ類																							
シヤツコ			1d/0	1f				0/1u															
リュウキュウツトシ	1e/0	2/2	7(5d),1(1d)	10/15,4f		0/4		1/2	1/0	2/1,1f	1/1			1/1	0/1	1/0	1/0	0/1	1/0	1(0)	0/1u		
ササゲ			2/0																				
マスホガイ	1u/1uc	4/1	5/7	12/15		0/1		0/1,1f	1/0	1/4(1e)	0/2u	1/0		0/1uc									
リュウキュウマスオ		22(8c?),1d,1u/15(9c?),1uc/2?	12(3c?),7,2u/11(2c?),1f	13(2c?),1u/14(2c?),1f	1f	1e?/3(1e?)	1e?/0	1/1	1/0	1/2?	1/0		2/0										
リュウキュウナシノ														0/1									
リュウキュウバカガイ		1/1	1/2	1,1u/2,2f		0/1		0/1					0/1										
イノマツガイ			4/2											0/1									
シラシラシ										0/1,1/2	1/0												
スノメガイ		19(11c?),2u/5(12c?),4u,6f	13(2c?),2,5,7u/17(2c?),6u,4f	9,5u/13,3u,4f		2(1e?)/1u	2(1e,1c)/0	1e?/1e?					0/1u	1e?/2(1e,7,1e)	1e/1,1u								1e,1f/0
アサメ		4(1c?),2,4f	2/7(1d),1u	1/2		0/1		0/1															
アサメガイ	0/1a	8(1c?)/3	9/9	2/5(1f)	0/1			1/1		0/1e	0/1e	1/0											
アサメクマシ	1u/0		5/4	0/1						0/1				0/1									
ウツカガハマダリ		0/1	0/1u	3/0	0/1			1e/0	0/1e														
オサメ			1/0																				
ウツカガハマダリ			0/1u	1u/0																			
オサメ			3,6,2u,4f		1/0								1e/0										
ヒメダリ		0/1	2/2																				
ハマダリ類(カモノ)				0/1u																			
一枚貝類																							
一枚貝類ヤング	1e													1e									7e

第48表 詳細な確認に基づく同定標本数 (NISP) と最小個体数 (MNI) の比較

	地山直上			Ⅲ層			Ⅱ層		
	NISP	MNI*	MNI/ 食用	NISP	MNI*	MNI/ 食用	NISP	MNI*	MNI/ 食用
巻貝類									
マガキガイ	24	24	24	214	213	213	66	66	66
ネジマガキ				36	36	36	5	5	5
イモガイ類	4	4	3	36	31	31	14	13	9
オノツノガイ	5	5	5	12	12	12	9	9	9
クモガイ	2	2	2	41	32	32	12	9	9
ニシキウズ	2	2	2	2	2	2			
ハナヒラダカラ				18	18	18	6	4	4
ハナマルユキ	4	3	3	18	18	18	3	3	3
タカラガイ類/その他	20	12	12	78	61	56	20	14	14
チョウセンサザエ	4	2	2	23	12	12	10	6	6
サラサバテイラ	2	2	2	15	15	12	2	1	1
巻貝類/その他	8	8	5	46	36	28	16	16	12
二枚貝類									
スノメガイ	46	21	21	81	49	49	12	4	3
アラスノメガイ	7	4	4	13	10	9			
リュウキュウマスオ	41	22	21	51	26	26	1	1	1
ホソスジイナミ	8	5	5	25	14	13	3	2	2
カワラガイ	7	4	4	29	15	13			
リュウキュウサルボオ	4	3	2	32	16	13	9	4	4
リュウキュウシラトリ	2	2	2	47	26	25	1	1	1
マスオガイ	5	4	4	39	22	22	1	1	1
シャコガイ類	4	3	3	51	22	18	5	2	2
イソハマグリ				8	5	5	1	1	1
メンガイ	3	1	1	9	6	5	5	4	4
二枚貝類/その他	23	14	14	55	34	27	4	4	4
合計	225	147	141	979	731	695	205	170	161

*:c(色彩の残る現代と考えられるものを除く)

第49表 食用貝類遺体の優占種（ピックアップ法/NISP）

	地山直上		Ⅲ層下層		Ⅲ層		Ⅱ層	
	グスク～近世初頭?		近世		近世		近代	
	N=271	%	N=208	%	N=6835	%	N=311	%
サンゴ礁域/岸側潮間帯 (I-1)								
イソハマグリ	1	0.4	1	0.5	42	0.6	2	0.6
サンゴ礁域/イノー内 (I-2)								
マカキガイ	29	10.7	40	19.2	1516	22.2	93	29.9
シヤコガイ類	7	2.6	9	4.3	282	4.1	17	5.5
イモガイ類	8	3.0	5	2.4	307	4.5	20	6.4
オニツノガイ	8	3.0	3	1.4	166	2.4	10	3.2
クモガイ	4	1.5	3	1.4	191	2.8	17	5.5
サンゴ礁域/干瀬 (I-3)								
チョウセンササエ	4	1.5	6	2.9	129	1.9	14	4.5
サンゴ礁域/礁斜面 (I-4)								
サラサハテイラ	2	0.7	3	1.4	160	2.3	4	1.3
内湾域 (II)								
ヌノメガイ	47	17.3	25	12.0	649	9.5	19	6.1
リュウキュウマスオ	46	17.0	20	9.6	501	7.3	7	2.3
ホソスジイナミ	8	3.0	11	5.3	321	4.7	5	1.6
カワラガイ	9	3.3	10	4.8	206	3.0	4	1.3
リュウキュウサルホオ	7	2.6	7	3.4	190	2.8	13	4.2
リュウキュウシラトリ	5	1.8	12	5.8	253	3.7	2	0.6
マスオガイ	5	1.8	7	3.4	263	3.8	2	0.6
		20% ≤		10% ≤ < 20%		5% ≤ < 10%		2.5% ≤ < 5%

第50表 タカラガイ集積遺構の種別内容

種名	成長段階	個体数	小孔有り
ハナピラダカラ	成貝	1636	7
ハナピラダカラ	亜成貝	38	4
ハナマルユキ	成貝	144	3
キイロダカラ	成貝	41	
ナツメモドキ	成貝	3	

第 52 表 這構内の堆積物から抽出された陸淡水産貝類

遺構名 グリッド	P594		P299			SX8						生息場所	備考
	Q-04		P-01			Q-04							
遺構内の層序		5層	3層	1層	9層	7層	5層	4層	3層	1層			
クビキレガイ		1	1									海浜部	
スナガイ	9	3	2	3				1				海浜部	
ホソオカチョウジガイ	3	1	2	3			1			1		開放地	
オオオカチョウジガイ	2	2	1	1		1					2	開放地	ガス期?移入種
オカチョウジガイ?		6		6								[林縁]	
オカチョウジガイ類/卵		1											
コハクガイ類?	5	1		4		4		4	1			開放地	
オナジマイマイ科	3	4	2	2		5	2		1			開放地	
パンダナマイマイ	2	3	1	2			1		1			開放地	
オキナワウスカワマイマイ		1									1	開放地	
ソメワケダワラ	1											開放地	ガス期?移入種
ハブタエヒラマキ?	1											止水	淡水産種
ネジヒダカワニナ	1											止水	汽水～淡水産種
ハクサンベッコウ類似属	3							1				開放地	
ホリアコマオカチガイ類			1								1		
ナガケシガイ									1			林縁	
オカモノアラガイ科							2					開放地	
オキナワヤマキサゴ						1						林縁	
ナハキビ						1						林縁	ガス期?移入種
ウスイロオカチグサ						2						開放地	移入種?/湿性 地生息種
シモチキバサナギ						1						開放地	戦後移入種
イシノシタ類						1		13				開放地	復帰後?移入種
陸産貝類/不明						1							



圖版 50 貝類遺體 1 (卷貝)



圖版 51 貝類遺體 2 (卷貝)



圖版 52 貝類遺體 3 (卷貝、二枚貝)



- 1 リュウキュウウノアシ、2・3 チョウセンサザエ、4・5 ヤコウガイ、6 カンギク、7 オオウラウズ、8 ニシキウズ、9 ムラサキウズ、10 ギンタカハマ、11 サラサバテイル、12 アマオブネガイ、13 マルアマオブネ、14 ニシキアマオブネ、15 マルタニシ、16 オニツノガイ、17 タワノミカニモリ、18 カヤノミカニモリ、19 リュウキュウウミニナ、20 イボウミニナ、21 フトヘタナリ(イトカケ型)、22 ムカシタモト、23 フトスズムカシタモト、24 ネジマガキ、25 マガキガイ、26 イボツデ、27 マイノツデ、28 クモガイ、29 スイジガイ、30 リュウキュウヘビガイ、31 キイロダカラ、32 ハナビラダカラ、33 コモンダカラ、34 ナツメドキ、35 ハナナルユキ、36 ヤクシマダカラ、37 ホソヤクシマダカラ、38 ホシダカラ、39 ヒメホシダカラ、40 ホシキスタ、41 ハラダカラ、42 ヘソアキトミガイ、43 リスガイ、44 ウズラガイ、45 スタミウズラ、46 シオボラ、47 ミツカドボラ、48 ホラガイ、49 オキニシ、50 オオナルトボラ、51 ガンゼキボラ、52 コイワニシ、53 シラクモガイ、54 ツノレイシ、55 コウシレイシダマシ、56 アカイガレイシ、57 コオニコブシ、58 オニコブシ、59 イボヨフバイ、60 ヒメオリイレムシロ、61 アワムシロ、62 シマベッコウバイ、63 イトマキボラ、64 ツノマタモドキ、65 チトセボラ、66 チョウセンフデ、67 ヒメチョウセンフデ、68 オオミノムシ、69 マダライモ、70 サヤガタイモ、71 ジュズカケサヤガタイモ、72 キヌカウギキモ、73 イボシマイモ、74 ヤナギシボリイモ、75 カバミナシ、76 イタチイモ、77 ヤキイモ、78 サラサモドキ、79 アジロイモ、80 ニシキミナシ、81 ナガサラサミナシ、82 アカシマミナシ、83 ナンヨウクロミナシ、84 ゴマフイモ、85 クロザメモドキ、86 アンボククロザメ、87 クロフモドキ、88 ナツメガイ、89 スグカワニナ、90 シュリマイマイ、91 バンダナマイマイ、92 オオタカノハ、93 エガイ、94 ベニエガイ、95 リュウキュウサルボオ、96 ミドリアオリ、97 クロチョウガイ、98 ヒオウギ類、99 メンガイ類、100 ミノガイ、101 クチベニツキガイ、102 ウラキツキガイ、103 ヒメツキガイ、104 カブラツキガイ、105 カネツケザル、106 シロザル、107 リュウキュウザル、108 カワラガイ、109 オオシラナミ(シラナミ)、110 ナガジヤコ(トガリシラナミ)、111 ヒレジヤコ、112 ヒメジヤコ、113 シヤゴウ、114 リュウキュウバカガイ、115 イソハマグリ、116 リュウキュウナミノコ、117 サメザラ、118 モチツキザラ、119 リュウキュウシラトリ、120 リュウキュウマスオ、121 マスオガイ、122 シレナシジメ、123 アラスノメガイ、124 スノメガイ、125 ホソスジイナミガイ、126 アラスジケマンガイ、127 ヌウカダハマグリ、128 オミナエシ?、129 ケシウオウミナエシ、130 リュウキュウアサリ、131 オイノカガミ、132 ヒメアサリ、133 スダレハマグリ、134 ハマグリ類(キルン?)

図版 53 貝類遺体 4 (二枚貝、種名一覧)

第2節 千原遺跡出土の脊椎動物遺体

菅原広史（浦添市教育委員会）

1. はじめに

本節では、千原遺跡から出土した脊椎動物遺体（動物骨）について分析結果を報告する。本時調査では主に近世から近代にかけての遺物が出土しており、特に近世に相当するⅢ層からの遺物の出土が多く、脊椎動物遺体も同様の傾向であることから、種同定等の分析を通し、近世の動物利用の様相について動物遺体の観点から言及する。

2. 資料の概要と分析の方法

(1) 分析資料について

本報告において対象とする脊椎動物遺体は、遺物包含層の掘り下げ・遺構検出及び遺構覆土精査に伴い目視で出土を確認、取り上げた資料（ピックアップ資料）である。脊椎動物遺体はⅠ層からⅣ層・地山上面及びP・SK・SD・SXの遺構覆土内から出土しており、グリッド毎で層別別に一括に取り上げられたものと、遺構ごとに取り上げられたものとに類別される。出土量ではⅢ層がその大半を占めており、遺構内から出土した資料群がそれに次ぐ。Ⅲ層からは動物遺体以外の資料も多数出土しており、沖縄産陶器や中国産陶磁器など概ね近世に比定される資料が中心であることから、動物遺体についても近世の生活様相を反映しているものであると推定される。後述する動物遺体の出土地点・層位等については一覧表（第54・55表）に記載しており、当該地点や層位に関する詳細については第Ⅲ章を参照いただきたい。

(2) 分析方法

本資料に対する分析は、主に種同定・骨長計測・変異あるいは人為的傷痕等の観察について実施した。種同定は、現生標本との形態比較によることを基本とし、比較に用いた現生標本は基本的に筆者が所蔵するものを用い、不足するものについては発掘調査報告書の図版等を適宜参照した。また、後述するが資料中には人骨が混在していると認められたことから、これの比較資料には浦添市教育委員会が所蔵する前田・経塚近世墓群出土の人骨を用いた。分析は、脊椎動物遺体全体を実現したうえで、種同定について、魚類は鰭棘を除く部位同定可能な資料、鳥類は部位同定可能で長管骨は骨幹の全周を残すものを対象とした。哺乳類は四肢骨などの長管骨は全周を残すものを対象とし、部位同定可能であっても破片については集計の対象から除外した。椎骨は椎体を残すもの、頭蓋骨は位置の特定が可能な資料について記載の対象とした。計測位置について、魚類は前上顎骨長・歯骨高・椎骨椎体径について行い、鳥類・哺乳類はDriesch1976に準じたが、イノシシ/ブタ類の手足骨および中足骨についてはこれに加えて「残存長」を計測項目とし、遠位端が未癒合で脱落しているものについて、近位端と骨端脱落の遠位端側の面の中心を結ぶ長さを計測した。

種同定・計測結果については第55表に一覧を記載した。その際、遺構出土の資料については、当該遺構における脊椎動物遺体の包含の有無を確認する目的で、同定・計測等の対象外とした破片について、詳細な分析は行っていないものの表中の分類群の列において「対象外」として表示した。そのため、集計には含めておらず、第54・56～58表中にも反映していないため留意いただきたい。

3. 分析の結果

脊椎動物遺体群の種同定の結果、魚類8分類群・鳥類2分類群・哺乳類7分類群に比定される結果が得られた。以下に、主要な分類群について記載する。

(1) 魚類（図版54上段）

ウツボ科・ハタ科・クロダイ属・フエフキダイ科・ベラ科・ブダイ科・ハリセンボン科が同定されたが、いずれも数点検出されたのみで、分析対象とした魚類全体の同定標本数（NISP）は同定不可等を含めても22である。その中でも、最多となるのはフエフキダイ科で、歯骨・口蓋骨が見られ、口蓋骨はフエフキダイ属に特徴的な形態と認められることから、細分して表記した。いずれの分類群も沖縄諸島の遺跡からは普遍的に出土する魚類である。なお、分析対象外資料として鰭棘・部位不明の破片等が散見されたが、いずれも少数である。

(2) 鳥類（図版54上段）

鳥類はNISPで29を数え、そのうちの約半数がニワトリに同定された。それ以外で鳥類としたものは骨端が欠損している点などから詳細な分類が困難であった資料である。欠損していることから計測値での比較が困難であるものの、

いずれの資料も概ね同程度のサイズの個体に由来するものであると感じられるが、1点のみ明らかに大型のサイズを持つ資料が認められ（第55表：袋No.563）、ニワトリ以外の鳥類が含まれていることが窺われる。

(3) 哺乳類

哺乳類の出土も、他の分類群と同様Ⅲ層および遺構覆土からの出土が大半を占めており、NISPではイノシシ/ブタが最も優占する。次いでウシ・ウマ・イヌと続き、わずかながらヤギやジューゴン等が検出された。Ⅲ層・遺構とも出土傾向は同様である。

○ウマ（図版54下段）

Ⅲ層からの出土を中心にNISPで41が得られた。同定部位は遊離歯・下顎骨・上腕骨・橈骨・尺骨・大腿骨・脛骨などで、最も多くを数えた部位は基節骨の8点である。基節骨のうち、2点は近位端が未癒合で脱落しており、若齢の個体であったことが窺われる。また、カットマークが観察される他、平坦な破面を呈する様子がみられ、切断されたものと考えられる。

また、調査区北端域のⅢ層中からは下顎骨（第55表：袋No.941）が右側の頰側を上に向け横倒しの状態で、陶磁器と共に検出されており（図版40）、出土地点を記録して取り上げられている。

○イヌ（図版55上段）

上下の顎骨及び四肢骨が同定され、上腕骨・大腿骨・脛骨などにカットマークが付されている様子がみとれる。

○イノシシ/ブタ（図版55下段～57）

本分析では最も多くの資料数が同定された分類群である。概ね近世に比定されるⅢ層からの出土が主体的な本群には、イノシシと同時に家畜化されたブタが含まれる可能性が考えられる。グスク時代以降に沖縄諸島の遺跡から出土する本群は、個体の年齢構成の偏る状況や形態変異などから飼育の可能性について言及されることが多い。本資料を窺うと、明瞭に月齢を窺うことのできる顎骨の残存が少ないことから、年齢構成による算出は窮するが、観察しうる限りではM₁の萌出が完了した個体はなく、臼歯の咬耗が著しく進行しているものも認められない。また、骨端の残存している四肢骨ないし中手骨・中足骨では大半の骨端が未癒合で脱落している状況である。即ち、若齢個体が多くを占める。このような状況は、グスク時代以降の遺跡の調査報告において飼育の可能性が指摘される資料群と同様であると言えよう。

形態的な観点からは顎骨の歯列形状や頭蓋骨の短頭化、四肢骨の短縮などによる骨形状の変異がイノシシと対比したブタの形質として挙げられるが、本資料中には完存する部位が少ないことなどから、明瞭にこれらが確認できたものは少ない。一部の橈骨や頭蓋がブタの形態と判断できた一方、四肢骨の骨幹断面形状や頭蓋骨の厚さなどでイノシシとはやや異なると感じられるものがあるが、欠損等の影響により計測値等での表出が難しい状況であった。一方でイノシシと形態差の認められないものも含まれる。そのため一覧表中では、基本的にイノシシ/ブタと表記し、ブタと判断できるものは所見覽で注記した。部位組成からは、概ね全身の部位が認められ、指骨などがやや少ない印象であるが、主要部位の四肢骨などでいずれかに偏るような状況ではないとみられる。

なお、後述のウシで観察された人為的な傷痕等は本群においてはほとんどみられていない。

また、P・Q-03グリッドからは本分類群に比定される個体の全身骨格が集中して出土した（第63図、図版40）。遺構としては頭蓋から前肢が頭位置で検出されている。取り上げられたものを観察すると、頭蓋は破片になっていたものの、上下の顎骨・椎骨・四肢骨などの主要な全身の部位が同定された（第55表袋No.161、図版57）。上下の顎骨には乳歯が残存するほか、骨端はいずれも未癒合であるなど若齢の個体で、上腕骨や橈骨の形状・長さ等の点からブタと判断した。ただし、手根骨・足根骨・指骨など、四肢先端の部位の骨が検出されていない点は、留意を要すると思われる。

○ウシ（図版58上段）

下顎骨・遊離歯・四肢骨・指骨などを中心に同定されており、特設部位別の出土数に偏りのある様子はみられない。遊離歯はほとんどが一程度の咬耗が観察され、未萌出ないし萌出中とみられる資料が1点であった他、下顎骨のうち1点にM₁およびM₂が未萌出である個体が確認された。四肢骨でも一部に骨端が未癒合である資料が含まれている産状が窺われた。また、四肢骨を中心にカットマーク及びスパイラルフラクチャーが付される資料が観察されており、本分類群の中ではスパイラルフラクチャーが比較的多くを占める傾向が窺われている。

○ジューゴン（図版58下段）

Ⅲ層ないし地山上面から7点が検出された。同定された部位は全て肋骨で、関節を残すものも一部にあるが完形の資料はなく破片である。ジューゴン骨は、他の哺乳類に比べ密度が高く、形状比較が困難である肋骨の破片でも同定が可能である。7点中3点にカットマークが認められ、そのほかについても明瞭な傷痕はないものの、破面は折り取られ

たような形状の印象である。

○ヒト (図版 59 上段)

本分類群に比定される頭蓋骨及び四肢骨がⅢ層、Ⅲ・Ⅳ層、地山上面および遺構覆土中など複数箇所から出土している。検出されている部位は前頭骨・部位不明の頭蓋骨破片・上腕骨・大腿骨・脛骨で、四肢骨骨端が未癒合である点、頭蓋骨の厚みがごく薄い点、残存長のサイズなどからすべて未成人骨であると判断される。残存状況の良好な顎骨や遊離歯などが検出されていないことから詳細な年齢は不明であるが、近世墓出土の未成人骨との比較からは、乳歯が未萌出ないし萌出中の個体よりも発達段階が前(乳児以前)であることが窺われる。出土地点はP205・P212・P402・P404・SK27の遺構覆土及び遺構外のⅢ層ないし地山上面である。少なくとも2体分が含まれているものと考えられる。

4. 考察

千原遺跡の今次調査の脊椎動物遺体出土傾向についてまとめると、近世期に比定されるⅢ層から得られた資料が分析対象の大半であることから、当該期の動物利用様相を反映しているものであると位置づけられる。これまでの発掘調査により、本遺跡の周辺では平安山原 A～C 遺跡・伊礼原遺跡など貝塚時代から戦前までの各時期に比定される脊椎動物遺体が豊富に得られており、本地域における動物利用の変遷を通史的に捉えることのできる貴重な資料群であり、本報告資料についてもその一端に加えることのできるものと言える。

千原遺跡の脊椎動物遺体組成は、魚類・鳥類・哺乳類により構成され、魚類・鳥類はごくわずかな分量であり、その大半を哺乳類、なかでもイノシシ/ブタとウシが占める点と特徴づけられる。これにより、漁撈は低調で、家畜ないし陸上哺乳類を資源とした生業形態を主としていたと考えられる。遺跡の立地を見ると、戦前よりも前においては眼前にイノシシの発達した海が広がっていたものとみられ、魚類の利用には比較的易い環境にあったものと思われるが、出土資料の様相からは低調であったことが窺われる。

一方で、哺乳類ではイノシシ/ブタ・ウシを多く出土し、ウマ・イヌ・ヤギに加えニワトリにより構成される組成を示す。イノシシ/ブタの分類群については資料により形質的な特徴による家畜か否かの判断に検討の余地が残る状況ではあるものの、それ以外の飼育動物の同定数を合計するとイノシシ/ブタ類を上回る。そのため、イノシシ/ブタの分類群のうち野生種・飼育個体の比率がどの程度であれ、動物利用全体における家畜類の占める様相からは、家畜利用が生業の主たる要素であることが示されると考えられる。

5. 今後の課題

上記の文中でも述べた通り、千原遺跡を含む周辺一帯の遺跡群から出土する脊椎動物遺体の様相を窺うことで、貝塚時代から戦前までの生業史の変遷を追うことができるものと考えられる。すでに平安山原 A～C 遺跡の報告書中ではその一端が考察されているものの、本分析では遺跡間の比較に至らず、基礎データの報告に留まった。千原遺跡の脊椎動物遺体の位置づけは、これらの遺跡との比較検討を経ることで評価されるべきものであり、今後へ向けた課題であるとして、結びとする。

謝辞

本分析に際しては、北谷町教育委員会の松原哲志氏および株式会社島田組の皆様にも多大なるご配慮を賜った。末筆ながら記して御礼申し上げたい。

<主な引用・参考文献>

- 樋泉岳二 2015 「平安山原 B 遺跡から採集された脊椎動物遺体」『平安山原 B 遺跡—桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業 (平成 20・21・23 年度) 一』北谷町教育委員会
- 樋泉岳二 2016 「平安山原 B 遺跡・C 遺跡で採集された脊椎動物遺体」『平安山原 B・C 遺跡—桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業 (平成 20・21 年度) 一』北谷町教育委員会
- 樋泉岳二 2016 「平安山原 A 遺跡から採集された脊椎動物遺体の概要」『平安山原 A 遺跡—桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業 (平成 19・21・22・23 年度) 一』北谷町教育委員会

第53表 脊椎動物遺体の分類群一覧

硬骨魚綱		OSTEICHTHYES
ウツボ科		Muraenidae
ハタ科マハタ型		Serranidae cf. <i>Epinephelus</i>
クロダイ属		Acanthopagrus
フエフキダイ属		<i>Lethrinus</i>
フエフキダイ科		Lethridae
ペラ科		Labridae
アオブダイ属		<i>Scarus</i>
ハリセンボン科		Diodontidae
鳥綱		AVES
ニワトリ		<i>Gallus galus</i>
哺乳綱		MAMMALIA
ウマ		<i>Equus ferus</i>
イヌ		<i>Canis familiaris</i>
ネコ		<i>felis catus</i>
イノシシ/ブタ		<i>Sus scrofa ver. domesticus</i>
ヤギ		<i>Capra hircus</i>
ウシ		<i>Bos taurus</i>
ジュゴン		<i>Dugon Dugong</i>
ヒト		<i>Homo sapience</i>

第54表 脊椎動物遺体の基本層位および遺構出土の状況

基本層位	グリップ・遺構等	魚類	鳥類	哺乳類	分群対象外	基本層位	グリップ・遺構等	魚類	鳥類	哺乳類	分群対象外	基本層位	グリップ・遺構等	魚類	鳥類	哺乳類	分群対象外		
																		基本層位	グリップ・遺構等
I	F-02					II	F-02					III	F-02						
	F-02						F-02						F-02						
	F-02						F-02							F-02					
	F-02						F-02							F-02					
	F-02						F-02							F-02					
	F-02						F-02							F-02					
	F-02						F-02							F-02					
	F-02						F-02							F-02					
	F-02						F-02							F-02					
	F-02						F-02							F-02					
IV	F-02					IV	F-02					IV	F-02						
	F-02						F-02						F-02						
	F-02						F-02						F-02						
	F-02						F-02						F-02						
	F-02						F-02						F-02						
	F-02						F-02						F-02						
	F-02						F-02						F-02						
	F-02						F-02						F-02						
	F-02						F-02						F-02						
	F-02						F-02						F-02						

第V章 2

第 55 表 -4 脊椎動物遺体一覧 (4)

p: 首位階, ps: 近位胸骨階, S: 骨幹, Sd: 遠位胸骨階, d: 遠位尾
 ①: 骨質未確定程度, (): 骨質未確定程度
 (): 本層まで発見した段階, (): 骨層未発見

層号	グリッド	基本単位	遺体号	分類群	部位	左右	埋存状況	計測位置	計測値	CM/SF	備考の表示例・所見等
226	P-04	墓	下腹	ウシ	肋骨	R	p-d	Sp	20.5	—	
38	Q-01	墓	—	ウシ	肋骨	R	不明	Sp	10.9	—	
107	Q-01	墓	—	ウシ	肋骨	R	不明	Sp	—	—	
202	P-01	遺体群	P162+P163	ウシ	肋骨	R	不明	Sp	—	—	
217	P-01	遺体群	P162+P163	ウシ	肋骨	R	不明	Sp	—	—	
284	Q-02	遺体群	P118+1層	ウシ	P175	肋骨	不明	不明	—	—	
29	P-03	墓	—	ウシ	M17	L	ほぼ完好	L	22.0	—	
75	P-01	墓	—	ウシ	M17	L	概ね保存	L	23.5	—	
82	Q-01	墓	—	ウシ	M17	L	概ね保存	L	25.1	—	
90	Q-20	墓	—	ウシ	M17	R	概ね保存	R	24.9	—	
91	Q-01	墓	—	ウシ	M17	R	概ね保存	R	29.4	—	
96	P-05	墓	—	ウシ	M17	L	概ね保存	L	21.9	—	
48	Q-02	墓	—	ウシ	M17	L	骨質	L	20.7	—	
131	Q-01	墓	下腹	ウシ	M17	L	骨質	L	28.4	—	
149	Q-04	墓	—	ウシ	M17	L	骨質	L	27.2	—	
149	Q-04	墓	—	ウシ	M17	L	骨質	L	29.4	—	
91	Q-01	墓	—	ウシ	M17	R	概ね保存	R	30.1	—	
492	Q-04	遺体群	P118+1層	ウシ	M17	R	骨質	L	32.4	—	
34	P-03	墓	—	ウシ	M17	不明	不明	不明	—	—	
35	P-04	墓	—	ウシ	M17	不明	不明	不明	—	—	
36	Q-01	墓	—	ウシ	M17	不明	不明	不明	—	—	
38	Q-02	墓	—	ウシ	下腹	L	不明	不明	—	—	
224	E-24+P-01	遺体群	P161	ウシ	P161	L	骨質未確定	不明	—	—	
249	Q-20	遺体群	東山1層	ウシ	P161	L	骨質未確定	不明	—	—	
250	Q-20	遺体群	東山1層	ウシ	P161	L	骨質未確定	不明	—	—	
133	P-01	遺体群	西谷1層	ウシ	P161	L	骨質未確定	不明	—	—	
258	Q-01	遺体群	西谷1層	ウシ	P161	L	骨質未確定	不明	—	—	
259	P-02	墓	—	ウシ	M17	L	骨質	L	23.1	—	
139	Q-01	墓	—	ウシ	M17	L	骨質	L	30.9	—	
323	P-01	遺体群	P562+P563	ウシ	M17	L	骨質	L	12.7	—	
112	Q-04	墓	—	ウシ	M17	R	概ね保存	R	14.4	—	
161	Y-20+Q-20	墓+墓	—	ウシ	M17	R	骨質	R	13.2	—	
46	Q-03	墓	—	ウシ	M17	L	完好	L	33.2	—	
90	Q-02	墓	—	ウシ	M17	L	概ね保存	L	33.1	—	
78	P-02	墓	—	ウシ	M17	R	骨質	R	36.7	—	
769	P-03	遺体群	3K31	ウシ	M17	R	概ね保存	R	14.2	—	
329	P-02	墓	—	ウシ	M17	不明	不明	不明	—	—	
330	Y-20+P-20	墓+墓	—	ウシ	M17	不明	不明	不明	—	—	
473	P-05	遺体群	3K1+1層	ウシ	不明	不明	不明	不明	—	—	
118	P-04	墓	—	ウシ	不明	不明	不明	不明	—	—	
119	P-01	墓	—	ウシ	不明	不明	不明	不明	—	—	
211	P-03	遺体群	F163	ウシ	R	肩甲骨	不明	不明	—	—	
134	P-04	墓	右側	ウシ	不明	不明	不明	不明	—	—	
135	P-01	墓	—	ウシ	不明	不明	不明	不明	—	—	
134	P-03	墓	—	ウシ	不明	不明	不明	不明	—	—	
91	P-01	墓	—	ウシ	不明	不明	不明	不明	—	—	
129	Q-20	遺体群	下腹	ウシ	不明	不明	不明	不明	—	—	
82	Q-01	遺体群	P224+P229	ウシ	不明	不明	不明	不明	—	—	
288	Q-03	遺体群	144	ウシ	不明	不明	不明	不明	—	—	
170	Q-01	遺体群	144	ウシ	不明	不明	不明	不明	—	—	
189	Q-01	遺体群	144	ウシ	不明	不明	不明	不明	—	—	
131	Q-01	遺体群	下腹	ウシ	不明	不明	不明	不明	—	—	
138	Q-01	遺体群	3K31	ウシ	不明	不明	不明	不明	—	—	
307	P-03	遺体群	P310+1層	ウシ	不明	不明	不明	不明	—	—	
114	Q-01	墓	—	ウシ	不明	不明	不明	不明	—	—	
91	Q-01	墓	—	ウシ	不明	不明	不明	不明	—	—	
252	Q-02	墓	—	ウシ	不明	不明	不明	不明	—	—	
46	Q-04	墓	—	ウシ	肋骨	L	p-d	Sp	23.9	SF	
142	P-01	墓	—	ウシ	肋骨	L	不明	不明	37.0	—	
142	P-01	墓	—	ウシ	肋骨	L	不明	不明	—	—	
204	Q-01	遺体群	180	ウシ	不明	不明	不明	不明	33.1	20+SF	
91	Q-01	墓	—	ウシ	肋骨	L	一層完備	不明	—	—	
129	Q-20	遺体群	下腹	ウシ	不明	不明	不明	不明	—	—	
129	Q-20	遺体群	下腹	ウシ	不明	不明	不明	不明	—	—	
129	Q-20	遺体群	下腹	ウシ	不明	不明	不明	不明	—	—	
82	Q-01	遺体群	P224+P229	ウシ	不明	不明	不明	不明	—	—	
36	Q-04	墓	—	ウシ	中肋骨	L	p-d	Sp	21.7	SF	
38	Q-04	墓	—	ウシ	中肋骨	L	p-d	Sp	19.1	SF	
133	P-02	墓	—	ウシ	中肋骨	L	p-d	Sp	—	SF	
81	P-02	墓	—	ウシ	中肋骨	L	p-d	Sp	—	SF	
88	Q-01	墓	—	ウシ	中肋骨	R	p-d	Sp	66.1	20+SF	
242	Q-03	遺体群	P161	ウシ	中肋骨	R	p-d	Sp	29.2	SF	
142	Q-04	墓	—	ウシ	中肋骨	R	p-d	Sp	—	SF	
78	P-02	墓	—	ウシ	中肋骨	R	p-d	Sp	—	SF	
91	Q-01	墓	—	ウシ	中肋骨	R	p-d	Sp	64.7	SF	
91	Q-01	墓	—	ウシ	中肋骨	R	p-d	Sp	—	SF	
91	Q-01	墓	—	ウシ	中肋骨	R	p-d	Sp	—	SF	
27	Q-02	墓	—	ウシ	肋骨	R	p-d	Sp	—	SF	
35	P-04	墓	—	ウシ	基節骨	不明	完好	不明	60.1	—	
45	Q-03	墓	—	ウシ	基節骨	不明	完好	不明	27.7	—	
45	Q-03	墓	—	ウシ	基節骨	不明	完好	不明	25.2	—	
45	Q-03	墓	—	ウシ	基節骨	不明	完好	不明	26.0	—	
56	P-05	墓	—	ウシ	基節骨	不明	完好	不明	63.9	—	
91	Q-01	墓	—	ウシ	基節骨	不明	p-d	不明	27.9	—	
91	Q-01	墓	—	ウシ	基節骨	不明	p-d	不明	25.1	—	
99	Q-02	墓	—	ウシ	基節骨	不明	完好	不明	61.5	—	
99	Q-02	墓	—	ウシ	基節骨	不明	完好	不明	28.9	—	
99	Q-02	墓	—	ウシ	基節骨	不明	完好	不明	23.9	—	
99	Q-02	墓	—	ウシ	基節骨	不明	完好	不明	26.2	—	

第56表 遺構外出土の脊椎動物遺体の組成 (NISP)

分類群	I層		II層				III層													
	P-05	0-02	0-03	P-03	P-04	Q-02	N-01	N-20	0-01	0-02	0-04	0-05	0-20	0-20 P-20	P-01	P-02	P-03	P-04	P-05	P-20
ウツボ科															1					
マハタ型																				
ハタ科															1					
クロダイ属																				
フェフキダイ属																				1
フェフキダイ科																				1
ベラ科													1							
アオブダイ属															1					
ブダイ科																1				1
ハリセンボン科																				
真骨類 (保留)																				
真骨類 (固定不可)																				
ニワトリ															3	1			2	
鳥類							1		1	2			1	5	2	1				
ウマ	1				1				5		1		2	6	5	3			1	
ウママ									5	1										
イヌ															2	1	1		4	
ネコ																				
イノシシ/ブタ			1	1			1	1	6	12	1		2	9	5	2	6	7	3	
ブタ																				
ヤギ																			1	
ウシ	1				1				1	18	8		5	7	3	5	4	5		
ウシ/ウマ									1	1		1		6		1		2		
ジュゴン										3					1					1
ヒト																				
哺乳類						1			1	5	4		2	12	4	1	2	1	1	
固定不可											1									
不明																				
グリッド別小計	1	1	1	1	2	1	2	3	44	29	2	3	11	1	54	23	14	19	18	5
層別別合計	1			6										228						

分類群	III層								III・IV層		地山上面				その他・攪乱			遺構外小計		
	P-03 Q-03	Q-02	Q-03	Q-04	Q-05	R-03	R-04	R-05	調査 区北 東端	N-20 0-20	N-01 N-02	N-20	0-20	P-01	N-20 N-01 0-20 0-01	P-02	P・Q -02		Q-04 R-04	
ウツボ科																				1
マハタ型																				0
ハタ科																				1
クロダイ属																				0
フェフキダイ属					2															2
フェフキダイ科													1							2
ベラ科																				1
アオブダイ属																				1
ブダイ科																				2
ハリセンボン科																				0
真骨類 (保留)																				0
真骨類 (固定不可)																				0
ニワトリ																				6
鳥類					2															15
ウマ					1		1		1								1	3	1	33
ウママ																				0
イヌ				1																15
ネコ																				0
イノシシ/ブタ			2	7	7			2						1				1		77
ブタ	47																			47
ヤギ					2															3
ウシ					2	6	2		1	1		2		1						73
ウシ/ウマ					1	3														16
ジュゴン													1							7
ヒト					1						1	3								5
哺乳類					5			1			1				10	1	1			54
固定不可																				1
不明																				0
グリッド別小計	47	3	10	29	2	1	4	1	1	4	3	1	2	11	1	2	4	1		362
層別別合計					98					4			18			7				362

第57表-1 遺構内出土の脊椎動物遺体の組成 (NISP) (1)

分類群	遺構名																
	P2	P7	P15	P20	P68	P72	P90	P94	P96	P101	P114	P121	P124	P149	P163	P180	P188
ウツボ科																	
マハタ型																	
ハタ科																	
クロダイ属																	
フエフキダイ属																	
フエフキダイ科																	
ベラ科																	
アオブダイ属																	
ブダイ科																	
ハリセンボン科																	
真骨類 (保留)																	
真骨類 (同定不可)																	
ニワトリ												1					
鳥類			1														
ウマ				1													
ウマ?																	
イヌ					1					1							
ネコ																	
イノシシ/ブタ						1	1	1	1							1	
ブタ																	
ヤギ											1						
ウシ	1	1									1		1	1	1		
ウシ/ウマ															1		1
ジュゴン																	
ヒト																	
哺乳類				1				1									
同定不可																	
不明																	
合計	1	1	2	1	1	1	2	1	1	1	2	1	1	1	2	1	1

分類群	遺構名																
	P204	P205	P212	P234	P238 P239	P244	P246	P248 P249	P250	P251	P255	P257	P261	P267	P274	P278	P283
ウツボ科																	
マハタ型				1													
ハタ科																	
クロダイ属												1					
フエフキダイ属																	
フエフキダイ科																	
ベラ科																	
アオブダイ属																	
ブダイ科																	
ハリセンボン科																	
真骨類 (保留)													1				
真骨類 (同定不可)															1		
ニワトリ																	1
鳥類							1										
ウマ										1							
ウマ?																	
イヌ																	
ネコ																	
イノシシ/ブタ					1			2		1	1						
ブタ																	
ヤギ																	
ウシ	1					2				1				1			
ウシ/ウマ					1			2									
ジュゴン																	
ヒト			1	4													
哺乳類								1					1				
同定不可																	1
不明																	
合計	1	1	5	2	2	1	3	2	1	2	1	2	1	1	1	1	1

第 57 表 -2 遺構内出土の脊椎動物遺体の組成 (NISP) (2)

分類群	遺構名																
	P300 P301 P302 P303	P304	P305	P322 P323 P324	P323	P328 P329	P331	P332	P333	P353	P355	P369	P370	P378	P380 P381	P382 ~ 384 SK16	P384
ウツボ科																	
マハタ型																	
ハタ科																	
クロダイ属				1													
フエフキダイ属																	
フエフキダイ科																1	
ベラ科																	
アオブダイ属																	
ブダイ科																	
ハリセンボン科																	
真骨類 (保留)																	
真骨類 (同定不可)																	
ニワトリ																	
鳥類													1				
ウマ						1			1						1		
ウマ?																	
イヌ																	
ネコ										1							
イノシシ/ブタ			3		1		1	1				1					1
ブタ																	
ヤギ																	
ウシ				1								1				1	
ウシ/ウマ																	
ジュゴン																	
ヒト																	
哺乳類	1			1						1		1	1				
同定不可																	
不明			1														
合計	1	4	3	1	1	1	1	1	1	2	1	2	1	1	1	1	1

分類群	遺構名																
	P391	P400	P402	P404	P408	P419	P433	P434 P440	P438	P441 ~ 444	P443	P449	P454	P462 ~ 466	P467	P468 P469	P469
ウツボ科																	
マハタ型																	
ハタ科																	
クロダイ属																	
フエフキダイ属																	
フエフキダイ科																	
ベラ科																	
アオブダイ属																	
ブダイ科																	
ハリセンボン科																	
真骨類 (保留)			1		1												
真骨類 (同定不可)																	
ニワトリ								1									
鳥類																	
ウマ																	
ウマ?																	
イヌ												1					
ネコ																	
イノシシ/ブタ										1			1	1			1
ブタ																	
ヤギ																	
ウシ										1	1						1
ウシ/ウマ	1							1									
ジュゴン																	
ヒト				2	1												
哺乳類									1						1		
同定不可																	
不明																	
合計	1	1	2	1	1	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	2

第57表-3 遺構内出土の脊椎動物遺体の組成 (NISP) (3)

分類群	遺構名																
	P51	P511	P577 P578	P583	P593	P623	P628	P658	P662 P663	P670	P676	SD2	SD3	SK1	SK3	SK4	SK5
ウツボ科																	
マハタ型																	
ハタ科																	
クロダイ属																	
フエフキダイ属																	1
フエフキダイ科																	
ベラ科																	
アオブダイ属																	
フダイ科																	
ハリセンボン科																	1
真骨類 (保留)																	
真骨類 (同定不可)																	
ニワトリ																	
鳥類																	
ウマ						1				1					1		
ウマ?										1							
イヌ										1							
ネコ																	
イノシシ/ブタ			1		1		1						1			5	
ブタ																	
ヤギ																	
ウシ		1		1				1	1	5						2	1
ウシ/ウマ	1									1	2	1				2	
ジュゴン																	
ヒト																	
哺乳類														1	1		1
同定不可																	
不明																	
合計	1	1	1	1	1	1	1	1	1	9	2	1	2	1	1	10	3

分類群	遺構名											遺構群出土計
	SK9	SK10 SK11	SK17	SK19	SK20	SK21	SK23	SK27	SK33	SK4	SK12	
ウツボ科												0
マハタ型												1
ハタ科												0
クロダイ属												2
フエフキダイ属												1
フエフキダイ科												1
ベラ科												0
アオブダイ属												0
フダイ科												0
ハリセンボン科												1
真骨類 (保留)			1									4
真骨類 (同定不可)												1
ニワトリ												4
鳥類												4
ウマ												8
ウマ?												1
イヌ			1	1								6
ネコ												1
イノシシ/ブタ					1		1			1	1	36
ブタ												0
ヤギ							1					2
ウシ	1				1				1			32
ウシ/ウマ												14
ジュゴン												0
ヒト								4				12
哺乳類	1					1						16
同定不可												1
不明												2
合計	2	1	1	1	2	1	2	4	1	1	3	150

第58表 脊椎動物遺体 層位・遺構別集計表 (NISP)

分類群	グリッド						遺構群	NISP 合計	分類群	NISP 合計
	I層	II層	III層	III・ IV層	地山上面	その他・ 擾乱				
ウツボ科			1					1	魚類	21
マハタ型							1	1		
ハタ科			1					1		
クロダイ属							2	2		
フェフキダイ属			2				1	3		
フェフキダイ科			1		1		1	3		
ベラ科			1					1		
アオブダイ属			1					1		
ブダイ科			2					2		
ハリセンボン科							1	1		
真骨類 (雑類)							4	4		
真骨類 (同定不可)							1	1		
ニワトリ			6				4	10	鳥類	29
鳥類			15				4	19		
ウマ	1	1	26				5	8	哺乳類	462
ウマ?								1		
イヌ			15					6		
ネコ								1		
イノシシ/ブタ		2	73		1	1	36	113		
ブタ			47					47		
ヤギ			3					2		
ウシ		2	68	2	1			32		
ウシ/ウマ			16					14		
ジュゴン			6		1			7		
ヒト			1	1	3			12		
哺乳類		1	40	1	11	1		16		
同定不可			1					1		
不明								2		
層位別合計	1	6	326	4	18	7	150	512	—	512



ウツボ科 1 歯骨 (R) ハタ科 2 腹椎 3 主上顎骨 (L) 4 前上顎骨 (R) クロダイ属 5 主上顎骨 (R) 6 前上顎骨 (R) フェフキダイ科 7 歯骨 (L) フェフキダイ属 8 口蓋骨 (R) アオブダイ属 9 歯骨 (L) ブダイ科 10 角骨 (R) ペラ科 11 前上顎骨 (L) ハリセンボン科 12 前上顎骨 or 歯骨
ニワトリ 13 鳥口骨 (L) 14 肩甲骨 (L) 15 上腕骨 (L) 16 上腕骨 (R) 17 脛骨 (L) 鳥類 18 長管骨



ウマ 1 下顎骨 (L) 2 上腕骨 (R) 3 腕骨 (L) 4 大腿骨 (R) 5 膝蓋骨 (R) 6 踵骨 (R) 7・8 中手骨 or 中足骨 9 基節骨 10 中部骨 11 末節骨
図版 54 脊椎動物遺体 1 (上段：魚類・鳥類、下段：ウマ)



イヌ 1 下顎骨 (L) 2 下顎骨 (R) 3 上腕骨 (R) 4 橈骨 (R) 5 尺骨 (R) 6 寛骨 (L) 7 大腿骨 (R) 8 脛骨 (R)
 ネコ 9 上腕骨 (L) ヤギ 10 1 (L) 11 M₁/6 (L) 12 橈骨 (R)



イノシシ/ブタ 1~5 下顎骨

図版 55 脊椎動物遺体 2 (上段: イヌ・ネコ・ヤギ, 下段: イノシシ/ブタ)

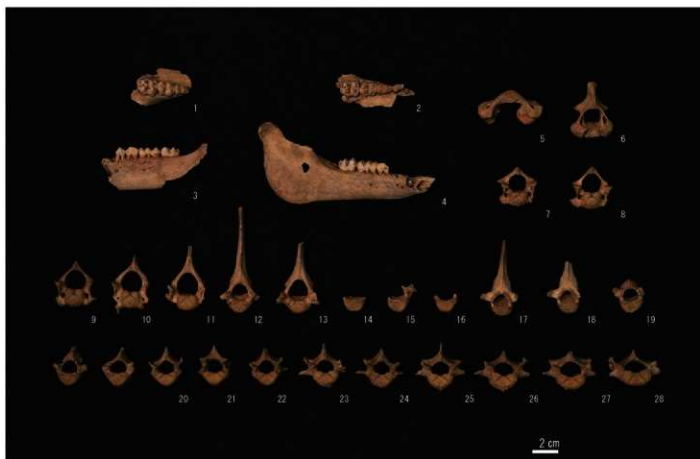


ブタ 1 前頭骨+頭頂骨+後頭骨 (R) 2 前頭骨 (L) 3 頭頂骨 (L) イノシシ/ブタ 4・5 肩甲骨 (L) 6・7・8 上腕骨 (L) 9・10 上腕骨 (R)
 ブタ 11 橈骨 (L) イノシシ/ブタ 12 橈骨 (L) ブタ 13 橈骨 (R) イノシシ/ブタ 14 橈骨 (R)



イノシシ/ブタ 1・2 尺骨 (L) 3・4 尺骨 (R) 5 第2中手骨 6 第3中手骨 (L) 7 第4中手骨 (L) 8 第4中手骨 (R) 9 寛骨 (R)
 10 大腿骨 (L) 11 大腿骨 (R) 12・13・14 脛骨 (L) 15 脛骨 (R) 16 距骨 (R) 17 第3中足骨 (L) 18 第4中足骨 (R) 19 基節骨

図版 56 脊椎動物遺体 3 (上段: イノシシ/ブタ頭蓋・前肢、下段: イノシシ/ブタ前肢・後肢)



フタ 1 上顎骨 (L) 2 上顎骨 (R) 3 下顎骨 (L) 4 下顎骨 (R) 5 環椎 6 軸椎 7～11 頸椎 12～22 胸椎 23～28 腰椎



フタ 1 肩甲骨 (L) 2 肩甲骨 (R) 3 上腕骨 (L) 4 上腕骨 (R) 5 桡骨 (L) 6 桡骨 (R) 7 尺骨 (L) 8 尺骨 (R) 9 腕骨 (L) 10 腕骨 (R) 11 大腸骨 (L) 12 大腸骨 (R) 13 脛骨 (L) 14 脛骨 (R) 15 踵骨 (L) 16 第4中足骨 (L)

図版 56 脊椎動物遺体 4 (上段：フタ頭蓋・椎骨、下段：フタ四肢骨)



ウシ 1 頬骨 (L) 2 下顎骨 (L) 3 橛骨 (L) 4 橈尺骨 (L) 5 中手骨 (R) 6 大腸骨 (R) 7 大腸骨 (L) 8 脛骨 (L) 9 距骨 (L) 10 中足骨 (R) 11 基節骨 12 中節骨 13 末節骨



ジュゴン 1～5 肋骨

図版 58 脊椎動物遺体 5 (上段：ウシ、下段：ジュゴン)



ヒト 1・2 前頭骨 (L) 3 前頭骨 (R) 4 下顎骨 (L) 5 肩甲骨 (L) 6 鎖骨 (R) 7 上腕骨 (L) 8 上腕骨 (R) 9 腸骨 (R) 10 大腿骨 (L) 11 大腿骨 (R) 12 脛骨 (L) 13 脛骨 (R)



ウマ 1 脛骨 (L) イヌ 2 大腿骨 (R) イノシシ/ブタ 3・4 上腕骨 (L) 5 上腕骨 (R) 6 桡骨 (L) 7 尺骨 (L) 8 大腿骨 (L)
ウシ 9 脛骨 (L) 10 大腿骨 (R) 11 距骨 (L) 12 中足骨 (L) ヤギ 13 脛骨 (R) ジュゴン 14~18 肋骨 ※縮尺不同
図版 59 脊椎動物遺体 6 (上段: ヒト, 下段: 動物遺体にみられる傷痕)

第3節 千原遺跡出土遺物の年代測定

バリノ・サーヴェイ株式会社

1. 試料

試料は、北谷町に所在する千原遺跡から出土した、西壁Ⅳc層出土の炭化材（現地取上No.972、樹種リュウキュウマツ）、下層確認ピーチロック中で採集した貝、ブタ埋葬遺構で出土した骨（現地取上No.161肋骨）の3点である。

2. 分析方法

木材は、塩酸（HCl）により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム（NaOH）により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid）。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に最大1mol/Lである。

貝は表面を洗浄したあと、塩酸で全体の半分程度を溶かし、中心部分のみを測定試料とする（塩酸によるエッチング処理 HCl）。

骨は表面を物理的に洗浄したあと、水酸化ナトリウムによるアルカリ処理（0.2mol/L）、中性になるまで洗浄後凍結乾燥、粉砕、塩酸による脱灰処理（1.2mol/L）、中性になるまで洗浄後凍結乾燥、加温しゼラチン化させたものを吸引濾過、これを再び凍結乾燥させコラーゲンを得る。

試料の燃焼・熱分解、二酸化炭素の精製、グラファイト化（鉄を触媒とし水素で還元する）はElementar社のvario ISOTOPE cubeとIonplus社のAge3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC社製）を用いて、¹⁴Cの計数、¹³C濃度（¹³C/¹²C）、¹⁴C濃度（¹⁴C/¹²C）を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局（NIST）から提供される標準試料（HOX-II）、国際原子力機関から提供される標準試料（IAEA-C6等）、バックグラウンド試料（IAEA-C1等）の測定も行う。

$\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の¹³C濃度（¹³C/¹²C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表したものである。放射性炭素の半減期はLibbyの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma:68.2%）に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う（Stuiver & Polach, 1977）。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。

暦年較正に用いるソフトウェアは、OxCal4.32(Bronk, 2009)を用いる。較正曲線は骨と木材はIntcal13、骨はMarin13(Reimer et al., 2013)を用いる。

3. 結果

結果を第59表、第84図に示す。木材は保存状態が良かったため、定法の前処理（1mol/LによるAAA処理）を行い、十分な炭素が回収された。貝についても同様に十分な炭素が得られた。コラーゲンは、分析処理量0.2130gに対し、有機質23.0mg、このうちコラーゲン13.42mgを得る。これは回収率6.3%にあたり、変性していないコラーゲンが残っていたことを示す(van Klinken(1999)によると、回収率が1%に満たない場合、コラーゲンが変性している可能性があるとする)。さらに、年代測定にあたって十分な炭素が得られた。

同位体補正を行った年代値は、炭化材が770 ± 20BP、貝が4370 ± 20BP、肋骨が135 ± 20BPである。暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴Cの半減期5730 ± 40年）を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正のもとになる直線は暦年代がわかっている遺物や年輪（年輪は細胞壁のみなので、形成当時の¹⁴C年代を反映している）等を用いて作られており、最新のものは2013年に発表されたIntcal13(Reimer et al., 2013)である。なお、海洋生物（今回の場合は貝）については、平均的な海洋リザーバー効果を考慮したMarin13(Reimer et al., 2013)を用いる。年代測定値に関しては、国際的な取り決めにより、測定誤差の大きさによって値を丸めるのが普通であるが(Stuiver & Polach 1977)、将来的な較正曲線ならびにソフトウェアの更新に伴う比較、再計算がしやすいように、表には丸めない値（1年単位）を記す。2σの値は、炭化材がcalAD1224 ~ 1227、貝が4595 ~ 4417calBP、肋骨がcalAD1676 ~ 1942である。

第 59 表 放射性炭素年代測定結果

試料	種別・性状	方法	補正年代 (暦年較正用) BP*	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正年代				Code No.	
					年代値					確率
					1 σ	2 σ	1 σ	2 σ		
最上層072 炭化材	リュウキュウ マツ	AAA (1M)	770 \pm 20 (769 \pm 18)	-27.1 \pm 0.4	1 σ	cal AD 1247 - cal AD 1275	703 - 675 cal BP	0.682	TKA- 18368	pal- 10789
					2 σ	cal AD 1224 - cal AD 1277	727 - 673 cal BP	0.954		
下層埋蔵	貝	HCl	4370 \pm 20 (4370 \pm 21)	-0.4 \pm 0.4	1 σ	cal BC 2596 - cal BC 2497	4545 - 4446 cal BP	0.682	TKA- 18369	pal- 10790
					2 σ	cal BC 2646 - cal BC 2468	4595 - 4417 cal BP	0.954		
最上層161 ブタ骨遺構骨	肋骨	CoEx	135 \pm 20 (137 \pm 18)	-23.5 \pm 0.5	1 σ	cal AD 1681 - cal AD 1697	269 - 254 cal BP	0.113	TKA- 18370	pal- 10791
					cal AD 1725 - cal AD 1738	225 - 212 cal BP	0.086			
					cal AD 1755 - cal AD 1762	195 - 188 cal BP	0.035			
					cal AD 1803 - cal AD 1815	148 - 136 cal BP	0.077			
					cal AD 1835 - cal AD 1877	115 - 73 cal BP	0.230			
					cal AD 1917 - cal AD 1937	33 - 13 cal BP	0.142			
					2 σ	cal AD 1676 - cal AD 1709	275 - 242 cal BP	0.156		
					cal AD 1718 - cal AD 1778	233 - 173 cal BP	0.236			
					cal AD 1798 - cal AD 1888	152 - 62 cal BP	0.390			
					cal AD 1911 - cal AD 1942	40 - 9 cal BP	0.172			

1)年代値の算出には、Libbyの半減期568年を使用。

2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3)付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68.2%が入る範囲)を年代値に換算した値。

4)AAAは酸・アルカリ・酸処理、HClは酸によるエッチング、CoExはコラーゲン処理を示す。

5)暦年の計算には、Oxcal v4.3.2を使用。

6)暦年の計算には、補正年代に σ で暦年較正用年代として示した、1桁目を丸める前の値を使用している。

7)1桁目を丸めるのが慣例だが、較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が正しいように、1桁目を丸めていない。

8)較正曲線は陸生生物はIntcal13、海洋貝類はMarin13を使用。

9)統計的に真の値が入る確率は、 σ が68.2%、2 σ が95.4%である。

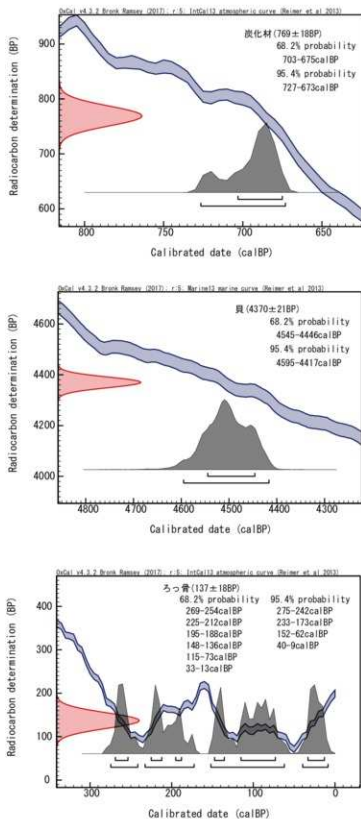
〈引用文献〉

Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51, 337-360.

Reimer P.J., Bard E., Bayliss A., Beck J.W., Blackwell P.G., Bronk R.C., Buck C.E., Cheng H., Edwards R.L., Friedrich M., Grootes P.M., Guilderson T.P., Hafidason H., Hajdas I., Hatté C., Heaton T.J., Hoffmann D.L., Hogg A.G., Hughen K.A., Kaiser K.F., Kromer B., Manning S.W., Niu M., Reimer R.W., Richards D.A., Scott E.M., Southon J.R., Staff R.A., Turney C.S.M., van der Plicht J., 2013, IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0-50,000 years cal BP. Radiocarbon, 55, 1869-1887.

Stuiver M., & Polach A.H., 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon, 19, 355-363.

van Klinken, G.J., 1999, Bone collagen quality indicators for palaeodietary and radiocarbon measurements. Journal of Archaeological Science 26, 687-695.



第 84 図 暦年較正結果

第Ⅵ章 総括

千原遺跡は平成15年3月31日に返還されたキャンプ桑江北側地区内に位置し、基地返還に先立つ試掘調査により平成9年10月に発見された。当時、基地機能は停止しておらず、従って多くの制約のもと調査は実施された。例えば、現場入城パスの申請・都度ゲートでのパス確認・埋設物発見時の対応・掘削後の即日復旧などが想起される。試掘調査では、約50cmにも及ぶ黒褐色遺物包含層下の砂層上面から多数のビットが検出され、包含層には多量の輸入陶磁器が含まれていたことからグスク時代の遺跡と判断された。その後、国道58号の拡幅が計画され、工事に先立ち平成25年度に緊急発掘調査を実施した。本章では主に緊急発掘調査成果をもとに千原遺跡の総括を行う。

層序 層序は概ね5枚に区分される。Ⅳ～Ⅴ層間に「地山上面」と「遺構群」を設定したが、地山上面の遺構検出作業中に出土した遺物と、遺構掘削時に出土した遺物を上下層と区別するために便宜上設けたものであり、層は成さない。

Ⅰ層：1945年以降の米軍関係工事に伴う客土および攪乱層。

Ⅱ層：近代の遺物包含層。層厚5～20cm前後で、ほぼ調査区全域に広がる。14～16世紀の輸入陶磁器も包含する。

Ⅲ層：近世の遺物包含層。層厚10～40cm前後で、調査区全域に広がる。14～16世紀の輸入陶磁器が多数出土。

Ⅳ層：遺物包含層。層厚10～20cm前後で、調査区北側のみ広がる。出土遺物は5点と僅少だが近世の遺物なし(第6表)。

・地山上面：地山上面の遺構検出作業中に削り取った土砂のことで、32点の遺物が出土。近世の遺物あり。

・遺構群：地山上面で検出した755基余のビット・土壌など。遺構埋土には近世の遺物が含まれているものもある。

Ⅴ層：地山。出土遺物なし。

・ピーチロック：Ⅴ層上面から約1.4m下で検出。ピーチロック上面で採取した貝の 2σ 値は4595～4417caBP。

調査終了直後の3月25日にバリノ・サーヴェイ(株)の橋本真紀夫氏と上田圭一氏の両氏が現場に訪れる機会があり、「調査区北側に見られるⅣ層(砂層)が土壌化しており、人が住み始めたと思われる」との所見を戴いた。Ⅳ層は遺跡内でも黒味の強い層で、堆積が始まった時期は不明であるがⅢ層の出土遺物から遅くとも近世までは遡れる。他の状況から推察すると、Ⅳ層の一部がR-03グリッド西壁に断片的に見られ、現存範囲よりも広く分布していたと考えられること、近世の活動によりⅣ層は大きく攪乱されたこと、Ⅳ層の上位層から14～16世紀の遺物が多く出土していること、などから、Ⅳ層はグスク時代のオリジナルな遺物包含層であった可能性も考えられる。

遺構 遺構は全部で760基確認され、内訳は、溝状遺構(SD)3条、ビット692基、土坑38基、性格不明遺構15基、石列遺構1基、方形石組遺構1基、タカラガイ集積遺構1基、動物遺体集中部2基で、Ⅱ層下面、Ⅲ層中、Ⅴ層上面の3面から検出された。ただし、Ⅴ層上面で検出した遺構には上層から掘り込まれているものが壁面で確認でき、時期の異なる遺構が同一面で検出されていることに留意しなければならぬ。検出面はそれぞれ、近代から戦前・近世・近世からグスク時代、に相当する。以下主な遺構について記述する。

近代から戦前の遺構に方形石組遺構と石列遺構がある。当該期の遺構は諸般の事情により簡易的な調査に終始したが、方形石組遺構の性格については、隣接する平安山原A遺跡で参考となる遺構が良好に残っていた。左記遺跡における当該期の石組み遺構は全31基確認され、うち24基が長方形であり、内壁の長軸100～170cm、同短軸65～90cmに収まる。石材は石灰岩や砂岩・板状砂岩で、粘土や漆喰・セメントで遮水処理を施し、また諸記録などから、沖縄方言で「クムイ」と呼ばれる雨水溜施設の可能性が示された。千原遺跡で確認された石組遺構は、内壁長軸110cm、同短軸90cmの長方形を呈しており、サイズや形状は平安山原A遺跡のそれに類似する。石列遺構は3列確認され、いずれもほぼ南北軸上に並列している。戦前の北谷の様子を記した『北谷町の地名』と照査すると、当地における戦前の敷地境がほぼ南北軸上にあることから、敷地境あるいはそれらに付随するものと思われる。

Ⅲ層掘削中に検出した、ブタを埋葬したと考えられる遺構とタカラガイ集積遺構を近世の遺構と捉えた。前者は掘り込みを判別できなかったが、上半骨格が解剖学的な位置を保ち、西側を向いている頭骨の北側に板状に加工したピーチロックがあたかも墓標のような状態で検出された。肋骨を年代測定にかけたが、 2σ 値はcaAD1676～1942とかなりの年代幅を示し、発掘調査による年代観を支持するには弱い結果となった。タカラガイ集積遺構は、ハナピラダカラを主として、ハナマルユキ・キイロダカラ・ナツメモドキが検出された。県内でもほとんど例が無い遺構である。同遺構出土の貝1,824個全てを詳細に観察した黒住耐二氏によると、これらの貝に死殻はなく、岩礁域の貝類等の採取時につけ

られた可能性のある小孔が14個体確認され、また、那覇市渡地村跡の事例やサイズ・種などから、本遺構は貝鍾用ではなく交易品をストックしたものである可能性を示唆した。遺構半裁時の図面や写真が無く、検出状況時に掘り込みも確認できなかったが、一箇所に集中して円形の平面視を成し、遺構の外壁側面にも貝が数点確認できる(巻首図版4)ことから、何らかの掘り込みあるいは器に入れられていたと考えられる。今後の類例増加が待たれる興味深い遺構である。

本遺跡の遺構のほとんどは標高2.05～2.50mの地山(V層)上面で検出された。特にピットは約700基も検出され、あまりの密度に明確な建物プランを把握できなかった。ここではその他の主だった遺構を紹介する。SD1・2は、先述の石列遺構と位置及び軸を同じとするが、SD埋没後に石列遺構が構築されていることから時期は異なる。ただ、両遺構とも何らかの区画意識を持って構築されているとみるべきであり、溝から石列への転換が何を意味するのか注視したい。なお、SD1からは後述する五銖銭が1点(ほか石製品2点)、SD2からは神繩産陶器などが出土しており、同時期に埋没したとすると近世に比定できる。SD3は、埋土から出土した碗・播鉢の組成から、埋没時期を18世紀前半以降に求められる。これらのSDは「シリーズサク(後ろの迫)」と呼ばれる集落の北東に位置する丘陵谷間の延長線上にある。

遺物 出土した人工遺物の総数は6,221点で、うち4,908点(全体の78.8%)がⅡ～Ⅳ層で出土した。18～19世紀の神繩産陶器が全体の46.0%を占め、輸入陶磁器が29.4%と続く。Ⅱ・Ⅲ層からはグスク時代の輸入陶磁器が出土しており、前述の通り近世の活動によってグスク時代の遺物包含層や遺構が攪乱されたことと推察される。中でも、焼土265点(1,397g)・鍛造途中の鉄板・鉄洋など、鍛冶遺構の存在を示唆する遺物が得られていることは興味深い。これらの遺物が当地で発生したのかあるいは流れ込みなのか判別できないが、先述した「シリーズサク」とは別の谷に「カンジャヌスバ(鍛冶の側)」と呼ばれる場所があり、付近で鍛冶が行われていたことを窺わせる(シリーズサクの東側にある窪地との証言もある)。SD1出土の五銖銭やその他の無文銭も鍛冶関連のための遺物と捉えられる。なお、北谷町における五銖銭の出土はこれまで3点あり、いずれも北谷城からである。戦前に北谷城一帯で鍛冶を行っていた記録は見られない。

そのほか12～13世紀代の遺物が出土しており、Ⅳc層で採取した炭化物(袋№972)の 2σ の値はcalAD1224～1277を示している。これらの解釈が今後の課題として挙げられる。

おわりに

県下でも屋敷集落が多い北谷において、千原遺跡のある浜川村は遅くとも1674年までには成立していた本字である。1689年に首里王府は系図座を設置、士族は増加し官職は欠乏した。1725年に士族の転職を王府が許可したことや、1786年に北谷間切で大量の払請地が発生したことを契機に多くの士族が北谷に屋敷として移り住む様子を浜川村の人々は、どのように見ていたであろうか。

試掘調査ではグスク時代の遺跡と判断された千原遺跡だが、今回の調査結果からはそれを裏付ける明確な遺構及び遺物の出土状況は確認できなかった。一方、12～13世紀代の遺物や後兼久原遺跡に続き鍛冶関連の遺物が多数出土したことも大きな成果である。今後は同時期の砂辺サーク原遺跡や小堀原遺跡、北谷城の成立を視野に入れた調査研究が必要となる。

遺構のほとんどは白砂の地山上面で検出した。その理由として、契約締結の遅延により調査期間が予定より短くなったこと、大量のガラや不発弾が出土し、その撤去及び調整に時間を要したこと、遺構検出に十分な時間が割けなかったこと、そして何より、遺物包含層と遺構の識別が困難であったこと、が列挙される。限られた期間内で注力すべきシーンを見極めることが調査員として求められる力量であり、その意味において、この度の発掘調査は、私自身全く無力だった。ただ幸いなことに、現地調査に携わった株式会社アーキジオパシフィック支店の迅速且つ丁寧な掘削・図化作業により、何とか現地調査を期間内で終えることができた。感謝の言葉しか浮かばない。また、現場を見たことが無いまま資料整理と報告書作成に取り組み、発掘調査の成果を纏め上げた株式会社島田組神繩支店には感嘆の念しかない。本報告書の刊行には多くの人々の理解と協力があって実現できた。深謝し総括としたい。

参考・引用文献

書名・稿名	発行年	編者名・発行機関・集号	参考・引用箇所
〔北谷町史 第二巻 資料編 1 前近代・近代文献資料〕	1986	北谷町役場	全般
〔北谷町史 第三巻 資料編 2 民俗 上〕	1992	北谷町役場	全般
〔北谷町史 第一巻 通史編〕	2005	北谷町教育委員会	全般
〔沖縄県史 各論編 第二巻 考古〕	2003	沖縄県教育委員会	全般
〔沖縄県史 各論編 第三巻 古琉球〕	2010	沖縄県教育委員会	全般
〔北谷町の遺跡〕	1994	北谷町文化財調査報告書第 14 集	全般
〔後兼久原遺跡〕	2003	北谷町文化財調査報告書第 21 集	全般
〔大作原古窯群〕	2003	北谷町文化財調査報告書第 22 集	全般
〔キャブア染江北側返還に伴う試掘調査〕	2005	北谷町文化財調査報告書第 23 集	全般
〔北谷町の地名〕	2006	北谷町文化財調査報告書第 24 集	全般
〔伊礼原 B 遺跡・伊礼原 E 遺跡〕	2007	北谷町文化財調査報告書第 26 集	全般
〔伊礼原 E 遺跡〕	2008	北谷町文化財調査報告書第 27 集	全般
〔伊礼原 E 遺跡〕	2010	北谷町文化財調査報告書第 31 集	全般
〔小瀬原遺跡〕	2010	北谷町文化財調査報告書第 32 集	全般
〔伊礼原 D 遺跡〕	2012	北谷町文化財調査報告書第 34 集	全般
〔伊礼原 B 遺跡〕	2013	北谷町文化財調査報告書第 35 集	全般
〔平安山原 B 遺跡〕	2015	北谷町文化財調査報告書第 37 集	全般
〔平安山原 A 遺跡〕	2016	北谷町文化財調査報告書第 38 集	全般
〔平安山原 B・C 遺跡〕	2016	北谷町文化財調査報告書第 40 集	全般
〔伊礼原 D 遺跡・平安山原 A 遺跡〕	2017	北谷町文化財調査報告書第 41 集	全般
〔琉球誌島の長古学〕	1983	上江洲均・神崎宣武・工藤貞功・末本社	近代遺物
〔ガラス瓶の考古学〕	2006	桜井真由/六一書房	近代遺物
〔柳跡編年からみた近世琉球窯業の展開〕	1987	安里進・上原政昌・家田淳一 / 『名護博物館紀要 あじま』 3	沖縄産陶器
〔朝屋古窯群 I〕	1992	那覇市文化財調査報告書第 23 集	沖縄産陶器・陶質土器・陶磁器製品・土製品
〔朝田古窯跡 I〕	1993	沖縄県文化財調査報告書第 111 集	沖縄産陶器・本土産陶磁器
〔朝田古窯跡 II〕	1995	沖縄県文化財調査報告書第 121 集	沖縄産陶器・陶質土器・本土産陶磁器・琺瑯
〔沖縄のやきもの 概説〕	1998	家田淳一 / 『沖縄のやきもの - 南海からの香り -』 / 佐賀県立九州陶磁文化館	沖縄産陶器
〔琉球近世琉球陶器 一 上雄師軸技法と目積み技法についての覚書一〕	2000	池田栄史 / 高宮廣衛先生古稀記念論集 琉球・東アジアの人と文化・高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会	沖縄産陶器
〔九州陶磁の編年 - 九州近世陶磁学会 10 周年記念 -〕	2000	九州近世陶磁学会	沖縄産陶器
〔沖縄産陶磁器に関する基礎研究 1 - 灰釉陶を中心に -〕	2010	木村謙介 / 『帝京筑波大学博物館紀要』 11	沖縄産陶器
〔琉球陶器の来た道 合同企画展〕	2011	沖縄県立博物館・美術館・那覇市立平屋岩博物館	沖縄産陶器・瓦質土器
〔近世における産・製の製作技術 - 九州・沖縄を中心に -〕	2017	田畑直彦 / 『中近世陶磁器の考古学』 第 6 巻	沖縄産陶器
〔琉球王国の近世陶磁器流通〕	2018	近世陶磁研究会第 8 回大会資料	沖縄産陶器・本土産陶磁器・瓦質土器・骨製品
〔喜友名貝塚・喜友名グスク (1)〕	1999	沖縄県文化財調査報告書第 134 集	陶質土器・骨製品

「南の境界・琉球の瓦質土器」	2008	瀬戸哲也 / 瓦質土器の出現と定着 ― 瓦質土器を考える (後編) ― / 日本中世土器研究会	瓦質土器
『内野山北窓録』	1996	佐賀県文化財調査報告書 129 集	本土産陶磁器
『大里寺跡 (1)』	2001	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 2 集	本土産陶磁器
『近世船舶探検録の編年案』	2002	沖野実 / 岡山城三之曲輪跡 / 岡山市教育委員会	本土産陶磁器
『いわゆるスカンマカイについて』	2002	喜屋敷 / 『帝居城跡博物館紀要』 3	本土産陶磁器
『沖縄の遺跡から出土する近代の本土産磁器について ― スカンマカイ』	2015	安斎英介・上原 干明 / 『南島考古』 34	本土産陶磁器
『首里城跡 京の内跡発掘調査報告書 (1) 一』	1998	沖縄県文化財調査報告書第 132 集	染付・青磁
『大宰府委分跡 XV ― 陶磁器分析編』	2000	大宰府市の文化財第 49 集	染付・青磁・白磁・褐釉陶器
『沖縄における貿易陶磁器研究 ― 14 ～ 16 世紀を中心に』	2008	瀬戸哲也・仁王浩司・主税清・宮城弘毅・安藤隆夫・松原哲志 / 『沖縄郷土研究』 5	染付・青磁・白磁・褐釉陶器
『首里城跡 ― 御内院北地区発掘調査報告書 (1) 一』	2010	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 54 集	染付・青磁・白磁
『15 ～ 16 世紀の染付磁、皿の分類とその年代』	1982	小野正敏 / 『貿易陶磁研究』 2	染付
『16 世紀末から 17 世紀前半における中国製対峙陶、皿の分類と編年への予察』	1991	上田秀夫 / 『関西近世考古学』 1	染付
『沖縄出土の清朝陶磁』	2003	新垣力 / 『沖縄文化研究』 1	染付
『渡地村跡』	2007	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 46 集	染付・青磁
『14 ～ 16 世紀の青磁鉢の分類』	1982	上田秀夫 / 『貿易陶磁研究』 2	青磁
『渡地村跡』	2012	那覇市文化財調査報告書第 91 集	青磁
『14 ～ 16 世紀の白磁の型式分類と編年』	1982	森田勉 / 『貿易陶磁研究』 2	青磁・貝製品・貝集積遺構
『13 ～ 14 世紀海上貿易からみた琉球国成立要因の実証的研究 ― 中国福建省を中心に』	2009	木下尚子 (編) / 『文部科学省科学学術研究費補助金研究成果報告書 / 熊本大学文学部』	白磁
『琉球列島先史・原史時代における遺構と文化の変遷に関する実証的研究』	2014	新里貴之・高宮広土 (編) / 『六一書房研究論文集』【第 1 集】 琉球列島の土器・石器・貝製品・骨製品文化』	土器・石器
『琉球列島における窯業生産の成立と展開』	1995	安里進 / 『概説 中世の土器・陶磁器』 / 中世土器研究会	土器
『石鼓』	2003	新里貴人 / 『考古学研究』 49-4	カムイ・ヤマト
『アスク時代初期における出土滑石からみた集団関係』	1982	木下雅寿 / 『概説 中世の土器・陶磁器』 / 中世土器研究会	滑石製品
『アスク時代・近世出土の円盤状製品』	2016	宮城弘毅 / 『南島文化』 38	滑石製品
『琉球列島出土セールの基礎的研究 ― 琉球喫煙文化の研究～』	1986	上原静 / 『読谷村立歴史民俗資料館紀要』 10	円盤状製品
『VOC と日蘭交流 VOC 遺跡の調査とたばこ』	2012	石井龍夫 / 『東京大学考古学研究所紀要』 25	煙管
『考古資料より見た琉球の鉄器文化』	2012	たばこ / 『たばこ』	煙管
『勝連城跡』	1997	沖縄県立博物館	鉄製品
『琉球砥石考』	1990	勝連町の文化財第 11 集	鉄製品・骨製品・貝製品
『宝貝の調』	2010	上原静 / 『南島考古』 29	石器・石製品
『佐美・沖縄諸島における漁網罾の形態的研究 (その 1) ― 民俗事例の論』	1971	岸一郎・民谷隆 / 『民俗学研究』 35 巻 4 号	貝製品
『佐美・沖縄諸島における漁網罾の形態的研究 (その 2) ― 民俗事例の論』	2003	島袋春美 / 『沖縄国際大学大学院地域文化研究科 地域文化論』 5	貝製品
『佐美・沖縄諸島における漁網罾の形態的研究 (その 3) ― 考古資料の検討』	2003	島袋春美 / 『南島考古』 23	貝製品
『琉球ウエー・アヌタイ木製家型墓 ― 複製製作に伴う調査』	2006	『近野麻村立博物館紀要 芳ラマン』 12	貝製品・貝集積遺構
『琉球内文化財調査概要 ― 御物城の考古学的知見』	1977	新田重清 / 『御物城立博物館紀要』 3	貝集積遺構
『琉球の都中と村落』	2003	高橋謙一 / 『関西大学東洋学術研究所』	遺構

報告書抄録

ふりがな	せんばる いせき							
書名	千原遺跡							
副書名	沖縄西海岸道路北谷拡幅建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査事業（平成25年度）							
巻次	-							
シリーズ名	北谷町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第42集							
編著者名	松原哲志・國分篤志・安里進・伊波直樹・黒住耐二・菅原広史・ハリノ・サーヴェイ(株)							
編集機関	沖縄県北谷町教育委員会							
所在地	〒904-0192 沖縄県中頭郡北谷町字桑江226番地 TEL 098-936-3159							
発行年月日	2018年（平成30年）3月19日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°' "	°' "			
せんばる いせき 千原遺跡	<small>せんばる いせき</small> 沖縄県 北谷町 字桑江 226番地 小学千原	473260		26° 32' 67"	127° 75' 41"	20131212 ～ 20140327	427	国道拡幅
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
せんばる いせき 千原遺跡		グスク ～ 近世	溝状遺構 ピット群 土坑 不明遺構	沖縄産陶器（施釉・無釉・陶質土器） 輸入陶磁器（染付・青磁・白磁・襷軸） 本土産陶磁器、瓦質土器、滑石製品・燧管・ 金属製品・石器・石製品・貝製品				
		近世	ブタ埋葬遺構 タカラガイ集積遺構	沖縄産陶器（施釉・無釉・陶質土器） 輸入陶磁器（染付・青磁・白磁・襷軸・半軸 土器など） 本土産陶磁器、瓦質土器、瓦 貝塚時代後期～グスク時代の土器 カミヤキ、土製品、円盤状製品 銭貨、金属製品、石器・石製品 骨製品、貝製品、鉄滓・焼土			埋葬ブタ骨試料 : 137 ± 18BP	
		近代～戦前	方形石組遺構 石列	沖縄産陶器（施釉・無釉・陶質土器） 輸入陶磁器（青磁・白磁・染付） 本土産陶磁器、瓦質土器、瓦 円盤状製品、金属製品、石製品				
要約	<p>千原遺跡は平成9年度の試掘調査で発見され、国道拡幅に伴い平成25年度に緊急発掘調査が行われた。試掘時にはグスク時代の遺跡と捉えられていたが、今回の調査では同時期を示す明確な遺物包含層や遺構は確認できなかった。</p> <p>遺物包含層は大別して近代と近世の2期があり遺構もおおむね対応する。各包含層からはグスク時代の輸入陶磁器が出土し、総遺物量の約30%を占めることから、近世以降の活動によってグスク時代のオリジナルな遺物包含層や遺構が攪乱されたと判断した。量的に多い遺物に沖縄産陶器・輸入陶磁器・本土産磁器が挙げられる。その他、焼土や鉄滓・鍛造資料が見られ、付近には鍛冶関係遺構の存在が推察される。五銖銭や無文銭も鍛冶関連の遺物と考えられる。</p> <p>遺構は、溝状遺構・ピット群・土坑・不明遺構を地山直上の砂層で検出。その他、ブタ埋葬遺構や方形石組遺構を確認した。特筆すべき遺構に、近世のタカラガイ集積遺構が挙げられる。ハナビラタカラを主とする1,862個もの生貝が集中し、サイズや種などから交易品のストックと考えられる。県内でもほとんど事例が無いため今後の類例増加が待たれる。</p>							

北谷町文化財調査報告書 第 42 集

せん ぼる い せき
千 原 遺 跡

— 沖縄西海岸道路北谷拡建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査事業（平成25年度） —

編 集： 北 谷 町 教 育 委 員 会
発 行 年： 2018 年（平成 30 年）3 月
〒904-0192 沖縄県北谷町字桑江 226 番地
TEL 098-936-3159
印 刷： 丸正印刷株式会社
〒903-0211 沖縄県西原町字小那覇 1215 番地
TEL 098-835-8181



北 谷 町